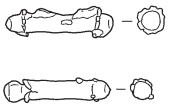
大宰府史跡発掘調査報告書 X

平成28・29年度



2019

九 州 歴 史 資 料 館

大宰府史跡発掘調査報告書 X

平成28・29年度

2019

九 州 歴 史 資 料 館

（1）大宰府政庁周辺官衙跡遠景（南から）

（2）大宰府政庁周辺官衙跡全景（南から）

（1）大宰府政庁周辺官衙跡蔵司地区全景（南西から）

（2）大宰府史跡第 212 次調査出土被熱鉄製品

序

本書は，大宰府史跡第 9 次 5 ヶ年計画の第 5 年次の計画調査及び第 10 次 5 ヶ年計画の第 1 年次の計画調査として，平成 28 年度及び 29 年度に実施した大宰府史跡の発掘調査についての報告書です。

当館では，平成 21 年度から大宰府政庁跡の西隣の蔵司丘陵において，蔵司地区官衙の構造解明を目的とした計画調査を実施しています。平成 21 年度から 25 年度までは確認調査を進め，その成果をもとに平成 26 年度から重点調査を開始しています。重点調査では計画的に配置された礎石建物群のほか，下層の建物群なども見つかり，蔵司地区官衙の変遷も明らかになってきています。本書では，平成 23 年度から 25 年度に実施した重点調査に先立つ確認調査の成果について報告します。

大宰府史跡に関する調査では，前面広場・大楠地区など大宰府政庁周辺官衙跡や大宰府学校院跡での調査があり，遺跡の広がりや旧地形などを復元する上で有益な情報を得ることができました。また，観世音寺子院跡や大野城跡原地区の調査などにより，四王寺山の山麓部に展開する遺跡についても少しずつその様相が明らかになってきました。

今回報告を行った調査の成果が，今後の研究にも寄与できれば，望外の喜びです。

最後に，発掘調査にあたりましては，大宰府史跡調査研究指導委員会をはじめ，文化庁，太宰府市教育委員会，さらに地元の関係者各位から多大な御指導と御協力を頂きました。記して，深く感謝致します。

平成 31 年 3 月 31 日

九州歴史資料館
館長　杉光　誠

例　言

1　本書は，平成 23 ～ 25・28・29 年度に福岡県教育委員会が国庫補助を受け，九州歴史資料館が実施した大宰府史跡発掘調査の年次報告書，大宰府史跡発掘調査報告書の第 10 集にあたる。

2　本書には，蔵司地区の計画調査として実施した第 212・216・220 次調査，大楠地区の緊急調査として実施した第 231 次調査，観世音寺子院跡の緊急調査として実施した第 232・233・237 次調査，政庁前面広場地区の緊急調査として実施した第 234・238 次調査，大宰府学校院跡の緊急調査として実施した第 235 次調査を掲載している。また，大野城跡の原地区で実施した大野城跡第 55 次調査の成果も掲載している。このうち第 212 次調査は平成 23 年度，第 216 次調査は平成 24 年度，第 220 次調査は平成 25 年度に実施しているが，整理作業の都合により本書に掲載することとなった。

　なお，蔵司地区の計画調査のうち平成 28・29 年度にかけて重点調査として実施した大宰府史跡第 225・228・230・236 次調査については，現在調査・整理中であり，蔵司地区の正式報告書において報告を行う。

3　発掘調査は，大宰府史跡調査研究指導委員会の指導のもとに実施した。

4　本書掲載の遺構実測図は，小澤佳憲・大庭孝夫・下原幸裕・岡田諭・小嶋篤・佐々木華子が作成した。

5　本書掲載の写真のうち，遺構は小澤・下原・岡田・小嶋・北岡伸一が，遺物は北岡が撮影したものである。

6　出土遺物の実測は大庭・下原・岡田・小嶋・中田千枝子・桑野暢子・深町幸子が行った。出土遺物の整理・復元作業は，九州歴史資料館及び発掘調査事務所において市川千香枝・中田・堤直美・伊東ひかり・桑野・深町が行った。

7　本書掲載図面の浄書は，大庭・岡田・中田・伊東・桑野・深町が行った。

8　本書の執筆分担は以下のとおりである。

　Ⅰ　大庭・下原

　Ⅱ　下原・岡田・小嶋・大澤正己・古環境研究所

　Ⅲ　大庭・下原

　Ⅳ　下原

9　本書の編集は，大庭・下原が行った。

目　次

頁

Ⅰ　緒　　言

1　調査計画と組織 …… 1

2　調査の経過と概要 …… 3

Ⅱ　大宰府跡の計画調査

1　蔵司地区計画調査の経過 …… 11

2　第 212 次調査（蔵司 E 区の計画調査） …… 12

3　第 212 次調査出土鉄関連遺物の理化学的分析 …… 33

4　第 220 次調査（蔵司 C・D 区の計画調査） …… 65

5　第 216 次調査出土土壌の理化学的分析 …… 84

Ⅲ　大宰府史跡の確認調査

1　第 231 次調査（大楠地区の確認調査） …… 93

2　第 232 次調査（観世音寺子院跡の確認調査） …… 97

3　第 233 次調査（観世音寺子院跡の確認調査） …… 98

4　第 234 次調査（政庁前面広場地区の確認調査） ……100

5　第 235 次調査（大宰府学校院跡の確認調査） ……103

6　第 237 次調査（観世音寺子院跡の確認調査） ……106

7　第 238 次調査（政庁前面広場地区の確認調査） ……113

Ⅳ　大野城跡の確認調査

1　大野城跡第 55 次調査（原地区の確認調査）……115

Fig. 目次

頁

Fig. 1　大宰府史跡発掘調査地周辺図（1/25,000）…… 8
Fig. 2　大宰府史跡発掘調査地域図（1/5,000）…… 折込
Fig. 3　蔵司丘陵地区割図（1/2,000）…… 13
Fig. 4　第 212 次調査区トレンチ配置図（1/500）…… 15
Fig. 5　第 212 次調査 A・F トレンチ実測図（1/60）…… 16
Fig. 6　第 212 次調査 B・C トレンチ実測図（1/60）…… 17
Fig. 7　第 212 次調査 D・E トレンチ実測図（1/60）…… 19
Fig. 8　第 212 次調査出土瓦実測図（1/4）…… 21
Fig. 9　第 212 次調査出土被熱瓦実測図（1/4）…… 23
Fig.10　第 212 次調査出土土器・陶磁器実測図（1/3）…… 25
Fig.11　第 212 次調査出土被熱鉄製品等実測図① 小札（1/2）…… 28
Fig.12　第 212 次調査出土被熱鉄製品等実測図② 鉄鏃（1/2）…… 30
Fig.13　第 212 次調査出土被熱鉄製品等実測図③ その他（1/2）…… 31
Fig.14　$FeO\text{-}SiO_2$ …… 44
Fig.15　№ 1　顕微鏡組織 …… 47
Fig.16　№ 2　顕微鏡組織 …… 48
Fig.17　№ 3　顕微鏡組織 …… 49
Fig.18　№ 4　顕微鏡組織 …… 50
Fig.19　№ 5　顕微鏡組織 …… 51
Fig.20　№ 6　顕微鏡組織 …… 52
Fig.21　№ 7　顕微鏡組織 …… 53
Fig.22　№ 8　顕微鏡組織 …… 54
Fig.23　№ 9　顕微鏡組織 …… 55
Fig.24　№ 10・11　顕微鏡組織 …… 56
Fig.25　№ 12　顕微鏡組織 …… 57
Fig.26　№ 1　EPMA 調査① …… 58
Fig.27　№ 1　EPMA 調査② …… 59
Fig.28　№ 4　EPMA 調査① …… 60
Fig.29　№ 4　EPMA 調査② …… 61
Fig.30　第 212 次調査分析資料実測図（1/2）…… 63
Fig.31　第 212 次調査分析資料写真① …… 63
Fig.32　第 212 次調査分析資料写真② …… 64
Fig.33　第 220 次調査区トレンチ配置図（1/500）…… 66
Fig.34　第 220 次調査 1 ・ 2 トレンチ実測図（1/60）…… 68
Fig.35　第 220 次調査 5 ・ 7 ・ 9 トレンチ実測図（1/60）…… 70
Fig.36　第 220 次調査 10 ～ 12 トレンチ実測図（1/60）…… 72

Fig.37　第 220 次調査出土軒瓦・鬼瓦・文字瓦実測図（1/4） …… 74
Fig.38　第 220 次調査出土丸瓦・平瓦実測図（1/4） …… 76
Fig.39　第 220 次調査出土被熱瓦実測図（1/4） …… 77
Fig.40　第 220 次調査出土土器・陶磁器実測図（1/3） …… 79
Fig.41　第 220 次調査出土被熱鉄製品実測図（1/2） …… 82
Fig.42　第 220 次調査その他の出土遺物実測図（1/2） …… 83
Fig.43　第 216 次調査トレンチ配置図（1/1,000）…… 84
Fig.44　第 216 次調査 C・D トレンチ実測図（1/60） …… 85
Fig.45　第 216 次調査（C トレンチ）における植物珪酸体分析結果 …… 89
Fig.46　第 216 次調査（D トレンチ）における植物珪酸体分析結果 …… 90
Fig.47　第 216 次調査の植物珪酸体（プラント・オパール） …… 91
Fig.48　第 231 次調査地位置図（1/500） …… 93
Fig.49　第 231 次調査トレンチ実測図（1/40）…… 94
Fig.50　第 231 次調査出土遺物実測図（1/3・1/4）…… 95
Fig.51　第 232 次調査地位置図（1/500） …… 97
Fig.52　第 232 次調査土層模式図（1/40）…… 97
Fig.53　第 233 次調査地位置図（1/500） …… 98
Fig.54　第 233 次調査トレンチ実測図（1/60）…… 99
Fig.55　第 234 次調査地位置図（1/500）…… 100
Fig.56　第 234 次調査 1 トレンチ実測図（1/60） …… 101
Fig.57　第 234 次調査 2 トレンチ実測図（1/60） …… 102
Fig.58　第 235 次調査地位置図（1/500）…… 103
Fig.59　第 235 次調査トレンチ実測図（1/40） …… 104
Fig.60　第 235 次調査出土遺物実測図（1/3・1/4） …… 105
Fig.61　第 237 次調査地位置図（1/1,000）…… 106
Fig.62　第 237 次調査トレンチ実測図（1/40） …… 107
Fig.63　第 237 次調査出土遺物実測図①（1/6）…… 109
Fig.64　第 237 次調査出土遺物実測図②（1/3・1/6） …… 111
Fig.65　第 238 次調査地位置図（1/500）…… 113
Fig.66　第 238 次調査トレンチ実測図（1/100）…… 113
Fig.67　大野城跡全体図（1/10,000）…… 117
Fig.68　大野城跡第 55 次調査トレンチ配置図（1/1,000） …… 118
Fig.69　大野城跡第 55 次調査トレンチ略測図（1/100） …… 119
Fig.70　大野城跡第 55 次調査トレンチ土層図（1/40）…… 120
Fig.71　大野城跡第 55 次調査出土土器・陶磁器実測図（1/3） …… 123

Tab. 目次

頁

Tab. 1　平成 28 年度調査計画表 …… 1
Tab. 2　平成 29 年度調査計画表 …… 2
Tab. 3　大宰府史跡調査研究指導委員会委員一覧（平成 28・29 年度）…… 3
Tab. 4　大宰府史跡現状変更申請対応状況表 …… 9・10
Tab. 5　大宰府史跡発掘調査実施表 …… 10
Tab. 6　第 212 次調査出土軒瓦点数表 …… 19
Tab. 7　第 212・220 次調査出土文字瓦点数表 …… 20
Tab. 8　供試材の履歴と調査項目 …… 45
Tab. 9　供試材の組成 …… 46
Tab.10　出土遺物の調査結果のまとめ …… 46
Tab.11　鉄関連遺物分析資料一覧表 …… 62
Tab.12　第 220 次調査出土軒瓦点数表 …… 74
Tab.13　第 216 次調査における植物珪酸体分析結果 …… 88
Tab.14　土器溜まり SX01 出土土師器法量 …… 122
Tab.15　報告書掲載遺構一覧 …… 124
Tab.16　報告書掲載遺物一覧 …… 125・126

PL. 目次

巻頭 PL. 1　⑴ 大宰府政庁周辺官衙跡遠景（南から）
　　⑵ 大宰府政庁周辺官衙跡全景（南から）
巻頭 PL. 2　⑴ 大宰府政庁周辺官衙跡蔵司地区全景（南西から）
　　⑵ 大宰府史跡第 212 次調査出土被熱鉄製品
PL. 1　⑴ 大宰府政庁周辺官衙跡蔵司地区遠景（西から）
　　⑵ 大宰府政庁周辺官衙跡蔵司地区から西を望む（東から）
PL. 2　⑴ 第 212 次調査状況（南東から）　⑵ A トレンチ掘削状況（南から）
　　⑶ A トレンチ掘削状況（北から）
PL. 3　⑴ A トレンチ掘削状況（南西から）　⑵ B トレンチ掘削状況（西から）
　　⑶ B トレンチ掘削状況（南西から）
PL. 4　⑴ C トレンチ掘削状況（南西から）　⑵ C トレンチ掘削状況（南から）
　　⑶ D トレンチ掘削状況（南東から）
PL. 5　⑴ E トレンチ掘削状況（東から）　⑵ E トレンチ整地層掘削状況（南から）
　　⑶ F トレンチ掘削状況（南東から）
PL. 6　⑴ 第 220 次調査状況（南から）　⑵ 1 トレンチ掘削状況（北東から）
　　⑶ 2 トレンチ掘削状況（東から）

PL. 7　⑴ 5トレンチ掘削状況（北西から）　⑵7トレンチ掘削状況（南東から）
⑶ 7トレンチ整地層掘削状況（南東から）
PL. 8　⑴ 9トレンチ掘削状況（北東から）　⑵ 10トレンチ掘削状況（南東から）
⑶ 11トレンチ掘削状況（北西から）
PL. 9　⑴ 11トレンチ礎石抜取穴（S－3）（西から）
⑵ 12トレンチ掘削状況（南東から）　⑶ 12トレンチ礎石検出（南東から）
PL.10　⑴ 第231次調査トレンチ（南東から）　⑵ 第232次調査1トレンチ（北西から）
⑶ 第232次調査2トレンチ（南西から）
PL.11　⑴ 第233次調査1トレンチ（西から）　⑵ 第233次調査2トレンチ（南から）
⑶ 第234次調査1トレンチ（南東から）
PL.12　⑴ 第234次調査2トレンチ（南西から）　⑵ 第235次調査1トレンチ（南東から）
⑶ 第235次調査2トレンチ（北から）
PL.13　⑴ 第237次調査平坦面上段検出状況（北から）
⑵ 第237次調査平坦面下段検出状況（南から）
⑶ 第237次調査SX4810検出状況（南から）
PL.14　⑴ 第238次調査南トレンチ検出状況（西から）⑵大野城跡第55次調査地（南東から）
⑶ 大野城跡第55次調査地（南から）
PL.15　⑴ 1トレンチ北半部（西から）　⑵ 1トレンチ南半部（南から）
⑶ 2トレンチ（北東から）
PL.16　⑴ 2トレンチSX01検出状況（南東から）⑵ 3トレンチ（北から）
⑶ 4トレンチ（西から）
PL.17　⑴ 5トレンチ（東から）　⑵ 6トレンチ（東から）
⑶ 7－1トレンチ（北東から）
PL.18　⑴ 7－2トレンチ（北東から）　⑵ 8トレンチ（東から）
⑶ 9トレンチ（南から）
PL.19　⑴ 10トレンチ（南東から）　⑵ 11トレンチ（東から）
⑶ 12トレンチ（南から）
PL.20　第212次調査　瓦，土器・陶磁器①
PL.21　第212次調査　土器・陶磁器類②，鉄製品①
PL.22　第212次調査　鉄製品②，第220次調査　瓦①
PL.23　第220次調査　瓦②，土器・陶磁器類
PL.24　第220次調査鉄製品，第231・235・237次調査出土遺物
PL.25　第237次調査石塔類①
PL.26　第237次調査石塔類②，大野城跡第55次調査出土遺物，蔵司SB5000

文中写真・目次

P 4上　第 228 次 SB5010（南から）
P 4下　第 230 次 地中レーダー探査状況
P 5　　第 228 次 柵列と柱穴群（東から）
P 6上　第 230 次 SB5110（南から）
P 6下　第 230 次 SB5120（上から , 上が西）
P 7　　第 230 次 現地説明会
P112　第 237 次 調査石塔出土状況
P114　第 238 次 北トレンチ　SB2300 柱穴検出状況（西から）

凡　例

1　本書に掲載の遺構配置図は，国土調査法第Ⅱ座標系（日本測地系）をもとに基準点を設け作成している。
2　遺構番号の頭に付した記号は，以下の遺構を示す。
SB：建物，SD：溝，SK：土坑，SX：その他の遺構
3　土器・陶磁器類，瓦等の報告においては，以下の文献の型式分類・名称等に準じている。
・土 師 器：九州歴史資料館 1981『大宰府史跡 昭和 55 年度発掘調査概報』
・黒色土器：田中琢 1967「古代・中世における手工業生産の発達 (4) 畿内」『日本の考古学Ⅳ』
・陶 磁 器：森田勉・横田賢次郎 1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心にして－」『九州歴史資料館研究論集』 4　九州歴史資料館
太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡ＸＶ』
上田正敏 1982「14 ～ 16 世紀の青磁椀の分類について」『貿易陶磁研究』№.2 日本貿易陶磁研究会
小野正敏 1982「15 ～ 16 世紀の染付碗，Ⅲの分類と年代」『貿易陶磁研究』№.2 日本貿易陶磁研究会
・古 代 瓦：九州歴史資料館 2000『大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧』
九州歴史資料館 2007『観世音寺－遺物編２－』（新型式の追加）
九州歴史資料館 2009『水城跡－下巻－』（新型式の追加）
九州歴史資料館 2013『大宰府史跡発掘調査報告書Ⅷ－平成 24・25 年度－』（新型式の追加・訂正）
・鬼　　瓦：毛利光俊彦 1980「日本古代の鬼面文鬼瓦」『研究論集Ⅳ』奈良国立文化財研究所学報 38 冊

Ⅰ　緒　　言

1　調査計画と組織

（1）　調査計画

平成28年度

平成 28 年度は，大宰府史跡発掘調査第 9 次 5 ヶ年計画の 5 ヶ年目にあたり，平成 26 年度より開始した特別史跡大宰府跡蔵司地区官衙跡の重点調査を継続して行った。当年度の対象地区は大型礎石建物 SB5000 南側に広がる E 区で，前年度に着手した第 228 次調査，年度後半からは D・E 区東の C 区で第 230 次調査を開始した（Fig. 3）。なお，C 区の調査に際しては，事前に古代の建物跡及び古代の整地層下にある下層遺構の有無や広がりなどを確認するため，地中レーダー探査を実施した。

また，この他にも大宰府政庁周辺官衙跡の大楠地区で 1 件，政庁前面広場地区で 1 件，観世音寺子院跡で 2 件，大宰府学校院跡で 1 件，住宅建設や駐車場整備の申請が提出され，特別史跡大野城跡の原地区においても砂防ダム建設の計画が出され，いずれも大宰府史跡の解明を行う上で重要な地区であることから，緊急調査として調査計画に組み込み，確認調査を実施した。

報告書については，平成 21 年度から大宰府政庁周辺官衙跡の本報告書を刊行しているが，平成 28 年度は『大宰府政庁周辺官衙跡Ⅸ―大楠地区 総括・図版編―』及び『大宰府政庁周辺官衙跡Ⅹ―広丸地区 遺構編―』の 2 冊を刊行した。

大宰府史跡調査研究指導委員会は，平成 28 年 9 月 27・28 日に開催した。1 日目は，平成 27 年度及び 28 年度の大宰府史跡関係の調査報告を行い，大宰府史跡第 228 次調査地（蔵司地区）及び水城跡の東門跡整備状況の現地視察を行った。2 日目は，大宰府史跡の調査研究，大宰府史跡整備事業について報告・協議を行い，政庁周辺官衙跡の今後の調査・報告書作成等について指導，助言を受けた。なお，平成 28 年度の発掘調査計画は，次のとおりである。

Tab. 1　平成 28 年度調査計画表

（面積：㎡）

区　分	場　所	所　在　地	面積	備考
蔵司官衙跡	政庁周辺官衙	太宰府市観世音寺3丁目478, 484-1･2, 486	414	計画調査
蔵司官衙跡	政庁周辺官衙	太宰府市観世音寺3丁目478	545	計画調査

平成29年度

平成 29 年度は，大宰府史跡第 10 次 5 ヶ年計画の初年度にあたる。当年度も引き続き蔵司地区官衙跡の重点調査を実施し，E 区で第 228 次調査の追加調査，C 区で調査区の拡張をはじめ建物跡や整地層の断ち割り調査を実施した。さらに丘陵南東部にある A 区でも事前に地中レーダー探査を実施した上で，調査を開始した。

また，この他にも大宰府政庁周辺官衙跡の政庁前面広場地区の共同住宅建築申請，観世音寺子院跡で山ノ井池堤改修申請が提出されたことを受け，事前の確認調査を調査計画に組み入れて，調査を実施した（Fig. 3）。

報告書については，大宰府政庁周辺の官衙跡の正式報告書である『大宰府政庁周辺官衙跡ⅩⅠ―広丸地区 遺物編―』を刊行した。

大宰府史跡調査研究指導委員会は，平成 29 年 8 月 3 日に臨時委員会を開催し，筑紫野市前畑遺跡で発見された大宰府の外郭施設と推定される土塁状遺構の現地視察を行い，大宰府における外郭施設の有無や構造等を把握するための調査について諮り，おおむね了承を得た。

通常の委員会は，平成 29 年 10 月 24・25 日に開催した。1 日目は，平成 28・29 年度の大宰府史跡関係調査研究の報告を行い，大宰府史跡第 230・236 次調査地の現地視察及び水城跡第 61 次調査地の現地視察を行った。

2 日目は，平成 29 年度以降の蔵司地区官衙跡の調査，土塁状遺構の重点調査計画，今後の大宰府史跡について協議を行い，政庁周辺官衙跡の今後の調査，報告書作成等について指導・助言を受けた。また，水城跡の整備事業等について報告を行った。なお，平成 29 年度の発掘調査計画は，次のとおりである。

Tab. 2　平成 29 年度調査計画表

（面積：㎡）

区　分	場　所	所　在　地	面積	備考
蔵司官衙跡	政庁周辺官衙	太宰府市観世音寺3丁目478, 484-1･2, 486	80	計画調査
蔵司官衙跡	政庁周辺官衙	太宰府市観世音寺3丁目478	578.5	計画調査
蔵司官衙跡	政庁周辺官衙	太宰府市観世音寺3丁目454-2, 476, 477, 478, 490-5	895.31	計画調査

（2）調査組織

調査の主体は九州歴史資料館であり，発掘調査及び報告書作成は文化財調査室調査研究班が担当した。本報告書作成に係る関係者は，以下のとおりである。

		平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度
九州歴史資料館				
総　括	館　長	杉光　誠	杉光　誠	杉光　誠
	副 館 長	飛野　博文	飛野　博文	東　良
庶　務	総務室長	塩塚　孝憲	田嶋　朋子	尾籠　哲弥
	総務班長	中村満喜子	中村満喜子	中村満喜子
	事務主査	西村　知子	林田　朋子	前原　俊史
				林田　朋子
	主任主事	原野　貴生	原野　貴生	原野　貴生
		秦　健太	秦　健太	
	主　事	甲斐　進也		具志堅靖知
報　告	文化財調査室長	吉村　靖徳	吉村　靖徳	吉村　靖徳
	学芸調査室長	小田　和利	小田　和利	小田　和利
	文化財調査室室長補佐	伊﨑　俊秋	伊﨑　俊秋	伊﨑　俊秋
	調査研究班長	小澤　佳憲	小澤　佳憲	吉田　東明
	技術主査	大庭　孝夫	大庭　孝夫	岡寺　良
			下原　幸裕	大庭　孝夫
				下原　幸裕（文化財保護課：兼務）
				岡田　諭
	主任技師	下原　幸裕		小嶋　篤（九州国立博物館：兼務）
保存処理	保存管理班長	加藤　和歳	加藤　和歳	加藤　和歳
	技術主査			小林　啓

	主任技師	小林　啓	小林　啓	
整　　理	文化財調査班参事補佐			小川　泰樹
整理作業員		市川千香枝	中田千枝子	中田千枝子
		中田千枝子	伊東ひかり	桑野　暢子
		堤　直美	桑野　暢子	深町　幸子

指導委員会

大宰府史跡は，国指定特別史跡である「大宰府跡」及び政庁周辺の官衙跡，「水城跡」，「大野城跡」及び国指定史跡の「大宰府学校院跡」，「観世音寺境内及び子院跡附老司瓦窯跡」，「筑前国分寺跡」，「国分瓦窯跡」等の古代の官衙・山城・寺院・生産遺跡を包括する我が国有数の大規模史跡である。これら史跡の調査研究，報告書刊行及び整備活用を進めるにあたっては，種々な視点から対処する必要があり，歴史学・考古学・建築史学・造園学・都市工学・土木工学の専門家で構成される諮問機関である「大宰府史跡調査研究指導委員会」に諮り，委員による指導・助言のもとに計画調査を実施している。なお，委員は Tab. 3 のとおりである。

また，平成 29 年度は調査研究指導委員の改選があり，各委員の推薦により委員長は小田富士雄氏が選出され，副委員長は佐藤信氏が指名された。なお，鈴木嘉吉氏は平成 28 年度をもって退任され，林重徳氏は平成 29 年 10 月に惜しくも逝去された。

Tab. 3　大宰府史跡調査研究指導委員会委員一覧（平成 28・29 年度）

役　職	氏　名	職名（就任時）	専　門
委 員 長	小田富士雄	福岡大学名誉教授	考古学
副委員長	佐藤　　信	東京大学大学院教授	歴史学
委　　員	八木　　充	山口大学名誉教授	歴史学
	狩野　　久	元岡山大学教授	歴史学
	森　　公章	東洋大学教授	歴史学
	坂上　康俊	九州大学大学院教授	歴史学
	松村　恵司	独立行政法人国立文化財機構　奈良文化財研究所長	考古学
	山中　　章	三重大学名誉教授	考古学
	鈴木　嘉吉	元奈良国立文化財研究所長	建築史学
	箱崎　和久	独立行政法人国立文化財機構　奈良文化財研究所	建築史学
	杉本　正美	九州芸術工科大学名誉教授	造園学
	尼﨑　博正	京都造形芸術大学教授	造園学
	渡辺　定男	東京大学名誉教授	都市工学
	林　　重徳	佐賀大学名誉教授	土木工学

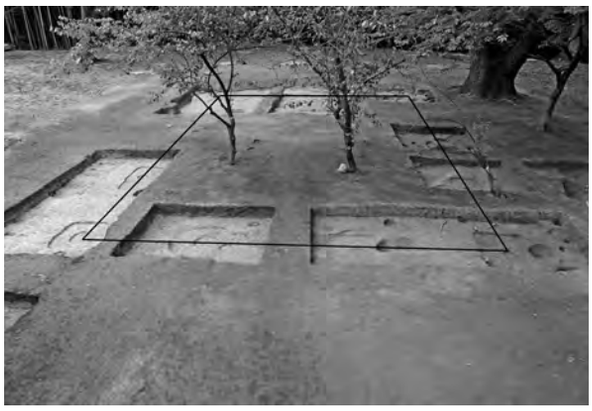
2　調査の経過と概要

（1）平成 28 年度

平成 28 年度の計画調査は引き続き蔵司地区官衙跡を調査対象とし，第 228・230 次調査を実施した。緊急調査は，大楠地区の第 231 次調査，政庁前面広場地区の第 234 次調査に加え，観世音寺子院跡の第 232・233 次調査や，大宰府学校院跡の第 235 次調査を行った。また特別史跡大野城跡では山麓部の原地区で大野城跡第 55 次調査を実施した。

この他，太宰府市教育委員会が主体となって行った政庁周辺官衙跡の日吉地区や大宰府学校院跡の電柱建替工事の立会も行った。

第２２８次　大宰府史跡第 228 次調査は，４月 14 日から開始した。調査対象は大型礎石建物 SB5000 の南側の E 区で，SB5000 よりも古い時期の下層建物群の広がりや変遷，絵図から存在が推定される礎石建物や区画施設の有無，被熱遺物の成因などを解明するための調査を実施した。



第 228 次 SB5010（南から）

調査の結果，下層掘立柱建物群の中心建物と推定される SB5010 の規模が桁行４間，梁行３間の側柱建物であることが確定した。柱穴の断ち割り調査によって SB5000 造営時に大きく削平され，SB5010 周辺は本来現在よりも１m以上高かったことが判明した。調査区西側でも掘立柱建物の可能性がある柱穴を複数確認したが，調査区外に広がるため構造把握は平成 29 年度の追加調査に持ち越した。E 区の西側では，近世の絵図に描かれていた礎石群から南北棟と推定される礎石建物が存在していた可能性があったことから面的に調査を実施したが，後世の地下げが著しいこともあり，礎石建物は検出できなかった。なお，被熱遺物に関しては，ほとんどが表土中からの出土であったため，その成因や時期についての情報を得ることはできなかった。以上の調査成果をもとに，平成 28 年 10 月 1 日に現地説明会を開催し，約 200 名の参加者があった。

第２３０次　大宰府史跡第 230 次調査は，11 月８日から開始した。調査対象は大型礎石建物 SB5000 東の C 区で，D 区より現状約２m低い平坦地である。当調査では，昭和初期に撮影された古写真に礎石群の並ぶ状況が確認できたため，遺構の広がりや変遷等の解明に向けた調査を実施した。調査の結果，近現代の造成に伴う削平などが著しかったものの，礎石建物２棟とその雨落溝，官衙造営に伴う古代の整地層などを確認した。

第 230 次　地中レーダー探査状況

なお，蔵司 D・E 区の調査で下層建物が見つかったことをうけ，C 区にも下層遺構が存在する可能性があることから，調査に先立ち地中レーダー探査を実施した。上層の礎石建物に関しては良好な探査結果が得られたが，下層建物に関しては現在検討中である。

第２３１次　大宰府史跡第 231 次調査は，倉庫建設に伴う確認調査で，４月 19 日に実施した。調査地は政庁跡の南西側に広がる大楠地区の北西部にあたる。調査の結果，古代の遺構面と土坑状の掘り込みを確認した。これまで大楠地区では東部の状況はある程度明らかになっていたが，今回の調査で西部にも遺構の広がりが確認できたことは重要である。ただし，調査区が狭小であるため，遺構の変遷や性格などについては，今後の調査が期待される。

第２３２次　大宰府史跡第 232 次調査は，住宅建設に伴う確認調査で，７月 21 日に実施した。調査地は観世音寺の北側に広がる東観世団地の北部に位置し，西側の推定金光寺跡と，東側の県指定史

跡「横岳崇福寺跡」に挟まれた谷筋にあたる。調査の結果，地表下約 3.1 mまで掘削したが，団地造成に伴う真砂土しか確認できず，谷部を大きく埋め立てていることが判明した。遺物の出土はなかった。

第２３３次

大宰府史跡第 233 次調査は，住宅建て替えに伴う確認調査で，11 月 28・29 日に実施した。調査地は第 232 次調査地とは道路を挟んだ南東に隣接する。調査の結果，地表下 1.4 mまで宅地造成時の真砂土であった。さらにピンポールを刺して確認した結果，少なくとも地表下２mまでは真砂土が続いている可能性が高く，宅地造成に伴って谷部を大きく埋め立てていることが判明した。遺物の出土はなかった。

第２３４次

大宰府史跡第 234 次調査は，駐車場整備に伴う確認調査で，12 月 20・21 日に実施した。調査地は政庁周辺官衙跡の政庁前面広場地区の中央北端に位置し，南側は第 73 次調査地に相当する。調査の結果，古代の遺構面は確認したが，遺構は確認できなかった。これまでの調査により政庁前面広場地区は空閑地としての機能が推定されており，今回の調査でも明確な遺構を確認できなかったことは，こうした遺跡の在り方を追認する成果であったといえる。

第２３５次

大宰府史跡第 235 次調査は，住宅建て替えに伴う確認調査で，３月７日と 14 日に実施した。調査地は学校院跡の北西寄りに位置し，隣接地の調査では古代～近現代まで複数の遺構面が重層的に確認されている。調査の結果，中世期の遺構面，ピットを確認した。この遺構面は第 159 次調査では近現代の遺構面とされていたものであるが，今回の調査により中世後半に遡る遺構面の可能性がある。遺構面を形成する整地層中からは土器や瓦などが出土した。

第　55　次

大野城跡第 55 次調査は，治山ダム設置に伴う確認調査で，９月 20・21 日の両日で実施した。調査地は原地区の山麓部に位置し，北西から南西に向かって下る谷筋にあたる。周辺は古代から中世にかけて隆盛した原山寺と関連施設群が所在する地域である。調査の結果，谷部の西側に沿って古い川筋を確認し，その左岸にある平坦地で柱穴や土器溜まり，土坑状遺構などを確認した。土器溜まりは出土遺物から 11 世紀後半に位置づけられ，古代に遡る遺構群が展開していることが判明し，大野城廃城後の土地利用の一端を把握することができた。

（２）平成 29 年度

平成 29 年度の計画調査は，引き続き蔵司地区官衙跡を調査対象とし，継続調査である第 228・230 次調査に加え，C 区東側に位置する A 区でも年度後半から第 236 次調査を開始した。緊急調査は，大宰府政庁周辺官衙跡では政庁前面広場地区の第 238 次調査の１件，観世音寺子院跡の第 237 次調査の１件である。

第 228 次　柵列と柱穴群（東から）

第２２８次

大宰府史跡第 228 次調査は，27 年度からの継続調査で，29 年度の調査は，前年度複数の柱穴群を検出したため，これらの柱穴群より構成される可能性のあ

る建物等の配置や構造を確認するため，調査区を拡張して確認を行った。調査の結果，東西方向に２間以上のびる柵跡１列と，東西に並ぶ柱穴２基からなる何らかの施設と判断した。

柵跡及び柱穴２基はいずれも，縄目瓦が主体の整地層上層の下，瓦が全く混じらず，古墳時代の須恵器・土師器が混じる整地層下層を掘り込んでおり，大型礎石建物 SB5000 以前に位置付けられる可能性がある。今後遺物整理を進め，時期等を確定する予定である。

第 230 次 SB5110（南から）

第 230 次 SB5120（上から，上が西）

第２３０次　大宰府史跡第 230 次調査も前年度からの継続調査で，29 年度の調査では，南北に並ぶ２棟の礎石建物（高床式倉庫）を確認した。北側の礎石建物 SB5110 は建物の一部が調査区外に及ぶものの，礎石４石が原位置付近に残っており，他の礎石抜取穴の配置などから南北５間，東西３間の総柱建物と推定でき，高床式倉庫と考えられる。柱間は桁間・梁間ともに 2.4m（８尺）の等間で，規模は桁行 12.0 m，梁行 7.2 m，床面積 86.4㎡と推定できる。また建物の周囲には雨落溝の一部が遺存する。

南側の礎石建物 SB5120 については，礎石は全く遺存していないが，南北５間，東西２間となる礎石抜取穴の配置を確認した。柱間が桁間・梁間ともに 2.4m（８尺）の等間とみられ，北側の礎石建物 SB5110 と柱間が共通すること，両者の柱筋が通ることから，同じ南北５間，東西３間の総柱建物と推定され，高床式倉庫と考えられる。建物の西側及び北側の一部に幅 1.4 ～ 1.7 mの雨落溝が残るが，後世の削平のため深さ 13cm 程度と非常に浅い。

南北の礎石建物２棟は柱間が 2.4m の８尺等間とみられ，政庁周辺官衙跡や大野城，基肄城などで見つかっている同構造の建物の柱間よりも１尺広く，全体に一回り大きい規模の建物であることも注目される。建物の時期は，現在遺物の整理中であるが，礎石抜取穴，雨落溝，瓦溜まりなどから出土する遺物から，この２棟の年代の上限は８世紀代で，下限は 10 世紀代に下るとみられる。

このほか，調査区北半及び南半中央部で古代の整地層を確認した。遺構面にみえる整地層は瓦を含んでいるが（上層整地），その下層で瓦を含まない整地層を確認した（下層整地）。礎石建物２棟は上層整地を切り込むことから，上層整地は８世紀代を上限とし，下層整地は瓦葺き建物が出現する８世紀代より以前の段階の整地とみられる。

なお，調査成果を受けて平成 30 年１月 14 日（日）に一般県民等を対象として現地説明会を開催し，約 120 名の参加があった。

第２３６次

大宰府史跡第 236 次調査は，調査地は蔵司丘陵南東部に広がる広い平坦地で，230 次調査区の東隣に位置する。これまでの確認調査で，古代の礎石抜取穴や瓦溜まり，整地層，近世の溝などが見つかっており，近世の絵図にも多数の礎石が描かれているため，大宰府関連の建物群が展開していたと推測されている。ただし，面積が広いため調査地点を絞り込むために事前にレーダー探査を行い地下遺構の有無や位置，深さなどの検討を行った。

第 230 次　現地説明会

調査の結果，東西に並ぶ 2 棟の礎石建物を検出できた。東側の礎石建物は，礎石抜取穴の配置から東西は少なくとも 4 間，南北は 3 間に復元される東西棟である。礎石は全て抜き取られているが総柱構造とみられ，柱間が東西 3.6 m，南北 3.0 mと広く，230 次調査で見つかっている高床式倉庫とは異なる構造である。西側の礎石建物との間に幅 1.2 ～ 1.5 m程度の南北溝があり，両建物が雨落溝として共有しているが，東側の礎石建物の側にのみ石列が残っており，この建物は低い基壇を伴っていたと考えられる。北側には幅 2.0 mほどの溝が東西にのび，雨落溝と考えられるが，西側礎石建物の側にまで直線的に続く。

西側の礎石建物は，礎石抜取穴の配置から東西 7 間の建物と推定される。柱間は礎石建物 1 と同じく桁間 3.6 m，梁間 2.7 m（？）を測る。建物の南北規模は未確認であるが，建物の南側の空間がそれほど広くないことから，南北 3 間の可能性が考えられる。西側の幅 1 m程度で残る溝が雨落溝の可能性がある。現在，出土遺物の整理中であるが，これら 2 棟の建物の年代は C 区の SB5110・5120 と同じく下限は 10 世紀代，上限は 8 世紀代と推定される。

第２３７次

大宰府史跡第 237 次調査は，観世音寺背後に位置する山ノ井池の排水施設改修工事に伴う確認調査で，1 月 9 ～ 24 日に確認調査及び立会調査を実施した。調査地は谷筋東側の丘陵斜面裾部にあたり，地形は東から西に向かって傾斜する。調査の結果，地山である風化花崗岩を掘り込む，一辺 60㎝ほどの略方形プランの土坑を検出した。付近の堆積土砂から石塔の部材などが多く出土したため中世墓の墓壙を検出した可能性が考えられる。これを受けて工事側と協議を行い，設計変更を行い，検出した土坑は粘質土の保護層が敷設され，遺構保全を図った。

第２３８次

大宰府史跡第 238 次調査は，集合住宅建替えに伴う確認調査で，1 月 25 日に実施した。調査地は，第 81・136 次調査において大型の四面廂建物が見つかっており，遺構を避けた位置に住宅基礎を設置するため，再確認の調査を行った。調査では柱穴の並びを確認し，国土座標による測量により，厳密な基礎の位置を定めることができた。

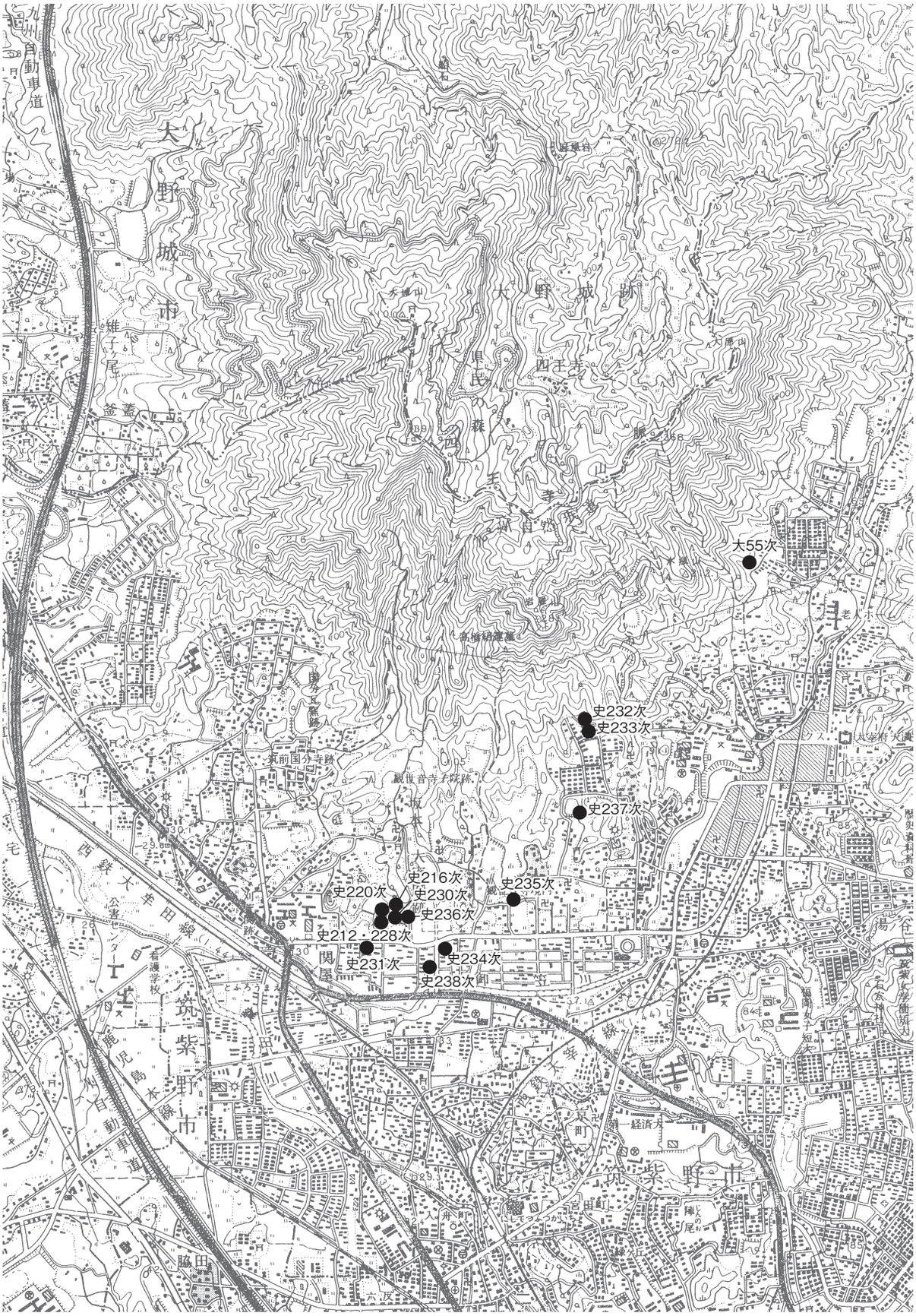


Fig. 1　大宰府史跡発掘調査地周辺図（1/25,000）

Tab. 4　大宰府史跡現状変更申請対応状況表

平成27年度

申請日	申請者	申請理由	申請地	面積(㎡)	指定区分	指示	対応内容	許可日
	県教育長	解説広場整備	大野城市下大利3丁目5-1,5-8 太宰府市吉松1丁目144-1,149-1他		特史水城跡	文許可	県教委整備	12月11日
12月25日	太宰府市長	案内サイン設置	太宰府市観世音寺5丁目47-1番,4丁目1105-1番		史跡観世音寺境内及び子院跡	文許可	太教委立会	2月12日
12月25日	太宰府市長	案内サイン設置	太宰府市観世音寺4丁目207-3・4・5		史跡大宰府学校院跡	文許可	太教委立会	2月12日
12月25日	太宰府市長	案内サイン設置	太宰府市観世音寺4丁目1159		特史大宰府跡	文許可	太教委立会	2月12日
2月 9日	太宰府市長	法面保護工	太宰府市水城4丁目250-51他		特史大野城跡	文許可	太教委立会	3月11日

平成28年度

申請日	申請者	申請理由	申請地	面積(㎡)	指定区分	指示	対応内容	許可日
4月15日	個人	確認調査及び家屋新築等	太宰府市観世音寺6丁目896番22他		史跡観世音寺境内及び子院跡	文許可	九歴調査 太教委立会	6月17日
5月 6日	個人	擁壁建替	太宰府市観世音寺6丁目896番117	44.82	史跡観世音寺境内及び子院跡	文許可	太教委立会	6月17日
5月27日	九州歴史資料館長	確認調査	太宰府市観世音寺3丁目476他		特史大宰府跡	文許可	九歴調査	7月15日
6月14日	九州歴史資料館長	確認調査	太宰府市大字太宰府1478他	67.85	特史大野城跡	文許可	九歴調査 太教委立会	7月15日
6月15日	大野城市教育長	発掘調査	大野城市下大利4丁目705-4他		特史水城跡	文許可	大教委調査	7月15日
6月20日	大野城市教育長	散策路整備	大野城市瓦田1-1他		特史大野城跡	文許可	大教委整備	7月15日
7月29日	個人	家屋新築	太宰府市観世音寺6丁目896番51		史跡観世音寺境内及び子院跡	文許可	太教委立会	9月16日
8月18日	太宰府市長	道路拡幅	太宰府市観世音寺3丁目278-2他		史跡観世音寺境内及び子院跡	文許可	太教委立会	12月 9日
8月10日	太宰府市教育長	発掘調査及び整備工事	太宰府市国分2丁目199他		特史水城跡	文許可	太教委調査	9月16日
9月20日	県教育長	環境整備	太宰府市大字太宰府字岩谷1790-6 宇美町大字四王寺字猫坂191-1		特史大野城跡	文許可	県教委整備	10月21日
9月 2日	九州歴史資料館長	確認調査	太宰府市観世音寺6丁目715-75・76、896-29	8.4	史跡観世音寺境内及び子院跡	文許可	九歴調査 太教委立会	10月21日
10月17日	大野城市教育長	便益施設設置	大野城市大字瓦田618-1他		特史大野城跡	文許可	大教委整備	11月18日
10月17日	大野城市教育長	拠点施設整備	大野城市下大利3丁目681-8他		特史水城跡	文許可	大教委整備	11月18日
10月25日	個人	家屋解体等	太宰府市国分3丁目637番		史跡筑前国分寺跡	文許可	太教委立会	12月 9日
11月 1日	個人	家屋解体等	太宰府市観世音寺4丁目4391-1		特史大宰府跡	文許可	太教委立会	12月 9日
11月11日	太宰府市長	法面保護工	太宰府市水城4丁目262-217		特史水城跡	文許可	太教委立会	12月 9日
11月18日	福岡農林事務所長	地質調査	大野城市大字乙金618-48		特史大野城跡	文許可	大教委立会	12月 9日
12月19日	個人	法面保護工	太宰府市観世音寺4丁目604番		特史大宰府跡	文許可	太教委立会	1月27日
12月19日	太宰府市長	法面保護工	太宰府市大字太宰府字岩谷1790-3他		特史大野城跡	文許可	太教委立会	1月27日
12月20日	太宰府市長	法面保護工	太宰府市大字太宰府字岩谷1790-16他		特史大野城跡	文許可	太教委立会	1月27日
1月12日	九州歴史資料館長	確認調査	太宰府市観世音寺4丁目213他	4	史跡学校院跡	文許可	九歴調査 太教委立会	2月10日
1月13日	福岡農林事務所長	治山ダム補修等	大野城市乙金618-2		特史大野城跡	文許可	大教委立会	2月10日
3月16日	大野城市教育長	発掘調査	大野城市旭丘1丁目685-1他		特史水城跡	文許可	大教委調査	4月21日
3月16日	宇美町長	バス停設置	糟屋郡宇美町大字四王寺字大石垣250-1先21316		特史大野城跡		宇教委立会	3月29日

平成29年度

申請日	申請者	申請理由	申請地	面積(㎡)	指定区分	指示	対応内容	許可日
4月13日	太宰府市長	法面保護工	太宰府市大字太宰府字岩谷1790-1		特史大野城跡	文許可	太教委立会	6月16日
4月14日	個人	家屋新築等	太宰府市観世音寺6丁目715-88他		史跡観世音寺境内及び子院跡	文許可	太教委立会	6月16日
6月29日	個人	家屋新築等	太宰府市観世音寺6丁目896-51他		史跡観世音寺境内及び子院跡	文許可	太教委立会	7月21日
7月14日	法人	試験材料の採取	糟屋郡宇美町大字四王寺字アユカエリ15		特史大野城跡		宇教委立会	9月27日
8月18日	太宰府市教育長	発掘調査	太宰府市吉松3丁目479-2		特史水城跡	文許可	太教委調査	9月15日
9月20日	大野城市教育長	発掘調査	大野城市下大利4丁目714-3他		特史水城跡	文許可	大教委調査	10月20日
9月20日	大野城市教育長	散策路整備	大野城市下大利5丁目757-16他		特史水城跡	文許可	大教委整備	10月20日
10月12日	太宰府市長	確認調査及び斜樋改修	太宰府市観世音寺5丁目896-1		史跡観世音寺境内及び子院跡	文許可	九歴調査 太教委立会	11月17日
10月12日	個人	家屋新築等	太宰府市観世音寺6丁目896-103		史跡観世音寺境内及び子院跡	文許可	太教委立会	11月17日
10月18日	大野城市教育長	整備工事	大野城市旭丘1丁目685-1		特史水城跡	文許可	大教委整備	11月17日
11月 7日	那珂県土整備事務所長	地質調査等	太宰府市大字太宰府1451他		特史大野城跡	文許可	太教委立会	12月 8日
11月 9日	太宰府市長	解説板建替	太宰府市観世音寺4丁目1100番地		史跡観世音寺境内及び子院跡	文許可	太教委立会	12月 8日

Tab. 4　大宰府史跡現状変更申請対応状況表

平成29年度

申請日	申請者	申請理由	申請地	面積(㎡)	指定区分	指示	対応内容	許可日
1月10日	太宰府市長職務代理者	案内サイン建替	太宰府市観世音寺4丁目550-2		特史大宰府跡	文許可	太教委立会	2月 9日
1月12日	太宰府市長職務代理者	支柱新設	太宰府市大字太宰府字岩屋1790-6		特史大野城跡	文許可	太教委立会	2月 9日
3月 5日	太宰府市長	案内サイン建替	太宰府市観世音寺4丁目588-2		史跡観世音寺境内及び子院跡	文許可	太教委立会	4月20日
3月 5日	太宰府市長	案内サイン建替	太宰府市観世音寺5丁目183-4		史跡観世音寺境内及び子院跡	文許可	太教委立会	4月20日
3月 6日	個人	家屋新築等	太宰府市観世音寺6丁目715-95他		史跡観世音寺境内及び子院跡	文許可	太教委立会	4月20日
3月 6日	九州歴史資料館長	確認調査	太宰府市観世音寺6丁目715-75他	15	史跡観世音寺境内及び子院跡	文許可	九歴調査 太教委立会	4月20日

凡例：特史―特別史跡，史跡観世音寺―史跡観世音寺境内及び子院跡附老司瓦窯跡
文許可―文化庁許可
県教委―福岡県教育委員会，九歴―九州歴史資料館
宇教委―宇美町教育委員会，大教委―大野城市教育委員会，太教委―太宰府市教育委員会

Tab. 5　大宰府史跡発掘調査実施表

平成28年度

№.	調査次数	調査地区	面積㎡	調査期間	調査内容
1	大宰府史跡第228次調査	6AYT-A-J・I	414	160414～170317	政庁周辺官衙跡蔵司地区
2	大宰府史跡第230次調査	6AYT-A-J	545	161108～170321	政庁周辺官衙跡蔵司地区
3	大宰府史跡第231次調査	6AYM-C-Y	4.00	160419	政庁周辺官衙跡大楠地区
4	大宰府史跡第232次調査		5.31	160721	観世音寺子院跡
5	大宰府史跡第233次調査		8.4	161128～161129	観世音寺子院跡
6	大宰府史跡第234次調査	6AYI-D-Y	24.75	161220～161221	政庁周辺官衙跡政庁前面広場地区
7	大宰府史跡第235次調査	6ZGK-A	4.00	170307・170314	大宰府学校院跡
8	大野城跡第55次調査	6AON	67.85	160920～160921	大野城跡原地区

平成29年度

№.	調査次数	調査地区	面積㎡	調査期間	調査内容
1	大宰府史跡第228次調査	6AYT-A-I・J	460	151009 ～ 171218	政庁周辺官衙跡蔵司地区
2	大宰府史跡第230次調査	6AYT-A-J	578.5	161108 ～ 180313	政庁周辺官衙跡蔵司地区
3	大宰府史跡第236次調査	6AYT-A-F	895.31	170724 ～ 180328	政庁周辺官衙跡蔵司地区
4	大宰府史跡第237次調査		4.00	180109 ～ 180124	観世音寺子院跡
5	大宰府史跡第238次調査	6AYM-A-T	27.00	180125	政庁周辺官衙跡政庁前面広場地区

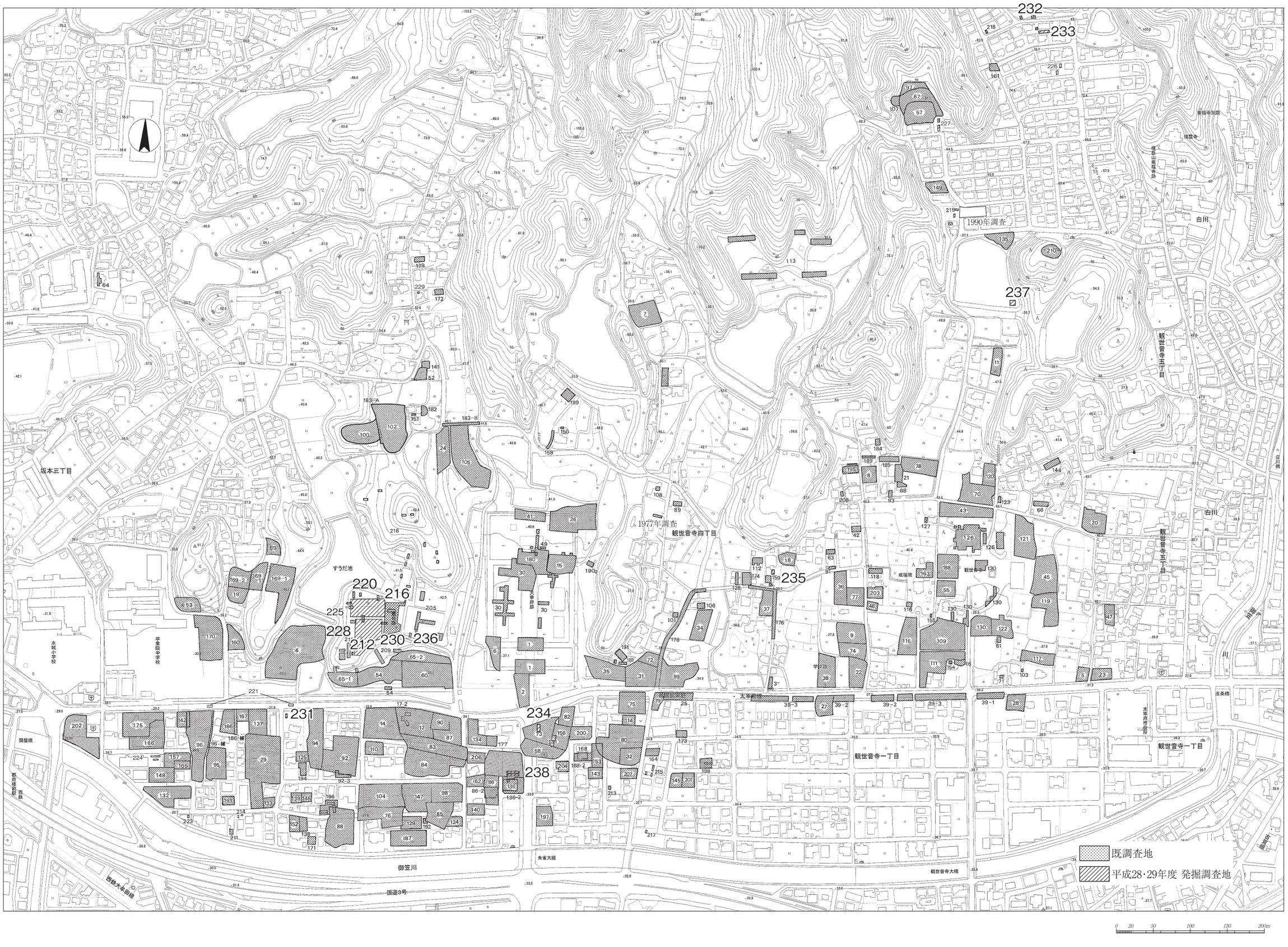


Fig. 2　大宰府史跡発掘調査地域図（1/5,000）

Ⅱ　大宰府跡の計画調査

Ⅱ　大宰府跡の計画調査

１　蔵司地区計画調査の経過 …… 11

２　第 212 次調査（蔵司Ｅ区）…… 12
（１）調査概要 …… 12
（２）トレンチ設定 …… 12
（３）各トレンチの調査成果 …… 14
（４）出土遺物 …… 19
（５）小　　結 …… 32

３　第 212 次調査出土鉄関連遺物の理化学的分析 …… 33
（１）調査概要 …… 33
（２）調査方法 …… 34
（３）調査結果 …… 36
（４）まとめ …… 43

４　第 220 次調査（蔵司Ｃ・Ｄ区）…… 65
（１）調査概要 …… 65
（２）トレンチ設定 …… 65
（３）各トレンチの調査成果 …… 67
（４）出土遺物 …… 74
（５）小　　結 …… 84

５　第 216 次調査出土土壌の理化学的分析 …… 84

1　蔵司地区計画調査の経過

計画調査

九州歴史資料館では，平成21年度から大宰府政庁西側の蔵司丘陵に位置する蔵司地区官衙の構造解明に向けた計画調査を実施している。平成21年度には，事前調査として中世山城の縄張り図を作成する方法を援用し，丘陵部をA～Gの7地区に区分した上で，現在の地形の状況や，礎石・遺物の散布状況等，現況把握図を作製するとともに，大型礎石建物SB5000の現況実測図の作成，主要地点の地中レーダー探査，古絵図・地籍図等の資料整理を行った。そして，その成果に基づき，平成22年度に「大宰府政庁周辺官衙跡・蔵司地区の調査研究の方針」を作成し，発掘調査への道筋を整理した。

方針においては，蔵司丘陵が3万㎡と非常に広大である一方で，大型礎石建物SB5000以外の遺構の情報が全く得られていない状況であったことから，本格的な発掘調査の実施に先立ち，丘陵各所で確認調査を実施し，その成果を踏まえて重点調査地区を設定し，重点的な発掘調査を実施することとした。

確認調査

確認調査は，方針策定と併行する平成21年度から着手し，平成21年度にA区（第205次），平成22年度にF区（第209次），平成23年度にE区（第212次），平成24年度にB・G区（第216次），平成25年度にC・D区（第220次）と進んだ。確認調査のうち，A・B・D・F区では建物や土坑など古代の施設に関連する遺構を確認し，また全ての地区において古代に遡る整地層が見つかり，丘陵上に古代の遺構が広く分布している状況が判明した。また，現況把握調査でも採集されていた被熱鉄製品がA・C・D・E・F区など丘陵南半の平坦地を中心に分布していることも明らかとなった。

重点調査

こうした確認調査の成果をうけ，平成25年度に「大宰府政庁周辺官衙跡・蔵司地区の重点調査の方針」を定め，平成26年度から重点調査を開始した。重点調査は遺構・遺物が顕著に分布している丘陵南半部を中心に実施することとし，平成26・27年度にD区（第225次），平成27・28年度にE区（第228次），平成28・29年度にC区（第230次），平成29年度からA区（第236次）へと順次展開しており，平成30年度も引き続きA区における重点調査を行った。

第225次調査（D区）では，大型礎石建物SB5000は周囲に雨落溝がめぐるが，特段の基壇化粧は伴わないこと，下層にSB5000より遡る時期の掘立柱建物3棟が存在すること，古代の整地層も掘立柱建物の段階のものと，礎石建物の段階のものの二時期に区分できることなどが判明した。第228次調査（E区）では掘立柱建物1棟の規模が確定するとともに，平坦地西端付近に柵状の遺構が存在すること，西側は谷地形が大きく入り込んでいたところを整地して平坦面を確保していることなどが判明した。第230次調査（C区）では5間×3間の総柱礎石建物2棟が南北に並ぶ状況で見つかり，広い範囲で谷地形を埋めるなどの整地を行っている状況が判明した。第236次調査（A区）でも複数の礎石建物が見つかるとともに，広範囲に古代の整地が確認できた。

なお，重点調査は現在も継続中であり，出土遺物の整理作業も進めており，今後，蔵司地区の正式報告書において成果をまとめる予定で，本書では確認調査のうち報告が遅れていた第212次調査と第216次調査，第220次調査の成果について報告を行う。

2　第 212 次調査（蔵司 E 区の計画調査）

（1）調査概要

経　過　調査地は特別史跡大宰府跡の指定地内に位置し，政庁周辺官衙跡・蔵司地区にあたる。蔵司地区では，平成 21 年度より計画調査を開始し，現況地形の形成過程や，遺構の分布や遺存状況などを把握するための確認調査を実施している。

計画調査の３ヶ年目となる平成 23 年度は，蔵司 E 区において大宰府史跡第 212 次調査を実施した。調査は平成 23 年６月 28 日に開始し，計６箇所にトレンチを設定した。調査期間中の平成 24 年３月 13 日には地元向けに現地説明会を実施し，約 100 名の見学者があった。調査は平成 24 年３月 30 日まで行った。

調査の結果，段地形は後世の造成により形成されたものであること，溝状遺構についても調査当初は古代に遡る区画に伴う溝の可能性も考えていたが，近現代の耕作に伴う溝であることが判明した。一方で，古代の整地層とみられる赤褐色粘質土の広がりも確認でき，後世に大きく削平を受けながらも部分的に古代の整地の痕跡が残っていることも判明した。ただし，古代に遡る建物等の遺構は確認できなかった。

位　置　調査地点は蔵司地区官衙のうち，丘陵南西部の平坦地に位置する。地番は太宰府市観世音寺３丁目 484 番－１・2，486 番である。

（2）トレンチ設定（Fig. 4）

第 212 次調査の対象となる E 区は，大型礎石建物 SB5000 がある D 区の南側に広がる平坦地で，近現代に耕作地となっていたこともあり，ほとんど起伏のない平坦な地形をなしている。しかし，測量の結果，E 区南西側に低い段地形があり，段差が東西方向あるいは南北方向にのびる傾向にあることから，何らかの人為的な地形の改変・造作の可能性が考えられた。特にこの段地形と軸を揃えるように南北方向の低い高まりも確認でき，段地形とともに古代の造作による可能性も考えられた。さらには，事前の現地踏査によって蔵司地区の中でも被熱鉄製品が集中的に散布し，壁土もしくは炉壁状の土塊が所々に散見されるなど，蔵司地区に特徴的な被熱鉄製品の被熱要因や関連遺構の広がりなどの把握ができるものと期待された。

そうした状況を踏まえ，現況地形の成因や南西部における遺構の分布状況の把握のため，A～F の６箇所のトレンチを設定し，調査を実施した。トレンチは，基本的に段地形と直交する方向とし，国土座標（日本測地系）に合せる形で設定し，必要に応じて拡張などを行った。

A トレンチは，南北方向にのびる高まりの状況把握と，段地形の構造を把握するため，東西幅２m，南北長 12 mの規模で設定し，東西方向の土層を確認するため中央部に 0.5 m幅の土層ベルトを設けた。また，トレンチ東壁沿いで見つかった溝状遺構の広がりを把握するため北東側の一部を 0.5 mの幅で拡張した。調査面積は 24㎡である。

B トレンチは，南北方向にのびる段地形の把握を目的として，段と直交する東西方向の調査区とし，南北幅１m，東西長５mの規模で設定した。調査面積は５㎡である。

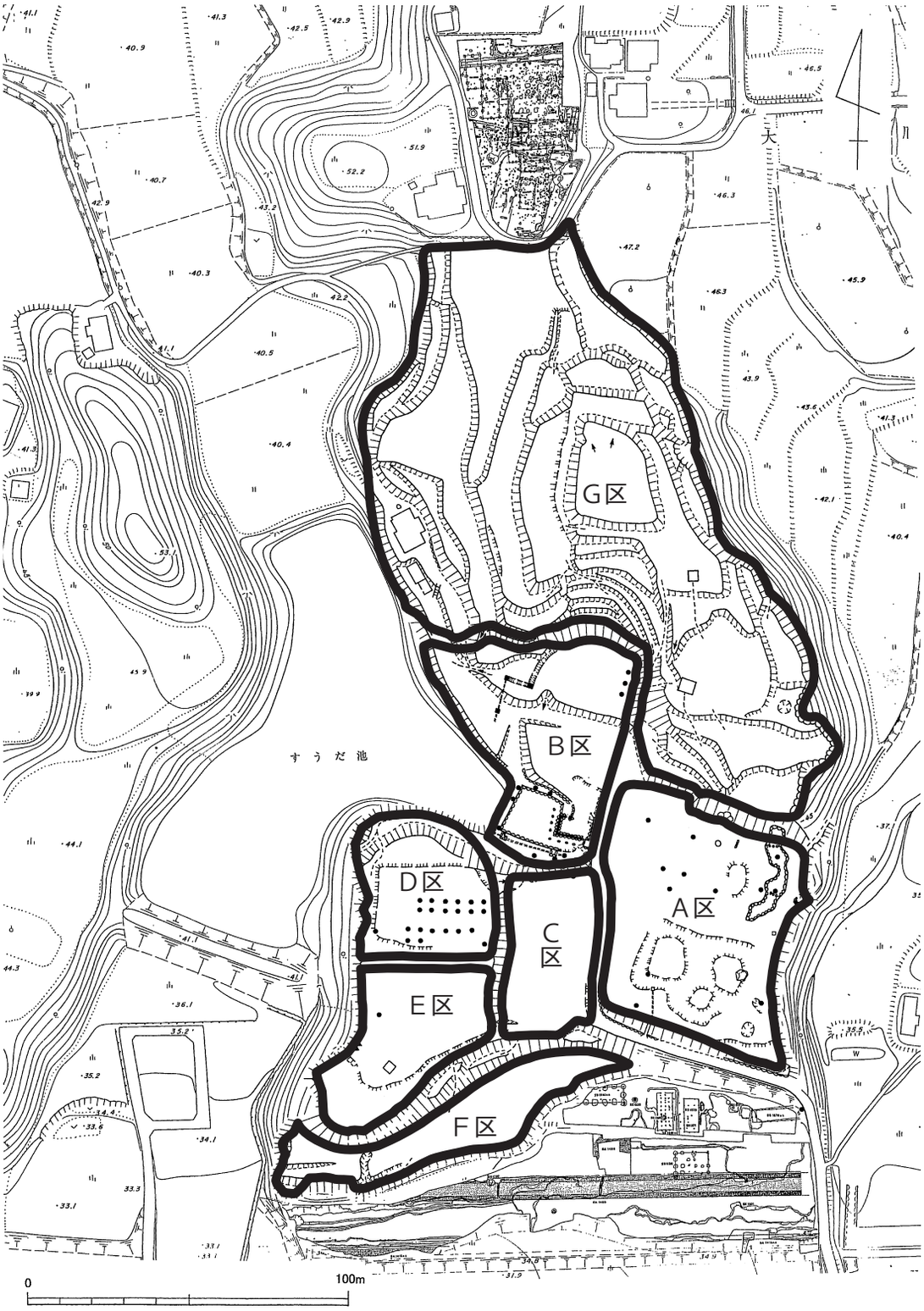


Fig. 3　蔵司丘陵地区割図（1/2,000）

Ｃトレンチは，段地形が直角に折れることから，その角の部分の状況を把握するため，東西幅３ｍ，南北長４ｍの規模で設定した。調査面積は 12㎡である。

Ｄトレンチは，Ａトレンチ北側の低い高まりの状況及びＡトレンチで確認した溝状遺構の延長部を把握するため，東西幅２ｍ，南北長４ｍの規模で設定した。調査面積は８㎡である。

Ｅトレンチは，Ａ・Ｄトレンチで見つかった溝状遺構が北側までのびるか否かを把握するため，南北幅２ｍ，東西長４ｍの規模で設定した。しかし，設定範囲の中では溝状遺構が確認できなかったことから，西側の崩落した法面への影響が出ないよう，西側に長さ 1.5 ｍ，幅 0.5 ｍの規模で拡張した。調査面積は 8.75㎡である。

Ｆトレンチは，Ａトレンチの東壁沿いで見つかった溝状遺構が途中で終わることから，その位置で東側に曲がるのか否かを確認するために設けたもので，東西幅１ｍ，南北長 2.5 ｍの規模で設定した。調査面積は 2.5㎡である。

（３）各トレンチの調査成果

以下では，各トレンチの基本層序と検出遺構について報告する。

Ａトレンチ（Fig. ５，PL. ２・３）

基本層序　南北に長い調査区であるが，表土（２層）及び堆積土である茶褐土（３層）を除去すると，橙褐色粘質土と淡黄褐色粘質土が混じった古代の整地層（18 層）がトレンチ北側を中心に広がる。この整地層の無い範囲は花崗岩風化土の地山（19 層）が露出する。トレンチ東側に南北方向の溝状の掘り込みＳ－１（13・14 層）があり，当初古代に遡る溝と推定したが，調査を進めた結果，近代以降の耕作に伴う溝で，古代の整地層に切り込んでいることが判明した。また，トレンチ南側にある東西方向の溝状の掘り込みＳ－５（４～６層）についても同様に近代の耕作に伴う溝であることが判明した。なお，南北方向の溝状掘り込みより東側の 11 層や，南側の溝状遺構から南側の７～ 10 層については，近代以降の耕作土である。

古代の整地

検出遺構

SX4731（Fig. ５）

土層ベルトより北側の調査区の西壁沿いに位置し，一辺 0.65 ～ 0.7 ｍ程度の隅丸方形を呈する。埋土は黒褐色土と褐色土が混じった粘質土（17 層）である。埋土中に瓦片や被熱鉄製品が混じるなど，古代よりも新しい時期に下る可能性も考えられるが，一段掘り下げた時点で，北寄りの位置に直径 20cm ほどの柱痕跡らしき黒褐色土が確認できたことから，柱穴である可能性も否定できない。

SX4732（Fig. ５）

土層ベルトより南側の調査区の北寄りに位置し，長径 0.6 ｍ，短径 0.45 ｍの楕円形を呈する。一段掘り下げたところで掘削を止めたため性格は不明であるが，古代の整地層（18 層）に掘り込む遺構である。

Ｂトレンチ（Fig. ６，PL. ３）

基本層序　西側に向って緩やかに下る地形が，段地形になる可能性を想定して東西方向に設

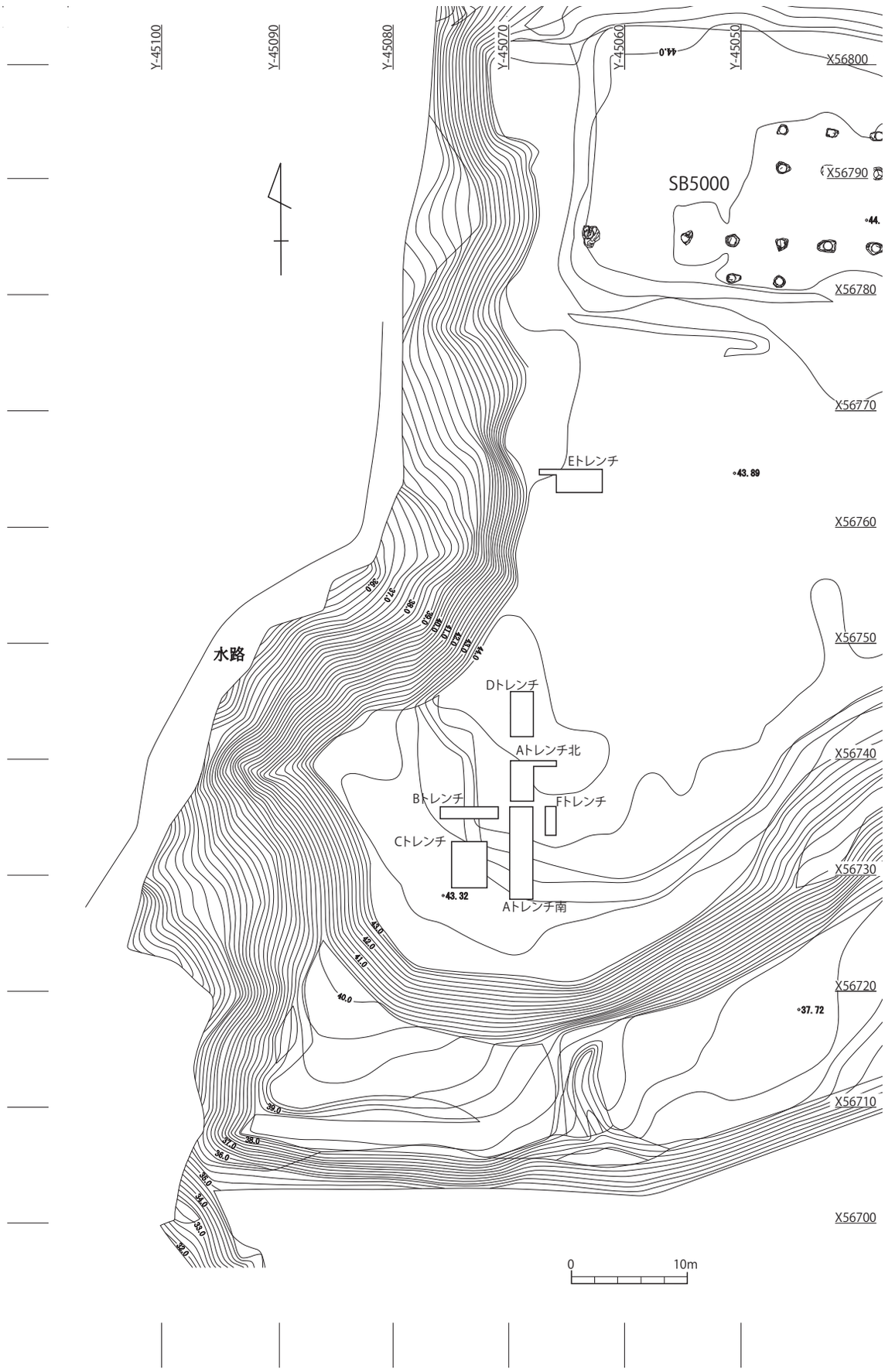


Fig. 4　第 212 次調査区トレンチ配置図（1 /500）

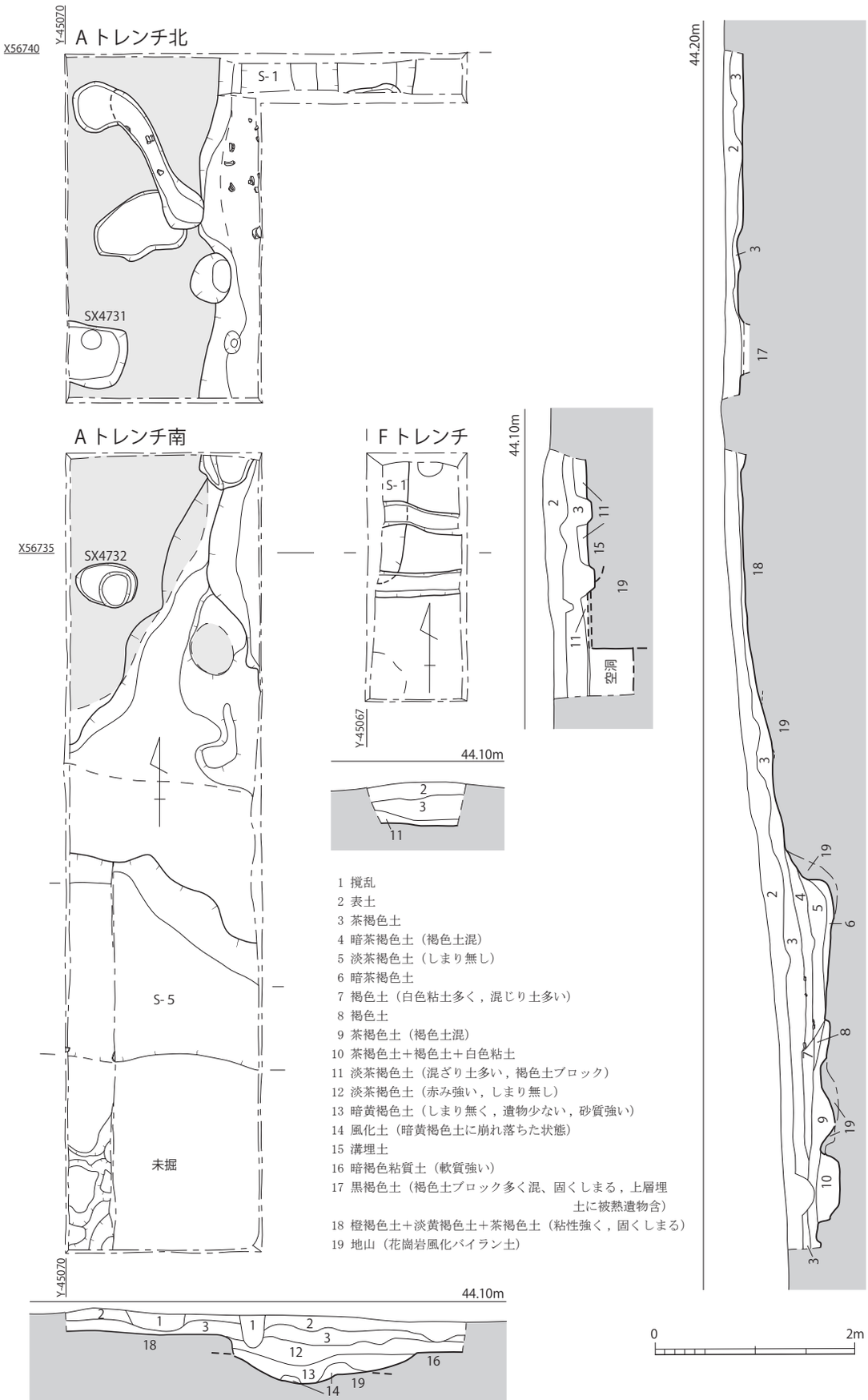


Fig. 5　第 212 次調査Ａ・Ｆトレンチ実測図（1/60）

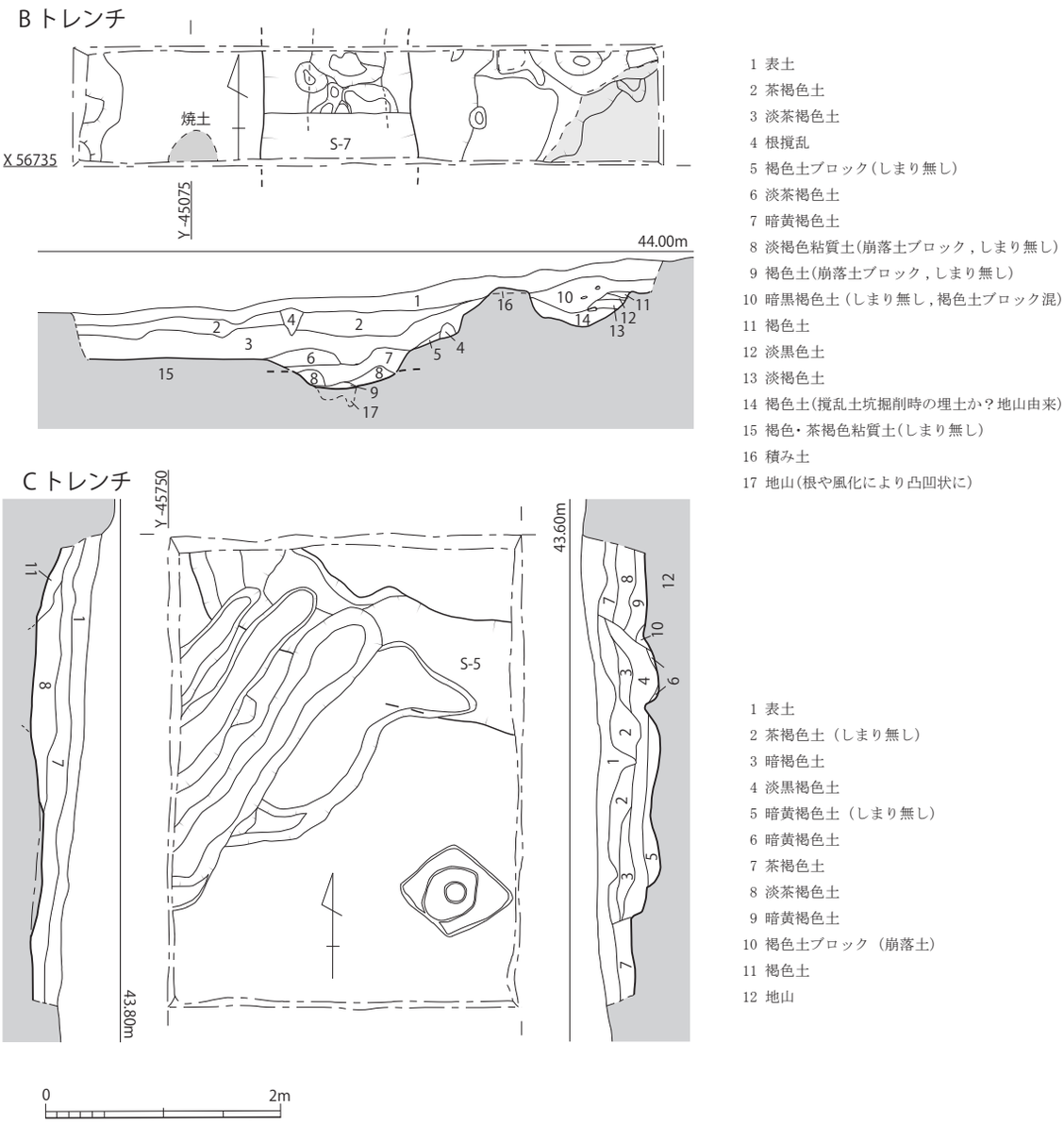


Fig. 6　第 212 次調査Ｂ・Ｃトレンチ実測図（1/60）

定した調査区である。表土（１層）の下層には近代以降の堆積土である茶褐色土（２層）が広がる。西側の一段低い側には，同じく近代以降の堆積土である淡茶褐色土（３層）が厚く堆積しており，これらを除去すると段地形が露出する。段地形を下がったところには，幅 1.3 mほどの溝状遺構Ｓ－７（６～９層）があり，当初何らかの区画施設に伴う溝の可能性も想定したが，調査の結果，近代以降の耕作に伴う溝であることが判明した。この溝よりも西側は，黄白色や褐色, 茶褐色の粘質土が混じった層（15 層）がみられ, 古代の整地土の可能性も考えたが, 締まりがなく，近代以降の造成に伴うものと推定される。

一方，一段高い東側では橙褐色や黄褐色，赤褐色などを呈する粘土が混じった層（16 層）が広がっている。締まりがあり，古代に遡る瓦の小片も僅かながら含むようである。この層は近現代より遡ることは確実で，古代の整地層と推定される。この下層には花崗岩風化土の地山があり，より下層は白色を帯びた粘性土が地山となる。

古代の整地

当トレンチでは古代の整地層（16 層）の広がりを確認したが，建物等の遺構は確認できなかった。トレンチ西側では，平面図に破線で示した範囲に焼土の広がりを確認したが，近代以降の造成土（15 層）の上面で検出したもので，古代などに遡るものではない。

Cトレンチ（Fig. 6，PL. 4）

基本層序　発掘調査に先立つ地形測量により等高線が直角に曲がる箇所にあたり，人為的な土地造成や遺構が存在する可能性などを考慮し設けた調査区である。厚く堆積した表土（１層）を除去すると，近代以降の堆積土である茶褐色土（７層）となる。トレンチ西半では帯状の耕作痕が数条確認できたが，トレンチ西壁の状況から耕作痕（２～６層）は７層を切り込むようである。茶褐色土の下層には淡茶褐色土（８層）や暗黄褐色土（９層）などが堆積しているが，近代以降の堆積土である。７・８層を除去すると，トレンチ北側を東西に走る溝状遺構S－５（９・10層）が確認でき，当初古代に遡る区画溝等の可能性も推測したが，調査の結果，近代以降の耕作に伴う溝であることが判明した。なお，この溝より南側の範囲では褐色粘質土と黄白色粘質土が混じった層が広がり，古代の整地層の可能性も考えたが，締まりがなく，近代以降の造成に伴うものと考えるのが穏当のようである。これらの下層は地山となり，標高が高い北東部では赤褐色を呈する花崗岩風化土，それより下位では白色に近い花崗岩風化土となる。

なお，当トレンチでは遺構は確認できなかった。

Dトレンチ（Fig. 7，PL. 4）

基本層序　当トレンチは，発掘調査前の地形測量時に確認した地形の高まりの成因を探るために設けた調査区である。表土（１層）を除去すると，近代以降の堆積土である茶褐色土（２層）があり，これを除去すると，調査区東壁沿いに南北方向の溝状遺構 S－１（４層）が確認できた。この掘り込みはAトレンチ及びEトレンチでも確認したが，調査の結果，近代以降の耕作に伴う溝であることが判明した。その一方で，この近代以降の溝より西側では，橙褐色・黄褐色・赤褐色などを呈する粘質土が混じった層（６層）が広がっている。締まりがあり，古代に遡る瓦片を含むことは確かのようであるが近現代の遺物を含まないことなどから，古代の整地層の一部が遺存しているものと推定される。

古代の整地

以上のように，当トレンチでは古代に遡る整地層は確認できたが，それ以外の建物などの遺構は確認できなかった。

E トレンチ（Fig. 7，PL. 5）

基本層序　表土（１層）及び堆積土（２層）である茶褐色土を除去すると，暗茶褐色粘質土と褐色粘質土の混じった耕作土（５層）となる。当初調査区の西端の拡張部で南北方向の溝状遺構S－１（３・４層）を確認しており，古代の整地層に掘り込まれていると考えていたが，土層観察により５層は近代以降の耕作土であることが判明し，耕作土に掘り込む近代以降の溝であることが判明した。耕作土の直下からは古代の整地層（６・７層）となる。

古代の整地

なお，当トレンチでは古代の整地層の広がりは確認できたが，建物をはじめとする遺構は確認できなかった。

Fトレンチ（Fig. 5，PL. 5）

基本層序　当初A・D・Eトレンチで確認した溝状遺構の広がりを把握するために設けた調査区であったが，調査の結果，溝状遺構は近代以降の耕作に伴う溝であることが判明した。表土（2層）が厚く，これを除去すると近代以降の堆積土である茶褐色土（3層）と淡茶褐色土（11層）となる。この下層で溝状遺構S－1（15層）が確認でき，花崗岩バイラン土の地山（19層）に掘り込んでいる。

なお，トレンチを掘削している際に，南西隅付近が陥没し，空洞が現われた。空洞は直径2m程度の楕円形を呈するようで，地中の水の流れによって，土が吸われて空洞が生じたものと推定される。

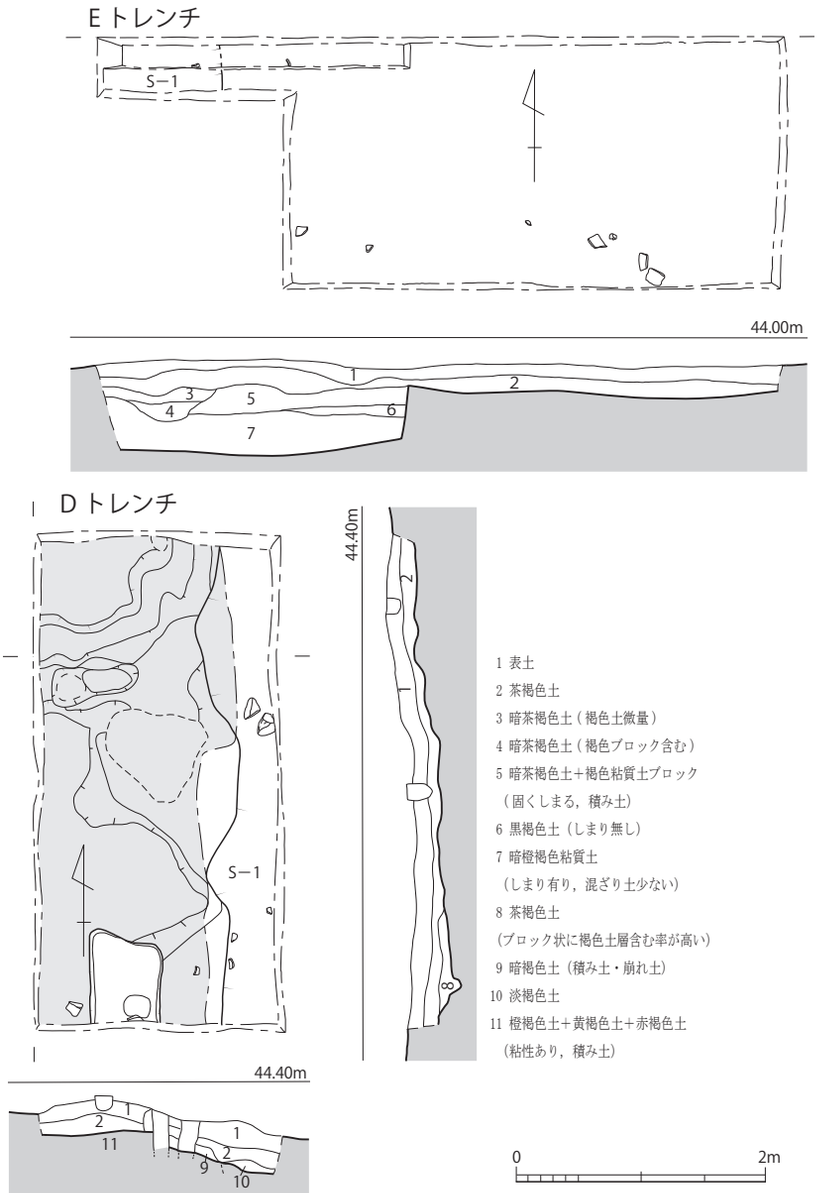


Fig. 7　第 212 次調査D・Eトレンチ実測図（1/60）

当トレンチでは，先述のように近現代の溝S－1は確認したが，これより遡る時期の遺構は確認できなかった。

（4）出土遺物

1）瓦塼類

軒平瓦（Fig. 8－1，PL.20）

本調査で出土した軒瓦は皆無に等しく，唯一560B型式軒平瓦（1）が出土したのみである。瓦当右側の破片で，右端から1転目と2転目の唐

Tab. 6　第 212 次調査出土軒瓦点数表

型式名称			合計	E区 212次	百分比 (%)
軒平瓦	560	Bb～c	1	1	100.00
	合　計		1	1	100.00

560B型式

草の間にあたる。笵傷を有することから 560Bb 型式もしくは Bc 型式のいずれかの段階である。顎は欠損しているが，長さは 4.5cm で，浅顎である。凸面はナデ調整で，叩きは確認できない。

型式名称			点数	E区	D区	百分比
				212次	220次	(%)
文字瓦	901	A	2		2	9.52
		B	3		3	14.29
		C	10	7	3	47.62
		E	1	1		4.76
	915	A	5	3	2	23.81
	合計		21	11	10	100
文様	十字文		1		1	
	合計		1	0	1	

Tab. 7　第 212・220 次調査出土文字瓦点数表

道具瓦類（Fig. 8－2，PL.20）

大宰府式鬼瓦

小片であるが，大宰府式鬼瓦 1 点（2）が出土している。左頬の破片で，吊り上った口角の一部がみえる。全体像が分からないが，大きさと口髭の表現から IB 式とみられる。

文字瓦（Fig. 8－3～13，PL.20）

第 212 次調査では 11 点が出土した。その内訳は，陽刻の「平井瓦」銘の 901C 型式が 7 点，「平井」銘の 901E 型式が 1 点，大きな斜格子に「大」銘の 915A 型式が 3 点である。

平井銘主体

3～10 は 901C 型式で，3～9 は丸瓦，10 は平瓦である。3 はやや胎土が粗く，砂粒が目立つ。凹面に布目を残す。4 は須恵質で，やはり破面には砂粒が目立つ。また凹面に粗い布目を残す。5 は土師質で，さほど砂粒は目立たない。凹面には布目を残す。6 は右側縁の小片で，辛うじて分割時の截面と破面を残す。凹面は布目を粗くナデ消している。7 は須恵質で，凹面は布目を粗くナデ消している。8 は細片であるが，辛うじて 901C 型式と判別できる。凹面は粗い布目である。9 はやや焼成があまい。凹面には布目が残る。10 は唯一平瓦に 901 型式の文字銘を叩打するものである。磨滅が著しい。

11 は陰刻の斜格子文のなかに陽刻の「平井」銘をもつ 901E 型式である。丸瓦の左側縁の破片で，側面に分割時の截面と破面を残す。凹面は布目である。須恵質で，砂粒はさほど目立たない。

12・13 は大きな斜格子のなかに「大」銘をもつ 915A 型式である。12 は平瓦の小片で，凹面に布目を残す。13 は平瓦で左側縁を残し，側面は分割時の截面と破面がみられる。凹面の側縁近くには粘土の接合痕跡がみられ，粘土板作りである。模骨痕はみられず，円筒桶によるか。凹面全体に布目を残す。

丸瓦・平瓦（Fig. 8－14～28，PL.20）

ほとんど破片資料で，全形を知り得る資料はない。ここでは主な資料について報告する。

14 は凸面に縄目叩きを行う丸瓦である。右側縁の破片で，側面はヘラ切り調整である。凹凸両面だけでなく破面にまで溶けた金属分が皮膜状に覆っている。被熱瓦の 1 つであるが，縄目叩きの丸瓦で良好な資料が限られるため，ここで報告した。

15～18 は凸面に縄目叩きを行う平瓦である。15 は狭端側の右側縁の隅部の破片である。狭端面・右側面ともヘラ切り調整である。縄目はやや細かい。凹面に模骨痕を残し，粘土板桶巻作りとみられる。16 もやや細かい縄目で，凹面はナデ調整のようである。模骨痕があり，粘土板桶巻作りか。17 はやや大きな縄目である。凹面は細かい布目がみられるが，平滑で，

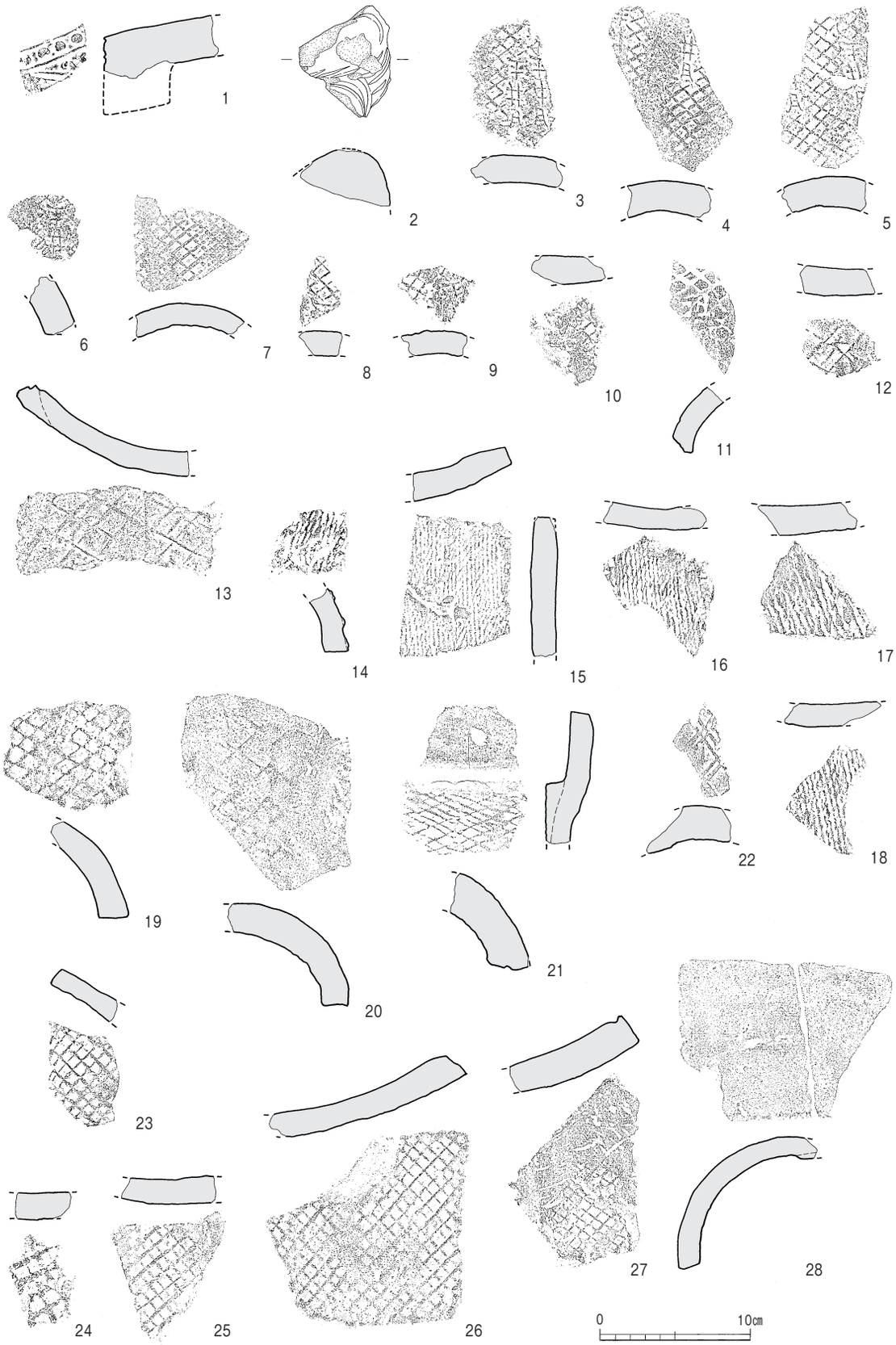


Fig. 8　第 212 次調査出土瓦実測図（1/4）

一枚作りによるものか。18 は通有の大きさの縄目である。凹面はナデ調整で仕上げており，わずかに細かな布目が残っている。

19 ～ 22 は凸面に斜格子叩きを行う丸瓦である。19 は比較的整った斜格子である。右側縁の破片で，側面には分割時の截面と破面を残す。凹面はやや細かい布目である。20 はやや磨滅気味であるが，大きな斜格子である。右側縁を残す破片で，側面には分割時の截面と破面が残る。凹面は粗い布目が残る。21 は横長の細かな斜格子で，玉縁式丸瓦の破片である。右側面には分割時の截面と破面が残る。凹面は粗い布目で一部ナデ消している。22 は小片であるが，二重格子の中に十字文が入るものである。凹面には非常に細かい布目がみられる。

23 ～ 27 は凸面に斜格子叩きを行う平瓦である。23 は左側縁の破片で，凸面に比較的整った斜格子叩きを行う。側面はヘラ切り調整で，凹面はやや粗い布目を残す。24 は格子の線が若干太い。25 は 23 に近い格子か。凹面はやや磨滅しているが，布目を残す。26 は正方形に近い斜格子であるが，23･25 なども同種か。右側縁を残し，側面は分割時の截面と破面を残す。凹面は布目が残るが，糸切り痕もみられ，粘土板作りである。分割破面には粘土板の継ぎ目もみられ，継ぎ目を分割位置としたようである。27 は斜格子叩きであるが，ナデ調整により部分的にしか残っていない。右側縁の破片で，側面は分割時の截面と破面が残る。凹面は布目が残る。

28 は凸面をナデ消しで仕上げる丸瓦である。左側縁を残す広端側の破片である。凹面は布目がみられ，側面には分割時の截面と破面を残す。

被熱瓦（Fig. 9，PL.20）

被熱した瓦

蔵司丘陵上の調査における特徴的な遺物の１つとして被熱した瓦がある。被熱の状況は多様で，丸瓦・平瓦などが確認できるが，現時点では軒瓦で被熱している資料は見受けられない。ここでは代表的な資料を報告することとしたい。

１～ 16 は平瓦で，凸面は縄目叩きと斜格子叩きの２種が確認できる。１～ 12 は凸面に縄目叩きを残す平瓦である。１は被熱の程度が強く，凹凸両面及び破面にも被熱が及んでいる。凹面には溶解した土が滓状に付着している。２は凹凸両面に被熱がみられ，破面は一部に及んでいる。凹面は布目をナデ消している。３は左側縁の破片で，凹面には細かい布目が残る。側面はヘラ切りで，凸面側を面取りする。被熱は凹凸両面のほか，破面にも及んでいる。また凹面には土の溶解物が付着している。４は右側縁に近い側の破片とみられ，凹面には若干細かい布目が残る。被熱は凸面側が顕著で，凹面は僅かに被熱を受ける程度である。５は強く被熱を受けた資料で，被熱は凹凸両面及び破面の一部におよぶ。特に凸面は金属質の溶解物が皮膜状に覆っている。６は，左側縁の破片で，側面はヘラ切り調整である。被熱は凸面と凹面の一部，及び破面の一部にみられる。７はやや屈曲の度合いが強い平瓦である。被熱は凹凸両面と，凸面側の破面に及んでいる。凹面に模骨痕を残し，粘土板桶巻作りとみられる。８は小片であるが，被熱は凹凸両面のほか，破面の大半に及んでいる。９は左側縁の破片で，側面はヘラ切りし，凸面側を面取りする。凹面には非常に細かい布目が残る。被熱は凹凸両面のみで，破面にはおよばない。10 は一見丸瓦片のようにみえるが，被熱により彎曲した平瓦である。凹凸両面には被熱により溶解した滓状の鉄や土が多量に付着し，破面も含めて被熱が確認できる。11 は

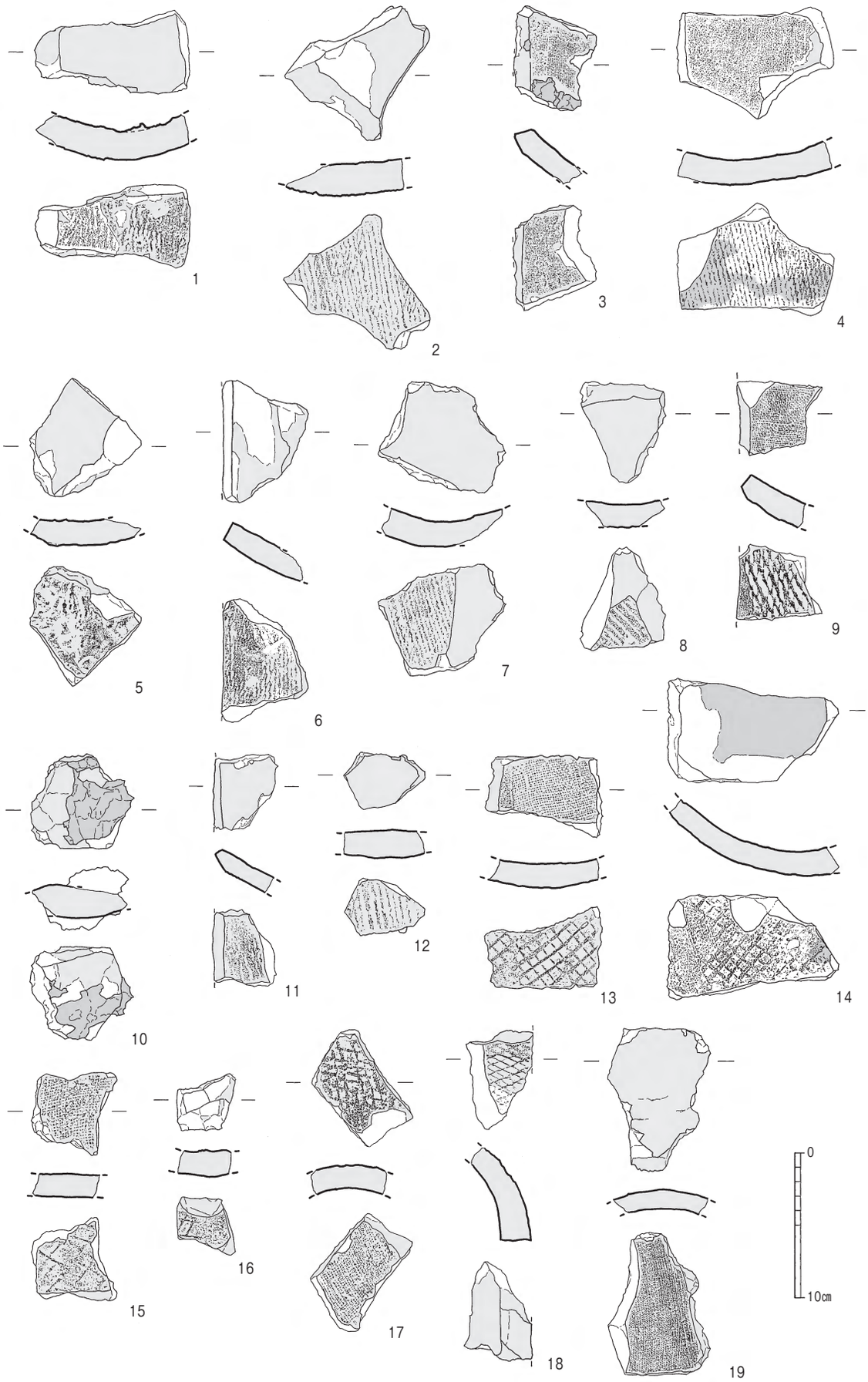


Fig. 9　第 212 次調査出土被熱瓦実測図（1/4）

左側縁の破片で，側面はヘラ切りで，凸面側を面取りする。被熱は凹凸両面のほか，破面の一部にもおよぶ。12は凹凸両面と破面に被熱がおよび,表面は金属質が被膜状に薄く覆っている。

斜格子叩きの平瓦　13～16は凸面に斜格子叩きを行う平瓦である。13は901C型式に似た比較的整った斜格子叩きを行うものである。凹凸両面のほか，破面の一部に被熱がおよぶ。凹面には布目を残す。14も13に似た斜格子叩きを行う左側縁の破片で，側面はほぼ分割破面となっている。被熱は凹面に広くみられるが，凸面はごく一部にみられる程度である。15は915型式に似た大きな斜格子叩きのものである。被熱は凹凸両面のほか，破面にもおよぶ。16はやや大きな斜格子叩きを行うもので，凹凸両面のほか破面の一部に被熱がみられる。

斜格子叩きの丸瓦　17～19は丸瓦である。17・18は，凸面に斜格子叩きを行う丸瓦である。17は不規則であまり整っていない斜格子の叩きで，凹面には布目が残る。被熱は凹凸両面のほか，破面の一部におよんでいる。18は細かな横長の斜格子である。右側縁の破片で，側面に分割に伴う截面・破面を残す。19は凸面をナデ調整する丸瓦である。被熱は凹凸両面のほか，側面や破面の一部にもおよんでいる。

２）土器・陶磁器類（Fig.10，PL.20)

調査では，土器・陶磁器類の出土はあまり顕著ではなく，パンケースにして１箱に収まる程度の出土量である。出土資料は，基本的に近現代の耕作土や造成土に包含されており，明確に古代の遺構に伴うような状況で出土した資料はない。

Ａトレンチ

表土出土土器（Fig.10－１～３・５）

須恵器蓋（１）　口縁部小片で，端部はごく僅かに肥厚する程度で，丸く収める。

須恵器坏（２・３）　ともに高台付坏の底部片である。２は体部外面を回転ヘラケズリし，底部端に高台を貼付する。３は体部下半をヘラケズリし，逆台形の小さな高台を貼付する。

土師器甑（５）　体部は一定の厚みで，口縁部までやや外側上方にむかって直線的にのびる。外面はタテハケ調整，内面は縦方向のヘラケズリで，口縁部は強いヨコナデで仕上げる。

耕作土出土土器・陶磁器（Fig.10－４・６）

土師器皿（４）　底部はヘラ切り未調整で，平底である。

染付小坏（６）　高台の小片で，外面に二条の圏線を描く。畳付のみ露胎である。

Ｂトレンチ

茶褐土出土土器（Fig.10－７）

土師質土器鉢（７）　火鉢の口縁か。外面は黒色を呈し，横方向のミガキを行う。内面はやや暗い灰色を呈する。

Ｃトレンチ

表土出土陶磁器（Fig.10－９）

白磁碗（９）　玉縁口縁となる白磁Ⅳ類の碗で，内外とも薄く釉が掛かる。

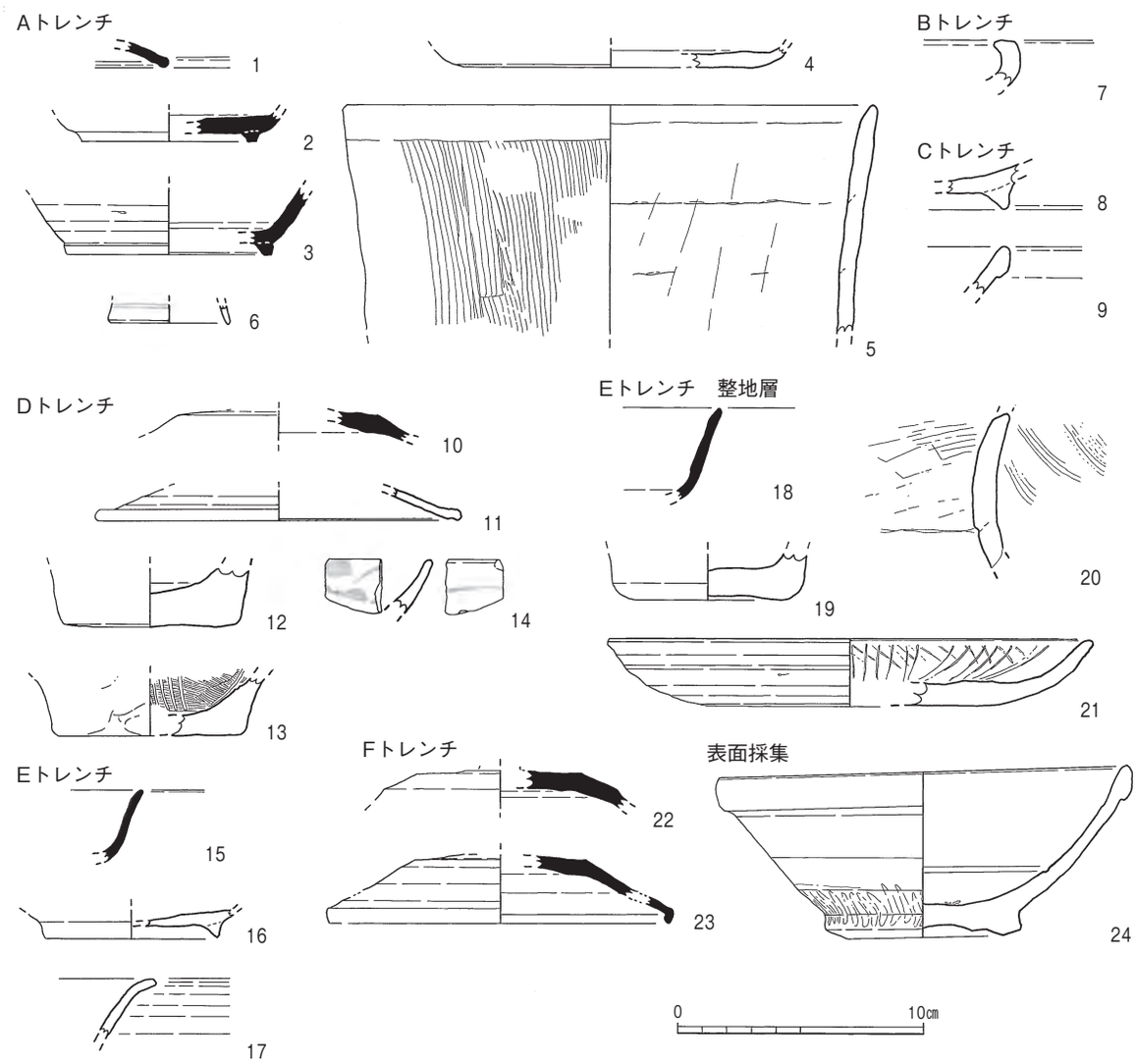


Fig.10　第 212 次調査出土土器・陶磁器実測図（1/3）

茶褐土出土土器（Fig.10 － 8）

土師器椀（8）　小片のため全形は知り得ないが，底部に断面三角形の高台を貼付する。

D トレンチ

表土出土土器（Fig.10 － 10・12）

須恵器蓋（10）　天井部の破片で，天井部外面は回転ヘラケズリで仕上げる。

弥生土器甕（12）　底部片で，平底である。内外とも磨滅している。

茶褐土出土土器・陶磁器（Fig.10 － 11・13・14）

土師器蓋（11）　口縁部を緩やかに屈曲させ，端部のみ僅かに下方へつまむ。

土師器甕（13）　底部片で，外面はナデ，内面はハケ調整を行う。

染付碗（14）　口縁部の破片で，内外に文様の一部がみえる。

Eトレンチ

表土出土土器・陶磁器（Fig.10 － 15・17）

須恵器坏（15）　口縁部片で，端部を僅かに外反させる。

青磁碗（17）　越州窯系青磁碗で，内外とも黄緑色の釉が掛かるが貫入はみられない。薄手で，口縁部を外反させる。

茶褐土出土土器（Fig.10 － 16）

土師器坏（16）　高台付坏の底部片で，断面三角形の高台を貼付する。

整地層出土土器（Fig.10 － 18 ～ 21）

面的に広がる整地層にサブトレンチを設けて掘り下げを行った際に出土した土器で，サブトレンチの下位で確認した暗橙褐色粘質土（7層）に伴う。その中でも18・19は掘削した最下部から出土した資料である。

須恵器坏（18）　口縁部の破片で，底部を失うため高台の有無は不明である。底部との境に丸味をもち，口縁部は一定の厚みのまま直線的にのびる。

弥生土器甕（19）　底部片であるが，内外とも磨滅している。

土師器皿（21）　やや厚手で，口縁部は緩やかに屈曲して外側へのびる。外面は底部から口縁部下半まで広範囲にヘラケズリを行い，内面にはヘラ描きの放射状暗文を施す。

土師器甕（20）　口縁部から頸部にかけての破片で，ほとんど一定の厚みで，緩やかに外反する。内外ともハケ調整で，内面は口縁部下半からヘラケズリを行う。

Fトレンチ

耕作土出土土器（Fig.10 － 22）

須恵器蓋（22）　無高台の坏に伴う蓋の破片で，つまみを欠損する。天井部外面は回転ヘラケズリを行う。

茶褐土出土土器（Fig.10 － 23）

須恵器蓋（23）　高台付坏の蓋の破片で，つまみを有するものと推測される。天井部から口縁部に向って緩やかに下り，口縁端部を下方へ折り曲げる。天井部は回転ヘラケズリで仕上げる。

その他の陶磁器（Fig.10 － 24）

白磁碗（24）　Eトレンチ西側の崖面で採集したもので，地表下0.6 mほどの位置に露出していた。玉縁口縁の白磁Ⅳ類碗で，完形品である。体部下半から高台内にかけては露胎で，内面から口縁部外面にかけて乳白色の釉が掛かる。体部下半は回転ヘラケズリを行い，ケズリ時の工具痕が顕著に残る。

完形の白磁

3）金属製品・金属製品関連遺物

鉄製品（Fig.11 ～ 13，PL.21・22）

鉄製品は調査区全域にわたって出土するが，特に調査地南西部での出土量が多い。出土層位は，地山や古代の整地土の上に堆積する表土や耕作土である。したがって，本調査区で出土し

た鉄製品は，近世の刀装具である Fig.13 － 27 を除き，すべて本来の帰属層位から二次的に移動している。

調査地点は中近世には耕作地，現代には物置小屋が設置されていたこともあり，発掘調査では古代から現代にいたる多様な鉄製品が出土した。本報告では，現代の鉄釘等を除外し，近世以前に属する鉄製品の代表的な資料を報告する。近世以前の鉄製品の主体をなすのは，古代の鉄製品である。隣接調査地の大宰府史跡第 205・209 次調査発掘調査報告でも，すでに報告しているように（『大宰府史跡発掘調査報告書Ⅷ』2014 年），古代の鉄製品の大半は高熱を受けた「被熱鉄製品」である。本調査地で出土した被熱鉄製品の種類は，大別して「小札（小札甲），鉄鏃，弓金具（両頭金具），鉄釘」の 4 種類が存在する。また，小片であるが，同様に被熱した吊手状・引手状金具，鋲留金具も出土した。以下では，鉄製品の種別毎に報告する。なお，Fig.13 － 27 は被熱しておらず，近世の刀装具（鍔）である。

被熱鉄製品の種類

小札（Fig.11 － 1 ～ 53，PL.21 ）　直径 1 ～ 4 mm の小孔を規則的に配した鉄片で，小札と識別できる資料群である。いずれも二次的な被熱により，原形を保ちつつも，細部では被熱による形状変化が生じている。小札自体の溶解･膨張により，綴孔や威孔が埋没する資料もあり，全体的に小孔の大きさは縮小傾向である。報告にあたっては，被熱による形状変化を認識した上で，おおまかに小札幅や頭部形状，綴孔・威孔・下搦孔の配置の組み合わせから，小札を分類した。

1 ～ 3 は，札幅 1.0 ～ 1.2cm の小型小札である。小片のため不確定部分は多いが，1 は威孔二列配置の小札と見られる。

4 ～ 16 は，札幅 1.5 ～ 1.8cm の小型小札である。4 ～ 6 は威孔一列配置の小札であるが，4 と 5・6 では綴孔の配置が異なるため，2 種類の小札を内包すると判断できる。4 には第 3 威孔が確認できる。7 ～ 10 は威孔二列配置の小札である。12 ～ 16 は札尻の破片で，下搦孔の数が 3 種類（1 個，2 個，3 個）認められる。

17 ～ 43 は，札幅 2.0 ～ 2.2cm の中型小札である。17 ～ 34 の札頭はいずれも威孔一列配置の小札である。札頭の整形状況から，17 ～ 21 の円頭形と 22 ～ 34 の方頭形に大別できる。円頭形小札は第 1・第 2 威孔と上段綴孔の位置が離れる傾向にあり，札頭の形状と綴孔配置という二つの要素から抽出可能である。ただし，円頭形小札内でも，17・18 と 19 ～ 21 では威孔の配置が異なり，2 種類を内包している可能性がある。方頭形小札は，円頭形小札と対照的に，第 1・第 2 威孔と上段綴孔の配置が狭い傾向にある。また，方頭形小札内でも，23 ～ 28 と 29 ～ 34 では，威孔の配置が大きく異なるため，2 種類を内包していると判断できる。このうち，23・29 の小札では第 2 威孔の位置が穿孔時に中心軸からズレており，製作時の作業誤差を把握できる。35 ～ 43 は札尻の破片で，下搦孔の数が 3 種類（1 個，2 個，3 個）認められる。下搦孔 1 個の小札は，下段綴孔の配置から 35 と 36・37 の 2 種類に分類できる。下搦孔 2 個の小札は，隅切りの有無で 38 と 39・40 の 2 種類に分類できる。下搦孔 3 個の小札も綴孔の配置から，41・42 と 43 の 2 種類を内包する可能性がある。

44 ～ 53 は札幅 2.5cm 以上の大型小札である。44 ～ 47 が威孔一列配置の小札と，48 ～ 50 が威孔二列配置の小札を内包する。威孔一列配置の小札は，各個体の威孔の配置に差異が

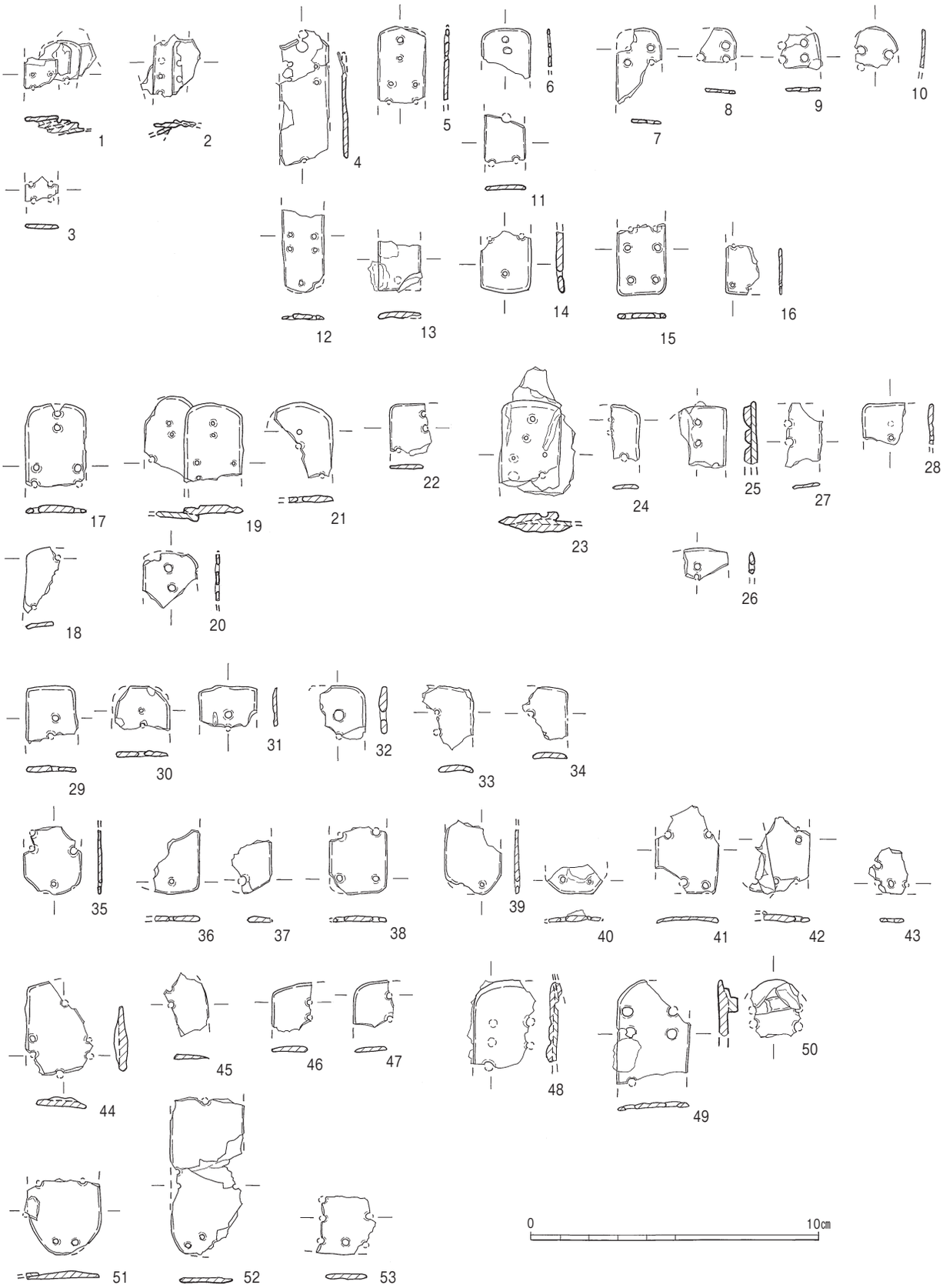


Fig.11　第 212 次調査出土被熱鉄製品実測図① 小札（1/2）

あり，将来的に綴孔等との配置から細分される可能性がある。44 には第 3 威孔が確認できる。威孔二列配置の小札は，綴孔の配置から 48 と 49 の 2 種類が確認できる。50 の小札表面では鉄鏃頸部と見られる破片が付着する。この鉄鏃片は錆で付着するのではなく，被熱時における個体同士の溶着で付着する。51 ～ 53 の数と配置から 3 種類に分類できる。52 では第 3 威孔と下段綴孔の配置が把握できる。

以上，残存状況がよく，部位同定が可能な小札片を中心に報告した。最後に既存報告資料を基に，現状での被熱小札の種類について整理する。札幅 1.0 ～ 1.2cm の小型小札では威孔二列配置の個体が確認できるが，中山平次郎氏報告資料では，類似した札幅で威孔一列配置の小札も認められる。本事例も踏まえると，小型小札は 5 種類が存在する。中型小札は，札頭の分類を基に 4 種類が把握できる。大型小札は，札頭の分類を基に 3 種類が把握できる。これらを総括すると，既存報告資料（大宰府史跡第 205・209・212 次調査）から，被熱小札は 12 種類以上の小札を内包すると判断できる。

小札の種類

12種類以上

鉄鏃（Fig.12 － 1 ～ 93，PL.21・22）　本調査区で出土した鉄鏃は，すべて被熱遺物である。1 ～ 60 が尖根系長頸鏃の刃部で，61 ～ 65 が平根系鉄鏃片，66 ～ 93 が尖根系長頸鏃の頸部から箆被部の破片である。刃部横断面を中心に半円形を呈する個体が多いのは，被熱時の二次的な溶解により，自重で変形することに要因がある。

1・2 は三角形式鉄鏃で，長抉状の刃関を有する。

3 ～ 7 は柳葉式鉄鏃である。被熱による膨張もあるが，刃関の切り込みは形骸化している。

8・9 は小型の三角形式鉄鏃で，8 は 7 個体が溶着する。刃部同士で軸を揃えて溶着しており，被熱した際に束ねられていたことを把握できる。

10 ～ 12 は尖根系の方頭式鉄鏃で，10 では 4 個体がほぼ刃部同士で溶着する。

13 ～ 35 は鑿箭式鉄鏃で，いずれも明瞭な刃関を作らず，なだらかに刃部と頸部が接続する。

36 ～ 44 は片刃箭式鉄鏃である。被熱により刃関が丸くなる傾向にあるが，もともと明瞭な刃関を整形していない。刃関の位置に多くのバリエーションが存在する。

45 ～ 60 は端刃箭式鉄鏃と見られる個体であるが，確実な個体は残存範囲が広い 45 ～ 47 である。48 ～ 60 は残存範囲が狭いため，片刃箭式鉄鏃の先端を内包する可能性がある。

61 ～ 65 は平根系鉄鏃片で，61・62 は平根系三角形式鉄鏃の刃部片である。62 は平根系鉄鏃 2 個体が類似した部位で溶着する。64・65 は平根系鉄鏃の箆被部の破片で，ともに棘箆被が確認できる。

平根系鉄鏃

66 ～ 91 は棘箆被を有する鉄鏃片で，いずれも被熱により棘箆被が膨張する。66 は本調査区で最も残存状態のよい個体で，頸部長は約 8.5cm 以上である。

92・93 は関箆被を有する鉄鏃片である。

弓金具（Fig.13 － 1 ～ 24，PL.22）　弓の弭付近に取り付けられる「両頭金具」で，いずれも二次的に被熱する。1 ～ 17 では皮金具が遺存し，花弁状の折り返し部が確認できる。この折り返しは芯金具に対して，ほぼ直角の状態を保つことから，弓本体に装着されたまま被熱したと判断できる。花弁状の折り返し部の切り込みは密で，6 ～ 12 枚の花弁を有する個体が多い。ただし，16 の個体は花弁が 4 枚であった可能性がある。

両頭金具が出土

吊手金具（Fig.13 － 25）　環状の部位を有する被熱鉄製品である。

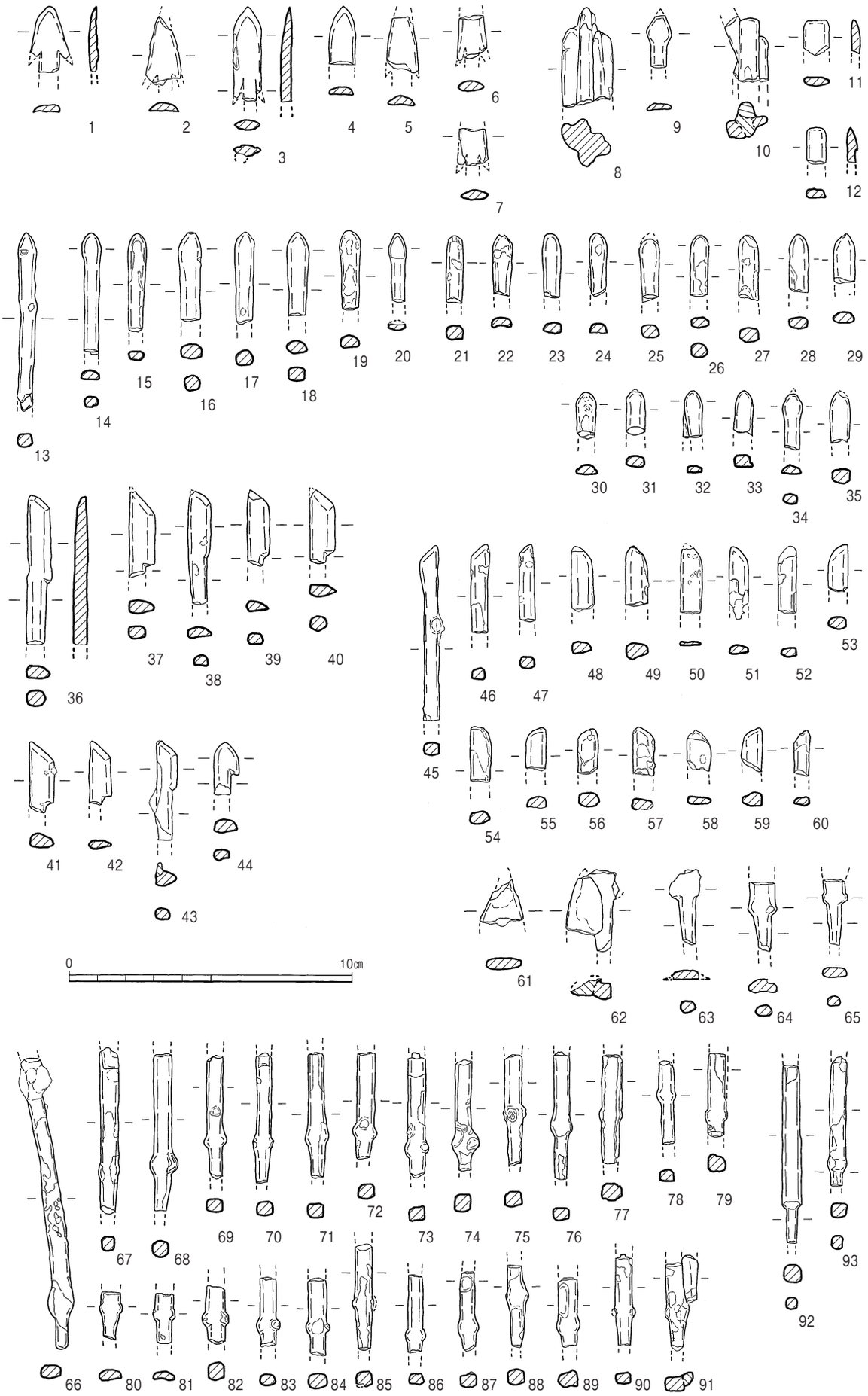


Fig.12　第 212 次調査出土被熱鉄製品等実測図② 鉄鏃（1/2）

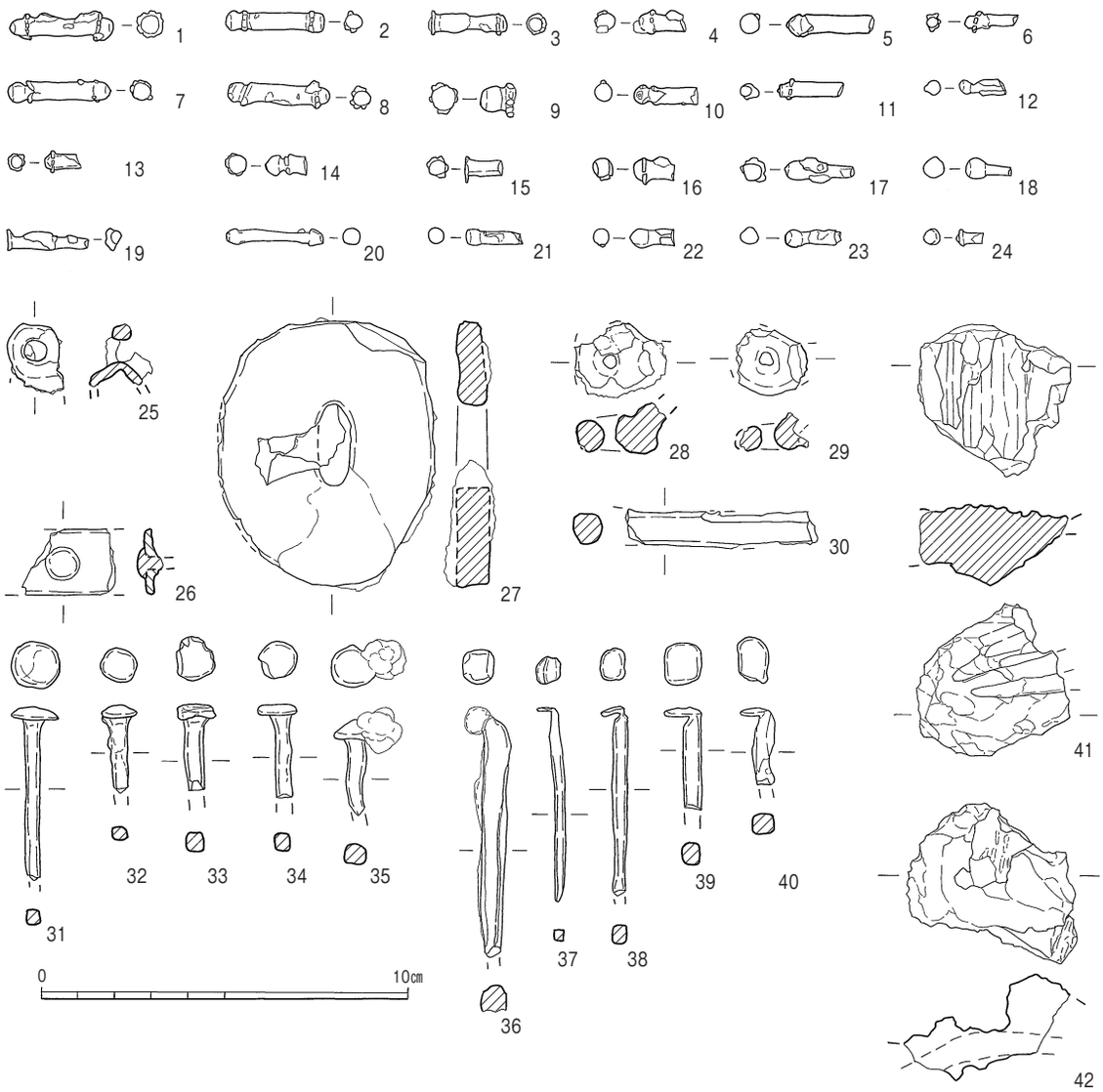


Fig.13　第 212 次調査出土被熱鉄製品等実測図 ③その他（1/2）

鋲留金具（Fig.13 － 26）　頭部円形の鋲を留めた被熱鉄製品で，矢入れ具の破片の可能性がある。

刀装具（Fig.13 － 27）　被熱していない刀の鍔で，近世に属する資料である。

引手金具（Fig.13 － 28 ～ 30）　28・29 は環状部位を有する被熱遺物で，形状から引手の可能性がある。30 は引手部位の被熱鉄製品か。

鉄釘（Fig.13 － 31 ～ 40）　31 ～ 35 は平面円形で鋲状の頭部を有する鉄釘，36 ～ 40 は頭部が折り曲がる鉄釘で，いずれも被熱遺物である。頭部が折り曲がった鉄釘は，頭部と胴部の境にくびれ状の整形を施している。いずれの鉄釘も結合対象物は遺存していないが，36 ～ 40 は頭部形状から見て，実際に打ち込まれた履歴のある鉄釘であったと判断できる。また，鉄鏃や小札のように他個体との溶着痕跡が認められないことから，結合状態のまま被熱した可能性が高い。建築釘に比べると小型であることをふまえると，木箱等の収納具や調度品の部材であったと見られる。

鉄塊・鉄滓（Fig.13，PL.22）

鉄塊（Fig.13 － 41）　表面に鉄鏃頸部，裏面に鉄鏃茎部の形状を残す鉄塊状遺物である。表面は溶解が著しく個体判別すら難しく，鉄塊内部では完全に溶解している。裏面に見える茎部はおおよその形状を遺しており，6 個体が確認できる。表面と裏面はそれぞれで軸を揃える一方で，表面と裏面では 60 度程度の軸のズレがある。

鉄滓（Fig.13 － 42）　縄目瓦片を含む鉄滓状遺物で，鉄製品の被熱時にともに生成された資料と見られる。

（5）小　結

第 212 次調査は，蔵司丘陵南東部の E 区で実施した確認調査である。調査前の踏査や測量時には，平坦地ではありながら緩やかな段地形が確認でき，北側 D 区の大型礎石建物 SB5000 周辺の微地形の位置とも整合する可能性が考えられたことから，遺構の広がりとともに，地形の成因についても探る目的で調査を実施した。

調査の結果，ピット状の掘り込みを数基確認した程度で，他に建物や区画溝といった官衙の施設を窺わせる明確な遺構の確認には至らなかったが，A・B・D・E トレンチにおいて古代の整地層を確認することができた。これにより，後世の耕作により削平などの地形の改変を受けているものの，丘陵南東部の D 区から E 区にかけて広がる平坦地は，古代の段階における造成により広い平坦地が確保された結果と推定できる。それは当然，何らかの建物群で構成される官衙施設の整備に伴う造成であったと考えられるが，今回の E 区の調査では建物や柵など構造物に関わるような遺構の確認には至らなかった。

古代の整地

出土遺物では瓦が最も多く，土器・陶磁器類は非常に少ない。瓦は 8 世紀代から 9 世紀代に位置づけられるものが大半で，7 世紀代に遡るものは確認できない。土器・陶磁器類では古墳時代に遡るものも見受けられるが，基本的には 8 世紀から 9 世紀にかけてのものが多い。

多様な被熱遺物

この他，多様な被熱遺物の存在が注目できる。大きくは被熱瓦と被熱鉄製品に分けられる。被熱瓦は凸面縄目叩きのものが大半であるが，一部に斜格子叩きの資料も混じり，被熱した時期を推定する手掛かりを与えてくれる。被熱鉄製品については，多様な種類の小札，鉄鏃，弓金具（両頭金具）などの武具・武器類が目立ち，少量ながら吊手金具，盛矢具の可能性がある鋲留金具なども出土した。鉄釘も少なくないが，小型であるため木箱などの収納具等に用いられた釘とみられる。束になって被熱した鉄鏃などは，元々収納・保管状況にあったものが被熱により溶着したことを物語り，蔵司丘陵上に武器・武具類などを収納する施設が存在したことを示している。

今回の調査では，残念ながら建物群などの把握には至らなかったが，丘陵上の大規模な造成が古代に遡ってなされていたこと，そうして造成された場所には武器・武具などを収納するような施設が存在していた可能性があることなどが確認できた。官衙の構造や時期，あるいは被熱の時期や要因については，いまだ不明なところが多いが，今後の調査成果も踏まえて改めて検討することとしたい。

３　第 212 次調査出土鉄関連遺物の理化学的分析

はじめに

大宰府史跡第 212 次調査（蔵司Ｅ区）により，Ｅ区を中心とする蔵司丘陵上には被熱鉄製品が多量に散布している状況が明らかとなり，その歴史的な位置付けについての解明が大きな課題となっている。そこで，平成 24 年度に以下の第 212 次調査出土資料の一部を選定して，理化学的分析を行い，冶金学的見地からの分析結果を得た。

今回の分析により，被熱した原因や錆の腐食が進まない理由等の被熱鉄製品の生成状況の把握，被熱鉄製品の種別ごとの成分値の確認，被熱鉄製品と炉壁，鉄塊系遺物，鉄滓，被熱瓦の相互関係の把握等の課題について，一定の成果を得ることができたと思われる。

なお，分析対象遺物の種類は，№１～５が鉄鏃，№６・７が小札（甲冑部材），№８～ 10 が鉄塊系遺物・鉄滓，№ 11 が炉壁，№ 12 が被熱縄目瓦（鉄滓付着瓦）である。

大宰府史跡第 212 次調査出土鉄関連遺物の分析調査

日鉄住金テクノロジー（株）八幡営業所・TAC センター　大澤正己

（１）調査概要

１）調査に供した鉄鏃２点に金属鉄が遺存していた。鉄中の非金属介在物は Fe-Ti 酸化物であり，低チタン花崗岩砂鉄原料由来が提示できる。また介在物には少量ながら，含 Ti，V，Cr 傾向をもち，福岡平野産鉄製品の条件を満たす。ただし，今後共分析点数を増やし確証をとる必要がある。 **福岡平野産**

なお，鉄鏃，小札は共にフェライト（ferrite：純鉄，α鉄）単相の極軟鋼（＜ 0.01％ C）である。高粘性材質で，加工の容易な材料の選択と指摘できる。

２）被熱鉄器は鍛造剥片と同質の酸化膜に覆われていた。570℃～ 1300℃程度の温度範囲での生成物であった。表層ヘマタイト（hematite：α -Fe_2O_3），中間層マグネタイト（magnetite：Fe_3O_4），内層ウスタイト（wustite：FeO）の安定した被膜構成である。この組成であれば錆化は殆んど進行しない。

３）広範囲な大量の被熱鉄器の散布は遺物焼成時の被熱かも知れない。941 年の藤原純友の乱に際しての侵入・放火で大宰府は炎上・焼失と『扶桑略記』にみられる。これと７・８世紀の被熱供試材との係わりがどう結びつくのか，少々気掛りの点でもある。

４）２点の炉内滓は鉱物相がウスタイト（wustite：FeO）＋ファヤライト（fayalite：2FeO・SiO_2）の鍛冶滓様相を呈するものであった。炉壁や被熱瓦の溶融物などはその性格付けに決め

手を欠く組成である。今後の発掘成果を援用して検討したく思う次第である。

５）被熱小札の調査事例として奈良県所在南郷角田遺跡出土品がある。この人為的焼成小札は銅製品の表面研磨剤としての鉄精原料の可能性を記した（大澤 1996）。

（２）調査方法

２- １. 供試材　　Tab. ８に示す。

２- ２. 調査項目

１）肉眼観察

分析調査を実施する遺物の外観の特徴など，調査前の観察所見を記載した。

２）マクロ組織

本来は肉眼またはルーペで観察した組織であるが，本稿では顕微鏡埋込み試料の断面全体像を，投影機の５倍で撮影したものを指す。当調査は，顕微鏡検査によるよりも広い範囲にわたって，組織の分布状態，形状，大きさなどの観察ができる利点がある。

３）顕微鏡組織

鉄滓の鉱物組成や金属部の組織観察，非金属介在物の調査などを目的とする。

試料観察面を設定・切り出し後，試験片は樹脂に埋込み，エメリー研磨紙の #150，#240，#320，#600，#1000，およびダイヤモンド粒子の３μｍと１μｍで鏡面研磨した。また観察には金属反射顕微鏡を用い，特徴的・代表的な視野を選択して写真撮影を行った。

４）マイクロ・ビッカース断面硬度

鉄滓中の鉱物と，金属鉄の組織同定を目的として，ビッカース断面硬度計（Vickers Hardness Tester ）を用いて硬さの測定を行った。試験は鏡面研磨した試料に 136°の頂角をもったダイヤモンドを押し込み，その時に生じた窪みの面積をもって，その荷重を除した商を硬度値としている。試料は顕微鏡用を併用した。

５）EPMA（Electron Probe Micro Analyzer）調査

試料面（顕微鏡試料併用）に真空中で電子線を照射し，発生する特性Ｘ線を分光後に画像化し定性的な結果を得る。更に標準試料とＸ線強度との対比から元素定量値をコンピューター処理してデータ解析を行う方法である。

反射電子像（COMP）は，調査面の組成の違いを明度で表示するものである。重い元素で構成される個所ほど明るく，軽い元素で構成される個所ほど暗い色調で示される。これを利用して，各相の組成の違いを確認後，定量分析を実施している。

また元素の分布状態を把握するため，反射電子像に加え，特性Ｘ線像の撮影も適宜行った。

6）X線回折

X 線回折（XRD）は，井澤英二九州大学名誉教授に依頼し，九州大学地球資源工学部門の X 線回折装置　理学 Ultima Ⅳを使用した。X 線は $CuK\alpha_1$（40Kv，20mA）を用い，全自動モノクロメーター，発散スリット 2/3°，受光スリット 0.3㎜，データ取得幅 0.02°（2 θ），走査速度 2°/min の条件で 2-65°（2 θ）を走査範囲とした。

7）化学組成分析

出土鉄滓の性状を調査するため，構成成分の定量分析を実施した。

全鉄分（Total Fe），金属鉄（Metallic Fe），酸化第一鉄（FeO）：容量法。

炭素（C），硫黄（S）：燃焼容量法，燃焼赤外吸収法

二酸化硅素（SiO_2），酸化アルミニウム（Al_2O_3），酸化カルシウム（CaO），酸化マグネシウム（MgO），酸化カリウム（K_2O），酸化ナトリウム（Na_2O），酸化マンガン（MnO），二酸化チタン（TiO_2），酸化クロム（Cr_2O_3），五酸化燐（P_2O_5），バナジウム（V），銅（Cu），二酸化ジルコニウム（ZrO_2）：ICP（Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer）法：誘導結合プラズマ発光分光分析。

8）耐火度

主に炉材の性状調査を目的とする。耐火度は，溶融現象が進行の途上で軟化変形を起こす状態度の温度で表示される。胎土をゼーゲルコーンという三角錐の試験片に作り，１分間当り10℃の速度で温度1000℃まで上昇させ，以降は４℃に昇温速度を落し，試験片が荷重なしに自重だけで軟化し崩れる温度を示している。

9）Tab. 8～11 のコメント

Tab. 8～11 の見方は次のとおりである。

・遺物種類　金属学的な分析を行う以前に，考古学的な観察によって判定した遺物の種類である。
・法量　資料の残存する最大長，最大幅，最大厚，重量を計測したものである。
・磁着度　鉄滓分類用の「標準磁石」を用いて資料との反応単位を１から順に数字で表現したもので，数値が大きいほど磁性が強い（国立歴史民俗博物館 1994 に準じた）。
・メタル度　特殊金属探知機によって判定された金属鉄の残留度を示すもので，最も金属鉄が依存しないものから遺存するものまで６段階に分け，「なし」，「錆化（△）」，「H（○）」，「M（◎）」，「L（●）」，「特 L（☆）」と表示した。
・分析　分析実施項目を○印で示す。
・所見　分析前の外形や破面・断面の状況，木炭痕や気孔の有無及び付着物やその他の状況について詳細に記す。
・分析個所　資料をどのように調査・分析するか記す。

（３）調査結果

No. 1　鉄鏃

１）肉眼観察：全体が被熱酸化（マグネタイト化）した鉄鏃破片。鉄鏃の箆被部で，矢柄（有機質部材）との接続部付近の破片である。頸部と茎部の大部分を欠損している。断面は隅丸方形状を呈しており，本来の形状からやや溶融して崩れが見える。下端に若干の錆の腐食がある。「棘箆被」と呼称される形態の資料で，７世紀に製作された可能性が高い。長軸端部１/２を切断し観察面とする。

２）マクロ組織：Fig.15 の②に示す。輪切り断面は，隅丸方形を呈して，灰色酸化膜に囲まれて中核部に金属鉄を残す。

３）顕微鏡組織：Fig.15 の③～⑩に示す。③④は研磨のままで腐食なし（no etch）の組織。③はマクロ組織の拡大，④は更に拡大を進めて鉄中の非金属介在物（non-metallic inclusion）を表す。組成はウスタイト（wüstite：FeO）と砂鉄由来を決定づけるチタン酸化物である。組成の詳細は EPMA の項で述べる（Fig.26・27）。鉄の製造履歴が低温還元製錬法（Low temperature reduotion for ironmaking）と読み取れる。⑤～⑩はナイタルエッチ（Nital etch）を施した。⑤⑥の組織は炭素を殆んど含まぬ白地のフェライト（ferrite：純鉄，α鉄）と黒く細い網目状の模様は結晶粒界で，ここでも小さい黒点の非金属介在物が認められる。⑦⑧は金属鉄を取り囲む酸化膜を示す。ナイタルエッチでは腐食液が弱くて組織に変化は現れない。金属鉄は軟らかい極低炭素鋼に分類されて，複雑な箆被部の加工に適した材質の充当であった。

砂鉄由来

４）マイクロ・ビッカース断面硬度：Fig.15 の⑨は金属鉄部のフェライトの硬度測定圧痕を示す。値は 95.4Hv・200gf，97.2Hv・200gf を得た。フェライトは本来 70 ～ 80Hv の経験側をもっていたが，硬化気味である。誤差は風化や時効からの目に見えぬ材質劣化であろう。ナイタルエッチで結晶粒界の不鮮明さはこの辺の事情を物語る。⑩は酸化層の圧痕である。表層側（右）が 686Hv･200gf, 内側は 515Hv･200gf と差異をもつ。前者はヘマタイト（Fe_2O_3）寄り，後者はマグネタイト（Fe_3O_4）に同定される。マグネタイトの文献硬度値は 505 ～ 592Hv で，測定値はこの範疇に収まる。酸化膜は酸素（O）との結合で安定した材質を留めている。

５）EPMA 調査：Fig.26・27 に鉄中の非金属介在物の分析結果を示す。まず Fig.26 の反射電子像（COMP）の介在物は３相に分かれる。分析点 23 は白色粒状結晶で特性 X 線像では Fe と O に白色輝点は集中する。定量分析値は 100％ FeO からウスタイト（wüstite：FeO）に同定される。分析点 24 と 25 は灰色多角形結晶である。白色輝点は Ti に強く反応する。分析点 24 は 66.3%FeO-10.7%TiO_2-1.1%V_2O_3-12.5%Al_2O_3 組成，分析点 25 は 67.5%FeO-10.2%TiO_2-1.0%V_2O_3-11.7%Al_2O_3 組成となる。チタン磁鉄鉱（ウルボスピネル：Ulvöspinel：Fe_2･TiO_4）と（磁鉄鉱：magnetite：Fe_3O_4）の中間組成で Al 含有の鉱物に同定される。分析点 26 は黒

色の地である。特性 X 線像は Si，Al，O に白色輝点は集中する。定量分析値は 59.4％ FeO-32.6%SiO_2-9.6%MgO-2.1%CaO 組成のオリピン（olivine）で，Mg･Ca 含有ファヤライト（fayalite，Fe_2SiO_4）であった。次は Fig.27 の非金属介在物である。展伸介在物の 4 個を分析対象とした。白色粒状結晶の分析点 27 の定量分析値は，101%FeO からウスタイト，分析点 28 の多角形結晶は 67%FeO-10.2%TiO_2-1.2%V_2O_3-13.5%Al_2O_3 組成からチタン磁鉄鉱（Al 含有），分析点 29 の灰色結晶は，65.0%FeO-31.0%SiO_2-3.9%CaO-2.0%MgO からオリピンで Ca・Mg 含有ファヤライト，暗黒色地の分析点 30 は，44.9％ CaO-39.7%P_2O_5-7.9%FeO 組成のやや P 含有量が少ないが，鉄を含んだリン酸カルシウム〔$Ca_3(PO_4)_2$〕であろう。鉄鏃の素材は Ti-V 特有元素の検出から砂鉄起源と発言できる。

No. 2　鉄鏃

1）肉眼観察：全体が被熱酸化した鉄鏃破片。鉄鏃の頸部で刃部先端に比較的近い部位である。前述No. 1 資料に比べ，更に球状化が進行する。その形状から鑿箭式長頸鏃である可能性が高い。長軸端部 1 / 2 を切断して供試材にした。

2）マクロ組織：Fig.16 の②に示す。鉄鏃頸部断面は，楕円形状素材 2 点を上下に組み合わせて鍛接一体化を目論む。軟質材の強度確保の対策であろうか。金属鉄は酸化されて残存しない。なお外層ヘマタイトは肥大して強火履歴が窺われる。

3）顕微鏡組織：Fig.16 の③～⑩は，上段素材に的を絞り，表層側と中核部の拡大組織変化を示す。③④⑤は表層の白色ヘマタイト（hematite：Fe_2O_3）が肥大著しく荒れ肌となる。⑥⑦⑧は中核部まで酸化され，⑥の拡大でフェライトとセメンタイト（Cementite：Fe_3C）の層状パーライト（Pearlite）の痕跡らしき組織を捉えた。もし，パーライト痕跡ならば№ 1 鉄鏃よりも素材の炭素量は増加する。ただし低炭素域でのバラツキの範囲内での動向である。

4）マイクロ・ビッカース断面硬度：Fig.16 の⑨は，酸化鉄最表層の白色ヘマタイトの硬度測定の圧痕である。硬度値は 1012Hv と硬質。ヘマタイトの文献硬度値は，1020 ～ 1084Hv[註1] であり，この範疇にほぼ収まる。⑩は酸化鉄中央部の硬度圧痕である。値は 450Hv でこちらもウスタイト文献硬度値の 446 ～ 503Hv の範囲内で，ウスタイトに同定される。以上は鍛造剥片など酸化膜が 3 層構造〔外層ヘマタイト（Fe_2O_3），中間層マグネタイト（Fe_3O_4），内層ウスタイト（FeO）〕を呈するが，該品も中間層マグネタイトが不明瞭ながら被熱の酸化は軌を一とする。

No. 3　鉄鏃

1）肉眼観察：全体が酸化した鉄鏃束の破片。頸部と思われるが，やや肉厚で不確実な破片である。軸を違えて他 2 個体が溶着し，さらに破損したような状態で残っている。分析資料 No. 1 ・ 2 に比べ，更に溶融が進む。

２）マクロ組織：Fig.17 の②に示す。一見不整円形断面ながら，仔細に観察すると，No. 2 の鉄鏃と同じ楕円形素材組合せ造り痕跡が窺える。外層白色ヘマタイトの円弧に注目すると，下段側のヘマタイト形状が内部へ向けての食い込みが中断ながら二個体を示唆する。全体は完全なる酸化鉄に変化する。

３）顕微鏡組織：Fig.17 の③～⑩に示す。金属鉄は残留せず酸化膜同様の被膜構造をとる。③は不明瞭ながら外層の白色微厚ヘマタイトと，中間層は非晶質淡灰色マグネタイト，内層は粒状ウスタイトである。④⑤はヘマタイトとマグネタイト層の拡大，⑥はウスタイトで，ここではファヤライト組成近似の針状結晶のイスコライト（iscorite：Fe_7SiO_{10}）の晶出をみる。⑦は下段素材中核部で巨大ウスタイトが生成する。被熱温度差による粒成長であろう。

４）マイクロ・ビッカース断面硬度：Fig.17 の⑨は中間層マグネタイトの硬度測定の圧痕である。値は 509Hv で，文献硬度値 505 ～ 592Hv の範囲内に収まる。⑩は外層ヘマタイトで，値は 993Hv を得た。文献ヘマタイトの下限を僅かに割るが，ヘマタイト判定で大過なかろう。バラツキの範囲内と見做す。

No. 4　鉄鏃

１）肉眼観察：全体が被熱酸化した鉄鏃束の破片。鉄鏃頸部の破片で３個体が軸をそろえた状態で溶着している。それぞれの個体をみると断面方向の形状を比較的残すが，表面部分が稜を起点に剥離したような部分が多くみられる。

２）マクロ組織：Fig.18 の②に示す。３個体は方形断面を示す。２点は全面酸化で，１点のみに中核部に白色金属を残す。各軸表層直下は大気孔で内部に進むと小気孔に変化する。

３）顕微鏡組織：Fig.18 の③～⑩に示す。３個体の内，芯に金属鉄を残す軸で，組織記述を代表させた。③④⑤はナイタルエッチ後の順次拡大した金属鉄組織である。⑤の最大拡大は結晶粒界の不鮮明なフェライト地に，粒状介在物が点在する。介在物組成の詳細は EPMA の項に譲るとして，フェライト地にウスタイト主体は低温還元製鉄法の産物に違わない。⑥⑦⑧は前述軸の酸化鉄を王水（塩酸３：硝酸：１の腐食液）腐食で，撮影対象とした。本来正常酸化鉄は王水腐食で３層構造は鮮明となるが，該品は風化を受けて，構造組織の明瞭度は薄まる。しかし，⑦の垂直表層面は，淡灰色ヘマタイトが灰色マグネタイトを経て，内層非晶質ウスタイトが辛うじて判別できる。

４）マイクロ・ビッカース断面硬度：Fig.18 の⑨はやや白黒のコントラストを欠く金属鉄の硬度測定の圧痕である。値は 85.6Hv とフェライトを同定できた。⑩は酸化膜内層の非晶質ウスタイトの圧痕である。408Hv はウスタイト文献値の下限を切るがウスタイト近傍値として採用できる。

5）EPMA調査：Fig.28・29に示す。鉄中非金属介在物を対象とした。まず，Fig.28は灰色地に黒色点が散在する約23μm径の非金属介在物を反射電子像（COMP）に示す。分析点31は黒色点で特性X線像ではSi，Al，Ca，Kに白色輝点が集中する。定量分析値は50.5%SiO_2 − 16.8%Al_2O_3 − 4.5%CaO − 6.2%K_2O組成からガラスである。分析点32の白色粒状結晶はFeにのみ白色輝点が集中し，定量分析値は92.3％FeOが得られた。磁鉄鉱（magnetite：Fe_3O_4）となる。分析点33の灰色地は33.3％SiO_2-8.7%Al_2O_3-4.8%CaO-2.5%K_2O組成はガラスである。この介在物からは砂鉄特有元素のTi，V，の検出はなかった。次のFig.29は顕微鏡組織⑤に示した粒状介在物である。３相に分かれて分析点34の灰色結晶は83.9%FeO − 1.9%TiO_2組成から，含Ti磁鉄鉱（Magnetite：Fe_3O_4）である。分析点35の暗色結晶は，47.1%FeO − 34.1%Al_2O_3 − 15.6%Cr_2O_3 − 2.1%V_2O_3組成となる。鉱物はヘルシナイト（hercynite：FeO・Al_2O_3）で少量のCrやVを固溶する。分析点36は暗黒地で，58.8%SiO_2 − 17.2%Al_2O_3 − 3.9%CaO − 6.9%K_2O組成からガラスが同定される。鍛打加工時の鉄肌に生じた酸化物であれば，粘土汁派生のウスタイトの可能性をもつ。しかし，粘土汁に生じたTi，Crを含有しているのは，福岡平野産と傍証できよう[註2]。福岡市大原海岸の後背地にはCrを含む蛇紋岩の存在が指摘されている[註3]。

福岡平野産の傍証か

No. 5　鉄鏃

1）肉眼観察：全ての面が酸化溶着した鉄鏃束。鉄鏃頸部２個体と刃部先端の１個体の３個体が溶着している。いずれも刃部先端付近の破片で，軸を揃えた状態で溶着している。頸部の破片では，稜の部分に縦方向の亀裂が生じている。

2）マクロ組織：Fig.19の②に示す。断面は鉄鏃頸部２個体のみで刃部先端は欠落する。なお，鉄鏃断面形状は方形だったのが，被熱起因から僅かに隅丸方形状に膨らみをもつ。

3）顕微鏡組織：Fig.19の③～⑩に示す。組織は２個体のうち，左側の１個体で代表させる。酸化は３層構造をとる。外層白色微厚のヘマタイトは明瞭であるが，中間層マグネタイトと内層凝集気味ウスタイトの境界は定まらない。⑦のウスタイトには，僅かながら短柱状ファヤライト結晶を伴う。このウスタイト＋ファヤライト鉱物相は，FeO-SiO_2状態図から被熱温度は1180℃以上が想定できる[註4]。

4）マイクロ・ビッカース断面硬度：Fig.19の⑨に肥大した外層ヘマタイトの硬度測定の圧痕を示す。値は583Hv・300gfと低値の異常値である。酸化被膜の亀裂と風化によるダメージが誤差要因であろう。⑩は非晶質ウスタイト部の硬度圧痕である。硬度値は483Hv・300gfを呈し，ウスタイトに同定できる。金属鉄組織の痕跡を残さないが，フェライト単相の軟鋼充当の可能性が提言できる。

No. 6　鉄製小札

1）肉眼観察：全体が酸化した鉄製小札の小破片。綴孔，もしくは縅孔２個が縦列した状態

を残す破片である。厚さの状況から縅孔の可能性が高い。層状に破損する状態にある。

2）マクロ組織：Fig.20 の②に示す。「層状に破損する状態にある」と肉眼観察からの指摘通りに，左端の折り返し曲げ二枚板が認められる。全て酸化を受けて金属鉄の残留はない。

3）顕微鏡組織：Fig.20 の③～⑩に示す。③④⑤は左側の折り返し曲げ二枚板部の拡大で，酸化鉄は 3 層構造の痕跡を留める。⑦はフェライト結晶粒界らしき網目が観察できるが定かでない。しかしフェライト単相軟質素材は穿孔作業から充分ありうると思う。

No. 7　鉄製小札

1）肉眼観察：全面が酸化した鉄製小札の小破片。小札表面の反りを本来の形状とすると，残存する孔は両側の綴孔であると判断できる。No. 6 小札と同様の破損状況である。

2）マクロ組織：Fig.21 の②に示す。折り返し曲げ鍛接の圧痕が窺える断面。小札に準じる。軟質薄板は二枚重ねで，強度と加工性に重点をおいた造作と考える。金属鉄は残らない。

3）顕微鏡組織：Fig.21 の③～⑩に示す。二枚重ねの上段素材を③～⑥に示す。酸化鉄の三層構造の外層ヘマタイト，中間層マグネタイト，内層非晶質ウスタイトをみる。⑦⑧は下段素材の酸化鉄で，内部は虫喰い状態に侵食される。こちらも金属鉄は残さない。軟鉄の充当であろう。

4）マイクロ・ビッカース断面硬度：Fig.21 の⑨は，外層ヘマタイトの硬度で，1155Hv・100gf，⑩は中間層のマグネタイトで 502Hv・200gf が得られた。酸化膜組成に見合った数値である。

No. 8　炉内滓様（鉄鏃圧痕付き，酸化）→鉄鏃束溶融物

1）肉眼観察：全体が酸化した鉄鏃束を主体に構成される炉内滓様の破片。表裏面にそれぞれ鉄鏃の形状を残す。一方は鉄鏃先端部付近の鉄鏃束で，形状を残す個体のみで 6 個体が確認できる。反対側の面も鉄鏃の形状を残す個体がそれぞれ 6 個体確認できる。それぞれの束内では，ほぼ同じ部位で軸を揃える状態にあるが，束内では 90 度前後のズレがあり，ほぼ直交するような状態にある。

2）マクロ組織：Fig.22 の②に示す。断面に鉄鏃軸が現われた。形状は楕円形から方形もしくは隅丸方形に膨れたものまで 8 個体が識別できた。それぞれの間隙はスラグ質鉱物が埋める。なお，鉄鏃の軸径は 5 ～ 10㎜を測る。

3）顕微鏡組織：Fig.22 の③～⑩に示す。鉄鏃軸は酸化鉄で前述してきた鉄鏃軸組織に準じている。例えば③の 10㎜径楕円形状鉄鏃軸断面は，拡大組織の⑤から僅かに外層ヘマタイト

と不明瞭なマグネタイト，内層は④の凝集・粒状ウスタイトが認められる。⑥⑦は隅丸方形鉄鏃軸で内部は凝集ウスタイト，⑧⑨は鉄鏃軸間隙のスラグ質は，白色粒状結晶のウスタイトと淡灰色盤状結晶のファヤライトであった。

4）マイクロ・ビッカース断面硬度：Fig.22 の⑩に 2 点の硬度測定の圧痕を示す。左側の白色粒状結晶は 495Hv・100gf でウスタイト，右側の淡灰色盤状結晶が 614Hv・100gf からファヤライトが同定される。該品は鉄鏃軸の酸化鉄と鍛錬鍛冶滓組成のスラグが共存する。

5）X 線回折（Fig.14）：構成鉱物はウスタイトを主とし，ファヤライトと少量の磁鉄鉱（マグネタイト，Fe_3O_4），ヘルシナイト（$FeO \cdot Al_2O_3$）を伴う。ガラスの回折バンドは認められない。顕微鏡鑑定に近似した結果といえる。

6）化学組成分析：Tab. 9 に示す。66.3％ Total Fe は高値で，11.35% 造滓成分（SiO_2 ＋ Al_2O_3 ＋ CaO ＋ MgO ＋ K_2O ＋ Na_2O）は極低値，更に随伴微量元素も 0.14％ TiO_2，0.04％ V，＜ 0.01%MnO など少なく，滓とは言い難い。成分的には夾雑物の介入の少なさから，炉内滓は鉄鏃束溶融物と改めるべきである。 **滓ではない**

No. 9　炉内滓

1）肉眼観察：全体がスラグ化した炉内滓破片。鉄製品の形状を残さない炉内滓であるため，肉眼観察のみでは確実に被熱鉄製品との関係を明らかにできない。ただし，類似した特徴をもつ資料の表面に鉄鏃の形状を残す個体も複数確認している。上面は比較的平滑で，下面は僅かながら椀形を呈し，炉底との接触面が残ると考えられる。上面と下面の表面には気泡の痕跡が多く残るが，断面でみる限り滓の中心部分は気泡のない密な状態にある。

2）マクロ組織：Fig.23 の②に示す。断面は全面スラグ質で占められて被熱鉄製品の痕跡を残さない。上下面には小気泡を発するが，中央は緻密質。

3）顕微鏡組織：Fig.23 の③～⑩に示す。③④は上面に晶出した大形マグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）の成長粒である。⑤～⑦は内部で観察された白色粒状結晶のウスタイトと淡灰色盤状結晶のファヤライト，⑧～⑩は下面でガラス主体に微量の針状結晶が認められる。以上の如く該品は鉄酸化物の鉱物相のみで構成される。鉄製品の溶融痕跡は残さない。前述 No. 8 鉄鏃束溶融物が更に高温保定されると，この様にスラグ化するのだろうか。

4）マイクロ・ビッカース断面硬度：Fig.23 の④は大きく成長した多角形結晶の硬度測定の圧痕である。硬度値は 510Hv・100gf が得られてマグネタイト，また⑦の白色粒状結晶は 501Hv・100gf でウスタイトに同定される。

5）X 線回折：構成鉱物はファヤライトを主とし，少量のウスタイトと微量の磁鉄鉱

（magnetite：Fe_3O_4）を伴う。ガラスの回折バンドは認められない。顕微鏡組織の鑑定，マイクロ・ビッカース断面硬度結果との矛盾はない。

６）化学組成分析：Tab. ９に示す。48.89％ Total Fe と 32.33％造滓成分，随伴微量元素の
スラグ組成 0.29％ TiO_2，0.03％ V，0.04％ MnO などすべて増量傾向にありスラグ組成である。鍛冶滓か製錬滓かの判定は後日としたい。

No.10　炉壁溶融物

１）肉眼観察：周囲が全て破面となった炉壁溶融物。分析資料 No. ８・９に比べ重量が無く，石英を主体とした砂粒を多量に包含している。砂粒に混じって，炉壁に類似した褐色粘土粒も見られる。したがって花崗岩地帯に由来する粘土を用いた炉壁が溶解して生成されたと考えられる。色調は黒色を呈するが，部分的に暗紫紅色を呈する箇所もある。

２）マクロ組織：Fig.24 の②に示す。断面は大量の灰白色石英粒と花崗岩風化土に含まれる非晶質物質で構成される。鉄・銅金属類やその酸化物の付着・混入は認められない。

３）顕微鏡組織：Fig.24 の③～⑥に示す。③の左半分は灰黒色の微細鱗片状粘土鉱物のセリサイト（sericite：〔$KAl_2(Si_3Al)O_{10}(OH)_2$〕と一部に灰白色多角形結晶のマグネタイトらしき鉱物相が認められる。右側は灰白色大粒石英である。④は後者の拡大組織。⑤⑥は炉壁内部で熱籠り個所で，粘土鉱物のセリサイトは非晶質化して加熱変化が認められる。更に石英粒は高温クラックが発生し，その拡大が⑥である。被熱温度は 1100℃前後であろうか。炉壁用途は金属溶融物の付着がないので，特定は難しい。なお後述する No.12 被熱瓦の極く微量析出のマグネタイト晶出は共通する。

No.11　炉壁（頂部寄り）

１）肉眼観察：炉壁頂部寄りとみられる小破片。黄褐色を呈し，内面は二次的な被熱を受けてやや赤味のある明褐色で，それほど強い火を受けた痕跡はない。胎土には石英を主体とした砂粒とスサ断片を多く含んでいる。また石英を多数含む点から，花崗岩地帯である現地で用土の調達を行ったものと考えられる。

２）マクロ組織：Fig.24 の⑧に示す。灰白色石英粒を多量に含有する粘土鉱物である。胎土のみで付着鉱物は認められない。

３）顕微鏡組織：Fig.24 の⑨⑩に示す。胎土は黒い微細な鱗片状粘土鉱物セリサイトと白色石英で構成される。セリサイトは被熱変化を受けず非晶質化は認められない。更に高温クラックは無く，被熱温度は 1000℃以下と推定される。

４）X 線回折：構成物質は石英とカリ長石（K － feldspar：K_2O・Al_2O_3・SiO_2），イライト（illite：

〔$KAl_2(Si_3Al)_{10}(OH)_2$〕→（セリサイトと国際合意で化学式は同じ）を主とし，非晶質物質を伴う。

５）化学組成分析：Tab. ９に示す。0.02％ CaO，0.33％ Na_2O などアルカリ成分が低値で，20.49％ Al_2O_3 とアルミナが 20％を超えるのは風化花崗岩の特徴。鉄分（Fe_2O_3）が 1.83％と少なく軟化性には優位で，高アルミナと塩基性成分（CaO ＋ MgO）は 0.33％と低めで耐火性を向上させる。

６）耐火度：1500℃と高値は化学組成成分が裏付けた。

No.12 被熱瓦（炉壁溶融物付き）

１）肉眼観察：鉄製品と同時に被熱したと考えられる瓦片で，本資料は表面に縄目叩きの痕跡が見られる。表面には分析資料 No.10 と同様の炉壁溶融物が付着し，破損面にも付着している。付着した溶融物は石英を多く含む。被熱瓦の大半は縄目瓦で，若干数であるが斜格子目瓦の破片を確実に含む。このため鉄製品と瓦の被熱時期は斜格子瓦の出現以後で，かつ縄目瓦が主体的に用いられた時期となる。

２）マクロ組織：Fig.25 の②に示す。中央の灰白色三角形状部が瓦片で，周囲を溶融物が取り囲む。溶融物はガラス地であり，金属の析出は認められない。

３）顕微鏡組織：Fig.25 の③～⑩に示す。③～⑤は最表層部のガラス地に灰白色多角形結晶が帯状及び分散晶出する。当鉱物相はマグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）らしくもあるが EPMA から裏付けが必要。こちらは局部的析出であり，製鉄や鍛冶工程派生物と見做すには無理がある。被熱条件は更なる検討を要す。別視野を⑦・⑧に示す。ガラス地に淡く針状や多角形結晶をみる。鉄スピネルのヘルシナイト（FeO・Al_2O_3）の可能性をもつが，EPMA からの分析を必要とする。被熱瓦の溶融物のマグネタイトらしき結晶は，前述 No.10 炉壁溶融物とも共通し，両者の被熱条件は近似するとみて大過なかろう。なお⑨⑩の被熱瓦母体の粘土鉱物セリサイトは，高温焼成から非晶質化する。石英や長石粒の混入はなく胎土は精製されている。

（４）まとめ

大宰府跡蔵司地区から出土した７・８世紀の被熱鉄製品（鉄鏃，小札：甲冑部材）と，８・９世紀の小札や鉄塊系遺物，鉄滓，炉壁，被熱瓦の分析調査を行った。個々のまとめを Tab.10 にしめす。

１）７・８世紀の鉄鏃と小札

①鉄鏃の材質はフェライト（ferrite：α鉄，純鉄）組織をもつ極軟鋼である。鉄素材は鉄中の非金属介在物（人間の DNA 相当）からクロム（Cr）を含む Fe-Ti 酸化物組成である。低チ

タン花崗岩起源砂鉄原料を示唆する。福岡平野産の可能性が頗る高い。

火災の高熱か　②鉄鏃は軸を揃えた状態の溶着物が存在する。屋内の火災からの高熱を受けた酸化膜に覆われる。酸化膜は外層をヘマタイト：Fe_2O_3，中間層がマグネタイト：Fe_3O_4，内層はウスタイト：FeO の三層構造をとる。鉄は加熱すると酸化膜を生成する。安定した被膜構成で，酸化鉄は殆んど腐食が進行しない。但し埋蔵品は時間の経過で風化を受ける。

小札は薄板２枚鍛接品　③小札は薄板２枚の折り曲げ鍛接品で，材質は鉄鏃同様のフェライト組織痕跡の極軟鋼材であった。綴孔に対する穿孔の作業性，防禦面からも柔軟材質は理にかなった素材の選択と考える。なお，被熱小札の酸化膜も鉄鏃と同様の３層構造（ヘマタイト，マグネタイト，ウスタイト）である。

２）８・９世紀の被熱遺物

①当該期の小札も前述７・８世紀の作りに大差ない。

鉄鏃束溶解物　②鉄鏃圧痕付き炉内滓と分類された遺物は，切断面を顕微鏡観察すると，鉄鏃束溶融物と判明した。６個体が約 90 度前後のズレでもって直交した 12 個体の塊である。材質は前述７・８世紀鉄鏃に準ずるが，金属鉄を残さず，非金属介在物からの産地同定はできなかった。

③炉内滓様遺物の鉱物相は，ウスタイト：FeO とファヤライト（fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）の構成で，一部にマグネタイト：Fe_3O_4 を伴う。鍛冶滓組成であるが，断定はできない。鉄器の被熱物の可能性も見逃せない。

④炉壁溶融物と炉壁は，高アルミナ含有炉材で，低塩基性（CaO+MgO）組成から 1500℃の優れた耐火性を保持する。金属溶融物を含まず用途の特定はできなかった。

⑤炉壁溶融物を付着した被熱瓦はガラス地にマグネタイト（Fe_3O_4）を晶出するが，付着量が僅少で鍛冶炉転用材の可能性までの展開は難しい。

以上，鉄製品の出土量は 2014 年４月の段階で約 25Kg に達し，鉄鏃 1700 ～ 2600 本分に相当するところである。当分析結果でもって全体を評価できない。更なる調査で今後に期したい。

註

（１）日本学術振興会製銑第 54 委員会（1968）『焼結鉱組織写真および識別法』日本工業新聞社

ウスタイトは 446 ～ 503Hv，マグネタイトは 505 ～ 592Hv，ヘマタイトは 1020 ～ 1084Hv，ファイヤライトは 655 ～ 713Hv の範囲が提示されている。また，ウルボスピネルの硬度値範囲の明記がないが，マグネタイトにチタン（Ti）を固溶するので，600Hv 以上であればウルボスピネルと同定している。それにアルミナ（Al）

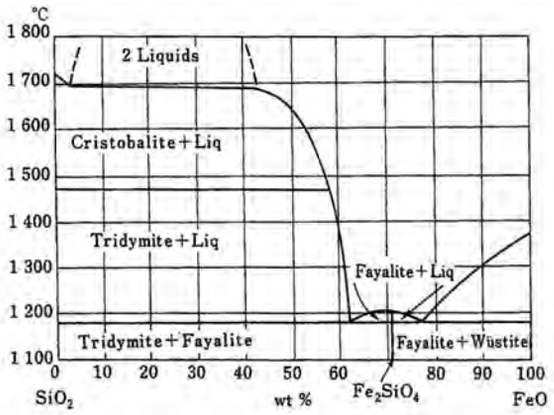


Fig.14　FeO-SiO_2

が加わり，ウルボスピネルとヘーシナイトを端成分とする固溶体となると更に硬度値は上昇する。このため 700Hv を超える値では，ウルボスピネルとヘーシナイトの固溶体の可能性が考えられる。

（2）大澤正己 2003「桑原石ヶ元石墳群出土鉄滓の金属的調査」『福岡市九州大学統合移転用地埋蔵文化財発掘調査報告書　元岡・桑原遺跡群２』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 744 集　福岡市教育委員会

（3）井澤英二 2005「日本の古代製鉄で使用された鉱石」『ふぇらむ』Vol.10　No. 5

（4）『鉄鋼便覧』第 3 版巻 1 巻 1981 丸善 P48

参考文献

大澤正己 1996「南郷角田遺跡出土の酸化膜片に対する一考察」『南郷遺跡Ⅰ』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書第 69 冊　奈良県立橿原考古学研究所

国立歴史民俗博物館 1994『国立歴史民俗博物館研究報告第 58 集（日本・韓国の鉄生産技術〈調査編１〉』

国立歴史民俗博物館 1994『国立歴史民俗博物館研究報告第 59 集（日本・韓国の鉄生産技術〈調査編２〉』

符号	地区名	遺構名	遺物名称	推定年代	計測値		磁着度	メタル度	調査項目							備考
					大きさ(mm)	重量(g)			マクロ組織	顕微鏡組織	断面硬度	X線回折	EPMA	化学分析	耐火度	カロリー	
No. 1	大宰府史跡第212次調査（大宰府跡蔵司地区）	BTr. (62-11-12Gr)	鉄鏃（基部，マグネタイト化）	7・8c	15×9×4	1.4		銹化(△)	○	○	○		○				
No. 2		BTr. (62-11-12Gr)	鉄鏃（基部，マグネタイト化）		15×6×3.5	1.2		銹化(△)		○	○						
No. 3		ETr. (40-2-3Gr)表土下茶褐色土	鉄鏃（基部，マグネタイト化）		23×15×10	5.2		銹化(△)	○	○	○						
No. 4		DTr. (54-15-7Gr)，表土	鉄鏃（基部，マグネタイト化）		17.5×11×8.5	3.5		銹化(△)	○	○	○		○				
No. 5		BTr. (62-11-12Gr)	鉄鏃（基部，マグネタイト化）		20×11×10	4.3		銹化(△)		○	○						
No. 6		BTr. (62-11-12Gr)	鉄製小札（マグネタイト化）		15×13×10	0.7		銹化(△)		○	○						
No. 7		DTr. (54-15-7Gr)，表土	鉄製小札（マグネタイト化）	8・9c	11×11×1	0.5		銹化(△)		○	○						
No. 8		ETr. 表土	炉内滓（鉄鏃圧痕付き，マグネタイト化）		47×42×21.5	58.6		銹化(△)		○	○	○		○			
No. 9		DTr. (54-15-7Gr)，表土	炉内滓（マグネタイト化）		78×41×32	144.8		銹化(△)	○	○	○	○		○			
No. 10		ATr. (54-15-14Gr) 北表土	炉壁溶融物		44×45×22	31.3		なし		○							
No. 11		DTr. (54-20-10Gr) 表土下茶褐色土	炉壁（頂部寄り）		59×47×30	56.1		なし		○		○		○	○		
No. 12		FTr. (61-14-14Gr)表土	被熱瓦（炉壁溶解部付き）		44×46×22	26.8		なし		○							

Tab. 8　供試材の履歴と調査項目

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe_2O_3)	二酸化珪素 (SiO_2)*	酸化アルミニウム (Al_2O_3)*	酸化カルシウム (CaO)*	酸化マグネシウム (MgO)*	酸化カリウム (K_2O)*	酸化ナトリウム (Na_2O)*	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO_2)	酸化クロム (Cr_2O_3)	硫黄 (S)	五酸化燐 (P_2O_5)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	二酸化ジルコニウム (ZrO_2)	耐火度	造滓成分 Σ*	造滓成分 Total Fe	TiO_2 Total Fe
No. 8	大宰府史跡 第212次調査 (大宰府跡 蔵司地区)	ETr.表土	炉内滓 (鉄鏃圧痕付き,マグネタイト化)	8・9c	66.30	0.06	69.06	17.96	7.79	3.01	0.06	0.19	0.25	0.05	<0.01	0.14	0.03	0.011	0.09	0.08	0.04	0.01	<0.01	−	11.35	0.171	0.002
No. 9		DTr. (54-15-7Gr) 表土	炉内滓 (マグネタイト化)		48.89	0.07	51.29	12.80	23.05	7.25	0.42	0.40	1.02	0.19	0.04	0.29	0.03	0.055	0.50	0.17	0.03	0.03	0.03	−	32.33	0.661	0.006
No. 11		DTr. (54-20-10Gr) 表土 下茶褐色土	炉壁 (頂部寄り)		3.04	0.03	2.23	1.83	55.34	20.49	0.02	0.31	3.96	0.33	0.01	0.50	0.02	0.059	0.05	Ig loss 12.40	0.04	<0.01	−	1500	80.45	26.464	0.164

Tab. 9　供試材の組成

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	顕微鏡組織	化学組成 (%) Total Fe	Fe_2O_3	塩基性成分	TiO_2	V	MnO	ガラス質成分	Cu	所　見
No. 1	大宰府史跡 第212次調査 (大宰府跡 蔵司地区)	BTr. (62-11-12Gr)	鉄鏃 (基部, マグネタイト化)	7・8c	金属鉄:介在物はFe-Ti酸化物, 素地はfe	−	−	−	−	−	−	−	−	鉄鏃の材質・砂鉄起源の極軟鋼
No. 2		BTr. (62-11-12Gr)	鉄鏃 (基部, マグネタイト化)		酸化鉄 (3層被膜:hm・mt・w) 素地はfe痕跡	−	−	−	−	−	−	−	−	極軟鋼素材で楕円形状2点片の合せ鍛え
No. 3		ETr. (40-2-3Gr) 表土下茶褐色土	鉄鏃 (基部, マグネタイト化)		酸化鉄 (3層被膜:hm・mt・w) 素地はfe痕跡	−	−	−	−	−	−	−	−	極軟鋼素材で円形断面
No. 4		DTr. (54-15-7Gr) 表土	鉄鏃 (基部, マグネタイト化)		金属鉄:含Ti.V.Cr介在物, 素地はfe	−	−	−	−	−	−	−	−	福岡平野賦存砂鉄由来の鉄か (方形断面)
No. 5		BTr. (62-11-12Gr)	鉄鏃 (基部, マグネタイト化)		酸化鉄 (3層被膜:hm・mt・w) 素地はfe痕跡	−	−	−	−	−	−	−	−	極軟鋼素材, 断面方形2点寄せ合せ
No. 6		BTr. (62-11-12Gr)	鉄製小札 (マグネタイト化)		酸化鉄 (3層被膜:hm・mt・w) 素地はfe痕跡	−	−	−	−	−	−	−	−	極軟鋼素材, 薄板2枚折り曲げ鍛接
No. 7		DTr. (54-15-7Gr) 表土	鉄製小札 (マグネタイト化)	8・9c	酸化鉄 (3層被膜:hm・mt・w) 素地はfe痕跡	−	−	−	−	−	−	−	−	極軟鋼素材, 薄板2枚折り曲げ鍛接
No. 8		ETr 表土	炉内滓(鉄鏃圧痕付き, マグネタイト化)		鏃茎断面8本遺存, 滓鉱物w+f	66.30	17.96	0.25	0.14	0.04	<0.01	11.35	0.01	鉄鏃束溶融物
No. 9		DTr. (54-15-7Gr) 表土	炉内滓 (マグネタイト化)		表層:mt, 内部:w+f, 底部:glass	48.89	12.80	0.82	0.29	0.03	0.04	32.33	0.03	鍛冶滓の鉱物様相
No.10		ATr. (54-15-14Gr 北表土	炉壁溶融物		glass地に局部的にmt晶出	−	−	−	−	−	−	−	−	炉壁用途は特定出来ない
No.11		DTr. (54-20-10Gr) 表土下茶褐色土	炉壁 (頂部寄り)		鱗片状粘土鉱物 (se)と石英混入胎土	3.04	1.83	0.33	0.50	0.04	0.01	80.45	<0.01	耐火度1500℃, 高Al, 低塩基性成分
No.12		FTr. (61-14-14Gr) 表土	被熱瓦 (炉壁溶解部付き)		付着溶融物はglass地にmt晶出	−	−	−	−	−	−	−	−	鍛冶炉転用材の可能性有, 断定はできない。

Fe-Ti酸化物:Ulvöspinel($2FeO \cdot TiO_2$) とHercynite($FeO \cdot Al_2O_3$) の固溶体, Fe:ferrite (α鉄, 純鉄), hm:hematite(α-Fe_2O_3), mt:magnetite(Fe_3O_4), W:Wüstite(FeO), f:fayalite($2FeO \cdot SiO_2$), se:sericite (粘土鉱物)

Tab.10　出土遺物の調査結果のまとめ

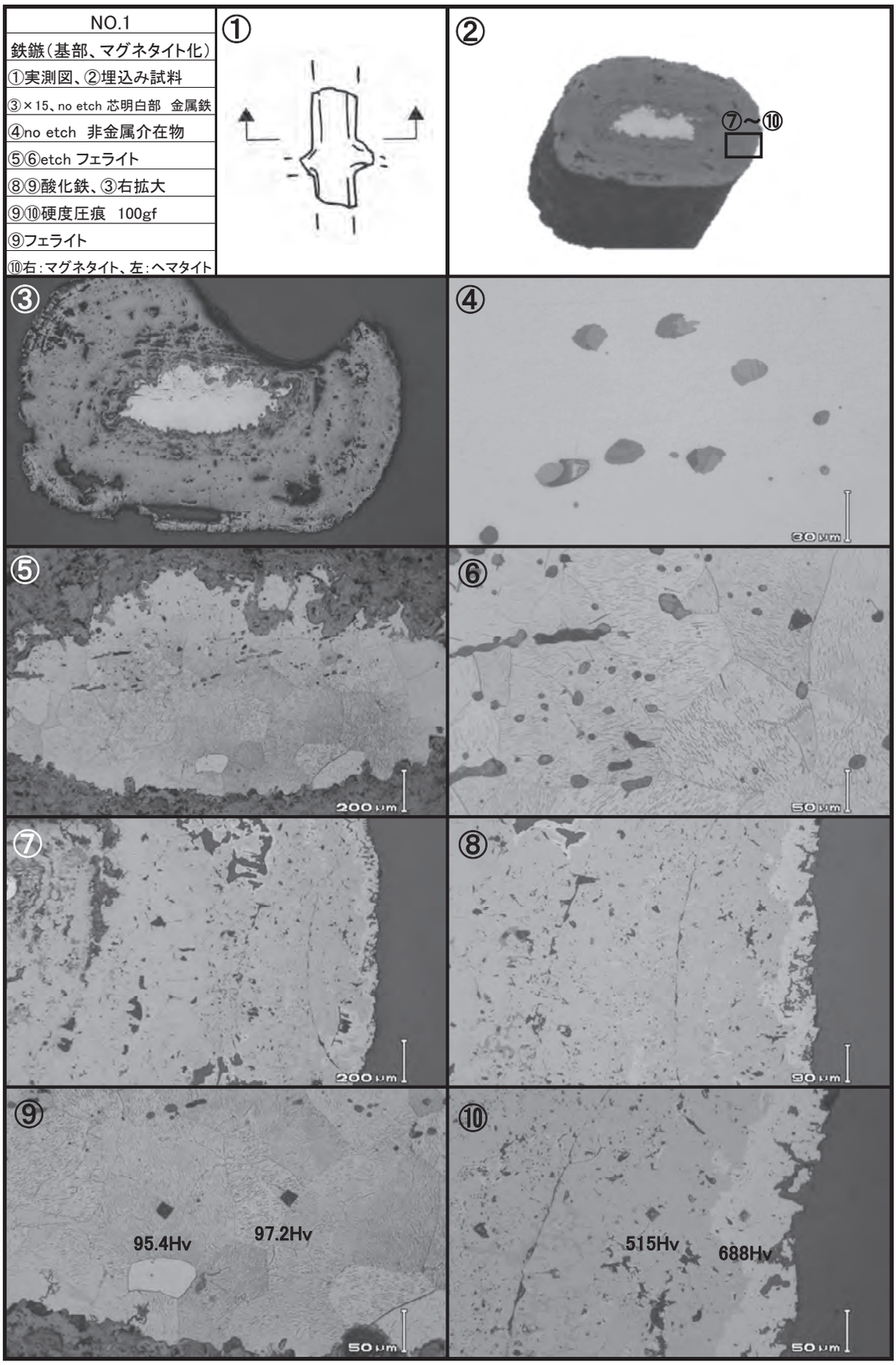


Fig.15　No. 1 顕微鏡組織

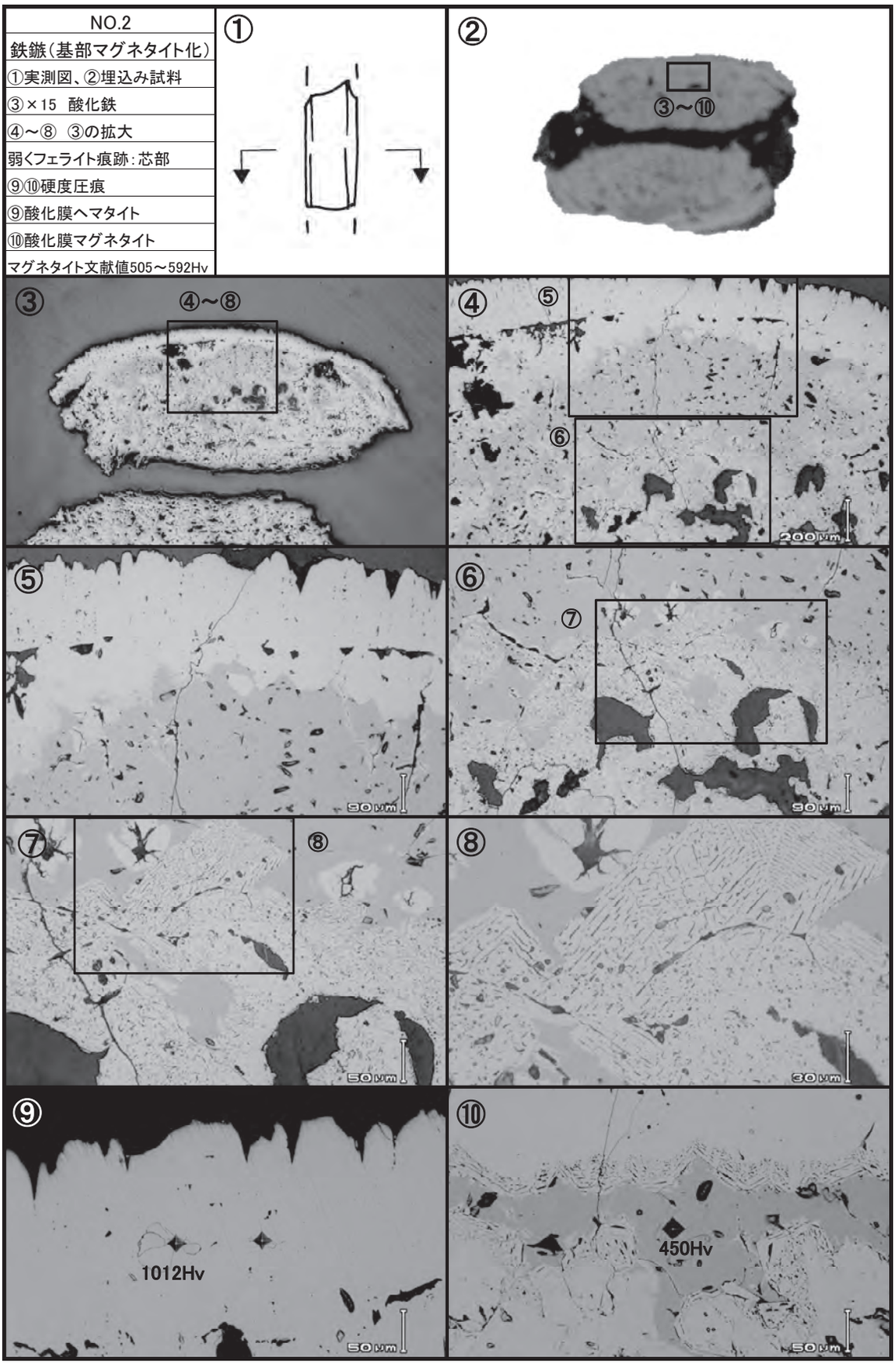


Fig.16　№2 顕微鏡組織

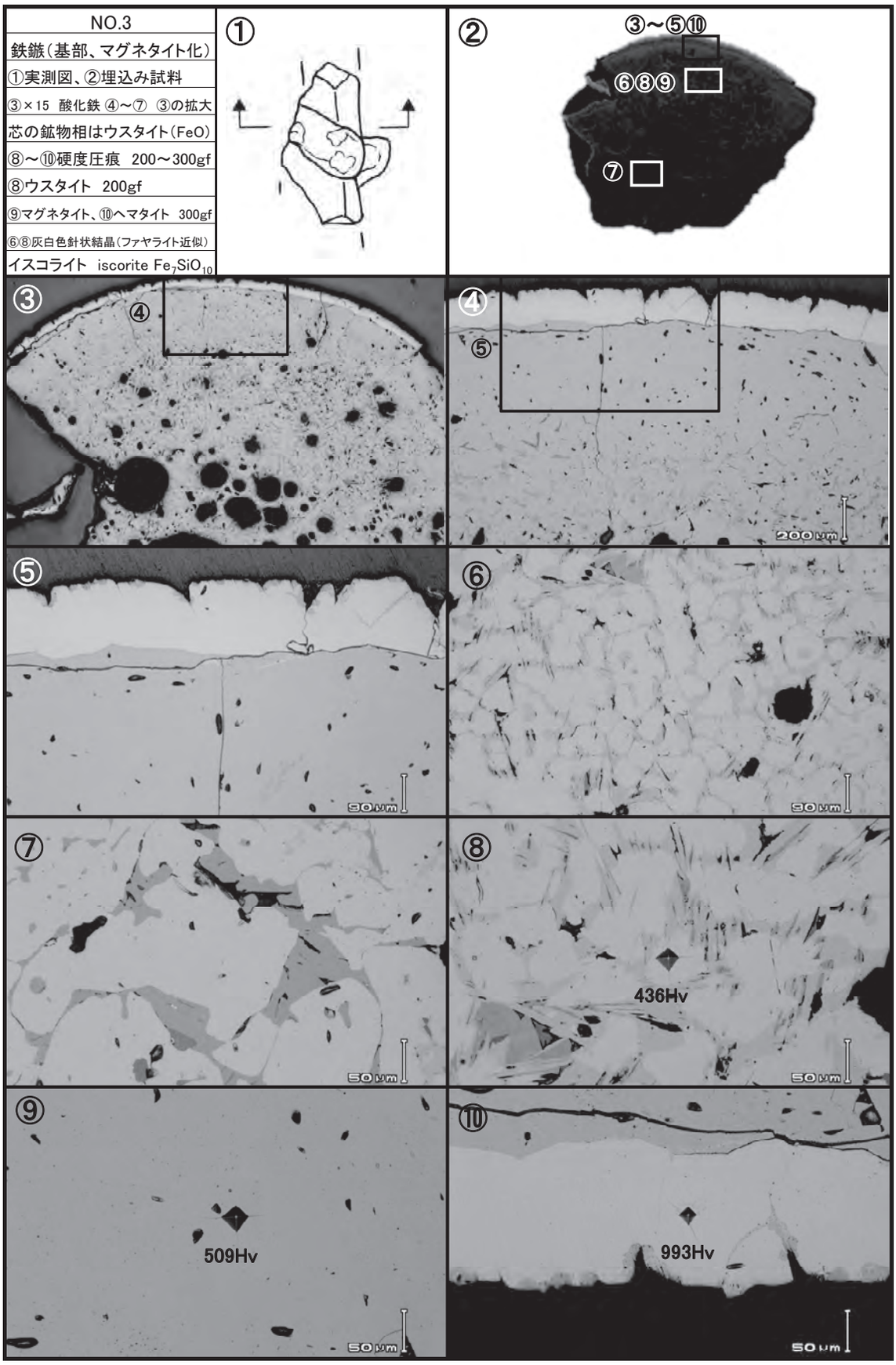


Fig.17　No.3 顕微鏡組織

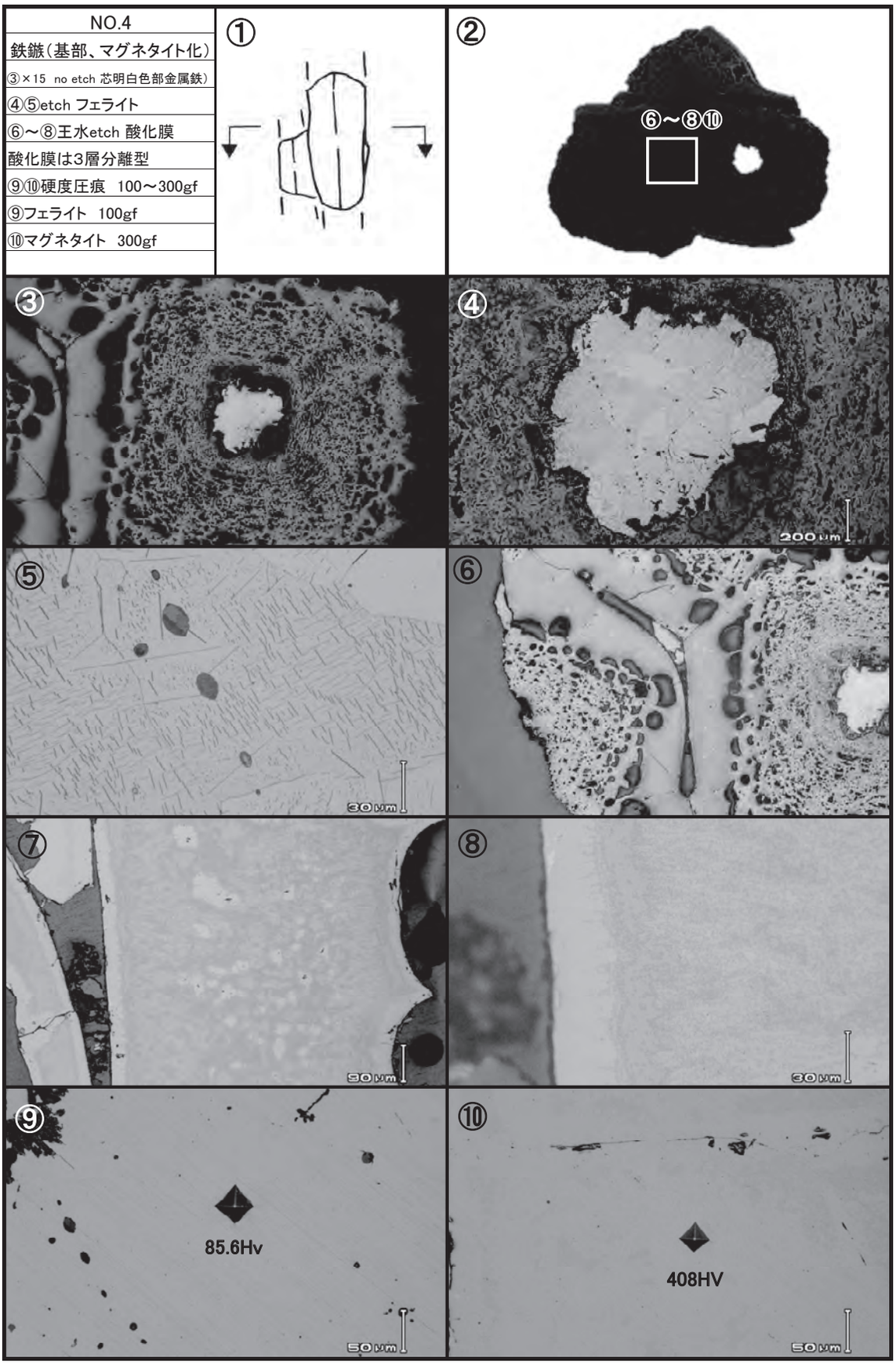


Fig.18　№4 顕微鏡組織

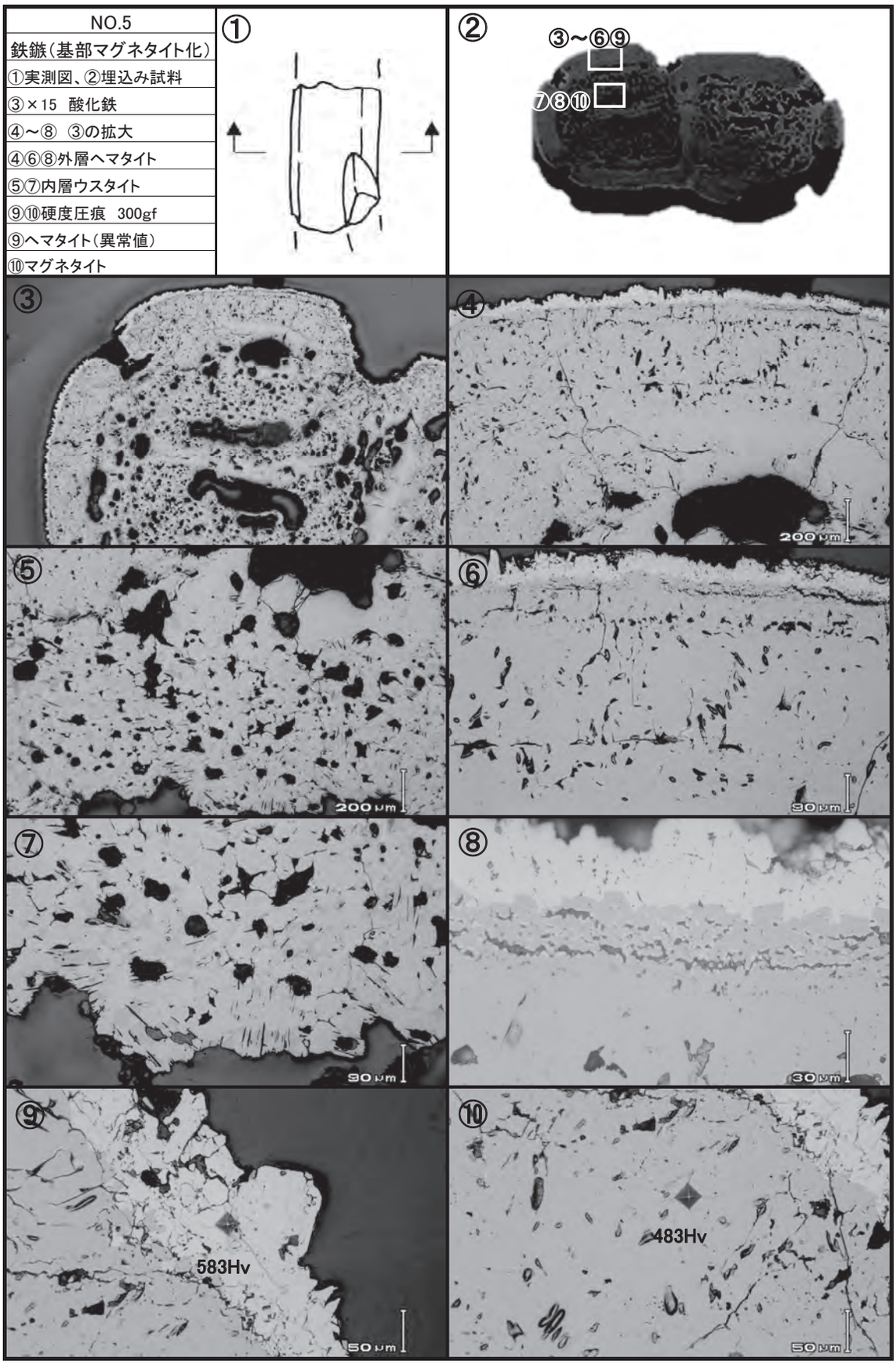


Fig.19　№5 顕微鏡組織

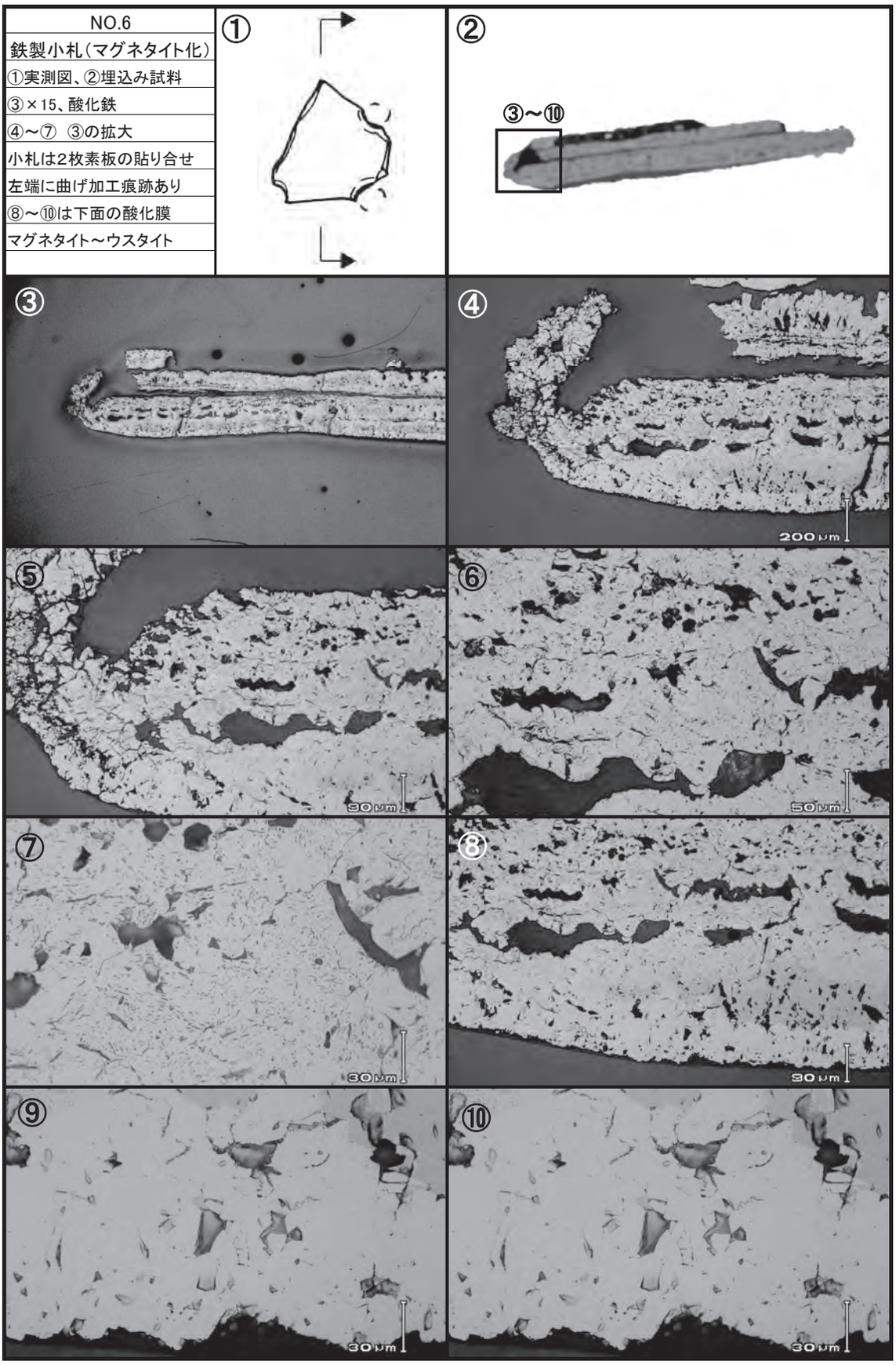


Fig.20　№6 顕微鏡組織

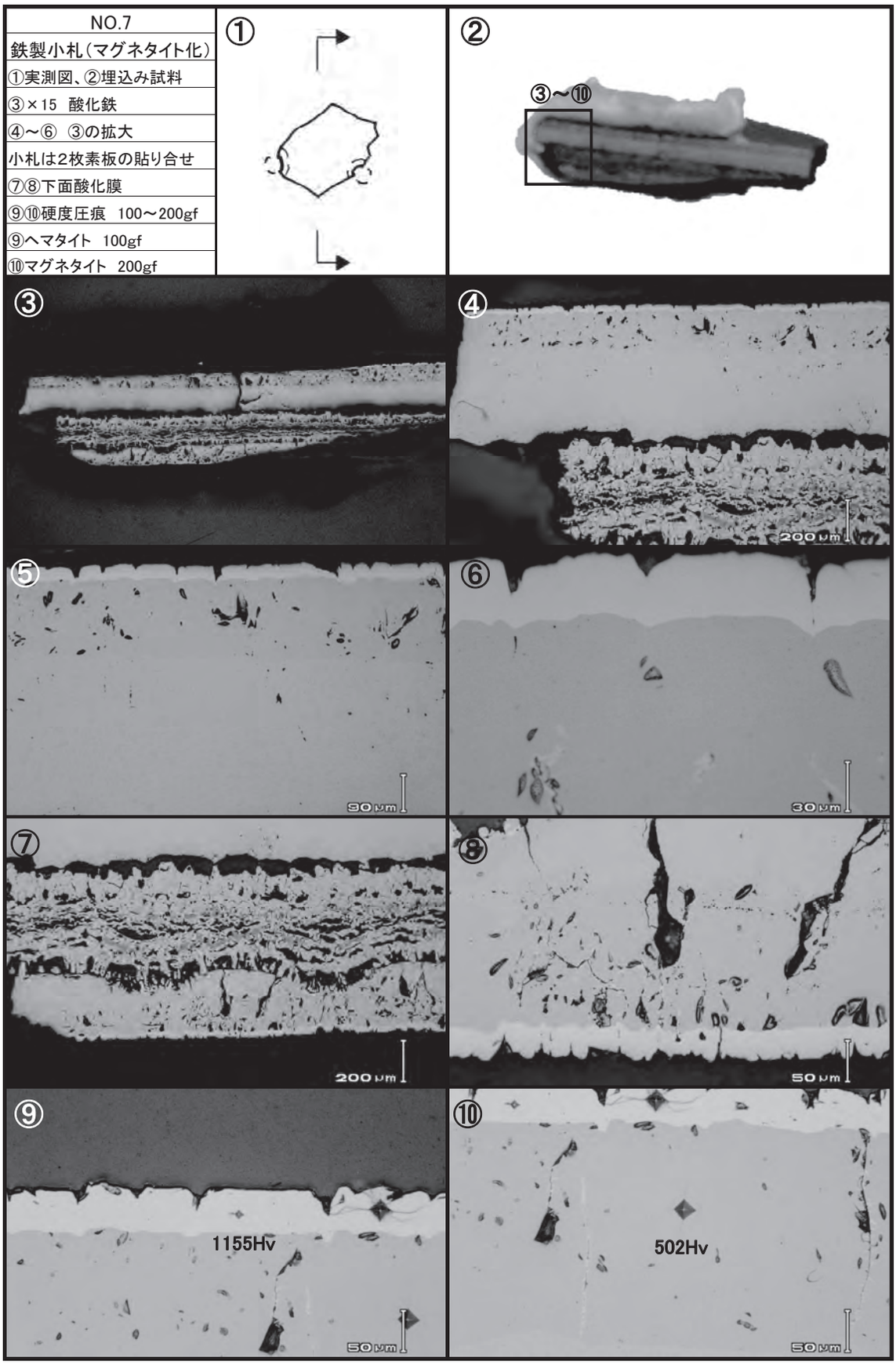


Fig.21　№7 顕微鏡組織

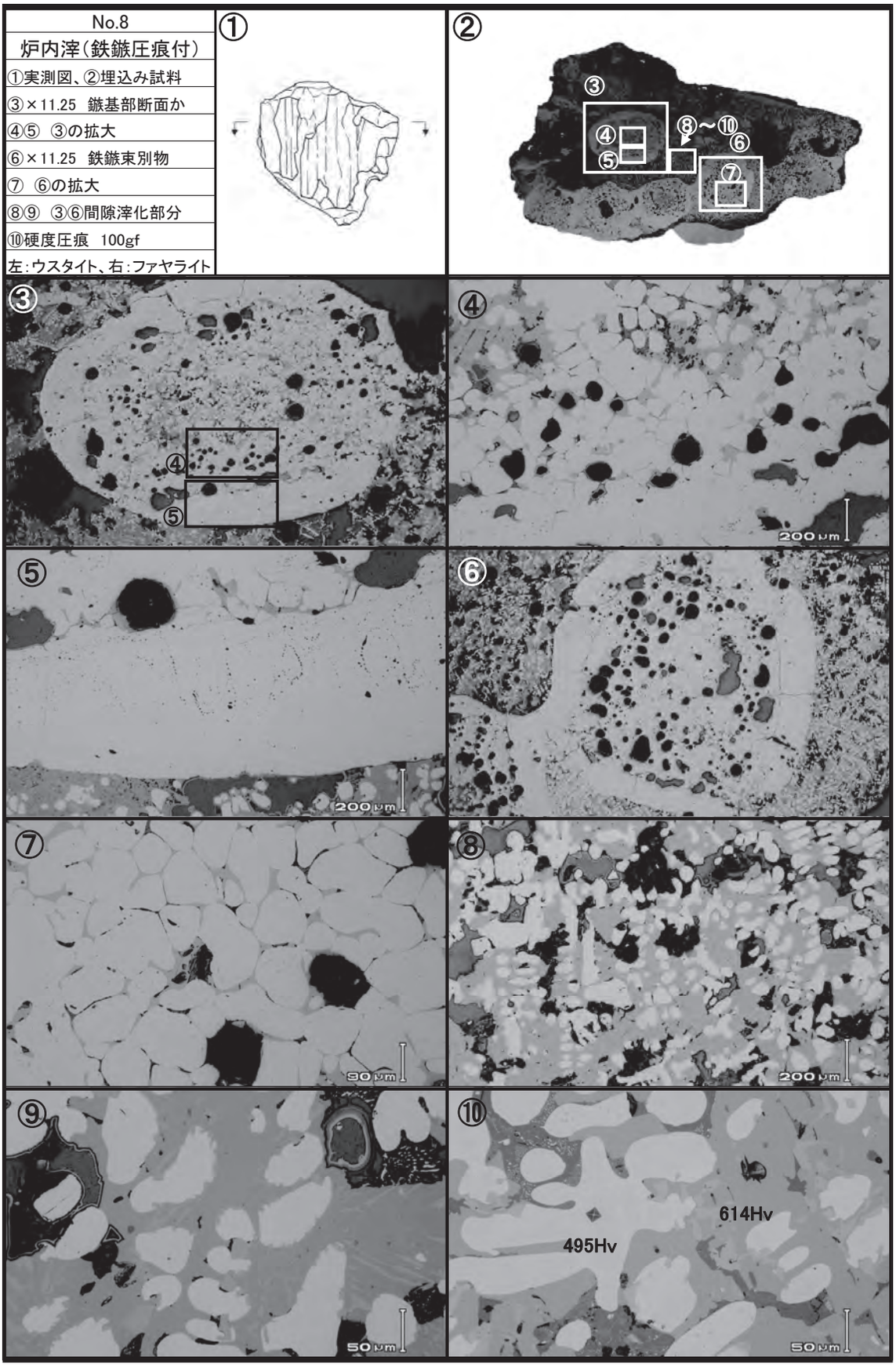


Fig.22　No.8 顕微鏡組織

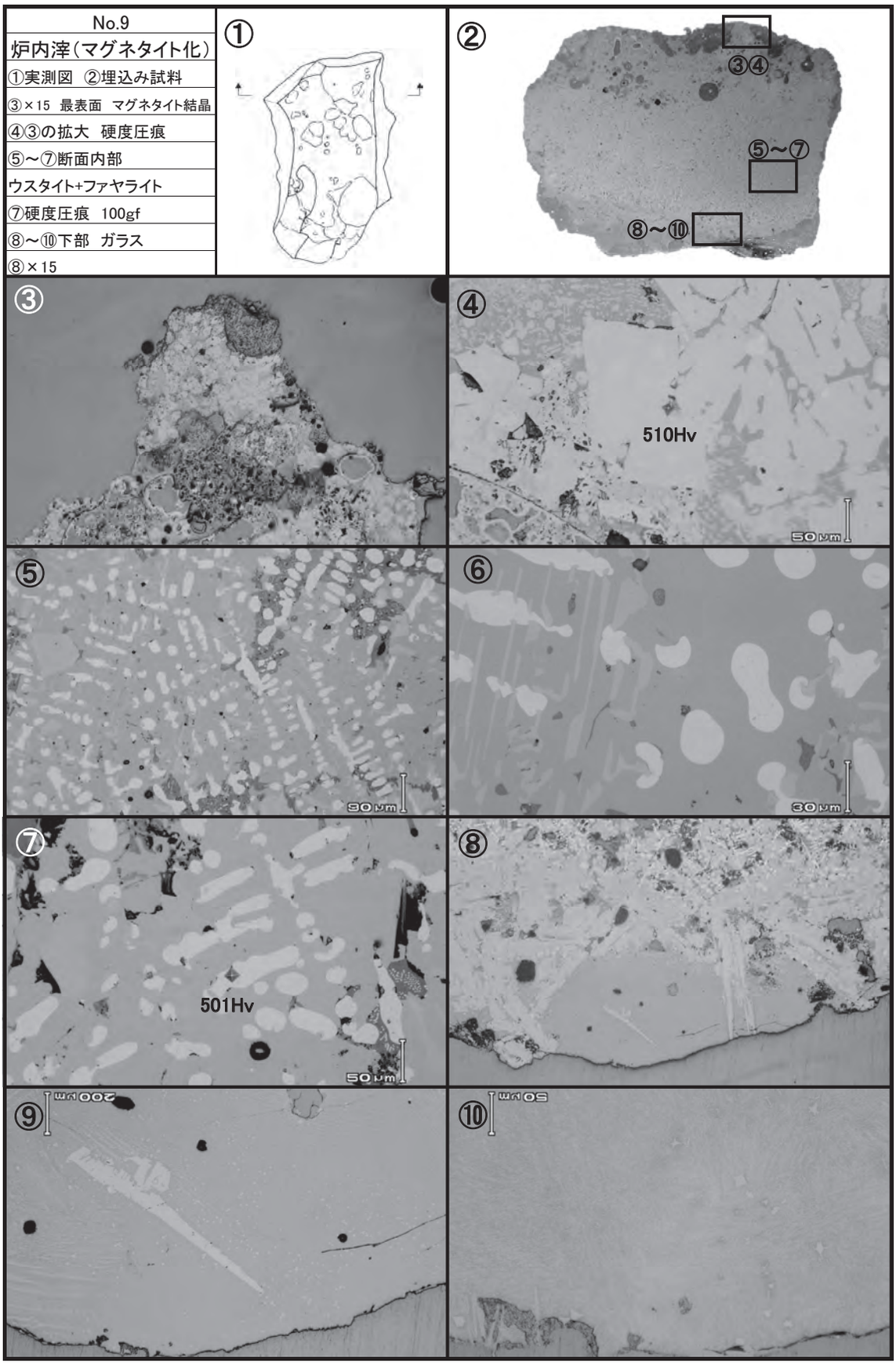


Fig.23　No.9 顕微鏡組織

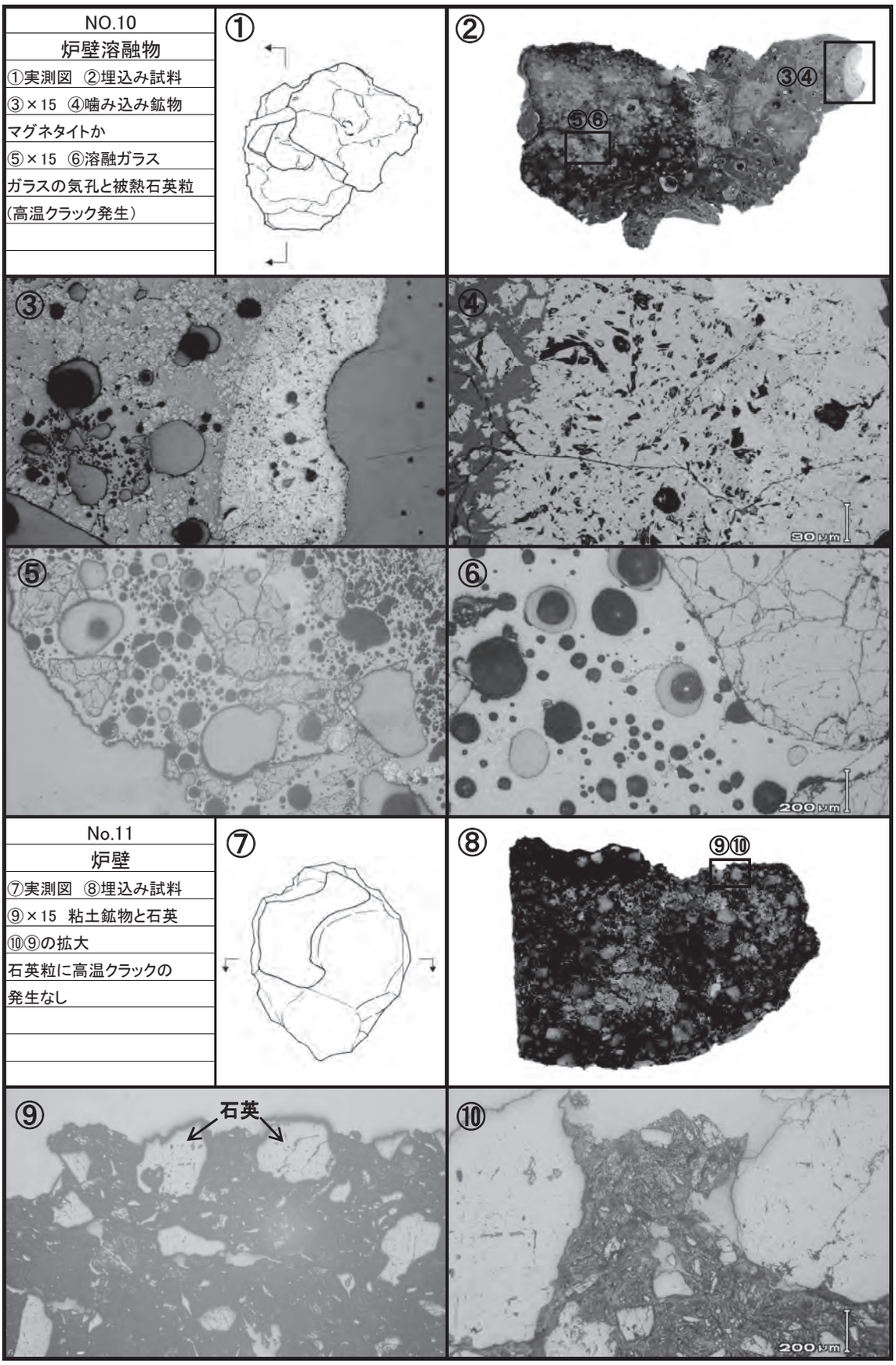


Fig.24　No.10・11 顕微鏡組織

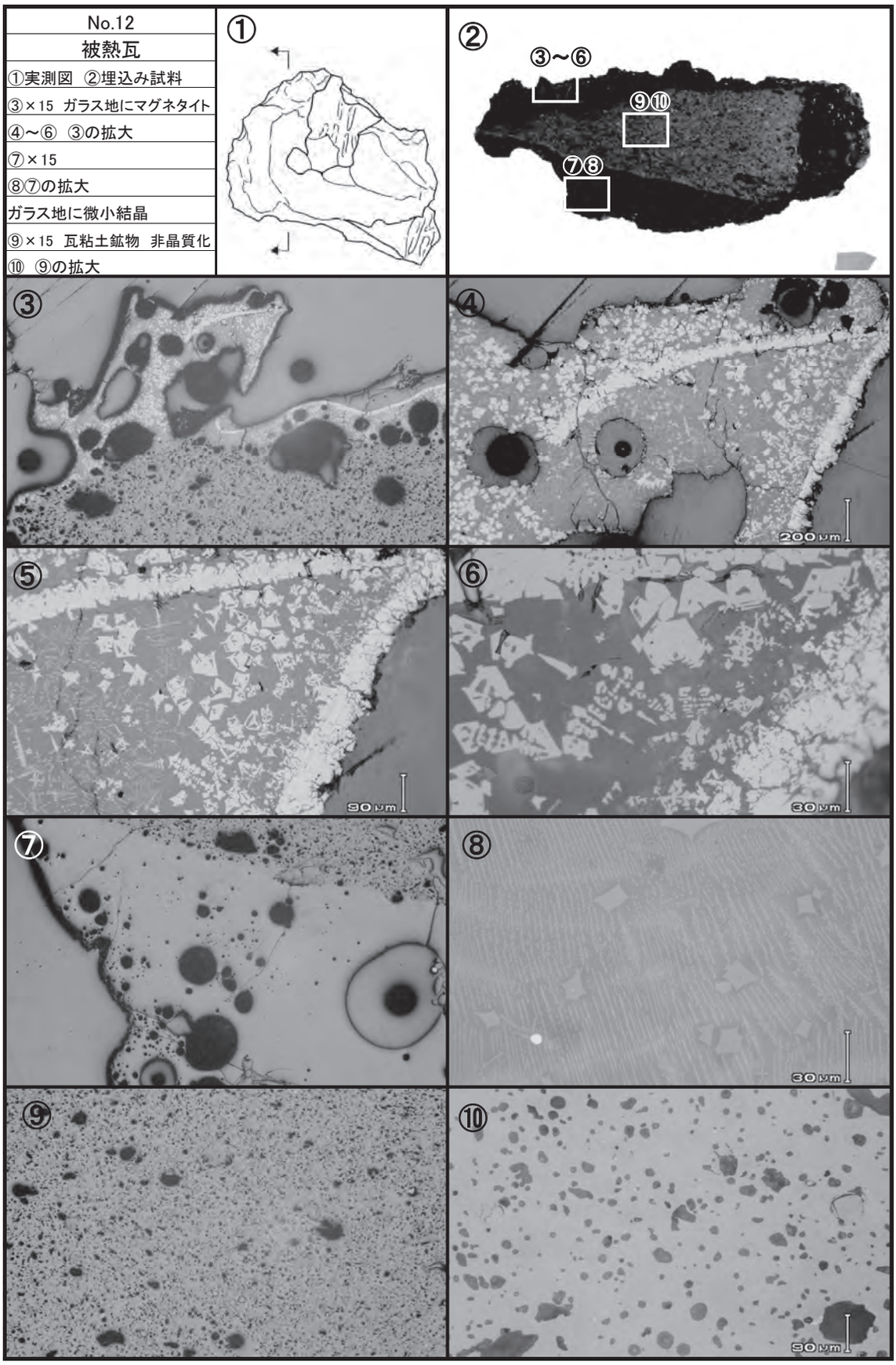
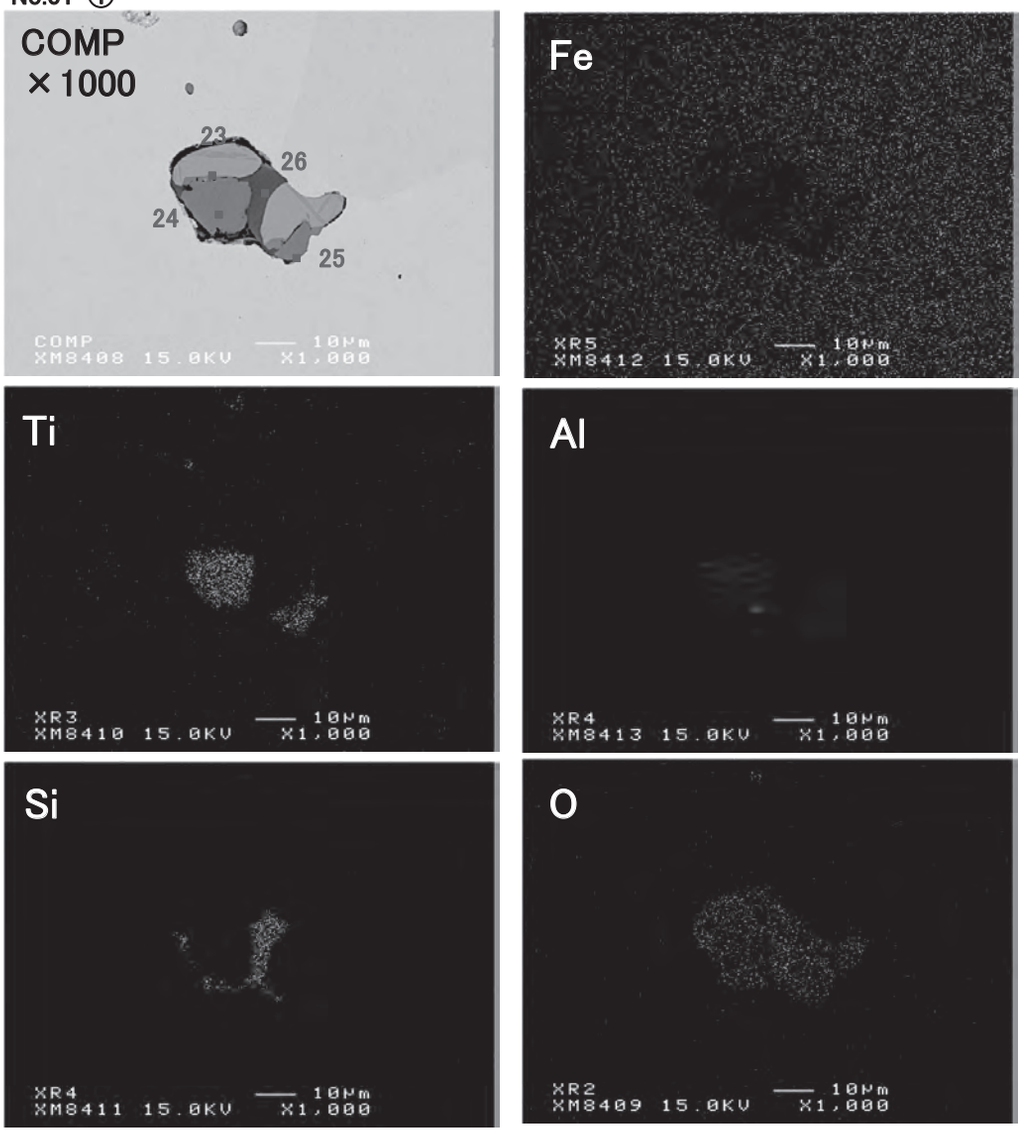


Fig.25　№ 12 顕微鏡組織

No.01-①

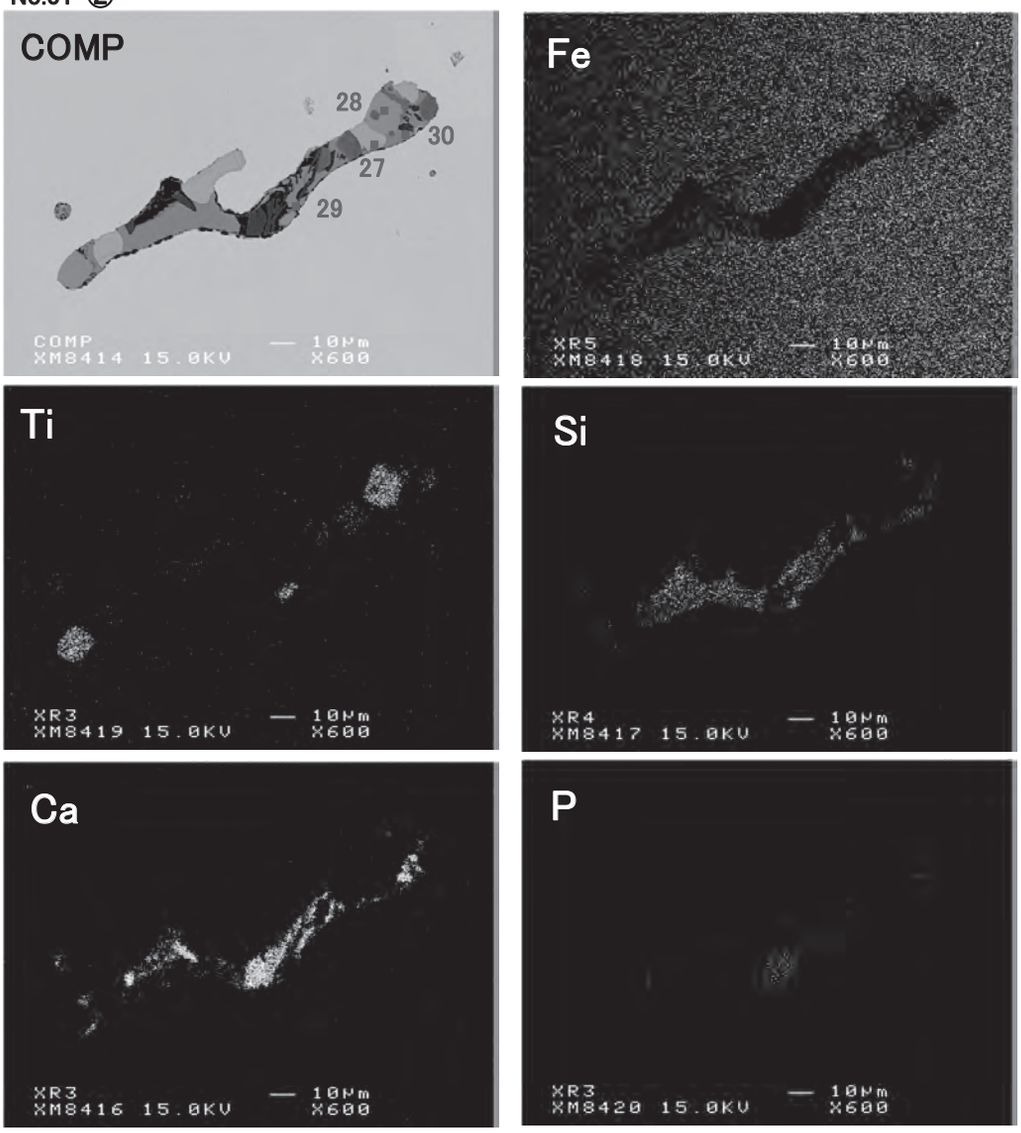


Element	23	24	25	26
Na_2O	–	–	–	0.006
P_2O_5	–	0.020	0.012	0.590
F	–	–	–	0.410
Cr_2O_3	0.039	0.183	0.157	–
S	–	0.015	–	–
MgO	0.759	0.957	0.923	9.545
K_2O	–	0.001	–	–
Al_2O_3	0.274	12.505	11.672	0.191
CaO	–	–	–	2.064
SiO_2	0.225	0.175	0.278	32.560
TiO_2	0.488	10.653	10.197	0.132
MnO	0.153	0.211	0.178	0.416
FeO	100.664	66.315	67.494	59.388
ZrO_2	–	0.051	–	–
V_2O_3	0.070	1.140	0.987	0.065
CuO	0.004	–	–	–
SrO	0.031	0.058	–	0.577
Total	102.707	92.284	91.898	105.771

分析点23：ウスタイト（wüstite：FeO）
分析点24：チタン磁鉄鉱（ウルボスピネルと磁鉄鉱の中間組成、Al含有）
分析点25：チタン磁鉄鉱（Al含有）
分析点26：オリピン（Mg・Ca含有ファヤライト）

Fig.26　No.1　EPMA 調査①

No.01−②

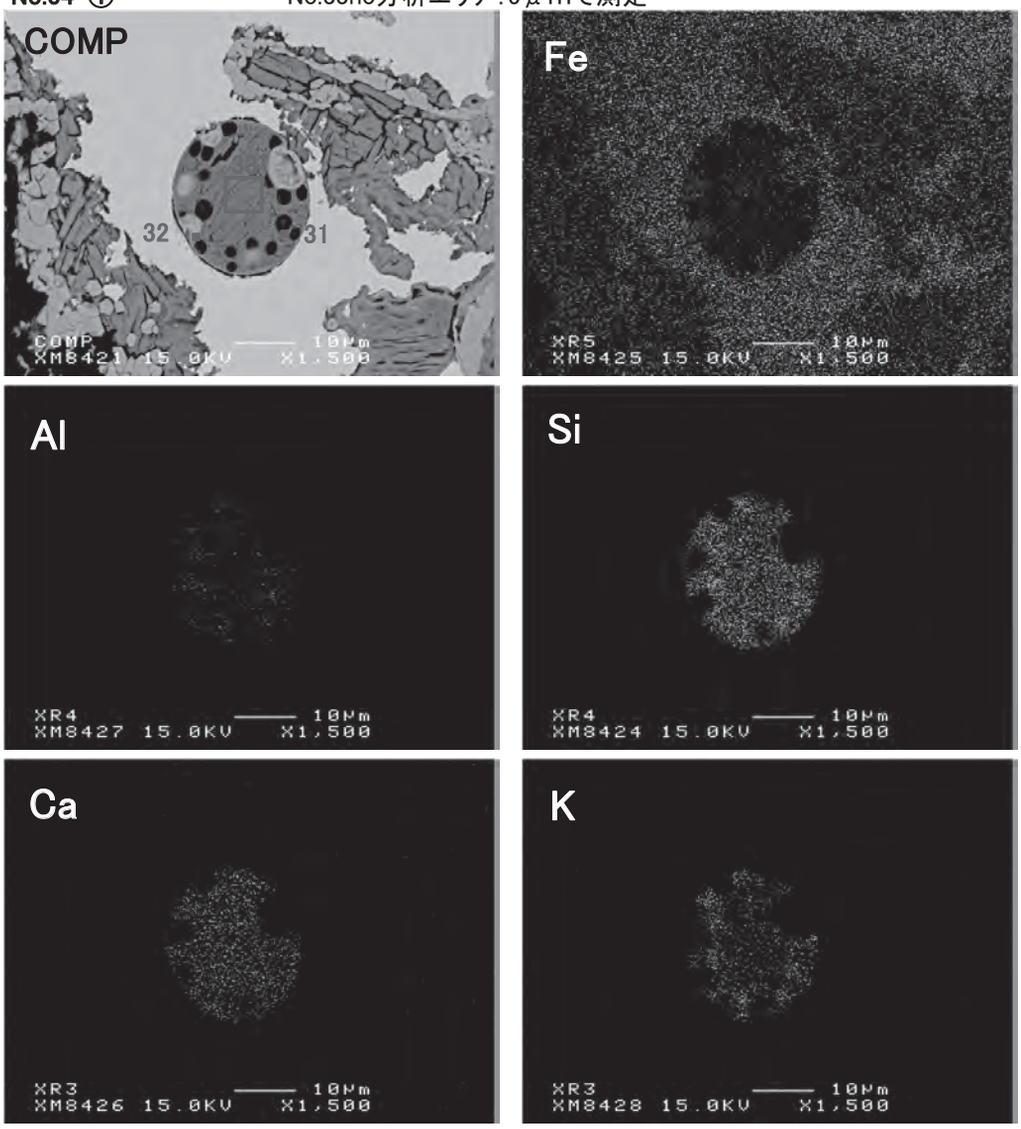


Element	27	28	29	30
Na_2O	0.036	0.011	−	−
P_2O_5	0.015	−	0.544	39.653
F	−	−	−	1.045
Cr_2O_3	0.035	0.226	−	−
S	0.016	−	0.006	0.001
MgO	0.306	0.564	2.013	1.001
K_2O	−	−	0.044	1.025
Al_2O_3	0.228	13.525	0.180	0.043
CaO	−	−	3.901	44.887
SiO_2	0.297	0.254	30.962	1.980
TiO_2	0.480	10.163	0.148	0.047
MnO	0.060	0.070	0.304	0.056
FeO	101.587	66.955	64.957	7.873
ZrO_2	0.006	−	−	0.145
V_2O_3	0.175	1.182	0.090	0.030
CuO	−	−	−	0.088
SrO	0.019	−	0.477	0.606
Total	103.260	92.950	103.626	98.040

分析点27：ウスタイト
分析点28：チタン磁鉄鉱（Al含有）
分析点29：オリピン（Ca・Mg含有ファヤライト）
分析点30：ややP含有量が少ないが鉄を含んだリン酸カルシウム〔$Ca_3(PO_4)_2$〕であろう

Fig.27　№1　EPMA 調査②

No.04-①　　No.33no分析エリア：5μmで測定

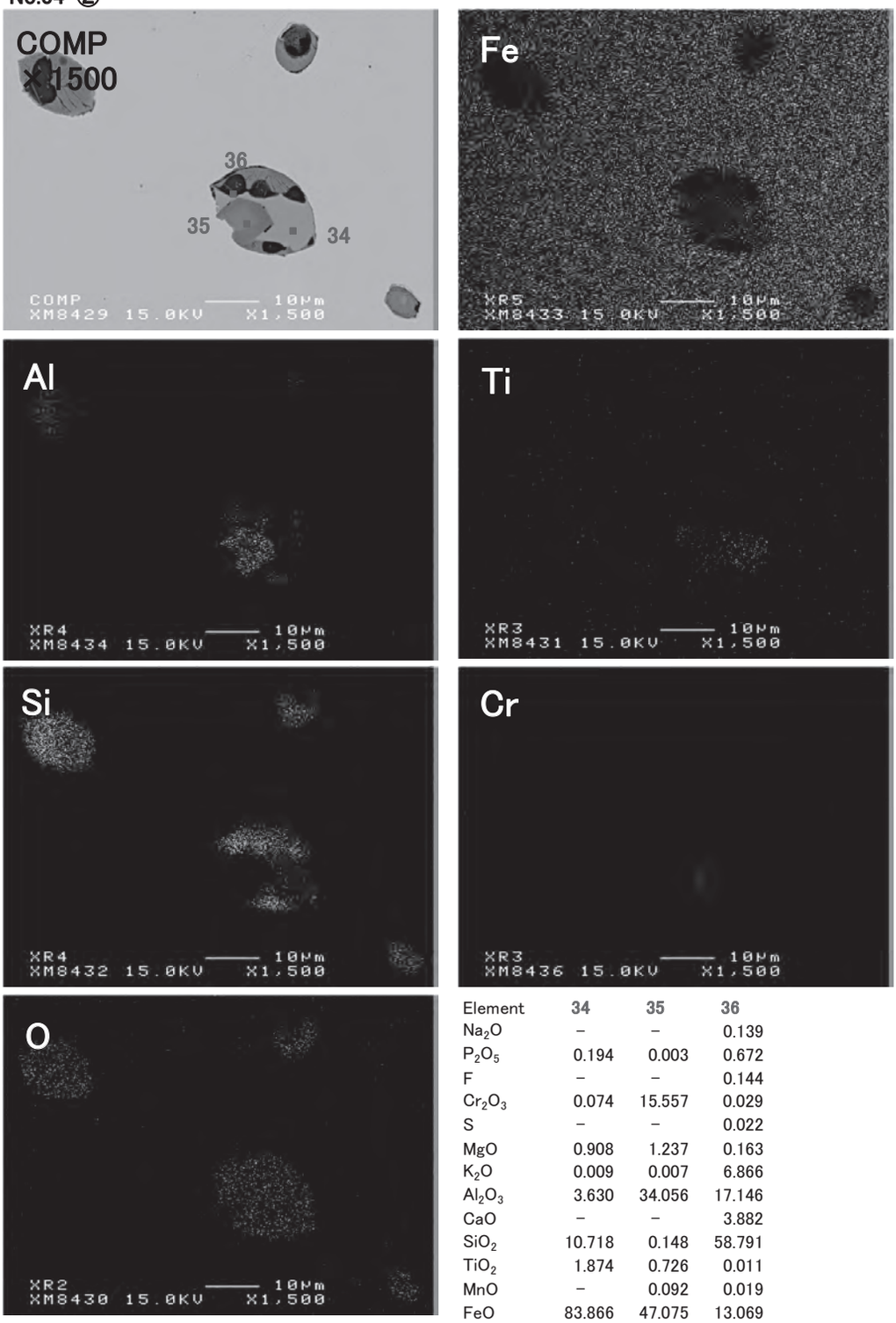


Element	31	32	33
Na_2O	0.092	−	−
P_2O_5	1.227	0.312	4.208
F	0.283	−	0.114
Cr_2O_3	0.023	0.250	0.016
S	0.209	0.070	0.449
MgO	0.174	0.281	1.497
K_2O	6.190	0.159	2.509
Al_2O_3	16.817	1.070	8.719
CaO	4.838	0.366	4.765
SiO_2	50.542	2.990	33.270
TiO_2	0.083	0.842	0.152
MnO	0.023	0.045	0.118
FeO	14.691	92.260	46.445
ZrO_2	0.040	0.030	0.010
V_2O_3	0.015	0.113	0.047
CuO	−	−	0.008
SrO	0.773	0.054	0.633
Total	95.901	98.842	102.912

分析点31：写真では分析点の位置がよく分らない。
Al_2O_3、K_2Oが主成分の中にあることから、
ガラスの組成のように見受けられる。
分析点32：磁鉄鉱
分析点33：ガラス

Fig.28　№.4　EPMA 調査①

No.04-②



分析点34：磁鉄鉱
分析点35：ヘルシナイト（含Cr）
分析点36：ガラス

Element	34	35	36
Na_2O	–	–	0.139
P_2O_5	0.194	0.003	0.672
F	–	–	0.144
Cr_2O_3	0.074	15.557	0.029
S	–	–	0.022
MgO	0.908	1.237	0.163
K_2O	0.009	0.007	6.866
Al_2O_3	3.630	34.056	17.146
CaO	–	–	3.882
SiO_2	10.718	0.148	58.791
TiO_2	1.874	0.726	0.011
MnO	–	0.092	0.019
FeO	83.866	47.075	13.069
ZrO_2	–	–	–
V_2O_3	0.170	2.123	–
CuO	–	–	0.008
SrO	0.175	–	0.341
Total	101.618	101.024	101.241

Fig.29　№4　EPMA 調査②

（滓：メタル又は胎土）

分析資料番号	地区名	遺構名	構成No.	遺物種類	重量（g）	磁着度	メタル度	分析コメント	マクロ	検鏡		硬度	EPMA	X線回析	化学分析		耐火度	カロリー	放射化分析	断面樹脂	分析位置指定	採取方法	観察	集合写真	モノクロ	カラー	実測図	前含浸	X線透過
1	蔵司地区	B Tr.（62−11−12Gr）		鉄鏃（基部，マグネタイト化）	1.4		銹化（△）	滓化したメタル部を中心に	○	○	—	○	—		—	—	—	—	—	○	長軸端部1／2	直線状の切断	○	—	○	○	○	—	○
2	蔵司地区	B Tr.（62−11−12Gr）		鉄鏃（基部，マグネタイト化）	1.2		銹化（△）	滓化したメタル部を中心に	—	○	—	○	—		—	—	—	—	—	○	長軸端部1／2	直線状の切断	○	—	○	○	○	—	○
3	蔵司地区	E Tr.（40−2−3Gr） 表土下茶褐色土		鉄鏃（基部，マグネタイト化）	5.2		銹化（△）	滓化したメタル部を中心に	○	○	—	○	—		—	—	—	—	—	○	長軸端部1／2	直線状の切断	○	—	○	○	○	—	○
4	蔵司地区	D Tr.（54−15−7Gr） 表土		鉄鏃（基部，マグネタイト化）	3.5		銹化（△）	滓化したメタル部を中心に	○	○	—	○	—		—	—	—	—	—	○	長軸端部1／2	直線状の切断	○	—	○	○	○	—	○
5	蔵司地区	B Tr.（62−11−12Gr）		鉄鏃（基部，マグネタイト化）	4.3		銹化（△）	滓化したメタル部を中心に	—	○	—	○	—		—	—	—	—	—	○	長軸端部1／2	直線状の切断	○	—	○	○	○	—	○
6	蔵司地区	B Tr.（62−11−12Gr）		鉄製小札（マグネタイト化）	0.7		銹化（△）	滓化したメタル部を中心に	—	○	—	○	—		—	—	—	—	—	○	長軸端部1／2	直線状の切断	○	—	○	○	○	—	○
7	蔵司地区	D Tr.（54−15−7Gr） 表土		鉄製小札（マグネタイト化）	0.5		銹化（△）	滓化したメタル部を中心に	—	○	—	○	—		—	—	—	—	—	○	長軸端部1／2	直線状の切断	○	—	○	○	○	—	○
8	蔵司地区	E Tr. 表土		炉内滓（鉄鏃圧痕付き， マグネタイト化）	58.6		銹化（△）	滓化したメタル部を中心に	—	○	—	○	○		○	—	—	—	—	○	長軸端部1／3	直線状の切断	○	—	○	○	○	—	○
9	蔵司地区	D Tr.（54−15−7Gr） 表土		炉内滓（マグネタイト化）	144.8		銹化（△）	滓部を	○	○	—	○	○		○	—	—	—	—	○	短軸端部1／5	直線状の切断	○	—	○	○	○	—	○
10	蔵司地区	A Tr.（54−15−14Gr） 北表土		炉壁溶解物	31.3		な　し	炉壁溶解物を中心に	—	○	—	—	—		—	—	—	—	—	—	長軸端部1／4	直線状の切断	○	—	○	○	○	—	—
11	蔵司地区	D Tr.（54−20−10Gr） 表土下茶褐色土		炉壁（頂部寄り）	56.1		な　し	炉壁として	—	—	○	—	—		—	○	○	—	—	—	長軸端部2／3	直線状の切断	○	—	○	○	○	—	—
12	蔵司地区	F Tr.（61−14−14Gr） 表土		被熱瓦（炉壁溶解物付き）	26.8		な　し	被熱瓦と炉壁溶解物との関係を	—	○	—	—	—		—	—	—	—	—	—	短軸端部1／4	直線状の切断	○	—	○	○	○	—	○

Tab.11　鉄関連遺物分析資料一覧表

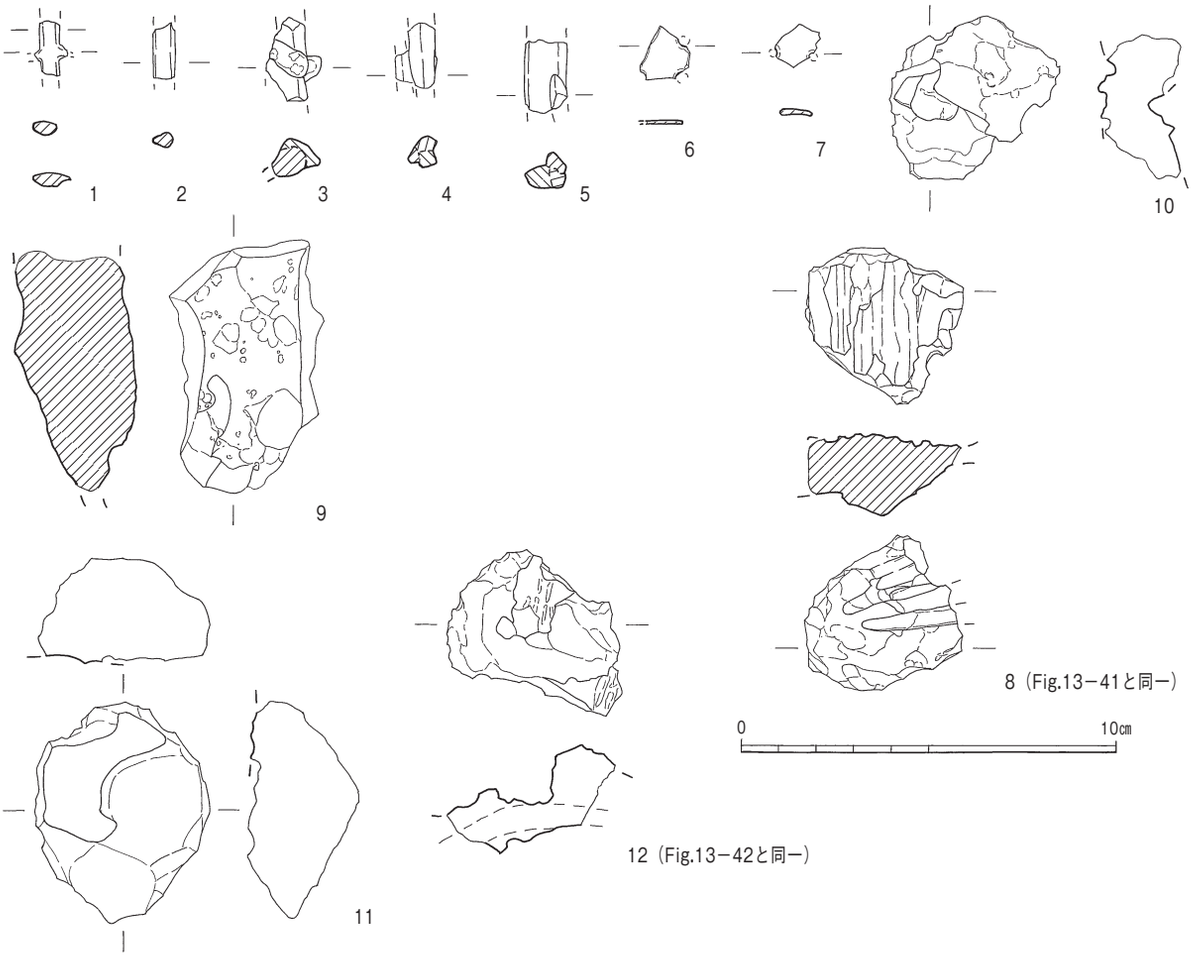


Fig.30　第 212 次調査分析資料実測図（1 /2）

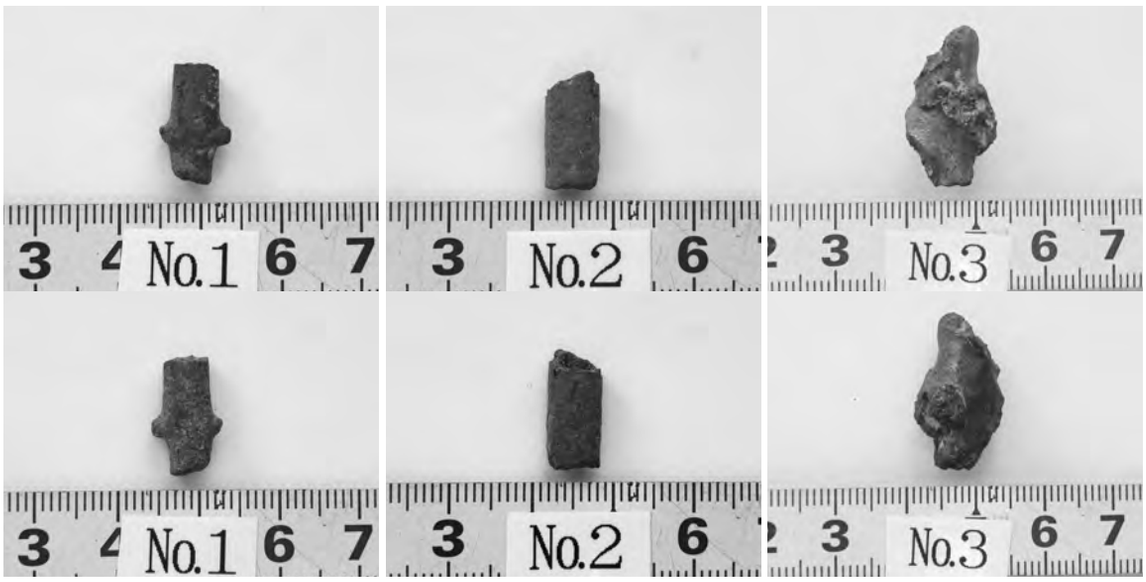


Fig.31　第 212 次調査分析資料写真①

Fig.32　第 212 次調査分析資料写真②

4　第 220 次調査（蔵司 C・D 区の計画調査）

（1）調査概要

経　過　大宰府政庁周辺官衙跡の蔵司地区では平成 21 年度より計画調査を開始したが，4 ヶ年目となる平成 24 年度は，蔵司 C・D 区における現況地形の形成過程，遺構の分布や遺存状況を把握するため第 220 次調査を実施した。調査は平成 24 年 7 月 24 日に開始し，計 8 箇所にトレンチを設定した。調査期間中の平成 24 年 10 月 26 日には現地説明会を開催し，約 60 名の見学者が訪れた。また平成 25 年 3 月 13 日には地元である観世音寺区・坂本区の地元住民対象に現地説明を行った。なお，調査は平成 25 年 3 月 31 日まで行った。

調査の結果，SB5000 の周囲には古代の整地層の広がりが確認できること，基壇状にみえる低い高まりは後世の造成により削り込まれていることが明らかとなった。また，C・D 区の間にある 1.5 mほどの段差も，元々段差として存在していたものであることが判明した。

位　置　調査地点は蔵司地区官衙のうち，丘陵南西部の平坦地に位置する。地番は太宰府市観世音寺 3 丁目 478，484 － 1 ・ 2，486 番である。

（2）トレンチ設定（Fig.33）

大宰府史跡第 220 次調査は，大型礎石建物 SB5000 が存在する D 区及び，その東側に一段下がった C 区を対象とするものである。

D 区に東接する C 区は，D・E 区よりも 2 mほど低い平坦地で，昭和期に駐車場等に利用されていた箇所でもある。SB5000 に近接した地点でもあることや，SB5000 との間の 2 mほどの段差が古代に遡るものであるのかなどを把握するため，トレンチを 2 箇所（1・2 トレンチ）に設定した。1 トレンチは D・E 区間の段地形に関する情報を得るため，段地形に直交する方向で長さ 6 m，幅 1 mの規模で設定した。2 トレンチは，1 トレンチと同じく D・E 区間の段差の成因及び C 区における遺構面の状況などを把握するため，段差に直交する方向で長さ 11 m，幅 1 mの規模で設定した。

ところで，D 区は早くから大型礎石建物 SB5000 の存在が知られていたが，地表に残る礎石の測量や遺物の採集が行われる程度で，本格的な発掘調査は実施されていなかった。そのため，平成 21 年度に改めて測量調査を実施した結果，SB5000 の範囲だけが周囲よりも一段高い地形になっていることが判明し，SB5000 に伴う基壇が遺存している可能性が考えられた。また，SB5000 の北側にも狭いながらも平坦面が存在することから，SB5000 に関連する遺構の広がりや北側平坦地における遺構の有無等を把握するためトレンチを 6 箇所（5 ・ 7 ・ 9 ・10・11・12 トレンチ）に設定した。

ＳＢ５０００周辺の高まり

5 トレンチは，SB5000 北東部の状況を確認するため，長さ 5.9 m，幅 2 mで設定した。7 トレンチは SB5000 北側にある一段低い平坦面の状況を確認するため，長さ 5 m，幅 1 mで設定した。9 トレンチは，SB5000 北西側の低い段地形と北側の平坦面との関係を確認するため，長さ 7 m，幅 1 mで設定した。10 トレンチは SB5000 北西側の低い段地形の状況と，西側の

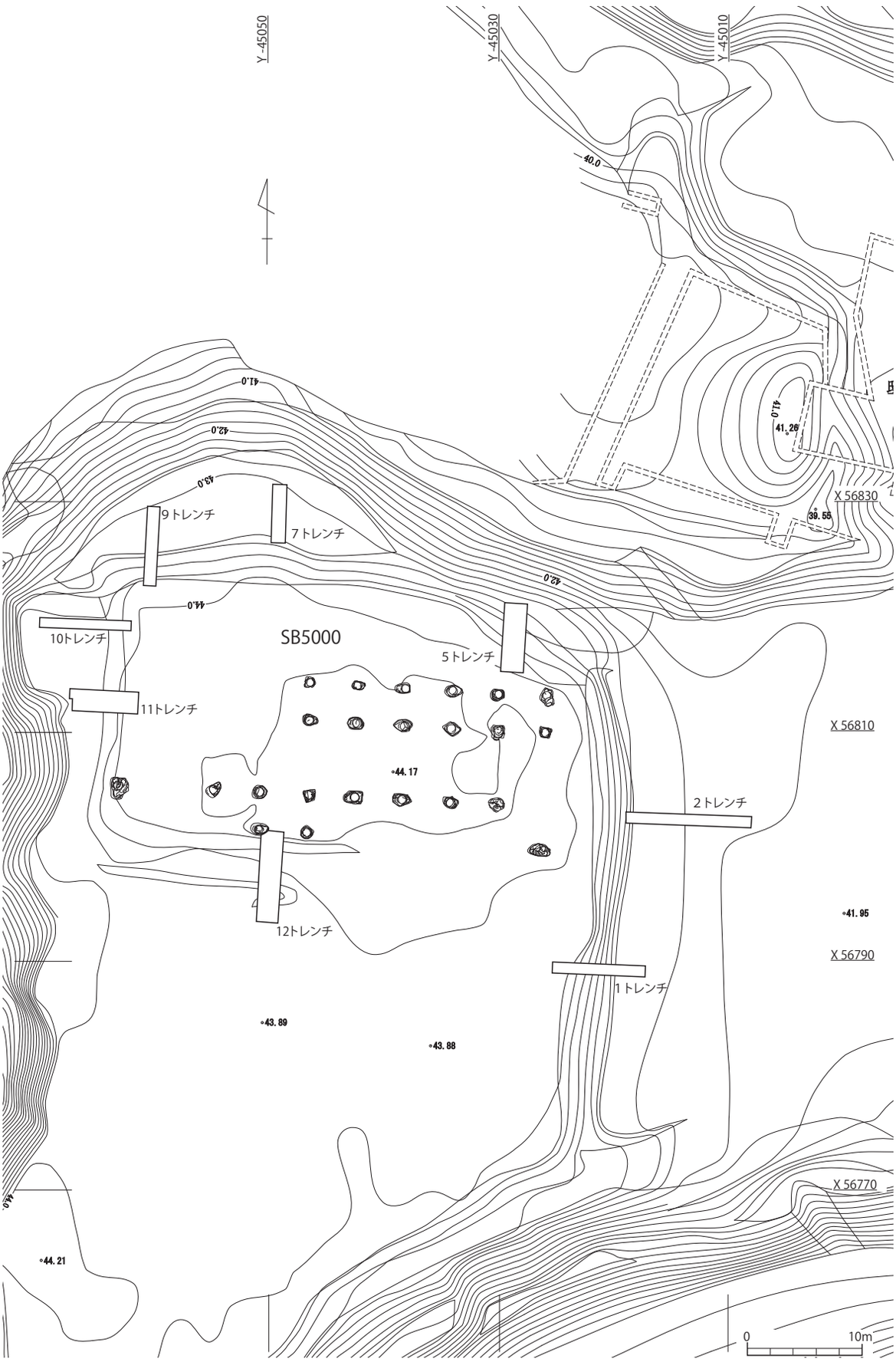


Fig.33　第 220 次調査区トレンチ配置図（1/500）

一段下がった面との関係を確認するため，長さ８m，幅１mの規模で設定した。11 トレンチは SB5000 の礎石が西側まで及んでいるのかを確認するため，また西側に一段下がった面における遺構の有無を確認するため，長さ 5.7 m，幅２mで設定し，瓦を含む整地層の広がりを確認するため，西側の一部を長さ 0.3 m，幅１mで拡張した。12 トレンチは SB5000 の南側における低い段地形の成因と遺構の広がりを確認するため，長さ８m，幅２mで設定した。

以上の全てのトレンチについては，SB5000 の測量によって得られた建物主軸を基準として設定したため，座標北から約３°東に振れている。また，設定位置については，礎石列の延長上になるよう測量している。なお，３・４・６・８トレンチについては当初計画では設定していたが，結果的に調査には至らなかったため，ここでは欠番とする。

SB5000を基準に設定

（３）各トレンチの調査成果

１トレンチ（Fig.34，PL. ６）

基本層序　表土（１層）を剥ぐと，古代の瓦を多量に含む暗灰褐色土（２層）となるが，近現代の造成に伴うものである。一段高いＥ区側（西側）には淡褐色土（３層），低いＣ区側（東側）の黄灰色土（４層）が，それぞれ厚さ５～ 10cm 程度で広がっているが，やはり造成に伴う堆積土とみられる。この下は赤褐色～暗灰褐色を呈する粘質土の地山であるが，Ｃ区側は花崗岩の岩盤風化層でところどころ岩脈もみられた。

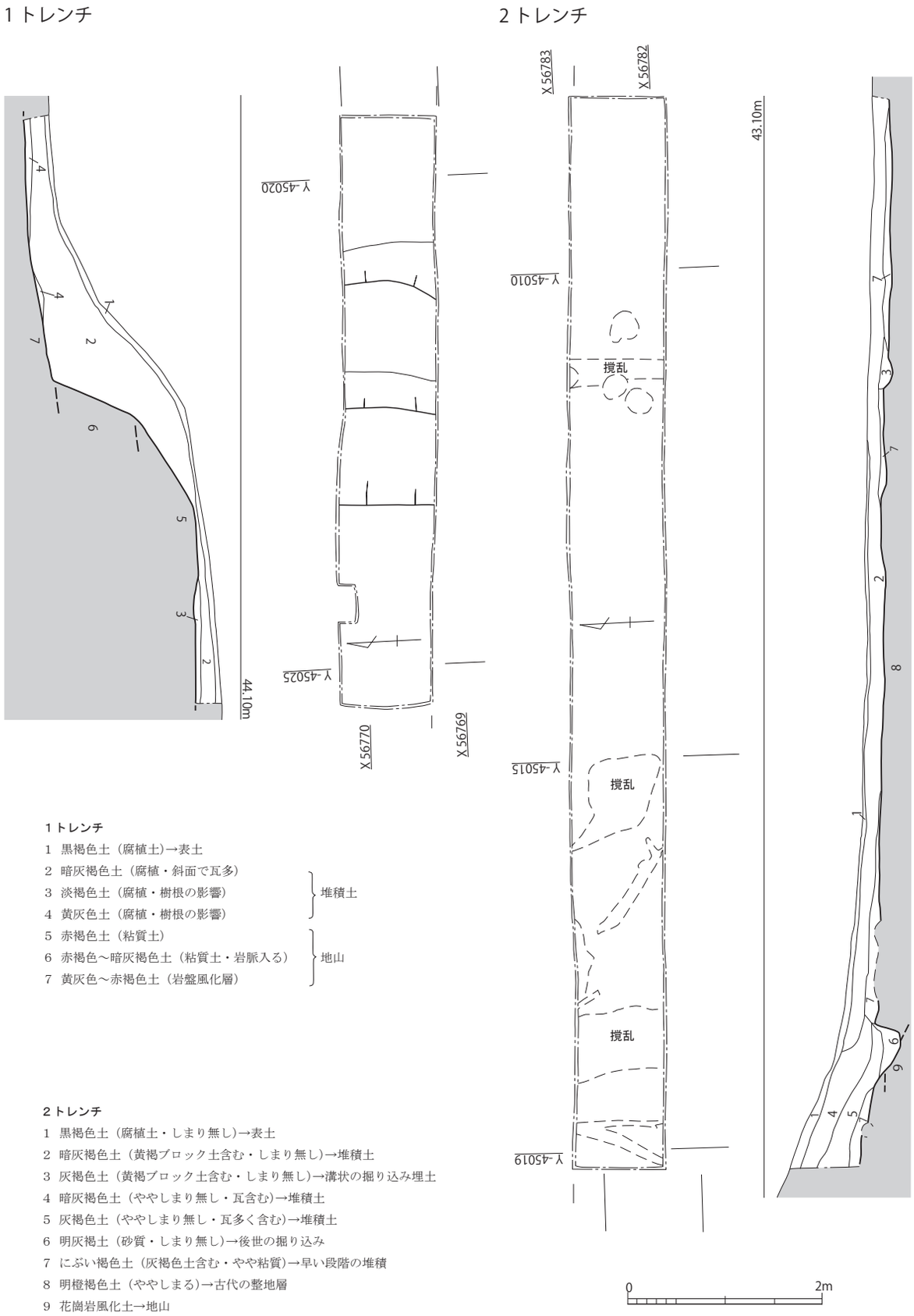
調査の結果，地山面において遺構は確認できなかった。ただし，段地形については，古代においても高低差をなす地形であったと考えられ，造成土の状況を踏まえると近現代になって西側へ少し削り込まれたものと推定できる。本来どの位置で段差をなしていたのか本トレンチの調査状況からは確認できない。

２トレンチ（Fig.34，PL. ６）

基本層序　トレンチは長さ 11m に及ぶが，堆積状況は単純で，表土（１層）及び近現代の造成土（２層）が大半を占める。西端の段地形に及ぶ箇所には灰褐色や暗灰褐色の堆積土（４・５層）が堆積し，古代の瓦などを多量に包含していた。これは１トレンチの２層の状況に対応するものである。また，西端から１mほどのところに明灰褐色土（６層）を埋土とする幅 0.6 mほどの掘り込みや，調査区東端から 2.8 mの位置に灰褐色土（３層）を埋土する南北方向の浅い掘り込みもあるが，いずれも近現代の撹乱である。また，厚さ５cm 程度のにぶい褐色土（７層）がところどころ広がっているが，近現代の堆積土の一部とみられる。これらの下は，やや締まる明橙褐色土（８層）となるが，これは地山ではなく古代の整地層で，瓦の小片を含んでいる。なお，撹乱である６層を掘削した範囲では，８層の下は風化花崗岩の地山となる。

古代の整地

以上のように，近現代の造成土や撹乱がみられる程度で，古代に遡るものは瓦を含む整地層しか確認できなかったが，整地層は広範囲に広がるようで，特にトレンチ西端から２mほどの位置にまで整地層が及んでいることを考えると，段地形は東に２m程度しか広がる余地がなかったのではないかと推定される。



1トレンチ

1　黒褐色土（腐植土）→表土
2　暗灰褐色土（腐植・斜面で瓦多）
3　淡褐色土（腐植・樹根の影響）　堆積土
4　黄灰色土（腐植・樹根の影響）
5　赤褐色土（粘質土）
6　赤褐色～暗灰褐色土（粘質土・岩脈入る）　地山
7　黄灰色～赤褐色土（岩盤風化層）

2トレンチ

1　黒褐色土（腐植土・しまり無し）→表土
2　暗灰褐色土（黄褐ブロック土含む・しまり無し）→堆積土
3　灰褐色土（黄褐ブロック土含む・しまり無し）→溝状の掘り込み埋土
4　暗灰褐色土（ややしまり無し・瓦含む）→堆積土
5　灰褐色土（ややしまり無し・瓦多く含む）→堆積土
6　明灰褐土（砂質・しまり無し）→後世の掘り込み
7　にぶい褐色土（灰褐色土含む・やや粘質）→早い段階の堆積
8　明橙褐色土（ややしまる）→古代の整地層
9　花崗岩風化土→地山

Fig.34　第 220 次調査 1 ・ 2 トレンチ実測図（1/60）

５トレンチ（Fig.35，PL. ７）

基本層序　北に向って緩やかに傾斜する地形で，平均して厚さ５cm 程度の表土（１層）を剥ぐと，瓦を多く含む暗褐色土（２層）が広がる。２層については，調査区北半部に厚く堆積しており，瓦溜りともいえるような状況を呈する。ただし，撹拌されたような土質で，近現代の造成に伴う堆積層と推定される。２層を剥ぐと遺構面となり，調査区南端では淡黄褐色土（３層），それより北側では瓦を含む赤褐色土（４層）となる。

調査当時は検出面での精査に留めたため，礎石建物 SB5000 周辺の整地層と推定していたが，第 225 次調査の結果，３層については SB5000 の雨落溝の埋土であったことが判明した。一方，４層については古代の整地層とした解釈が正しく，むしろ瓦を包含している点は整地の時期を考える上で参考となる。

SB5000の雨落溝

７トレンチ（Fig.35，PL. ７）

基本層序　他の調査区に比べると表土（１層）が厚さ 0.2 mほどと厚く堆積しており，これを除去すると，近現代の堆積土である暗灰褐色土（２層）とにぶい灰褐色土（３層）がみられる。堆積土の下は全体に締まりの良い粘質土で，古代に遡る整地層である。

調査区西端にサブトレンチを設けて掘り下げたところ，明褐色や茶褐色，灰褐色などを呈する整地層（４～７層）が続く状況が確認できた。地山の確認には至らなかったが，北側に向って下る斜面地に，水平を意識した整地を行うことで平坦地を形成していることが判明した。

古代の整地

なお，整地層上面の精査では，柱穴などの遺構は確認できなかった。

９トレンチ（Fig.35，PL. ８）

基本層序　調査区南端を SB5000 のある平坦面に及ぶように設定したトレンチで，現状で北側に向ってなだらかな段地形を成していたが，調査の結果，表土（１層）と堆積土（２層）を除去すると高さ 0.6 mほどの段状に地形が削られていたことが判明した。特に２層からは現代のガラス瓶の破片も複数出土するなど，段の削り込みが現代になってから行われたことが判明した。ただし，段を形成する５・６層については締まりのない土で，後世撹乱埋土の可能性もある。そうした場合，一度撹乱があった後に，段状に地形が削られたことになる。

北側は堆積土直下で風化花崗岩の地山（７層）となるが，ところどころに掘り込みが確認できる。４層は SX5011 で，当調査区で唯一の遺構に伴うものである。

検出遺構

SX5011（Fig.35）

調査区北端にあり，当初整地層である可能性も考えたが，深さ 0.2 mほど掘り下げたところ，壁面が急激に深くなることから，何らかの遺構と推測する。南西から北西に向けて直線的な輪郭をなすが，規模は不明である。埋土は固く締まる明褐色土（トレンチ土層図４層に対応）である。掘削に伴う遺物の出土はなかった。

10 トレンチ（Fig.36，PL.8）

基本層序　厚さ５～ 10cm ほどの表土（１層）を剥ぐと，暗灰褐色の堆積土（３層）となり，

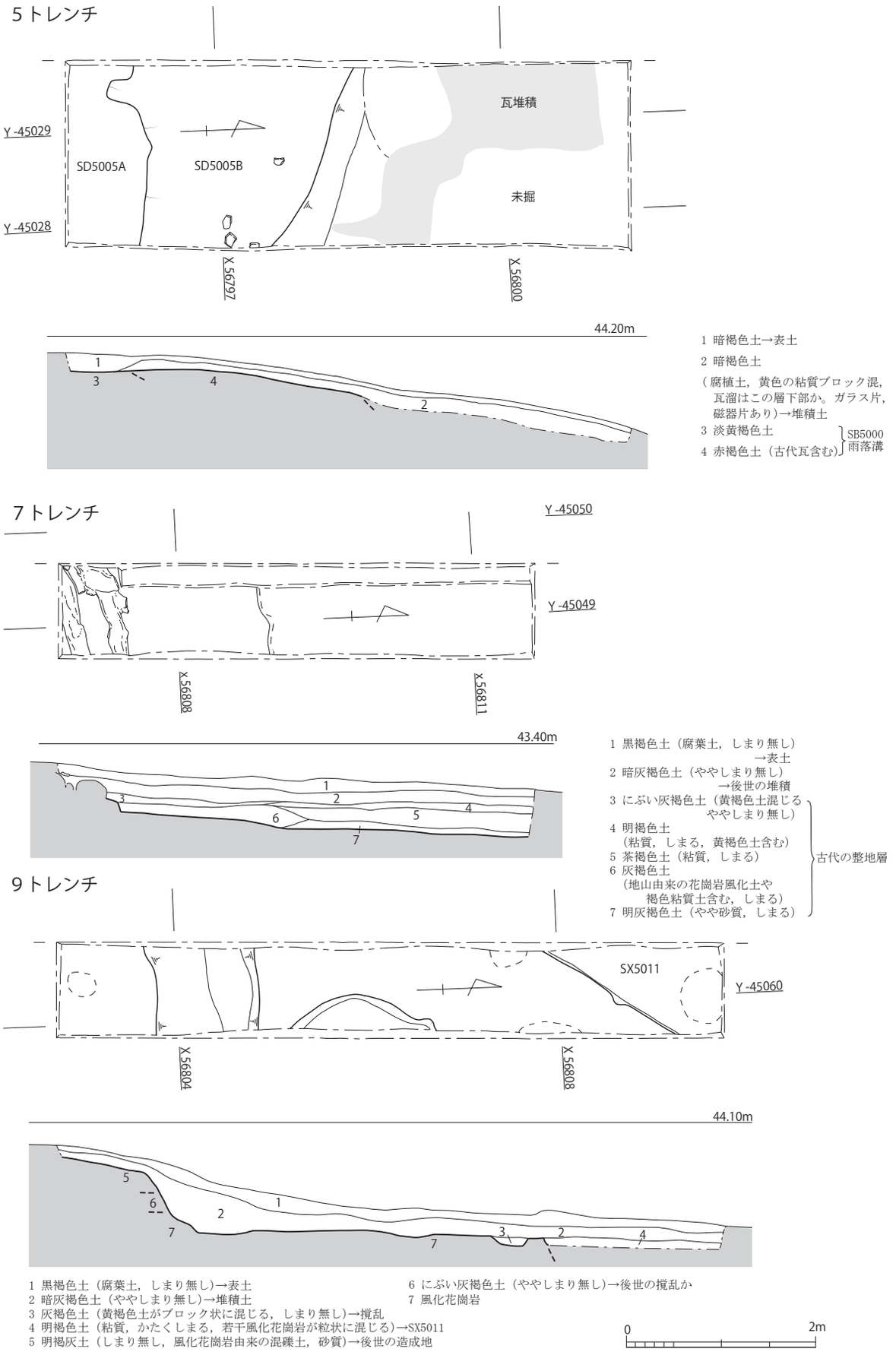


Fig.35　第 220 次調査 5・7・9 トレンチ実測図（1/60）

その下に橙褐色土（４層）が広がる。４層は瓦を含むやや締まりのない粘質土で，調査当時は古代の整地層と考えていたが，第 225 次調査の結果，SB5000 の周囲をめぐる雨落溝の埋土であることが判明した。雨落溝は当調査区の東端から 4.8 mのところまでを範囲とするが，当時の調査では遺構の輪郭を捉えることはできていなかった。

ＳＢ５０００の雨落溝

なお，調査区東端に高さ 0.2 mほどの低い段地形があるが，近現代の造成土を除去した直下にあり，11 トレンチの状況も踏まえると，後世になって SB5000 西端の礎石列の付近まで地形が削られてしまったものと考えられる。この削られた段地形に老司Ⅱ式に相当する 560H 型式軒平瓦（Fig.37 －５）が１点露出していたが，上記の状況から SB5000 雨落溝の埋土に包含される遺物であることは間違いない。

この調査区では，他に遺構は見つかっていない。

11 トレンチ（Fig.36，PL. ８・９）

基本層序　SB5000 西側の段地形に直交する調査区で，表土（１層）及び現代の堆積土（２・３層）を除去すると遺構面となる。遺構面は，一段高い東側は黄褐色粘質土と赤褐色粘質土が混じった土（６層）で，SB5000 造営に伴う基壇積土であるが，一段低い西側では風化した花崗岩に由来する礫混じりの黄褐色土（８層）となる。

礎石抜取穴

調査区東端から 1.8 m前後の位置で高さ 0.3 mほどの段となるが，ちょうど SB5000 の礎石抜取穴Ｓ－３の位置とも一致し，礎石抜取穴の埋土中に近代以降の遺物が複数含まれることから，近代以降になって礎石が据えられていた位置まで削平が及び，礎石も抜き取られてしまったことが判明した。また，この一段低い面では，SB5000より遡る建物SB5030を確認した。

なお，調査区西側 1.6 mほどは赤褐色粘質土（７層）が広がり，当初整地層かと推定していたが，第 225 次調査により SB5000 の西側雨落溝の埋土であることが判明した。

検出遺構

建　物

SB5000（Fig.36，PL. ８・９）

調査区南壁沿いで礎石抜取穴１基（Ｓ－３）を確認した。調査前は現地表に残る西端の礎石が他の礎石とは離れた位置にあるため，SB5000 と一連のものであるのか不明確であったが，礎石抜取穴が見つかったことで，SB5000 は東西９間分まで存在する可能性が高くなった。

抜取穴には拳大から人頭大の根石がみられ，その隙間や埋土中に花崗岩の破片が多数含まれていることから花崗岩の礎石が据えられていたことが窺える。ただし，西側は全体が地下げされていることもあってか根石などは一切残っておらず，むしろ東側よりも深く掘り下げられていた。この状況は，近代以降の地下げが建物の周囲から徐々に礎石付近まで及び，地下げが礎石に到達したところで礎石を西側に向って横方向に抜き取ったことを示している。

SB5030（Fig.36，PL. ８）

掘立柱建物

調査区西側の一段低いところで柱穴１基（Ｓ－４）を確認した。SB5000 より先行する掘立柱建物である。北側は調査区外に及ぶが，東西 1.3 m，南北 1.9 m以上の南北に長い不整形な楕円形を呈する。掘削は一段下げるにとどめ完掘はしていないが，赤褐色を呈する粘質土が埋土である。北側壁際にある撹乱の観察所見からすると，少なくとも遺構検出面からの深さ

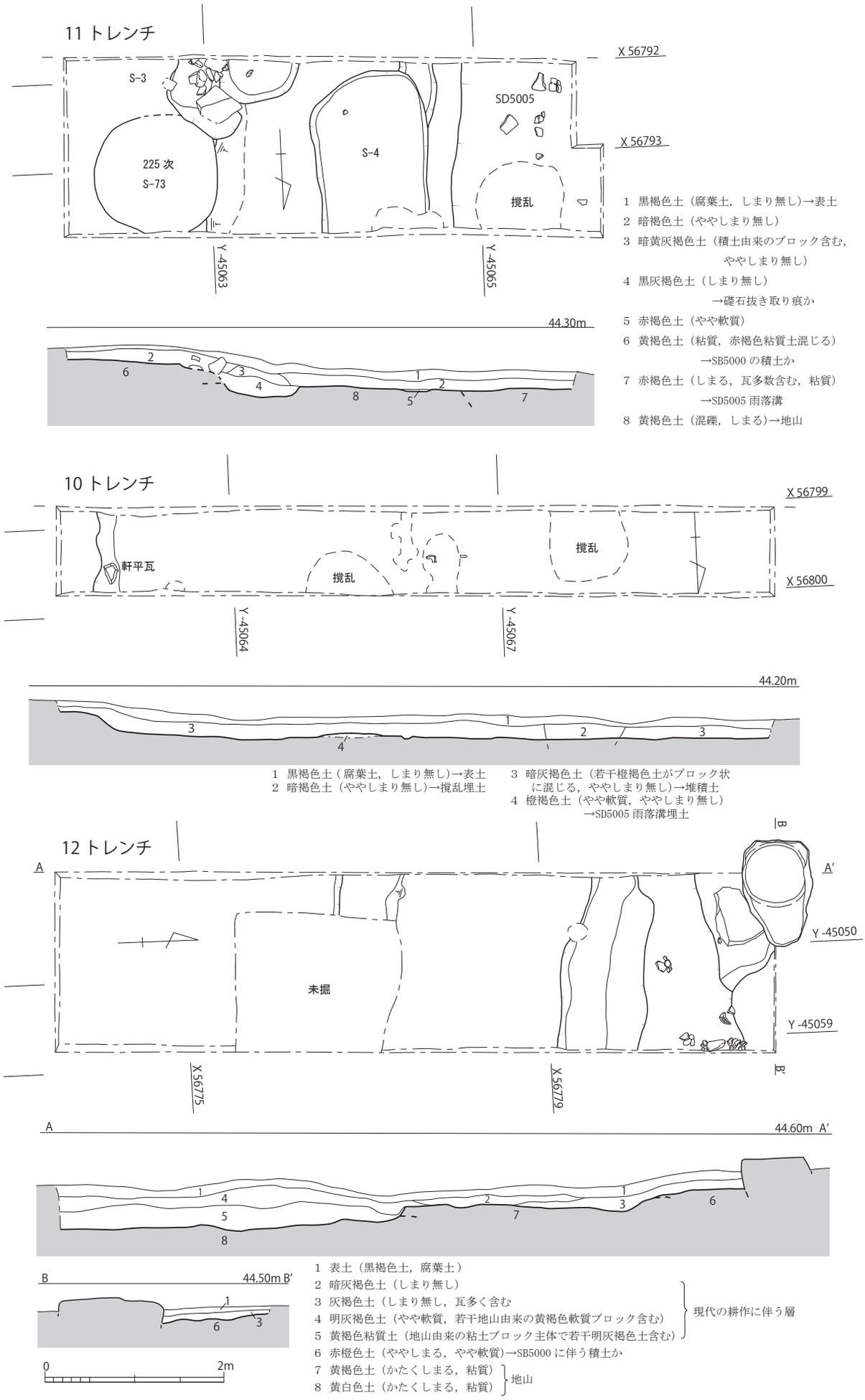


Fig.36　第 220 次調査 10 ～ 12 トレンチ実測図（1/60）

は 0.2 m以上とみられる。平面の精査でも柱痕跡は確認できなかったが，第 225 次調査では SB5030 は全ての柱が抜き取られていることが判明している。

埋土中からは土師器細片が出土した。

ところで，ここで報告する柱穴のほか，第 225 次調査の結果，この東側にも柱穴（S － 73）の存在が判明したが，第 220 次調査時点では確認に至らなかった。

雨落溝

SD5005（Fig.36，PL. 8）

ＳＢ５０００の雨落溝

既述のように，調査区西側に広がる赤褐色粘質土（７層）は，その後の調査により SB5000 に伴う雨落溝の埋土であることが判明した。調査区のすぐ西側は崩落した法面となっているため，調査区の拡張ができず，溝の幅の確定には至らない。埋土中から土器は出土しなかったが，瓦を多数含んでいる。

紙幅に限りがあるため，瓦の報告はできないが，確認した限りでは凸面に縄目叩きを行うものが目立ち，格子叩きのものはなかった。

12 トレンチ（Fig.36，PL. 9）

基本層序　礎石建物 SB5000 の南側礎石列から南に直交する方向で設けた調査区で，現状は南へ緩やかに下る地形である。表土を剥ぐと礎石に近い北側では灰褐色～暗灰褐色を呈する近現代の堆積土（２・３層）で，南半部は明灰褐色土の耕作土（４層）となる。南半はさらに深くまで耕作が及んでおり，地山由来の黄褐色土を基調とする耕作土（５層）がみられる。これらを除去すると，地山（７・８層）となる。

本来ならば，SB5000 南側の基壇や雨落溝などが存在したと考えられるが，地山まで地下げされており，それらの痕跡は確認できなかった。

検出遺構

当トレンチでは SB5000 の礎石以外の遺構は未確認であるが，礎石付近の調査を実施したことで得られた所見もあるので，ここで報告しておく。

建　物

SB5000（Fig.36，PL. 9）

本調査区の北西角には SB5000 南側の礎石がある。東西に長い礎石で，直径 72cm ほどの柱座が刳り出されている。礎石のすぐ脇には，長さ 65cm，幅 50cm ほどの石材が接している。礎石の下に入るというよりは，礎石に接するような位置にあるため，根石とは少し意味が異なる可能性もある。上面検出に留めているため，他に根石などは確認できなかった。

なお，礎石から南に 1.3 mほどの間には地山上に赤褐色土（６層）が積まれており，礎石据付穴はこの赤褐色土に切り込む。調査時点では，この赤褐色土を SB5000 造営時の積土ではないかと考えていたが，SB5030 など SB5000 よりも遡る下層建物（掘立柱建物）の段階の整地土の可能性もある。この評価については，今後の正報告までに整理することとしたい。

（4）出土遺物

Tab.12　第 220 次調査出土軒瓦点数表

型式名称			合計	D 区 220 次	百分比（%）
軒丸瓦	077		1	1	11.11
	145	b	2	2	22.23
	275	B	1	1	11.11
	290	290	1	1	11.11
		A	1	1	11.11
		B	1	1	11.11
	不　明		2	2	22.22
	合　計		9	9	100.00
軒平瓦	560	H	1	1	25.00
	657	b	1	1	25.00
	688	A	1	1	25.00
	704	A	1	1	25.00
	合　計		4	4	100.00

1）瓦塼類

軒丸瓦（Fig.37，PL.22）

第 220 次調査では，9 点の軒丸瓦が出土した（Tab.12）。このうち型式名がわかるものは 7 点である。以下，図化に耐え得る資料のみ報告する。

1 は 145b 型式である。内区に不揃いの単弁，外区内縁に珠文帯がめぐり，外区外縁は素文である。欠損部の断面観察から，丸瓦は瓦当上端から下がった位置で接合され，支持土も多い。端部は未処理とみられる。2 も小片ながら 145b 型式とみられる。145 型式は，大宰府政庁跡の調査で 653 型式や 656 型式の軒平瓦と組合い，9 世紀代を代表する軒丸瓦である。

老司Ⅱ式　3 は 275B 型式で，いわゆる「老司Ⅱ式」とよばれるものである。外区内縁に珠文，外区外縁に鋸歯文がめぐる。背面には丸瓦の接合面が残っている。

4 は 290A 型式で，外区内縁に珠文，外区外縁に鋸歯文がめぐる。丸瓦は瓦当面近くまで差し込まれているが，広端部は未処理のようである。丸瓦接合時の支持土は少量である。

軒平瓦（Fig.37，PL.23）

老司Ⅱ式の同文異笵　5 は 560H 型式で，従来「老司Ⅱ式」と呼ばれていたもので，その標識型式である 560B 型式とは同文異笵である。瓦当左端の唐草文の単位がみえる程度である。顎は浅顎で，段差は低

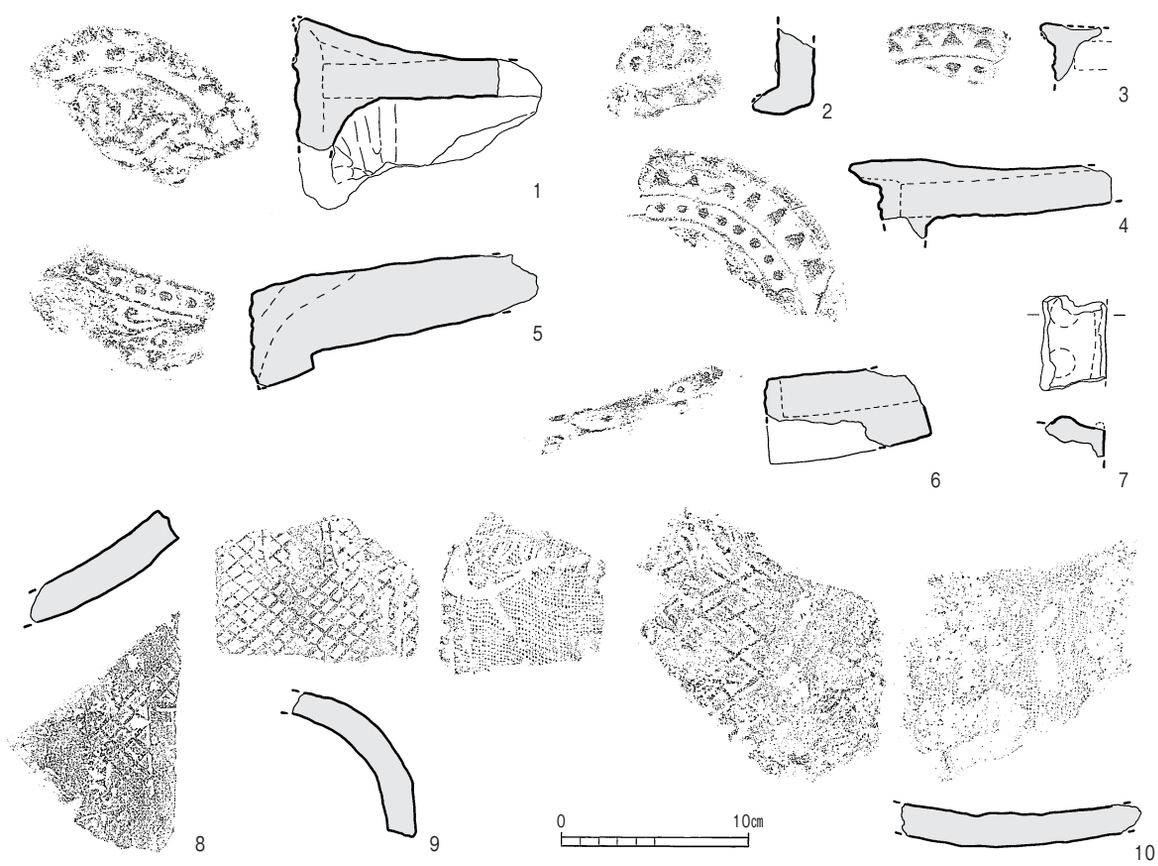


Fig.37　第 220 次調査出土軒瓦・鬼瓦・文字瓦実測図（1/4）

い。凹面は全体を縦方向のケズリ，瓦当側を横方向のケズリで整える。凸面の調整は磨滅により不明である。

6 は 657b 型式で，瓦当右端に近い破片である。瓦当面は上半部しか残っていないが，唐草文の脇に珠文が並ぶ。顎は深く，平瓦の凸面側に帯状の粘土を付加している。

道具瓦類（Fig.37，PL.22）

大宰府式鬼瓦

7 は鬼瓦の破片で，珠文の直径が 1.6cm を測ることから，大宰府Ⅰ式とみられる。右側縁として図化しているが，小片のため左右の判別はつかない。

文字瓦（Fig.37，PL.23）

平井瓦銘が主体

第 220 次調査では 10 点の文字瓦が出土した。内訳は「平井瓦屋」銘の 901A 型式が 2 点，陰刻の「平井瓦」銘の 901B 型式が 3 点，陽刻の「平井瓦」銘の 901C 型式が 3 点で，「大」銘の 915A 型式が 2 点である。この他，格子の中に十字文が入るものも出土した。

8 は，比較的整った斜格子に陰刻の「平井瓦屋」銘が伴う 901B 型式である。平瓦で，凹面に模骨の痕跡が残るため桶巻作りとみられ，右側面には分割に伴う截面と破面が確認できる。

9 は，やや細かい斜格子に陽刻の「平井瓦」銘が伴う 901C 型式である。丸瓦で，側面には分割に伴う截面と破面がみられる。

10 は，やや大きい斜格子の中に「大」銘を伴う 915A 型式である。平瓦であるが，側面は残っていない。凹面・凸面とも磨滅が著しいが，凹面には布目が残る。

丸瓦・平瓦（Fig.38，PL.23）

ここでは代表的な資料のみ報告することとしたい。

11 ～ 14 は丸瓦である。11 は玉縁式丸瓦で，凸面は縄目をナデ消している。12 は凸面に縄目がみられる。凹面に布目とともに糸切り痕が認められることから，粘土板作りである。13 は凸面をナデ仕上げするもので，側面はヘラ切りで，角を面取りする。凹面に粘土紐の接合痕跡が残り，粘土紐作りとわかる。14 は玉縁式丸瓦で，凸面には斜格子叩きを行い，粗くナデ消している。

15 ～ 19 は平瓦である。15 は左側面側の破片で，凸面には長手の縄目叩きを行う。側面はヘラ切りで凹面側のみ面取りする。凹面には模骨痕と糸切り痕がみられることから，粘土板桶巻作りである。16 も凸面に縄目叩きを行うもので，側面は凹面・凸面とも面取りする。凹面には模骨痕とともに粘土紐の接合痕も一部に残ることから，粘土紐桶巻作りとみられる。

17 は凸面に横長の細かい斜格子を叩打するものである。左側面には分割時の截面と破面が残る。凹面は布目痕のみで，模骨痕がみられず，円筒桶作りか。18 は凸面に正方形に近い斜格子がみられる。左側面は分割時の截面と破面が残る。凹面は粘土板の接合痕が縦方向に残り，模骨痕も少し確認できることから，粘土板桶巻作りである。19 はやや大きな斜格子のもので，側面には分割時の截面と破面が残り，凹面側は面取りする。凹面はやや粗い布目が残るが，模骨痕はみられず円筒桶作りか。

被熱瓦（Fig.39，PL.23）

被熱した瓦

蔵司地区の調査では後述するように被熱した鉄製品が多数出土するが，被熱しているのは鉄製品だけではなく，瓦にも被熱した資料をみることができる。ただし，これまでの調査では軒瓦の被熱した資料はみられず，被熱が確認できるのは丸・平瓦のみである。

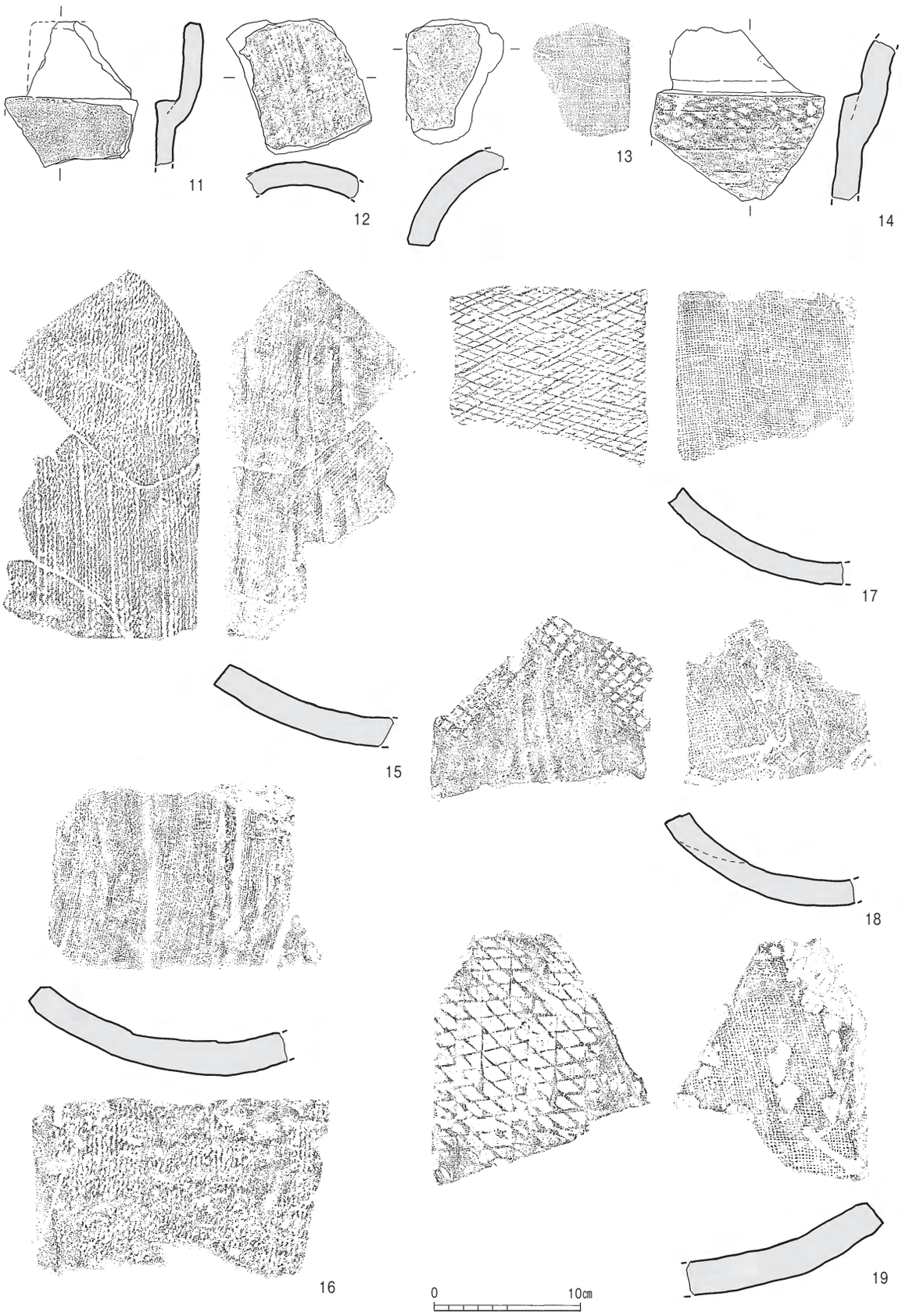


Fig.38　第 220 次調査出土丸瓦・平瓦実測図（1/4）

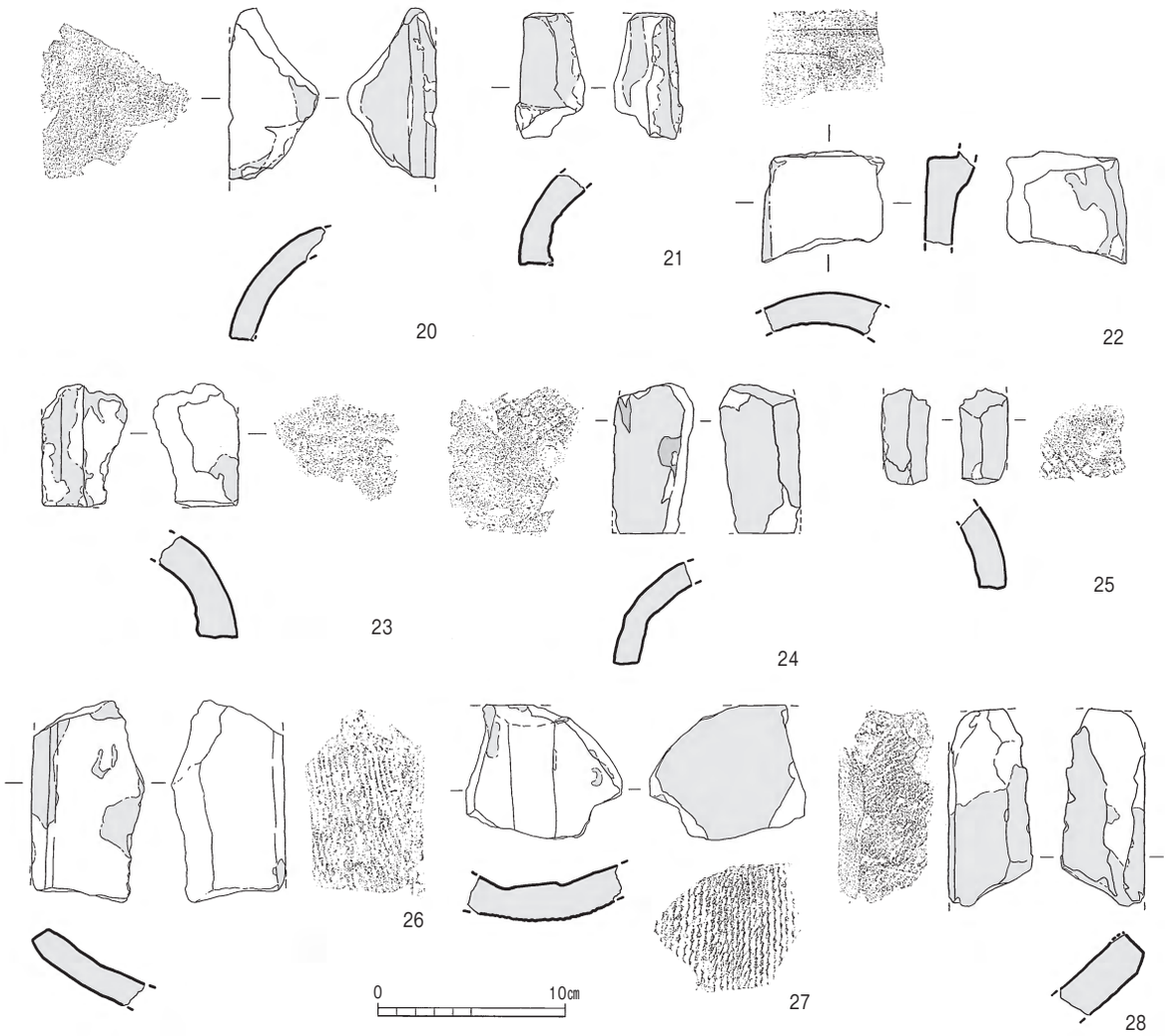


Fig.39　第 220 次調査出土被熱瓦実測図（1/4）

20 ～ 25 は丸瓦である。20 は凸面に縄目叩きを行うもので，左側面は分割時の截面と破面が残る。凹面全体と凸面の一部のほか，破面の一部が被熱している。21 は玉縁の破片で，左側面に分割時の截面と破面が残る。被熱は凸面・凹面の両方にみられ，破面にも及ぶ。22 は玉縁式丸瓦の丸瓦部片で，凸面は縄目叩きののちナデ消している。左側面の側に被熱がみられる。23 は右側面の破片で広端が残る。凸面はナデ消しで仕上げており，右側面は分割時の截面と破面が残る。被熱は凸面・凹面にみられるが，破面には及んでいない。24 は凸面に格子叩きを行うもので，広端側の左側面の破片である。側面には分割時の截面と破面が残る。被熱は凸面・凹面の双方にみられ，破面の一部にも及ぶ。25 も凸面に格子叩きを行うもので，右側縁の小片である。側面には分割時の截面と破面がみられる。被熱は凸面・凹面だけではなく破面にも及ぶ。

26 ～ 28 は平瓦である。26 は左側縁の破片で，凸面は縄目叩きである。側面はヘラ切り調整で，凸面側は面取りする。被熱は凹面から左側縁と，凸面の一部に及ぶ。27 は狭端側の破片で，凸面は縄目叩きである。被熱は凸面側が顕著で，凹面や破面の一部にも認められる。28 は狭端側右側縁の破片で，凸面は縄目叩きである。側面はヘラ切り調整で，凸面側のみ面取りする。被熱は凹面・凸面のほか破面にも及ぶ。

２）土器・陶磁器類（Fig.40，PL.23）

１トレンチ

層位出土土器（Fig.40 － 1 ・ 2）

土師器蓋（１）　小片のため全容は知り得ないが，胎土は精良である。口径は 6.8cm。

無釉陶器壺（２）　朝鮮系無釉陶器壺の小片である。内外とも回転ナデ調整で，内面はその痕跡が明瞭であるが，外面は灰被りで調整痕は不明瞭である。内面は暗青灰色，外面は灰色，断面は暗赤紫色を呈する。

２トレンチ

層位出土土器・陶磁器（Fig.40 － 3 ～ 8）

須恵器坏蓋（３）　古墳時代の坏蓋の天井部片で，外面にヘラ記号が確認できる。内面はナデ，外面は回転ヘラケズリである。

須恵器坏身（４）　立ち上がりのある坏身小片である。暗灰色を呈する。

須恵器高坏（５）　高坏脚の基部付近の破片で，長方形透かしの一部が残る。透かしは三方に入るとみられる。外面は回転ナデ調整で，内面には絞り痕跡が残る。

須恵器長頸壺（６）　長頸壺の肩部片で，肩は強く屈曲する。内外とも回転ナデ調整で，外面下半は回転ヘラケズリで仕上げる。

無釉陶器壺（７）　朝鮮系無釉陶器壺の小片で，内外とも回転ナデ調整である。器壁は薄く，内外とも暗灰色であるが，断面は暗赤紫色を呈する。

白磁碗（８）　高台部しか遺存していないが，玉縁口縁を有する白磁Ⅳ類とみられる。釉は灰白色で貫入はみられず，高台から高台内にかけては露胎である。高台は削り高台である。見込にはヘラによる文様が認められる。

５トレンチ

層位出土土器・陶磁器（Fig.40 － 9 ～ 11）

須恵器壺（９）　高台しか遺存していないが，太く外に踏ん張る高台の特徴から高台付壺とみられる。高台径は 11.6cm である。

土師器高台付坏（10）　口縁部は欠損するがほぼ直線的に伸びるとみられ，平底の底部端に断面三角形状の低い高台を貼付する。

白磁皿（11）　釉調は内外とも灰白色で，貫入が認められる。口縁端部は露胎である。

７トレンチ

層位出土土器（Fig.40 － 12 ～ 15）

須恵器蓋（12･13）　いずれも口縁部のみの破片である。12 は端部を断面三角形状につまむ。13 は端部内面が僅かに肥厚する程度である。

須恵器坏身（14）　口縁端部を失うが，立ち上がりは短いものと推定される。

無釉陶器鉢（15）　口縁部内面に断面三角形状の突帯を２条めぐらせる。色調は暗紫灰色であるが，断面は暗赤紫色を呈する。朝鮮系無釉陶器か。

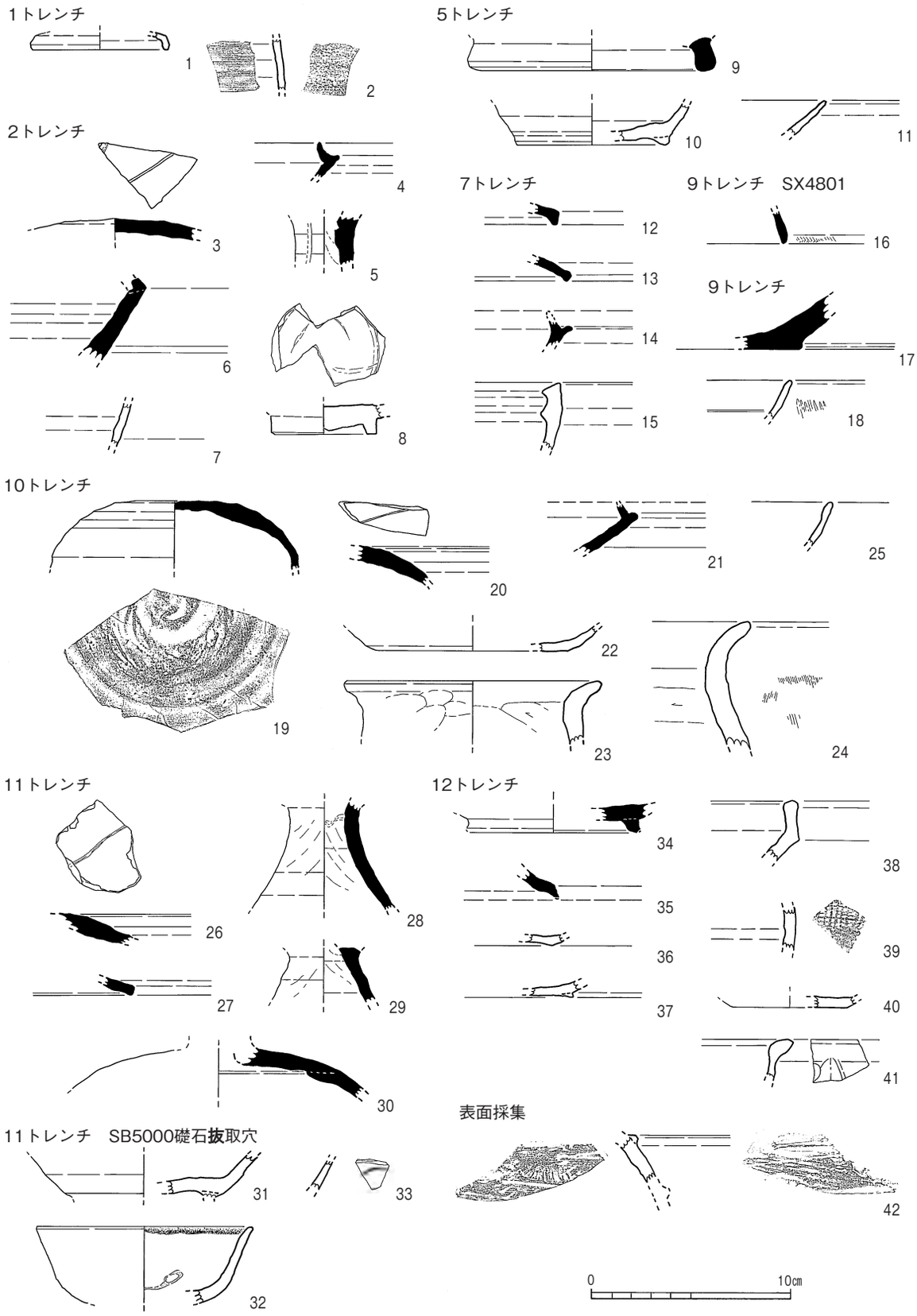


Fig.40　第 220 次調査出土土器・陶磁器実測図（1/3）

9トレンチ

SX4801 出土土器（Fig.40 － 16）

須恵器坏蓋（16）　古墳時代の坏蓋の小片で，口縁端部外面に工具痕跡を残す。

層位出土土器・陶磁器（Fig.40 － 17・18）

須恵器鉢（17）　東播系鉢の底部片で，底部は糸切りである。

青磁碗（18）　同安窯系の青磁碗で，内面に圏線，外面に櫛歯文を施す。釉は緑灰色を呈し，内面のみ貫入が認められる。

10 トレンチ

層位出土土器・陶磁器（Fig.40 － 19 ～ 25）

須恵器坏蓋（19・20）　ともに古墳時代の坏蓋片である。19 は天井部から口縁部に向って緩やかに移行する形態で，天井部外面を回転ヘラケズリ，内面を同心円当て具ののちナデで仕上げる。20 も外面は回転ヘラケズリで，ヘラ記号が確認できる。

須恵器坏身（21）　立ち上がりの短い坏身片で，底部外面は回転ヘラケズリで仕上げる。

土師器坏（22）　底部片で，内外とも回転ナデ，底面は磨滅しているがヘラ切り未調整とみられる。

土師器甕（23・24）　23 はやや小型の甕で，口縁部は短く外反し，頸部は肥厚する。外面はナデ調整，内面は手持ちヘラケズリで整える。24 は緩やかに外反する口縁部を持ち，外面はハケ調整，内面は横方向のヘラケズリを行う。

青磁碗（25）　同安窯系青磁碗で，緑灰色の釉が掛かる。

11 トレンチ

SB5000 礎石抜取穴出土土器・陶磁器（Fig.40 － 31 ～ 33）

土師器高台付坏（31）　坏部は平底で，底端部に高台を貼付する。

施釉陶器碗（32）　波佐見焼の小碗で，内外とも透明釉を掛け，その後口縁端部内面から外面にかけて褐釉が掛かる。見込みに砂目の跡が残る。

染付碗（33）　染付の小片であるが，全体像は不明である。

層位出土土器（Fig.40 － 26 ～ 30）

須恵器坏蓋（26・27）　26 は古墳時代の坏蓋の小片で，天井部外面は回転ヘラケズリを行い，ヘラ記号を施す。27 は口縁端部の内面をごく僅かにつまむ形態である。

須恵器高坏（28・29）　ともに脚部片である。28 は喇叭状に広がる形態で，内外とも絞りの痕跡が残る。29 はやや小型で，内外とも強い回転ナデであるが，絞り痕も残る。

須恵器平瓶（30）　体部上半の破片で，内外ともナデ調整である。

12 トレンチ

層位出土土器・陶磁器（Fig.40 － 34 ～ 41）

須恵器高台付坏（34）　小さく外側に踏ん張る高台を貼付し，底面は回転ヘラケズリか。

須恵器高坏（35）　脚端部の小片で，外側に向って細くつまむ。

土師器皿（36）　底部小片で，底面は回転糸切痕が残る。

無釉陶器碗（37）　断面三角形の小さな高台を有し，器壁は薄く，胎土は精良である。無釉であるが，灰釉陶器の素地と推定される。

無釉陶器壺（38・39）　38 は上方に屈曲して立ち上がる口縁部を有し，壺の口縁部とみられる。内面は黒茶色，外面は灰～黒茶色を呈するが，断面は暗赤紫色である。39 は壺の体部片で，外面は細かい格子叩きを行い，内面は強い回転ナデで仕上げる。内外とも暗青灰色で，断面は暗赤紫色を呈する。いずれも朝鮮系無釉陶器か。

白磁皿（40）　白磁皿Ⅸ類の底部片で，内外とも全面にやや青味のある白色釉が掛かる。

青磁碗（41）　龍泉窯系青磁Ⅲ類の口縁部片で，外面に蓮弁が確認できる。

表面採集資料（Fig.40 － 42）

無釉陶器壺（42）　朝鮮系無釉陶器で，外面に断面台形の突帯を数条めぐらせる。外面は平行叩き，内面は放射状の当て具痕跡が残る。色調は暗青灰色で，断面は暗赤紫色を呈する。

3）金属製品（Fig.41，PL.24）

鉄　　鏃

1 ～ 11 は鉄鏃である。1・2 は鑿箭式長頸鏃の刃部である。3・4 は片刃箭式長頸鏃である。4 は刃部先端が欠損する。5・6 は長頸鏃箆被部で，5 は棘箆被である。6 は 2 本が溶着している。7 は長頸鏃の茎部である。8・9 は鑿箭式長頸鏃刃部である。8 は 2 本が溶着し，9 は刃部が片刃である。10 は長頸鏃束。向きを違えて溶着している。また，片刃の刃部が一個所確認できる。11 は方頭斧箭式で刃部が折れ曲がり，被熱していないため銹に覆われている。

小　　札

12 ～ 31 は小札である。12 は小札の上部。縅孔は 1 孔，幅 9mm で銹が多い。13 は小札上部で，第 1・2 縅孔が確認できる。14 は小札上部か。隅切りを施す。他の被熱遺物と異なり，黒化し，銹がある。15 は天地不明。綴孔の縦方向の間隔が広い。16 は小札下部か。左列綴孔は 3 孔確認できる。17 は綴孔位置から小札下部と推定される。18 は 2 枚の小札が溶着しているが，綴孔の位置が一致しない。19 は小札上部で，隅切りを施す。20 は縅孔 2 孔，綴孔 3 孔 2 列が確認できる。21 は綴孔 2 列 2 孔。最下端の綴孔 2 列は銹により埋まる。全体的に銹化が著しい。22 は小札下部か。下端は若干弧状を呈する。23 は天地不明。縅孔は 1 孔確認できる。24 は小札上部である。第 1・2 縅孔，左綴孔は銹で埋まる。全体的に銹化が著しい。25 は小札上部。第 1・2 縅孔あり。上端は弧状を呈する。26 は小札下部。右側綴孔の下 2 孔は銹で埋まる。横方向に内湾し，下方向に外湾する。全体的に銹化が進む。27 は小札下部である。幅は 18.0mm 以上。下搦孔が確認できる。28 は小札 3 枚が溶着した状態である。綴孔の位置が一致せず，綴じ合わせた状態ではない。29 は小札 7 枚が溶着した状態である。小札の幅は 20.0mm 以上, 厚 1.5mm ～ 2.0mm。第 3 縅孔が 1 箇所確認できる。30 は幅が 9.0mm ～ 17.0mm の鉄片である。端部は丸く，縅孔は認められない。小札甲以外の武具を構成する可能性もある。31 は幅が 10.0mm 以上。小札下部か。端部は隅切りを施す。

鉄　鏃　束
瓦の溶着

32 は鉄鏃束である。溶融が進み，鉄鏃の原形がかなり失われている。33 は展開右図が下面にあたる。下面に瓦らしきものが溶着するも，当初の風化具合を留めており，直接熱に曝されていない可能性がある。下面は砂粒多く，上面は一部熱変し，襞状に変化する。34 は高熱を

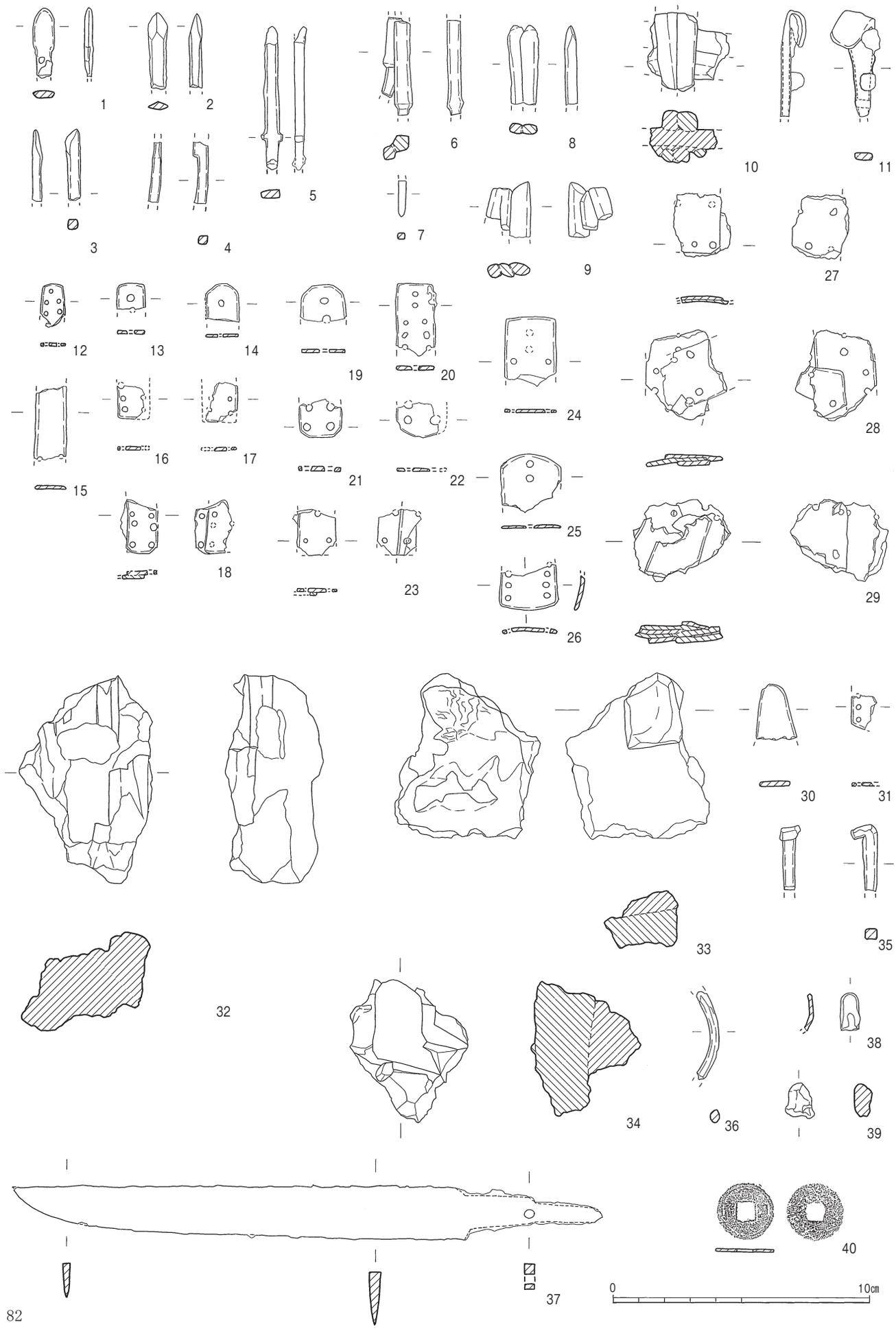


Fig.41　第 220 次調査出土被熱鉄製品等実測図（1/2）

受けて瓦が溶着している。熱の影響で発泡気味であり，重量は軽い。瓦部分は暗赤褐色に変色している。

35 は釘頭か。長さ 25.5mm 以上。折曲部長 9.5mm，折曲部長 7.0mm，折曲部幅 4.0mm である。36 は不明鉄製品である。6AYT-A-I 蔵司壁体露出付近で採集された。

37 は短刀である。茎部幅 11.0mm，刃部厚 3.0mm ～ 5.0mm，茎部厚 6.0 ～ 12.0mm。小札や鉄鏃のような被熱の状況は見られず，全体銹化している。被熱の状況がないことから近世以降の遺物であろうか。

不明銅製品

38・39 は不明銅製品である。38 は下端破断面は新しく，地金が見える。全体的に緑青をふく。端面はスレがあるが，形状を留めている。39 は全体的に緑青をふく。溶融して元来の形状が崩れ，銅塊状を呈する。40 は寛永通宝である。

寛 永 通 宝

従来より知られていた鉄鏃や小札の被熱遺物が多い中，高温の影響で溶融するものがある一方，銹化が進むものも見られるため，被熱の度合いが一様ではないことが推測される。また，これらの被熱鉄製品と同時期のものであるとの確証はないが，鉄以外の銅製品も出土しており，被熱遺物の器種構成を再検討する余地も出てきた。また，古代以降の遺物として近世の遺物が出土した。

4）石製品・土製品・その他の遺物（Fig.42，PL.24）

取瓶（1）　小皿状の小型品で，内面に滓が付着する。緑青は見られない。

羽口（2）　先端部の破片で，外面に滓が付着し，一部溶損がみられる。

滑石製紡錘車（3・4）　3は側面の小片で，高さ 2.0cm を測る。底面に径 6 ～ 7 mm ほどの孔が 2 つ穿たれているが，転用時のものか。4 は上部の破片で，中央に直径 8 mm に復元できる円孔が残る。

瓦玉（5）　平瓦を整形したもので，長径 2.6cm，短径 2.2cm を測る。

土壁状遺物（6・7）　いずれもスサ痕がみられる土の塊で，破面に粘土を継いだ痕が残る。6 は表面のナデ調整がみられる。7 もナデ調整とみられるが，表面が若干赤変しており，僅かながら被熱を受けている可能性もあるが，断定はできない。

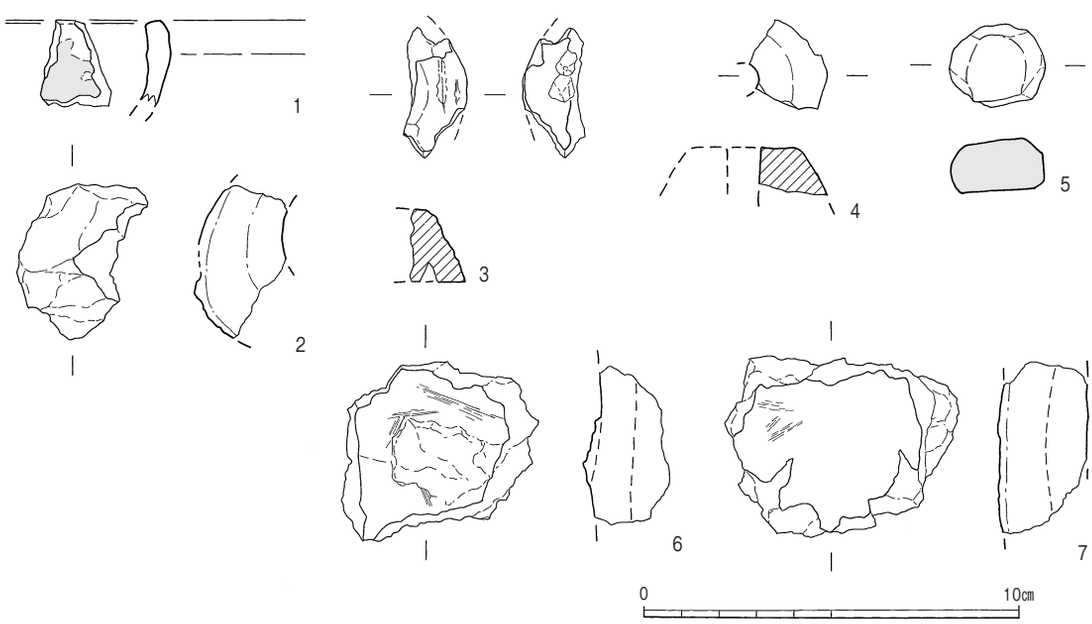


Fig.42　第 220 次調査その他の出土遺物実測図（1/2）

（5）小　結

第 220 次調査は，大型礎石建物 SB5000 が所在するＤ区を中心に，東に隣接するＣ区も含めて現況の段地形や微地形などの成因，あるいは遺構の広がりなどを把握するために実施したものである。

調査の結果，SB5000 のあるＤ区では，SB5000 の周囲の平坦地にも整地層の広がりを確認できた。また，SB5000 の雨落溝の痕跡も北側の５トレンチや西側の 10・11 トレンチなどで部分的に確認することができ，建物の規模を考える上で重要な所見が得られた。なお，調査時には認識できていなかったが，11 トレンチでは SB5000 に先立つ下層建物 SB5030 の柱穴を検出した。建物規模や構造については，重点調査の報告書の中で述べることとしたい。

下層の建物

SB5000 東側のＣ区では，調査範囲も限られるため建物などの遺構は確認できなかったが，２トレンチの広い範囲にわたって瓦片を含む古代の整地層を確認し，建物群などを設けるために土地を造成していることが確認できた。

一段高いＤ・Ｅ区と低いＣ区との間にある高低差２m近くの段地形については，古代においても段差を成していたと考えられ，SB5000 の広がりを考えると，Ｄ・Ｅ区の平坦地がもう少し東側にまで及んでいたことが窺える。ただし，Ｃ区の２トレンチで確認した整地層の範囲を踏まえると，段差は東側に広がっても３～４m程度ではないかと推定される。

5　第 216 次調査出土土壌の理化学的分析

はじめに

大宰府史跡第 216 次調査地点は，大型礎石建物 SB5000 の北東に位置し，蔵司Ｂ・Ｇ区にあたる（Fig, 2・3・43）。確認調査は平成 24 年７月 10 日～平成 25 年３月 29 日にかけて行い，その調査成果は既に『大宰府史跡発掘調査報告書Ⅷ（平成 24・25 年度）』2014 年で報告したが，紙数の関係で，平成 24 年度にＢ区で行った土壌分析の成果は掲載することができなかった。そこで，本書において第 216 次で行った，以下の土壌分析の調査成果を報告したい。

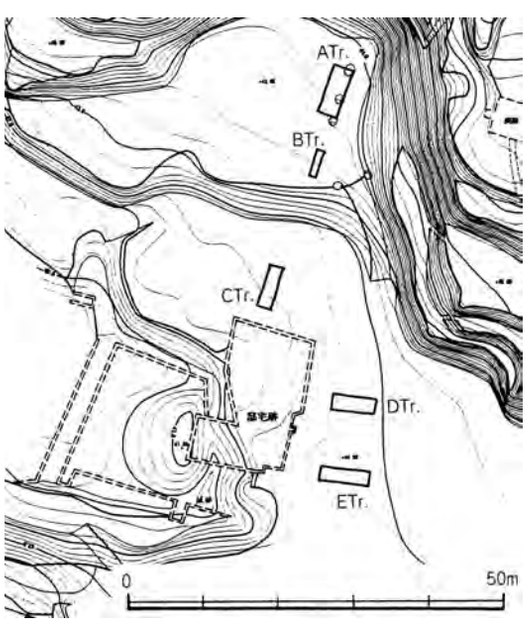


Fig.43　第 216 次調査トレンチ配置図（1/1,000）

第 216 次調査の概要と土壌サンプル採取

第 216 次調査地は，蔵司丘陵の北半部に位置する。調査対象地のＢ・Ｇ区は丘陵部であるが幾つもの段地形になっており，広い範囲で遺物が散布していた。また，平成 23 年度に奈良文化財研究所に委託したＧ区の頂上部と北寄りの平坦面で実施した地下探査（地中レーダー探査・磁気探査）の結果では，遺構等を思わせる反応がみられた。そこで，踏査や地下探査等の

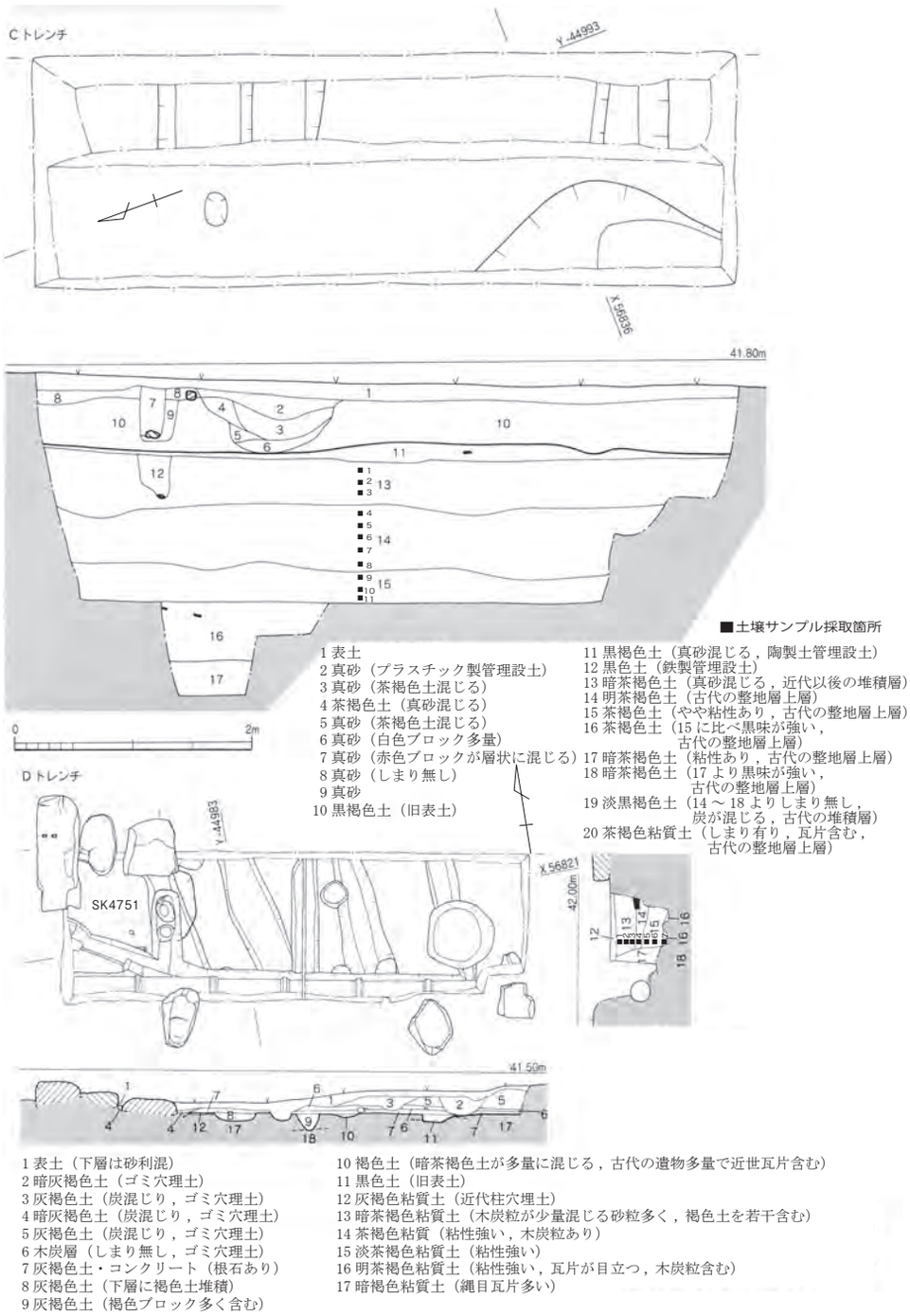


Fig.44　第 216 次調査 C・D トレンチ実測図（1/60）

所見をもとに丘陵の各所に調査区を設定し，遺跡の有無や広がり，地形の成因などを探るため確認調査を実施した。

調査の結果，G 区各段ともに遺物が少量出土するものの明確な遺構は存在せず，後世に大規模な造成が行われ，旧地形の削平や盛土の状況が明らかとなった。一方，丘陵南側の今回報告する B 区では古代に遡る整地層が広い範囲で確認できた。なお，B 区周辺には建物の礎石とみられる石材が散在していたが，いずれも後世に動かされていた。

土壌分析を行ったのは，第 216 次調査 B 区の C・D トレンチの 2 箇所である。C トレンチは，すうだ池東端の谷地形部にあたる。調査では谷部に堆積する厚い自然堆積を確認し，土層

の堆積状況を確認するため東壁側を 2.8 mまで掘り下げて調査した。土壌サンプルは，古環境研究所によって，深く掘り下げた旧表土下の古代の整地土である 13 ～ 16 層（Fig.44）を対象にサンプリングを行った。

一方，D トレンチは，C トレンチ南東に位置し，蔵司丘陵でも最も広い平坦面の西端部にあたる。トレンチ周辺には礎石状石材が多数露出していた。調査の結果，ほぼ表土直下で，古代の整地層を確認した。整地層は面的に削平を受けていたが，古代の遺構と考えられる SK4751 が近代住居に伴う攪乱を受けており，その壁面で SK4751 の堆積状況を確認できたため，そこで土壌サンプリングを行った。土壌サンプルは，SK4751 の埋土である 13 ～ 16 層（Fig.44）を対象にサンプリングを行った。なお，SK4751 は遺物を含まない古代の下層整地を掘り込んでおり，古代の上層整地である 12 層に被覆されていた。また SK4751 埋土には縄目瓦を含み，時期は古代かつ人為的に埋め戻された可能性が高いと指摘されている。

以上，土壌サンプルの分析を行った成果を以下で報告する。

大宰府史跡第 216 次調査における植物珪酸体分析

株式会社 古環境研究所

（1）はじめに

植物珪酸体は，植物の細胞内に珪酸（SiO_2）が蓄積したもので，植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は，この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり，イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山 2000）。

（2）試　料

分析試料は，第 216 次調査 C トレンチから採取された 11 点および D トレンチ SK4751 から採取された 7 点の計 18 点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

（3）分析法

植物珪酸体の抽出と定量は，ガラスビーズ法（藤原 1976）を用いて，次の手順で行った。

1）試料を 105℃で 24 時間乾燥（絶乾）
2）試料約 1 g に対し直径約 40 μ m のガラスビーズを約 0.02g 添加（0.1mg の精度で秤量）
3）電気炉灰化法（550℃・6 時間）による脱有機物処理
4）超音波水中照射（300W・42KHz・10 分間）による分散
5）沈底法による 20 μ m 以下の微粒子除去
6）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
7）検鏡・計数

同定は，400 倍の偏光顕微鏡下で，おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は，ガラスビーズ個数が 400 以上になるまで行った。これはほぼプレパラート 1 枚分の精査に相当する。試料 1 g あたりのガラスビーズ個数に，計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて，試料 1 g 中の植物珪酸体個数を求めた。

また主な分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0 と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重）をかけて，単位面積で層厚 1 cm あたりの植物体生産量を算出した。これにより，各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる（杉山 2000）。タケ亜科については，植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

（4）分析結果

1）分類群

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い，その結果を Tab.13 及び Fig.45・46 に示した。主要な分類群について顕微鏡写真（Fig.47）を示す。

〔イネ科〕　イネ，イネ籾殻（穎の表皮細胞由来），ヨシ属，キビ族型，ススキ属型（おもにススキ属），ウシクサ族 A（チガヤ属など）

〔イネ科－タケ亜科〕　メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節，ヤダケ属），ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節），チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など），ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など），マダケ属型（マダケ属，ホウライチク属），未分類等

〔イネ科－その他〕　表皮毛起源，棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来），未分類等

〔樹木〕　ブナ科（シイ属），クスノキ科，マンサク科（イスノキ属），アワブキ科，その他

2）植物珪酸体の検出状況

①第 216 次調査 C トレンチ（Fig.45）下位の 16 層（試料 11）から 15 層（試料 9，10）にかけては，イネ科ではイネ，ウシクサ族 A，ネザサ節型，ミヤコザサ節型が検出され，部分的にイネの籾殻（穎の表皮細胞），ヨシ属，キビ族型，ススキ属型，メダケ節型なども認められたが，いずれも比較的少量である。イネの密度は，700 ～ 2,100 個 /g と比較的低い値であり，稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている 5,000 個 /g を下回っている。樹木では，照葉樹のブナ科（シイ属），クスノキ科，マンサク科（イスノキ属）などが検出された。樹木は一般に植物珪酸体の生産量が低いことから，少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある（杉山 1999）。なお，すべての樹種で植物珪酸体が形成されるわけではなく，落葉樹では形成されないものも多い（近藤・佐瀬 1986）。

14 層（試料 4 ～ 8）では，イネが増加し，ヨシ属，キビ族型が見られなくなっているが，その他の分類群にはとくに大きな変化は認められなかった。イネの密度は，試料 5，試料 6，試料 8 では 5,600 ～ 8,000 個 / と高い値であり，試料 4 と試料 7 でも 4,200 個 /g および 4,000

検出密度（単位：×100個/g）

分類群	学名	C地点 1	C地点 2	C地点 3	C地点 4	C地点 5	C地点 6	C地点 7	C地点 8	C地点 9	C地点 10	C地点 11	D地点 1	D地点 2	D地点 3	D地点 4	D地点 5	D地点 6	D地点 7
イネ科	Gramineae																		
イネ	*Oryza sativa*	70	63	63	42	67	80	40	56	21	13	7	13	7	14	13		7	7
イネ籾殻(穎の表皮細胞)	*Oryza sativa* (husk Phytolith)							13			6								
ヨシ属	*Phragmites*									7		7							
キビ族型	Paniceae type									7	6								
ススキ属型	*Miscanthus* type	35	7	21	7	7	7				6	7							
ウシクサ族A	Andropogoneae A type	49	35	70	21	27	47	27	14	21	45	28	13	14	7	13	13	7	
タケ亜科	Bambusoideae																		
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus	21	14	14	14	7			14	21				7					
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	49	14	14	14	27	40	27	35	7	26	14	7	14	7	6			
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.					7				7									
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	14	21	14	42	7	20	20	7	28	13	34	20	7	29	13	13	7	7
マダケ属型	*Phyllostachys*	7	7																
未分類等	Others	49	84	70	84	94	140	27	42	84	58	69	80	35	43	32	27	15	28
その他のイネ科	Others																		
表皮毛起源	Husk hair origin	28	21	21	35	34	27	7	14	14	19	28	20	7				7	7
棒状珪酸体	Rod-shaped	106	105	140	84	134	107	54	21	56	77	48	20	35	14	13	7	22	7
未分類等	Others	134	126	197	119	107	134	67	49	112	96	48	74	42	43	45	47	7	21
樹木起源	Arboreal																		
ブナ科(シイ属)	*Castanopsis*	28	28	14	14	27	27	20	56	35	19	34	7	28	14	13	20	7	
クスノキ科	Lauraceae	7	14				7	7			19	7	7	7	14	6	7		
マンサク科(イスノキ属)	*Distylium*	7	7	21	28	7	13	7	7	7	6	7		7					
アワブキ科	Sabiaceae			7			7	7			6	14							
その他	Others	77	42	21	28	40	47	40	35	35	19	34	20	28	29	19	20	7	7
(海綿骨針)	Sponge spicules													7					
植物珪酸体総数	Total	683	588	688	531	590	702	364	349	462	437	386	281	236	215	175	154	90	83
おもな分類群の推定生産量（単位：kg/㎡・cm）：試料の仮比重を1.0と仮定して算出																			
イネ	*Oryza sativa*	2.07	1.85	1.86	1.23	1.97	2.36	1.19	1.64	0.62	0.38	0.20	0.39	0.20	0.42	0.38		0.22	0.20
ヨシ属	*Phragmites*									0.44		0.43							
ススキ属型	*Miscanthus* type	0.44	0.09	0.26	0.09	0.08	0.08				0.08	0.09							
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus	0.24	0.16	0.16	0.16	0.08			0.16	0.24				0.08					
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	0.24	0.07	0.07	0.07	0.13	0.19	0.13	0.17	0.03	0.12	0.07	0.03	0.07	0.03	0.03			
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.					0.05				0.05									
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	0.04	0.06	0.04	0.13	0.02	0.06	0.06	0.02	0.08	0.04	0.10	0.06	0.02	0.09	0.04	0.04	0.02	0.02
タケ亜科の比率（%）																			
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus	47	56	60	46	28			46	59				48					
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	45	23	25	19	46	76	68	48	8	76	39	35	40	29	44			
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.					18				13									
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	8	22	15	35	7	24	32	6	20	24	61	65	12	71	56	100	100	100
メダケ率	Medake ratio	92	78	85	65	75	76	68	94	67	76	39	35	88	29	44	0	0	0

Tab.13　第 216 次調査における植物珪酸体分析結果

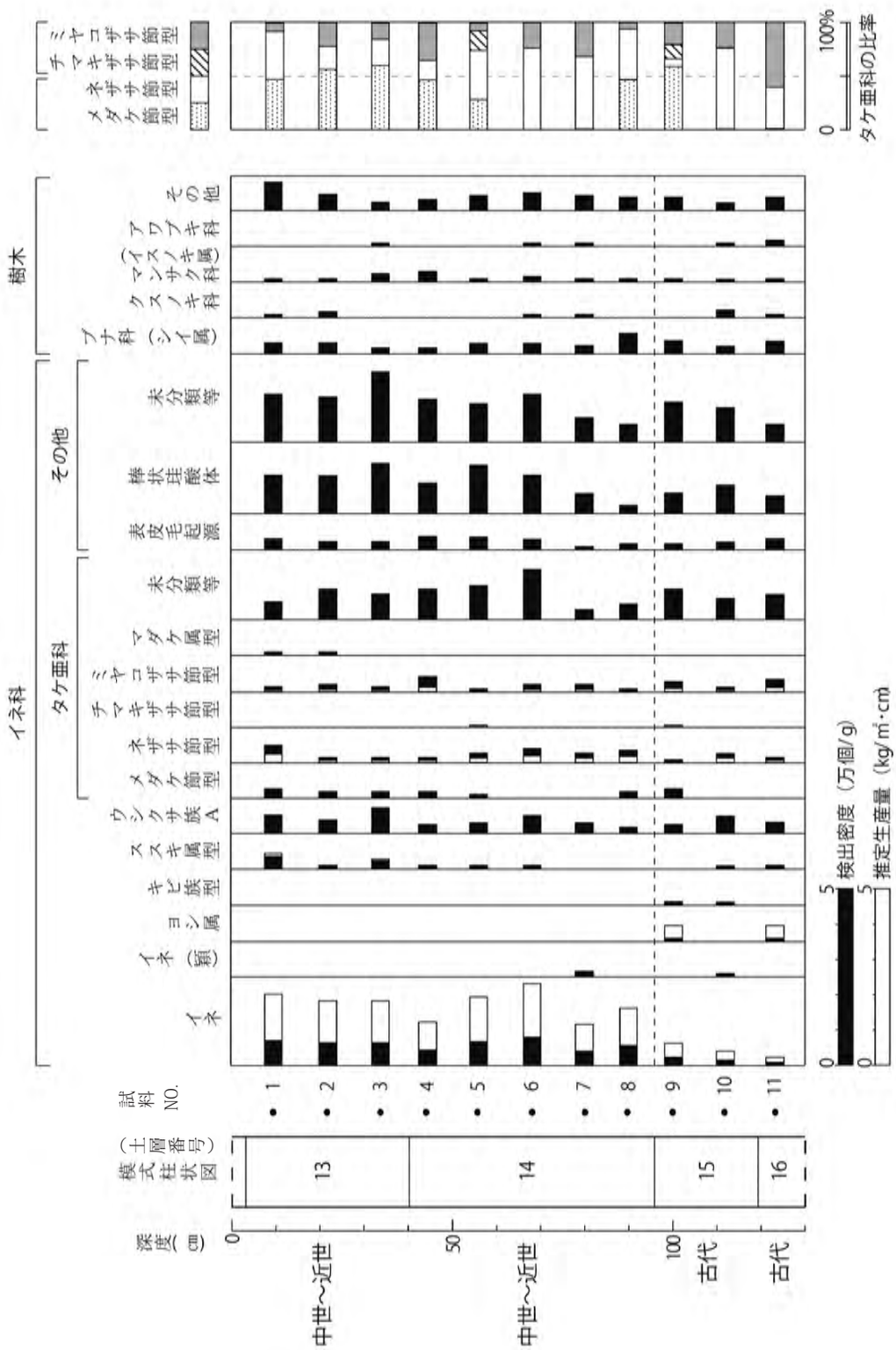


Fig.45　第 216 次調査（C トレンチ）における植物珪酸体分析結果

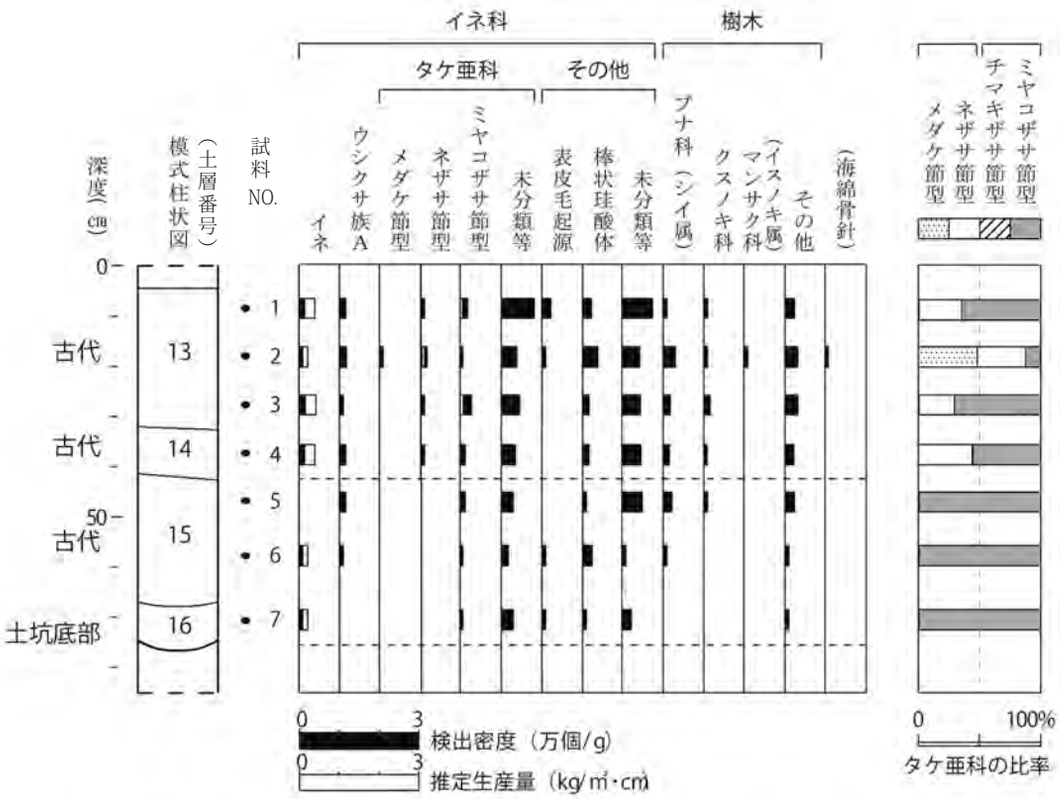


Fig.46　第 216 次調査（D トレンチ）における植物珪酸体分析結果

個 /g と比較的高い値である。13 層（試料 1 ～ 3）でも，おおむね同様の結果であり，マダケ属型が出現している。イネの密度は 6,300 ～ 7,000 個 /g と高い値である。おもな分類群の推定生産量によると，14 層より上位ではイネが優勢となっている。

②第 216 次調査 D トレンチ SK4751（Fig.46）

土坑底部の 16 層（試料 7）から 15 層（試料 5，6）にかけては，ミヤコザサ節型，樹木（その他）が検出され，部分的にイネ，ウシクサ族 A，ブナ科（シイ属），クスノキ科も認められたが，いずれも少量である。イネの密度は，いずれも 700 個 /g と低い値である。14 層（試料 4）から 13 層（試料 1 ～ 3）にかけても，おおむね同様の結果であり，ネザサ節型などが出現している。イネの密度は 700 ～ 1,400 個 /g と比較的低い値である。

（5）考　察

1）第 216 次調査 C トレンチ

古代とされる 15 層～ 16 層の堆積当時は，おおむねヨシ属が生育するような湿潤な環境であったと考えられ，周辺の比較的乾燥したところにはススキ属やチガヤ属，キビ族，メダケ属（おもにネザサ節），ササ属（おもにミヤコザサ節）などが生育し，遺跡周辺にはシイ属，クスノキ科，イスノキ属などの照葉樹林が分布していたと推定される。また，少量ながらすべての試料でイネが検出されることから，当時は周辺で稲作が行われており，そこから何らかの形でイネの植物珪酸体が混入したと考えられる。

古代は湿潤な環境か

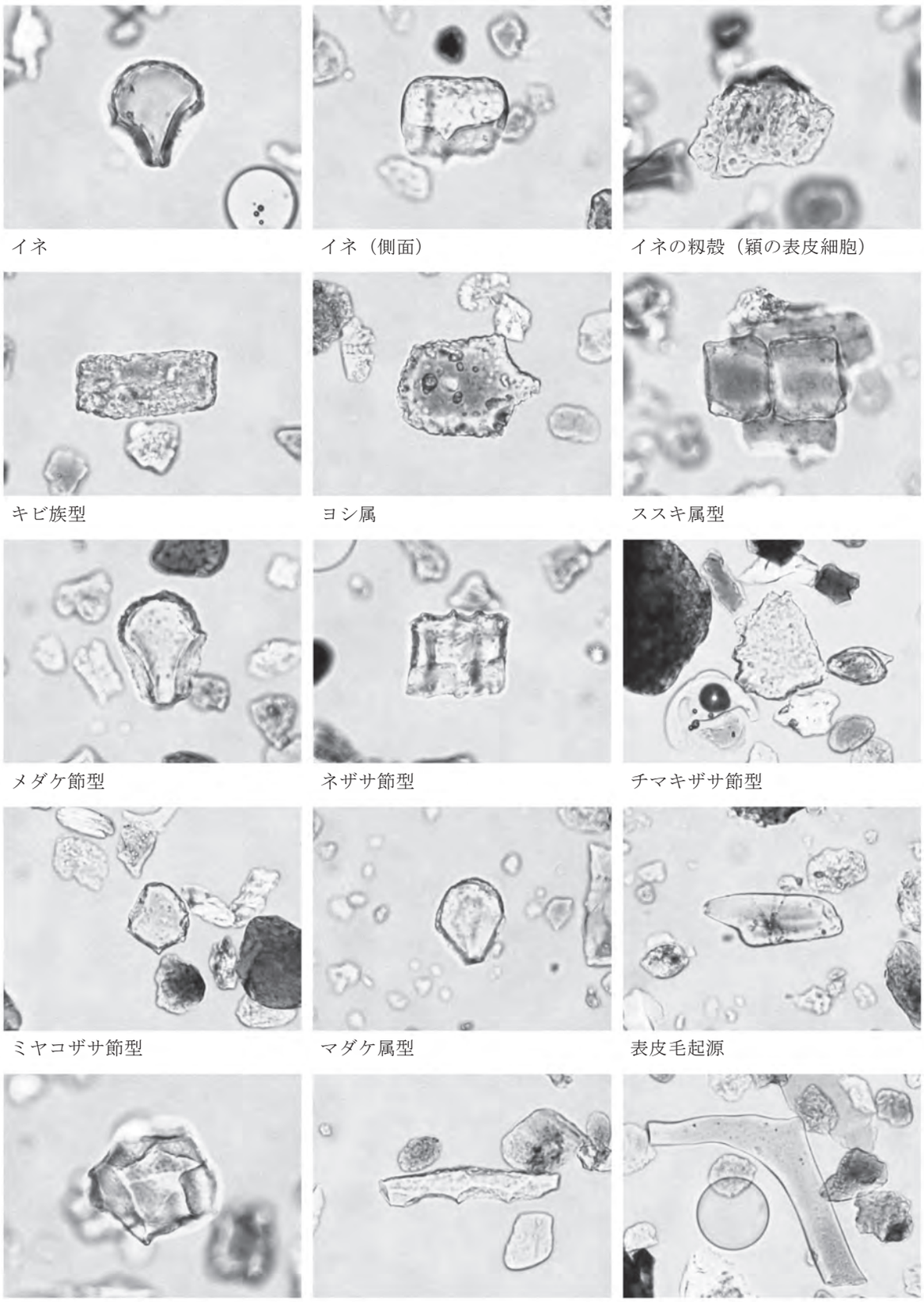


Fig.47　第 216 次調査の植物珪酸体（プラント・オパール）

中世～近世とされる 13・14 層では，ほとんどの試料でイネが多量に検出された。遺跡の立地などから，調査地点で稲作が行われていた可能性は考えにくいことから，ここで検出されたイネについては，周辺で利用された稲藁に由来する可能性が考えられる。稲藁の利用としては，建物の屋根材や壁材，敷物，履物，俵，縄など多様な用途が想定される。

周辺の植生にとくに大きな変化はなかったと考えられるが，ヨシ属が見られなくなっていることから，堆積環境の乾燥化が示唆される。また，13 層の時期には周辺にマダケ属が生育していたと考えられる。タケ亜科のうちマダケ属にはマダケやモウソウチクなど有用なものが多く，建築材や生活用具，食用などとしての利用価値が高い。植物珪酸体分析でマダケ属が確認されるのはおおむね中世以降であり，一般的に見られるようになるのは近世以降である。

2）第 216 次調査Ｄトレンチ SK4751

イネの検出　古代とされる土坑の埋土（13 層～ 16 層）では，ほとんどの試料からイネが検出された。このことから，土坑埋土の堆積当時は，周辺で稲作が行われており，そこから何らかの形でイネの植物珪酸体が混入したと考えられるが，前述のように周辺で利用された稲藁に由来する可能性も想定される。

また，周辺の比較的乾燥したところにはススキ属やチガヤ属，キビ族，メダケ属（おもにネザサ節），ササ属（おもにミヤコザサ節）などのイネ科草本類が生育し，遺跡周辺にはシイ属，クスノキ科などの照葉樹林が分布していたと推定される。

参考文献

近藤錬三・佐瀬隆（1986）植物珪酸体，その特性と応用，第四紀研究，25，p.31-63

杉山真二・藤原宏志（1986）機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－，考古学と自然科学，19，p.69-84

杉山真二（1999）植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史，第四紀研究，38（2），p.109-123

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント･オパール），考古学と植物学，同成社，p.189-213

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（１）－数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－，考古学と自然科学，９，p.15-29

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究（５）－プラント・オパール分析による水田址の探査－，考古学と自然科学，17，p.73-85

Ⅲ　大宰府史跡の確認調査

Ⅲ　大宰府史跡の確認調査

１　第 231 次調査（大楠地区）…… 93
（１）調査概要 …… 93
（２）トレンチ設定と基本層序 …… 94
（３）検出遺構 …… 94
（４）出土遺物 …… 95
（５）小　　結 …… 96
２　第 232 次調査（観世音寺子院跡）…… 97
（１）調査概要 …… 97
（２）トレンチ設定と基本層序 …… 97
（３）小　　結 …… 97
３　第 233 次調査（観世音寺子院跡）…… 98
（１）調査概要 …… 98
（２）トレンチ設定と基本層序 …… 98
（３）小　　結 …… 99
４　第 234 次調査（政庁前面広場地区）…… 100
（１）調査概要 …… 100
（２）トレンチ設定と基本層序 …… 100
（３）小　　結 …… 101
５　第 235 次調査（大宰府学校院地区）…… 103
（１）調査概要 …… 103
（２）トレンチ設定と基本層序 …… 103
（３）検出遺構 …… 104
（４）出土遺物 …… 104
（５）小　　結 …… 105
６　第 237 次調査（観世音寺子院地区）…… 106
（１）調査概要 …… 106
（２）トレンチ設定と基本層序 …… 107
（３）検出遺構 …… 108
（４）出土遺物 …… 108
（５）小　　結 …… 112
７　第 238 次調査（政庁前面広場地区）…… 113
（１）調査概要 …… 113
（２）トレンチ設定と基本層序 …… 114

1　第 231 次調査（大楠地区の確認調査）

（1）調査概要

経　過　大宰府政庁跡の周辺には，これまでの発掘調査で広範囲に建物跡などが展開していることが知られており，大宰府の様々な機能を担う諸官衙が存在していたと考えられている。

今回は，その範囲内で倉庫建設の申請が提出されたことを受けて，地下遺構の有無及び遺構面までの深度などを確認するための確認調査を太宰府市教育委員会職員の立会のもと，平成 28 年 4 月 19 日に実施した。

調査地は宅地の庭にあたる箇所で，樹木が多数植えられており，重機の進入が困難であったことから，人力による掘削を行った。調査面積は 4 ㎡である。

位　置　大楠地区は大宰府政庁の南西側に位置する。地番は太宰府市観世音寺 2 丁目 11 － 173 である。周辺では，大宰府史跡第 29・94・137・221 次調査などを実施している。

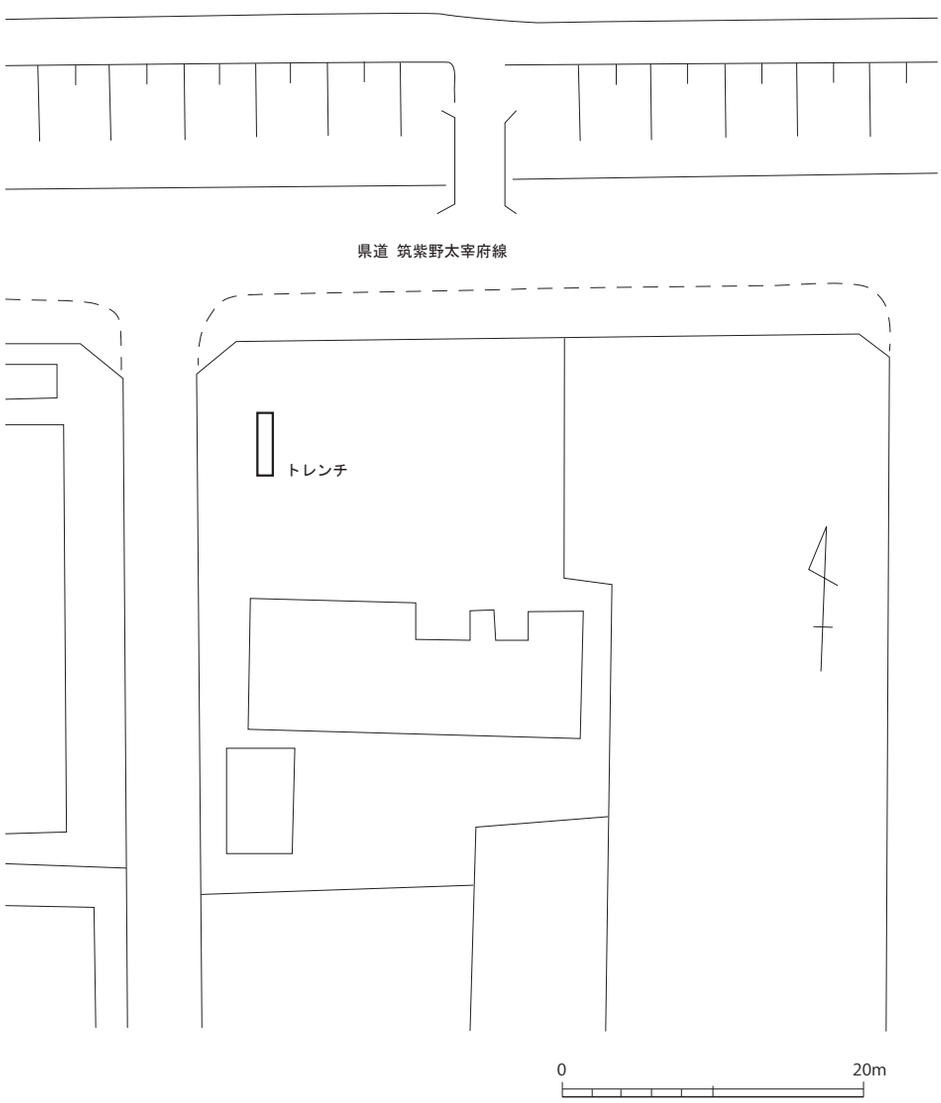


Fig.48　第 231 次調査地位置図（1/500）

（２）トレンチ設定と基本層序（Fig.48・49, PL.10）

調査区は，建設予定の倉庫の範囲に合せて，南北方向に長さ４m，幅１mの規模で設定した。

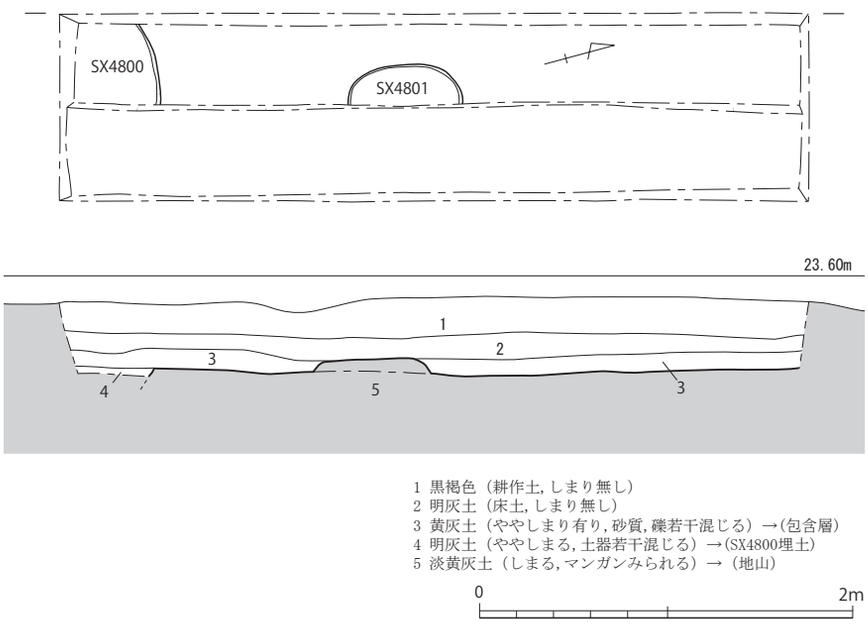


Fig.49　第 231 次調査トレンチ実測図（1/40）

調査の結果，地表下 20 ～ 30 ㎝までは近現代の耕作土（１・２層）で，その下に古代の瓦や土器の破片を含む包含層（黄灰土，３層）があり，地表下 40cm まで掘り下げると淡黄灰土（５層）の地山となった。なお，樹根が３層上面で横に這っているため，３層以下は後世の撹乱を受けていないと考えられる。

古代の土坑か　地山面には明灰土（４層）を埋土とする２基の円形の土坑状の掘り込みがみられ，いずれも包含層（３層）の直下から掘り込まれていた。

（３）検出遺構（Fig.49）

明確な遺構としては以下に報告する土坑２基である。いずれも一段掘り下げをしたのみであるが，包含層（３層）下から掘り込まれており，古代の遺構となる可能性がある。

SX4800

トレンチ南端で検出した土坑状の掘り込みで，規模は 45㎝以上× 40㎝以上を測る。埋土は灰色土である。

SX4801

トレンチ中央で検出した土坑状の掘り込みで，規模は 60㎝× 21㎝以上を測る。埋土は灰色土である。

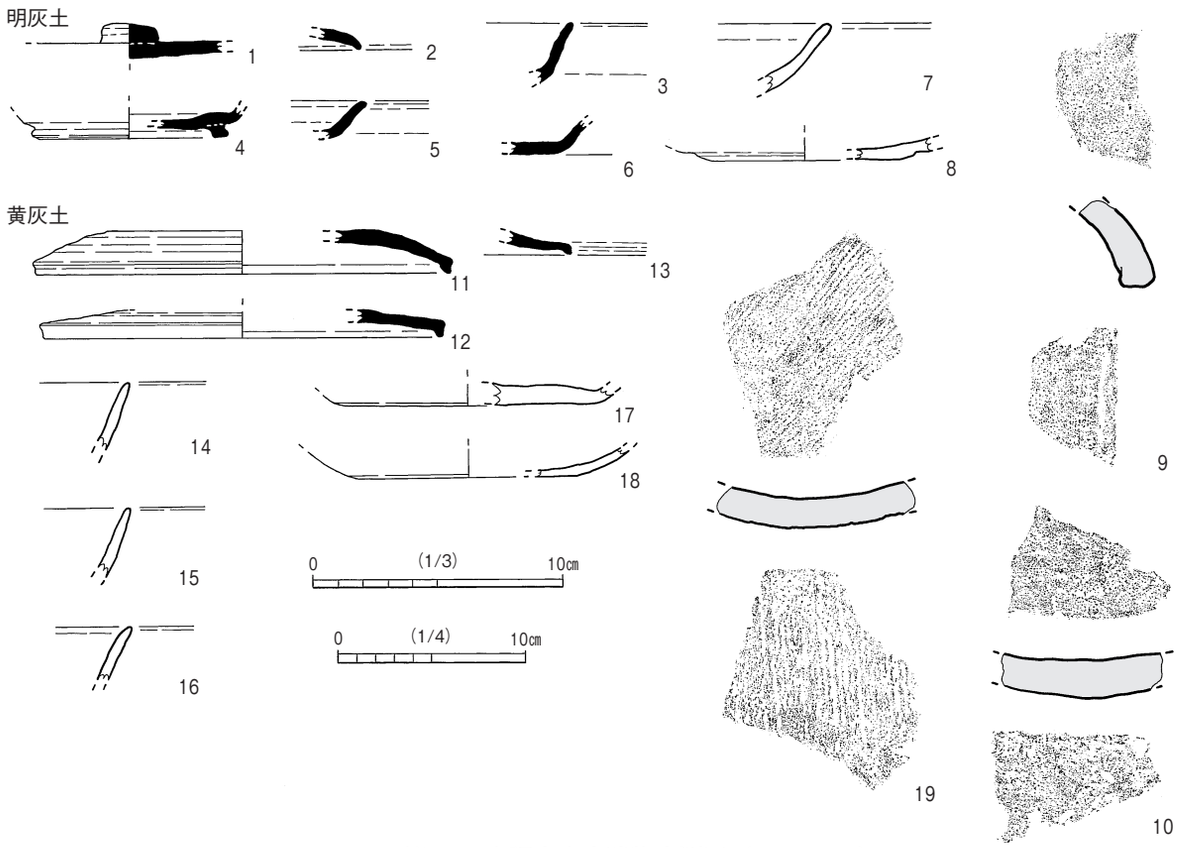


Fig.50　第 231 次調査出土遺物実測図（1/3・1/4）

（４）出土遺物（Fig.50，PL.24 ）

１～ 10 は明灰土（２層）出土，11 ～ 19 は黄灰土（３層）出土である。出土遺物は全体的に摩滅が認められる。

明灰土出土遺物

須恵器坏蓋（１・２）　１は低平な宝珠つまみを貼り付けたものである。焼成は不良で，色は淡灰色である。２は端部をわずかに嘴状にしたもの。内外面摩滅が顕著のため，調整は不明である。焼成はやや不良で，色は淡灰色を呈する。

須恵器坏身（３・４）　３は口縁部を緩やかに外反させるもので，内外面摩滅が顕著のため，調整は不明である。焼成は不良で，色は淡灰色を呈する。４は底径 6.8㎝に復元される，小型の高台付坏身である。底部外面にはヘラ切り痕と板状圧痕が認められる。

須恵器皿（５・６）　５は底部外面にヘラ切り痕が残る。６は口縁部と底部との境が緩やかに屈曲した下部片で，底部外面にはヘラ切り痕が認められる。

土師器坏（７・８）　７は口縁部が外反するのもので，口縁端部は丸く収める。内外面回転ナデ調整を施す。色は淡褐色。８は底部片で，内外面摩滅が顕著であるが，底部外面には回転糸切り痕が残る。色は淡褐色。

丸瓦（９）　９は端部に内側からヘラ切りを施したもので，一部分割時の破面が残る。両面とも摩滅しているが，凸面には縄目，凹面には布目痕が若干残る。凹面には粘土板継ぎ目痕も認められる。焼成は良く，色は淡灰色を呈する。

平瓦（10）　広端縁が残る破片で，凸面端部側は粗いナデ，凹面端部側は縦ナデ後横ナデを施していることから，一枚作りである可能性がある。調整は，凸面は縦ナデ，凹面は布目痕後縦ナデを施す。端面はケズリ仕上げである。焼成はやや不良で，色は凸面が淡橙褐色，凹面が淡褐色を呈する。

黄灰土（３層）出土遺物

須恵器坏蓋（11 ～ 13）　11・12 はいずれも端部が嘴状で，口縁外端部は回転ナデにより窪む。11 の天井部にはヘラ切り痕が残り，外面には自然釉も若干付着する。13 は端部をわずかに嘴状につまみ出し，外面には重ね焼き痕が残る。11 ～ 13 の色はいずれも灰色を呈する。

土師器坏（14 ～ 18）　14・15 の口縁部はほぼ直立するが，16 は端部のみがわずかに外反する。いずれも内外面回転ナデ調整で，色も淡橙色。17 は器壁が厚い底部片で，摩滅しているものの，底部外面はヘラ切り後ナデを施していると思われる。色は外面が淡橙褐色，内面が淡褐色。18 は器壁が薄いもので，内外面摩滅しているものの，底部外面はヘラ切りを施していると思われる。焼成は不良で，色は淡褐色。

平瓦（19）　狭端縁が残る破片で，端部はナデ調整を施す。凸面は縄目，凹面は布目痕とともに糸切り痕が残る。色は淡褐色。

（５）小　結

今回の調査では大楠地区官衙に伴うとみられる遺構も確認したが，部分的な確認にとどまる。今回確認された土坑状の掘り込み２基は，先述したように埋土が灰色土かつ包含層下から掘り込まれていることから，古代の遺構となる可能性が高いものの，その規模や性格については，狭小な調査区であることもあり不明である。

ちなみに今回の対象地北側の県道筑紫野太宰府線の擁壁工事に伴う確認調査である第 221 次調査ｂトレンチでは中世以前に想定される谷部堆積層を確認しているが，第 221 次調査ｂトレンチから南に 12 mの場所に位置する今回のトレンチでは，締まった地山である暗黄灰土を確認しており，蔵司西地区谷部（大宰府史跡第４次調査）から延びる旧河道及び氾濫原が今回の対象地まで延びないことが明らかになった点は新たな調査成果といえる。

遺構の広がりを確認

しかし，出土遺物の多くは摩滅が認められるため，氾濫原ではないものの，上層は一時期氾濫の影響を受けている可能性がある。

今後の周辺の調査状況を含めて検討を続ける必要がある。

2　第 232 次調査（観世音寺子院跡の確認調査）

（1）調査概要

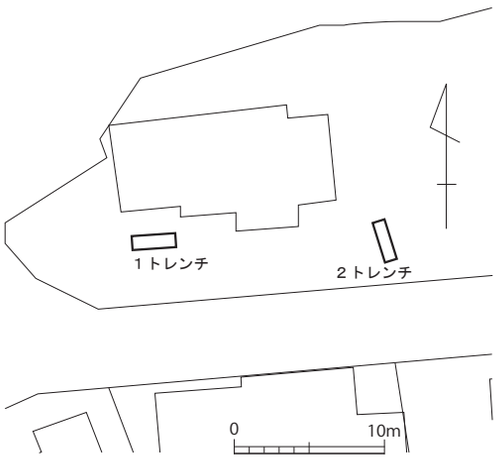


Fig.51　第 232 次調査地位置図（1/500）

経　過　観世音寺北側に広がる四王寺山山麓には，観世音寺に関わる子院群が展開していたが，早くに宅地開発が始まったため発掘調査例が少なく，実態については不明なところが多い。そのため，造成前と現在の地形との照合や確認調査などを積み重ね，遺跡の広がりや造成前の地形の確認を続けている。今回の調査は，個人住宅建設に先立ち，地下遺構の有無及び遺構面までの深さを確認するため実施した。調査は太宰府市教育委員会職員の立会のもと，九州歴史資料館が主体となって平成 28 年 7 月 21 日に実施した。重機により掘削を行い，写真撮影や図面作成の後，直ちに埋戻し，調査を完了した。調査面積は 5.31㎡である。

位　置　東観世地区の北側に位置し，地番は太宰府市観世音寺 6 丁目 896 － 22 である。

（2）トレンチ設定と基本層序（Fig.51・52, PL.10）

周辺は南へ向かって下る地形であるが，東側に南北にのびる尾根があることから，尾根と直交する東西方向に 1 トレンチ（長さ 3.0 m, 幅 0.9 m），全体地形に沿った南北方向に 2 トレンチ（長さ 2.9 m，幅 0.9 m）を設定した。

現地表から下は宅地造成時の真砂土が厚く盛られており，1 トレンチでは地表下 2.9 mまで，2 トレンチでは地表下 3.1 mまで掘削したが，崩落の危険から真砂土より下までは到達できず，遺構・遺物は確認できなかった。

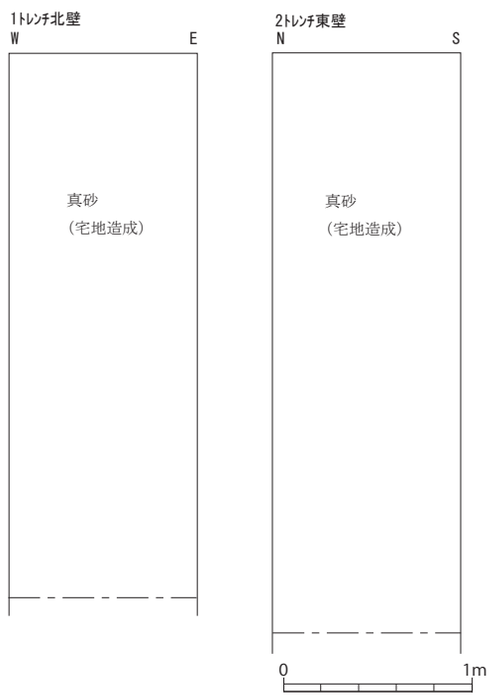


Fig.52　第 232 次調査土層模式図（1/40）

（3）小　結

調査の結果，昭和 40 年代の宅地造成時の盛土より下の状況は確認できなかったが，旧地形図との照合からすると調査地は元々谷筋があった箇所とみられ，厚い盛土によって谷が埋められている可能性があることが判明した。そのため，元の地形や遺構が削平されずに残っている可能性があり，今後の調査が期待される。

元は谷地形

3　第 233 次調査（観世音寺子院跡の確認調査）

（1）調査概要

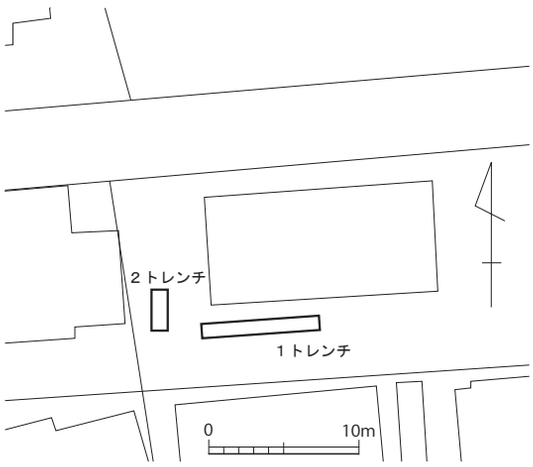


Fig.53　第 233 次調査地位置図（1/500）

経　過　国指定史跡「観世音寺境内及び子院跡附老司瓦窯跡」のうち，観世音寺の北側に広がる子院跡については，これまで発掘調査事例が少なく，実態の不明なところが多い。特に東観世団地は大宰府跡の史跡指定前から造成が始まったため，遺跡の情報が乏しい。そのため，旧地形との照合や確認調査を重ねて，遺跡の広がりや地形の把握を継続して行っている。

今回の調査は，住宅建て替えの計画が出されたことをうけ，太宰府市教育委員会職員の立会のもと，九州歴史資料館が主体となり平成 28 年 11 月 28・29 日の 2 日間で実施した。トレンチ掘削は人力により行い，写真撮影や図面作成等を行ったのち速やかに埋戻し，調査を完了した。調査面積は 8.4㎡である。

位　置　東観世地区の北側に位置し，地番は太宰府市観世音寺 6 丁目 715 － 75・76，896 － 29 である。調査地北西側では，同じ子院跡の調査として大宰府史跡第 232 次調査を実施している。

（2）トレンチ設定と基本層序（Fig.53・54，PL.11）

調査地周辺は北から南に向かって傾斜する地形であるが，北西側の第 232 次調査の所見から元々谷地形と推定された。推定される地形と直交する方向に 1 トレンチ（長さ 8.0 m, 幅 0.8 m），地形に沿う方向に 2 トレンチ（長さ 2.5m，幅 0.8 m）を設定した。

1 トレンチでは地形の変化を探るため，全体を 0.2 ～ 0.3 mほど掘り下げたのち，東端 1 m の範囲を地表下 0.9 mまで，西側半分を地表下 1.0 mまで深く掘り下げたが，宅地造成に伴う真砂土しか確認できなかった。そこで，中央付近のみを地表下 1.3 mまで掘削したが，遺構面には達しなかった。

2 トレンチも，地表下 1.0 mまで掘り下げたが，表土以下は全て宅地造成時の真砂土であったため，北端をさらに地表下 1.4 mまで掘削したが，やはり遺構面には達しなかった。

崩落の危険もあり更なる掘削は断念したが，いずれのトレンチも最も深く掘り下げた箇所に長さ 1 mのピンポールを刺して堆積状況等を確認したところ，力を入れずとも容易に刺さることから，造成土は地表下 2 m以上に及んでいることが推測できた。

なお，両トレンチとも遺構・遺物は皆無である。

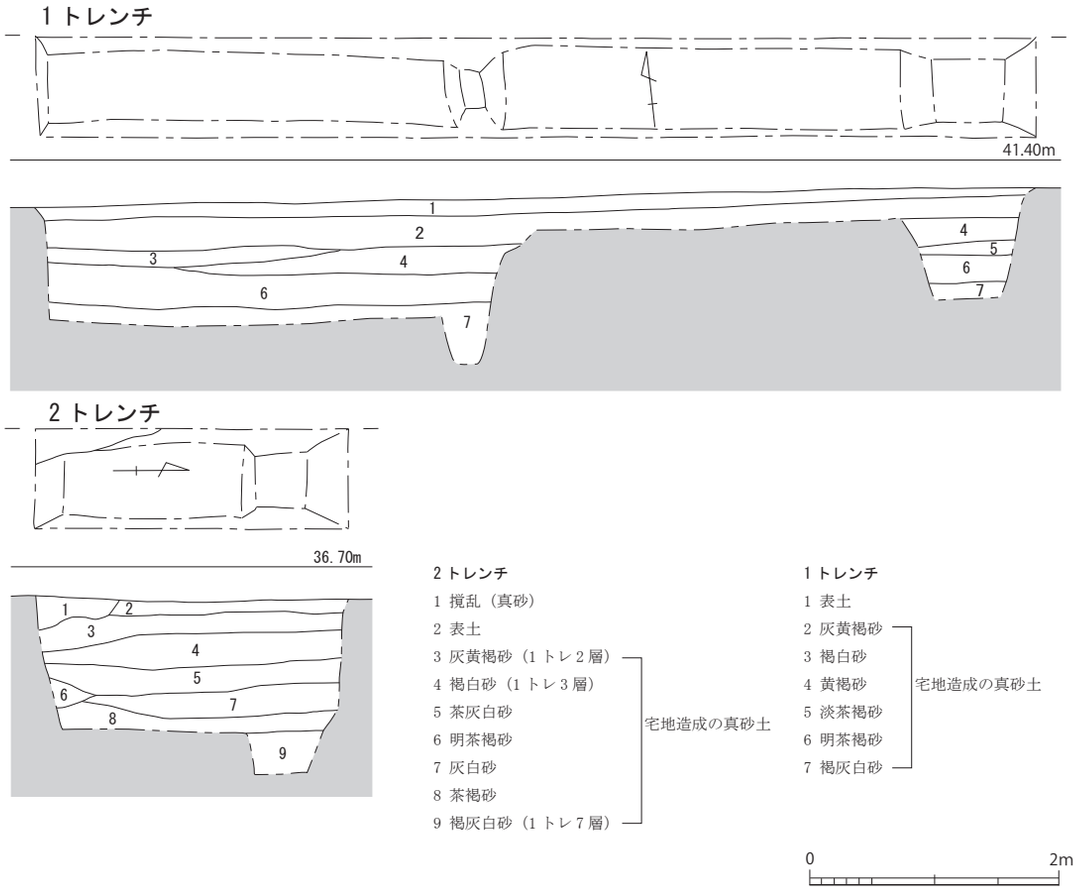


Fig.54　第 233 次調査トレンチ実測図（1/60）

（3）小　結

調査の結果，昭和 40 年代の宅地造成に伴う造成土が厚く盛られていることが判明した。狭長なトレンチでの人力掘削という制約もあり，造成土下まで掘削することはできなかったが，ピンポールによる確認でも地表下 2 m以上は盛土している可能性があることから，北側の第 232 次調査地から続く谷地形が南側にまで及んでいるものと推定される。 **厚い造成土**

そうした状況を踏まえると，今回の調査地に隣接する一帯は基本的に盛土によって宅地が造成されていると考えられ，その盛土下に遺構が削平を受けずに遺存している可能性も否定できない。今後の周辺の調査に期待したい。

4　第 234 次調査（政庁前面広場地区の確認調査）

（1）調査概要

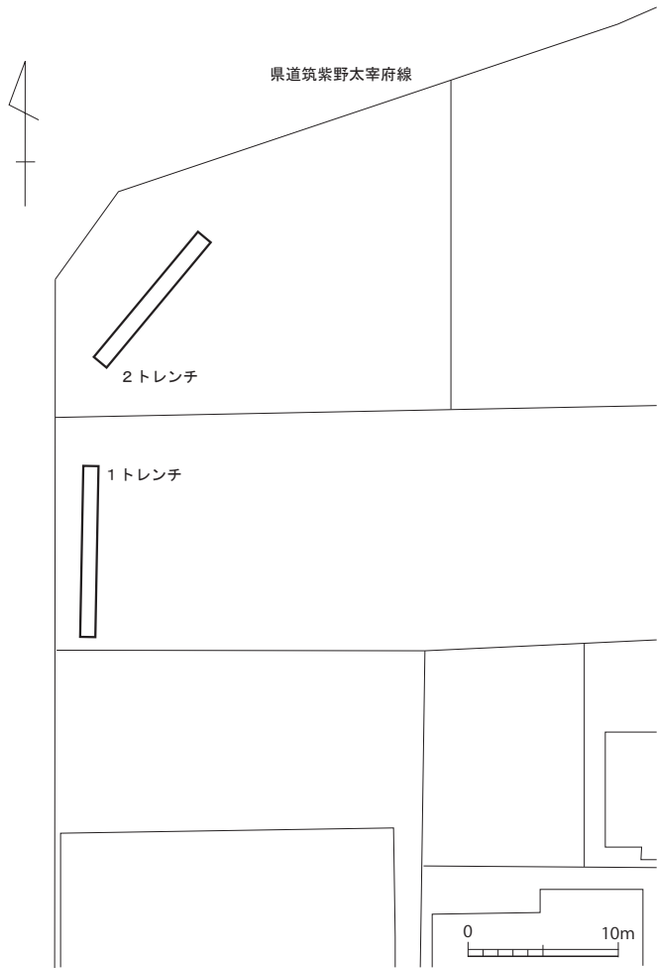


Fig.55　第 234 次調査地位置図（1/500）

経　過　大宰府政庁跡の周辺には古代大宰府を支える様々な官衙跡が広がっていることが確認されており，政庁を取り巻く周辺官衙跡の解明のため確認調査を続けている。特に政庁跡の正面（南側）では朝集殿と目される建物以外にほとんど遺構が確認されていないことから，広場が存在したと推定されるに至っている。

今回の調査は，駐車場整備及び便益施設建設の計画が出されたことをうけ，遺構の有無や広がりなどを把握するため実施した。調査は太宰府市教育委員会職員の立会のもと，九州歴史資料館が主体となり平成 28 年 12 月 20・21 日の両日で実施した。20 日は測量のみ実施し，21 日に重機により掘削を行い，写真撮影や図面作成ののち，即日埋戻して調査を終えた。調査面積は 24.75㎡である。

位　置　調査地は政庁前面広場地区の北端に位置し，地番は太宰府市観世音寺 1 丁目 411・412 である。対象地の南側では大宰府史跡第 73 次調査を実施している。

（2）トレンチ設定と基本層序（Fig.55 ～ 57，PL.11・12）

今回の調査対象地は第 73 次調査地の範囲とも一部重複するが，当時の調査成果との整合性を図るため，一部第 73 次調査地側まで及ぶ調査区を設定した。

調査地周辺は南に向かって緩やかに下る地形であることから，南北方向に 1 トレンチ（長さ 11.5 m，幅 1.1 m）を設定した。また，便益施設の建設候補地である調査地北西側の状況を把握するため 2 トレンチ（長さ 11.0 m，幅 1.1 m）を設定した。

1 トレンチは，第 73 次調査地に重複する位置に設けたため，遺構面より上位は耕作土（1 層）と当時の埋戻し土（2 層）である。その直下はかたくしまる黄褐土（3 層）が広がり地山とな

る。ただし北端部は黄褐土より下位のかたくしまる灰色砂層（４層）がみられる。これは地形が南へ向かって傾斜していることに起因するものと考えられる。

２トレンチは，区画整理時の造成土（真砂）が厚く堆積し（２・３層），これを除去すると区画整理以前の宅地造成土（５・６層）となる。その下の黄褐土（７層）が地山で，１トレンチの３層と同一層をなす。

両トレンチとも，遺構・遺物は皆無である。

（３）小　結

調査の結果，遺構は確認できなかったが，このことは政庁前面広場地区における既往の調査成果とも符合するもので，やはり「広場」として機能した空間であったとする従来の認識を補強するものといえよう。ただし，

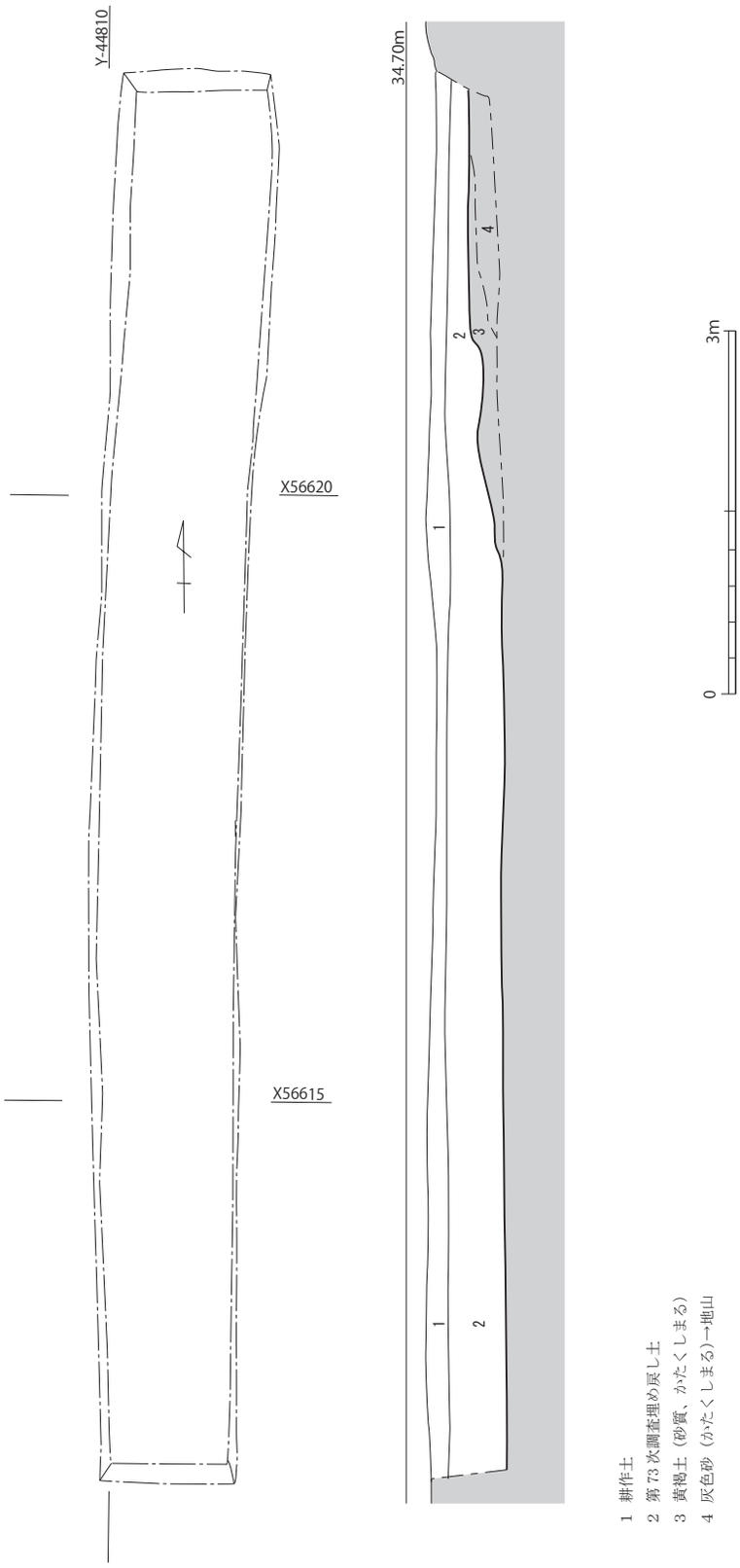


Fig.56　第 234 次調査 1 トレンチ実測図（1/60）

「広場」が実際にどのように使われたのか，朝集殿とされる建物 SB2300 に関連するような遺構が存在しないのか，建物以外でも広場の機能に関わる小規模な遺構は存在しないのか，ある

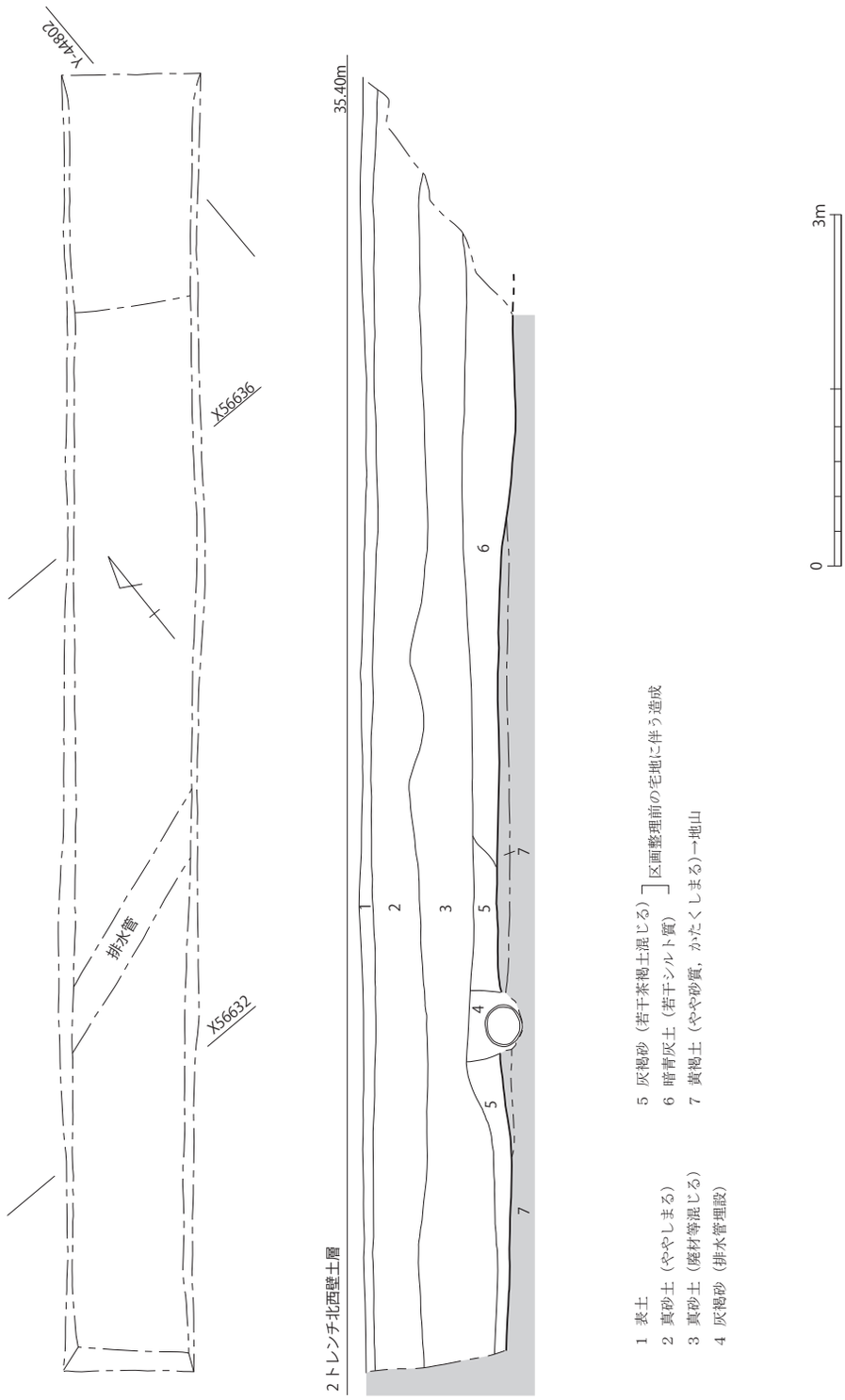


Fig.57　第 234 次調査 2 トレンチ実測図（1/60）

いは官衙域として平坦に造成される以前の地形がどのようなものであったのかなど，課題も少なくない。

5　第 235 次調査（大宰府学校院跡の確認調査）

（1）調査概要

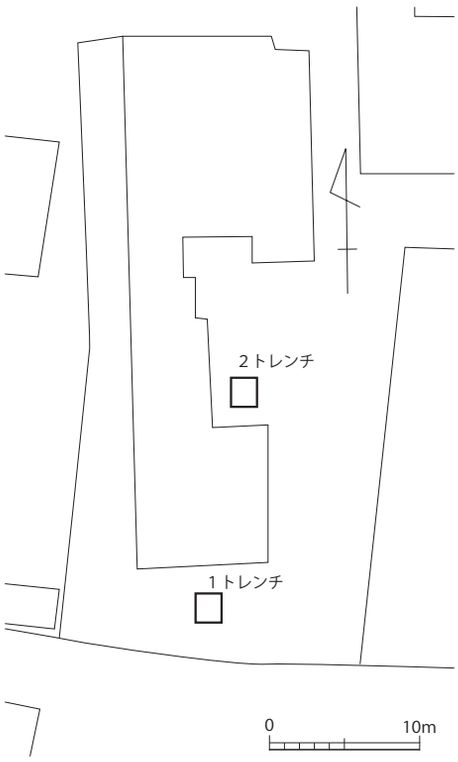


Fig.58　第 235 次調査地位置図（1/500）

経　過　調査地は史跡「大宰府学校院跡」に属し，史跡地の西側に位置する。周辺では，これまでの確認調査によって古代から近世に至るまで複数の時代の遺構が重層的に残っていることが確認されているが，調査がなされているのは一部に限られるため，建物群の配置や構造，変遷などは不明な部分も少なくない。そのため，史跡地の将来的な利・活用に向けて，機会があるごとに確認調査を継続して行っている。

今回の調査は史跡大宰府学校院跡の中央北側部分にあたり，住宅建築のための現状変更申請が提出されたことを受けて，地下遺構の有無及び深度を確認するため実施した。調査は太宰府市教育委員会職員の立会のもと，九州歴史資料館が主体となり，平成 29 年 3 月 7 日に調査を実施し，14 日は調査地周辺の測量を実施した。調査は人力によってトレンチ掘削を行い，写真撮影や図面作成の後，即日埋戻して調査を完了した。調査面積は 4 ㎡である。

位　置　史跡大宰府学校院跡の中央北側部分に位置し，地番は太宰府市観世音寺 4 丁目 213・214 － 1 である。対象地は大宰府史跡第 159 次調査区の北・南側に位置し，南側は大宰府史跡第 37・176 次調査区，北東には大宰府史跡第 18 次調査区，北西には大宰府史跡第 112 次調査区，西側には大宰府史跡第 128・174 次調査区が位置する。

（2）トレンチ設定と基本層序（Fig.58・59，PL.12）

調査地周辺は，過去の調査において北側から南側に向かって緩やかに下る地形であることが判明している。そうした地形の変化等をより詳細に把握するため，既存の建物を避けて南（1 トレンチ）と北（2 トレンチ）にそれぞれ調査区を設定した。調査区はいずれも長さ 2 m，幅 1 mの規模で，調査後は速やかに埋戻し，旧状に復した。

調査の結果，1 トレンチでは現代の造成土（1・2 層）と耕作に伴う床土（3 層）があり，標高 37.84 mで黄灰土（4 層），標高 37.70 mで黒灰土（5 層）となった。第 159 次調査の成果との照合により，黄灰土と黒灰土はいずれも中世の遺構面をなすことが判明した。黒灰土の下には平安期と奈良期の整地層が存在するとみられるが，今回は中世の遺構面の深さを確認したところで掘削を止めた。出土遺物は須恵器・土師器・瓦のほか輸入陶磁器類などが出土した。

中世の遺構面

2 トレンチでは，現代の造成土である真砂（1 層），暗灰褐土（2 層）を除去すると，標高

中世の遺構面

38.05mで中世の遺構面を形成する黄褐土（3層）となった。この下には標高37.90mで灰褐土（4層），標高37.80mで黒灰土（5層）がみられるが，灰褐土は黄褐土とともに上層の中世期の遺構面を形成する整地，黒灰土は下層の中世期の遺構面を形成する整地であると思われる。このうち，造成土直下の黄褐土の面では径20cm程度のピットがあり，一段掘り下げたところで近世以降の磁器壺の破片が出土した。

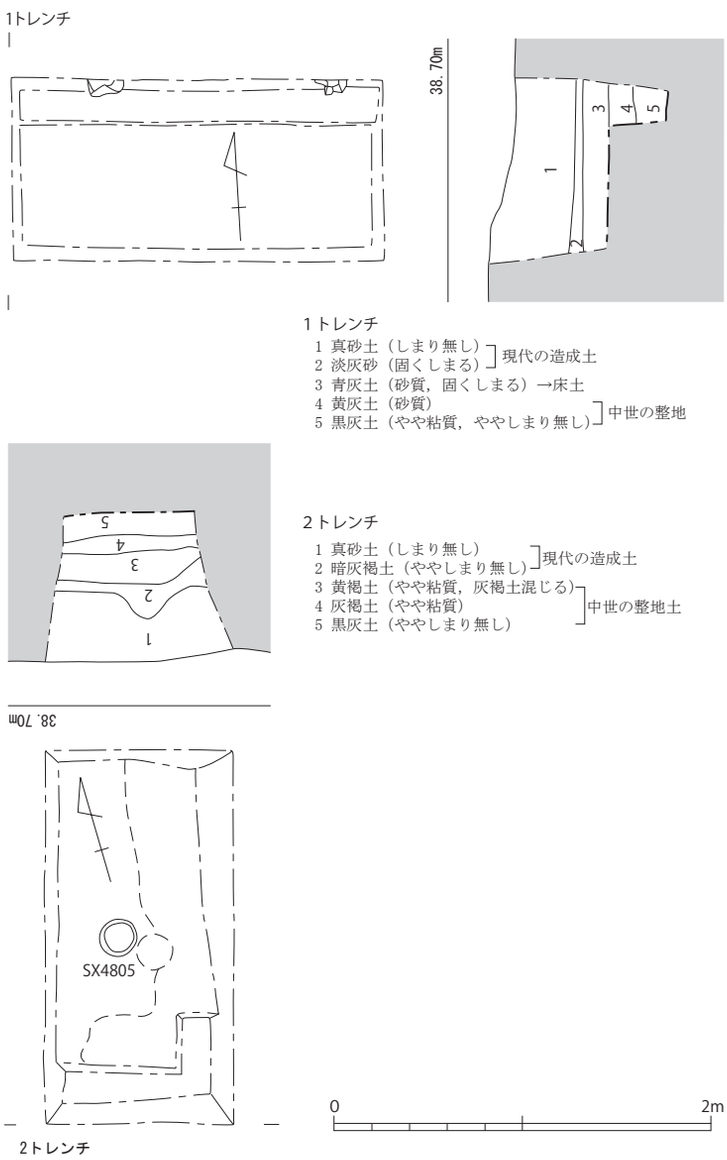


Fig.59　第235次調査トレンチ実測図（1/40）

（3）検出遺構

明確な遺構としては以下に報告するピット1基である。出土遺物から，近世以降の遺構となる可能性が高い。

近世以降のピット

SX4805（Fig.59）

1トレンチ中央で検出したピットで，規模は径20㎝を測る。深さは一段掘り下げたのみで，不明である。埋土は灰褐土で，近世以降の磁器壺片を含む。

（4）出土遺物（Fig.60，PL.24）

1～7は1トレンチ黒灰土（5層）出土，8は2トレンチSX4805出土，9・12は2トレンチ黄褐土（3層）出土，10・11は2トレンチ黒灰土（5層）出土である。

1トレンチ出土遺物

土師器坏（1・2）　1・2は口縁部で，いずれも内外面回転ナデで調整する。2の外面下部にはヘラ切り痕が若干残る。色はいずれも淡褐色である。

土師器皿（3）　3は口縁部で，外面底部にはヘラ切り痕が残る。色は淡褐色。

土師器椀（4）　4は高台付椀の高台部で，高台端部は欠損する。色は淡橙色。

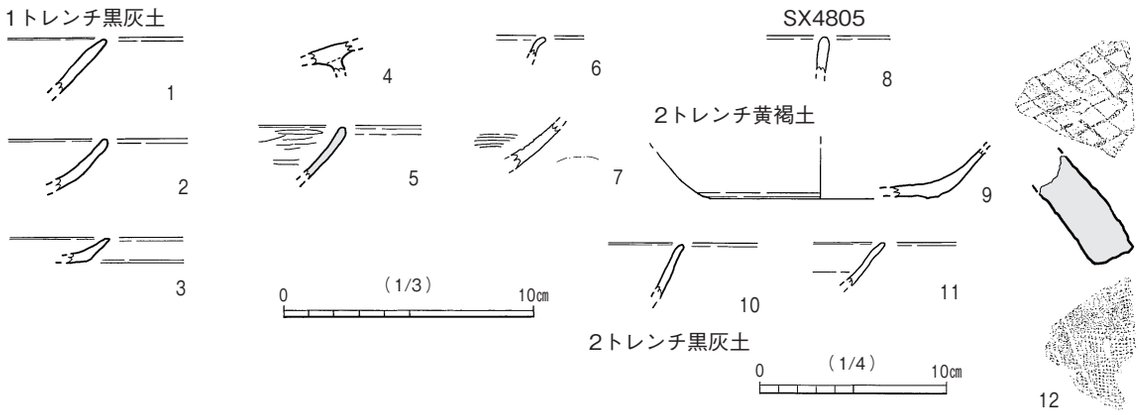


Fig.60　第 235 次調査出土遺物実測図（1/3・1/4）

瓦器椀（５）　５は口縁部で，内面には横方向のミガキを施す。外面は回転ナデで調整する。色は淡褐色。

白磁皿（６）　６は外反する口縁部で，釉は水色味の白色透明である。胎土はわずかに青白色を帯びる白色で，硬質である。白磁皿Ⅵ類か。

青磁碗（７）　７は龍泉窯系碗の体部下部片で，外面上部には青味を帯びた緑色の釉が施釉される。内面には櫛描文がみられる。胎土は緻密で灰色である。

２トレンチ出土遺物

磁器壺（８）　８は小型壺の口縁部の可能性があるもの。釉は淡緑色で厚く，胎土も白色であることから，近世以降の磁器の可能性が考えられる。SX4805 より出土した。

土師器坏（９・10）　９は椀状を呈する体部下部～底部片である。底部外面には糸切り痕と板状圧痕が認められる。色は淡褐色。10 は口縁部で，胎土は極めて精良である。色は淡橙色を呈する。

陶器皿（11）　11 は皿の口縁部と考えられるもので，外面上部～内面にかけて藁灰釉が施釉される。

丸瓦（12）　12 の凸面は長手叩打具により打捺された正格子気味の叩き，凹面には布目の痕跡がみられ，布綴じ痕跡も認められる。端面には分割突線による載面と破面が認められる。焼成は良く，色は灰色を呈する。

（５）　小　結

今回の調査では中世期の遺構面が周辺に広がっていることが確認できた。今回の調査所見は，隣接地で実施した第 159 次調査の成果とも整合しており，より下層には奈良時代にまで遡る遺構面が広がっているものと推定され，古代から中世に至るまで各時代の遺跡が重層的に展開していることが明らかとなった。

遺構が重層的に展開

ただし，今回の調査は狭小な範囲にとどまるため，遺跡の具体的な姿については今後の調査に期待したい。

6　第 237 次調査（観世音寺子院地区の確認調査）

（1）調査概要

経　過　国指定史跡「観世音寺境内及び子院跡附老司瓦窯跡」のうち，観世音寺の背後に広がる子院跡は調査例が少なく，実態については不明なところが多い。特に今回の対象地付近は字名などから観世音寺の子院「西福寺」あるいは「西林寺」の所在地とも推定されている。しかしこれまで付近の発掘調査はほとんど行われておらず，遺跡の実態については不明なところが多い。九州歴史資料館では，これまでも機会があるごとに確認調査を実施して情報の収集に努めてきた。

今回は，谷部の上流側に所在する農業用ため池である山ノ井池の排水施設改修工事の現状申請が提出されたことを受け，掘削予定箇所付近の地下遺構の有無および遺構面までの深さなどの情報を確認するため実施した。調査は太宰府市教育委員会職員の立会のもと，九州歴史資料館が主体となり平成 30 年 1 月 9 日～ 1 月 24 日までの間，改修工事に合わせた確認調査およ

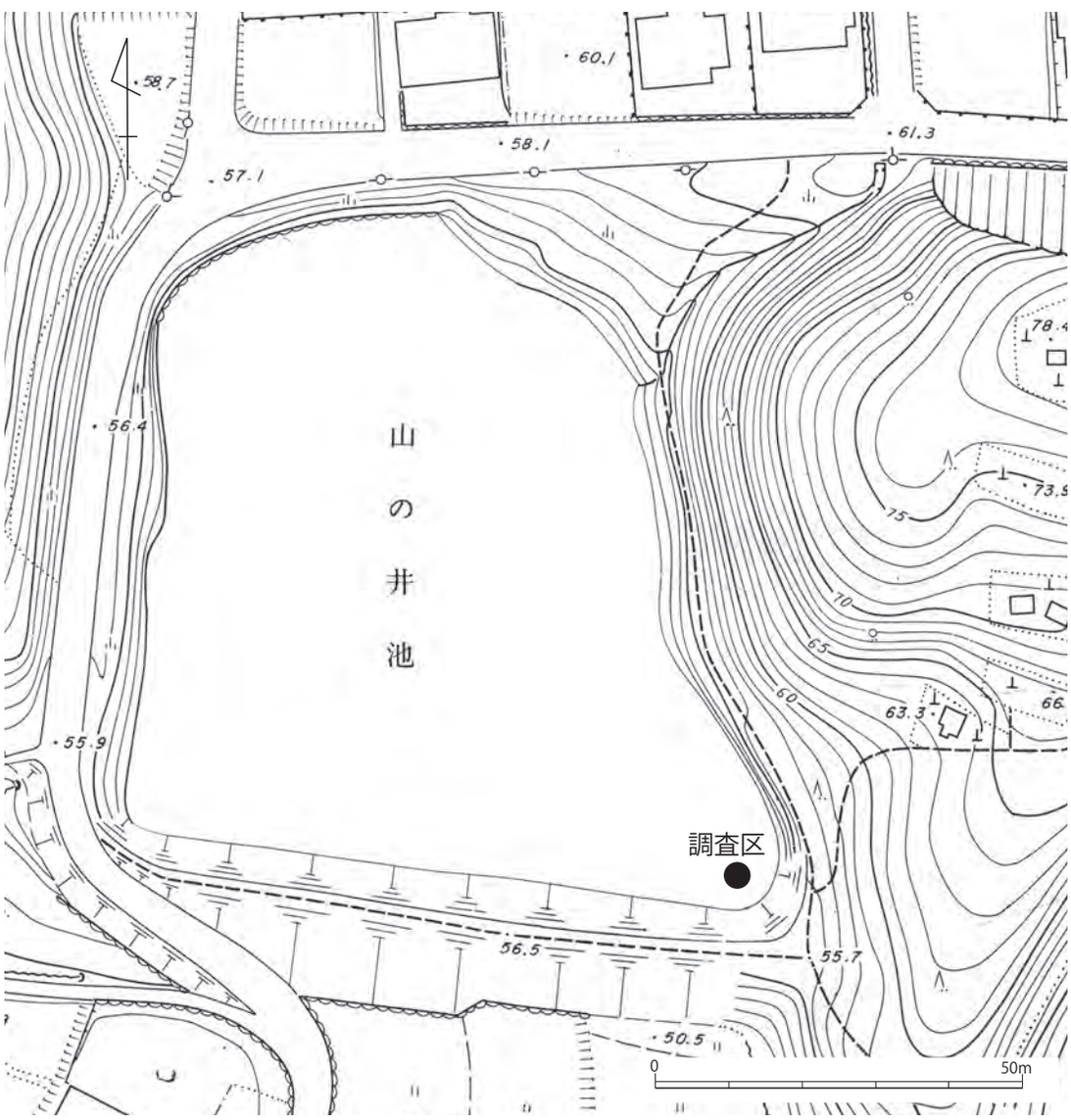


Fig.61　第 237 次調査地位置図（1/1,000）

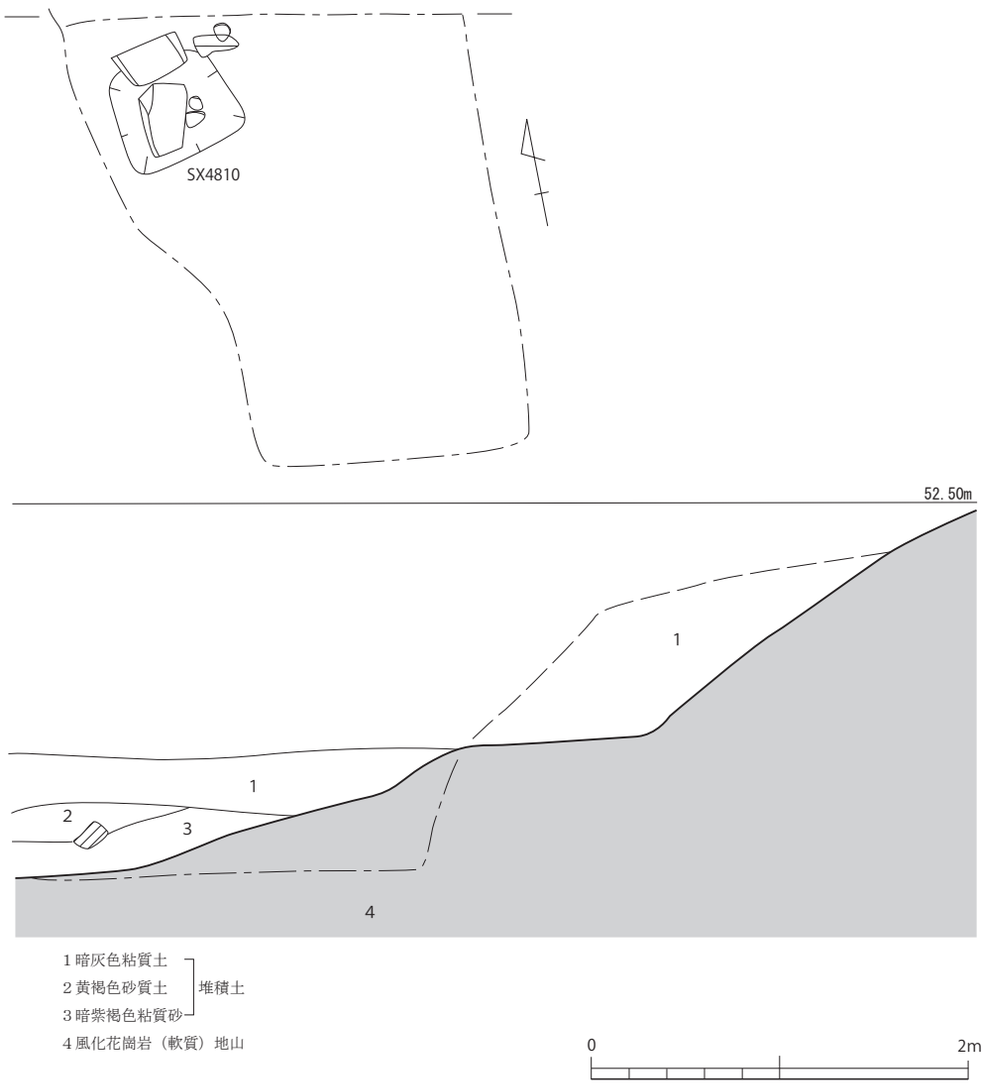


Fig.62　第 237 次調査トレンチ実測図（1/40）

び立会を実施した。重機によってトレンチ掘削を行い，写真撮影，図面作成等を行って，調査を完了した。調査面積は 4 ㎡である。

位　置　地番は太宰府市観世音寺 5 丁目 896 － 1 である。対象地周辺では北側は大宰府史跡第 135 次，南側は大宰府史跡第 11 次調査などを実施している。

（2）トレンチ設定と基本層序（Fig.61・62，PL.13）

観世音寺の北側には幅の広い谷地形が南北にのびているが，調査地は谷筋東側の丘陵斜面裾部にあたり，地形は東から西に向かって傾斜する。斜面上位はため池の水を落とした状態で地山が露出しており，斜面中途では斜面上位からの崩落土砂が，また下位にはため池の滞水に起因する水性堆積の土砂が地山を覆い隠す状況であった。

重機により堆積土砂を除去していくと，標高 51m の付近で斜面の傾斜が緩やかになる地形変換部を検出した。このため，人工的な平坦面の可能性もあるとみて遺構検出を行ったが，明確な遺構は確認できなかった。

この段階では斜面下側が著しい湧水によりさらなる調査が難しかったため，排水環境が整った状態で再度斜面下側の遺構検出を行った。

調査の結果，地山である風化花崗岩を掘り込んだ，略方形プランの土坑１基を検出した。

この調査結果を受けて，工事側と協議を行い，工事の設計変更を行った。設計変更により，遺構は保護され，かつ遺構上面に粘質土からなる保護層が敷設された。

（３）検出遺構

SX4810（Fig.62，PL.13）

地山を掘り込んだ東西62㎝×南北50㎝の方形の土坑である。調査では検出のみ行ったため，深さは不明である。土坑内及びその北側で長さ30㎝程度の方形の石材２個を検出した。土坑内からの出土遺物は確認できなかったが，形態から火葬壙の可能性もある。

火葬壙か

（４）出土遺物（Fig.63・64，PL.24 ～ 26）

いずれも池の堆積土の中から発見したもので，遺構に伴うものではない。また池の堆積土中の発見であることから，出土遺物のほとんどは摩滅及び器表の剥離，欠損が顕著である。

石塔類

今回の調査で出土した石塔類は,「五輪塔」,「板碑」の２種類と不明石製品１点がある。その他，パンケース15箱に及ぶ，長さ20㎝前後，幅15㎝前後，厚さ2㎝前後の中世墓周囲に敷かれたと想定される緑泥片岩製の河原石を多量に発見している。なお，この多量の河原石には墨書等は確認できなかった。

五輪塔（組み合わせ式）

空風輪　空風輪（１・２）　いずれも白味を帯びた花崗岩製のほぼ完形品で，下部には円形の枘様突起を造り出している。１は空輪頂部の尖りが弱く，風輪も丸味を帯びているが，表面の摩滅・剥離も顕著であるため，摩滅・剥離によるものと考えられる。法量は高さ17.7㎝，空輪部最大幅11.3㎝，風輪部最大幅12.6㎝を測る。２は１に比べると表面の摩滅・剥離が少なく，風輪もやや角張っている形状を残す。法量は高さ23.3㎝，空輪部最大幅14.5㎝，風輪部最大幅16.9㎝を測る。

火輪　火輪（３）　３は６割近く残存する凝灰岩製であるが，上下面を中心に摩滅・剥離が極めて顕著であるため，本来の形状を復元するのは難しい。降り軒はほぼ直線的に整形され，軒は斜めではなく,そのまま直線的になる可能性がある。枘穴は下面が径11.4㎝程度の円形であるが，上面は欠損・剥離が顕著であるものの，６㎝程度の浅い方形の枘穴になる可能性が高い。法量は高さ9.3㎝，最大幅21.5㎝を測る。

水輪　水輪（４～７）　４は白みを帯びた花崗岩製，５・６は凝灰岩製，７は砂岩製である。４は円球形をなす体部中央四方に梵字を薬研彫りで刻んだものである。梵字は剥離するものもあるが，図正面が「キリーク」，右側面が「サク」，左側面が「タラーク」，裏面が「ウーン」を刻

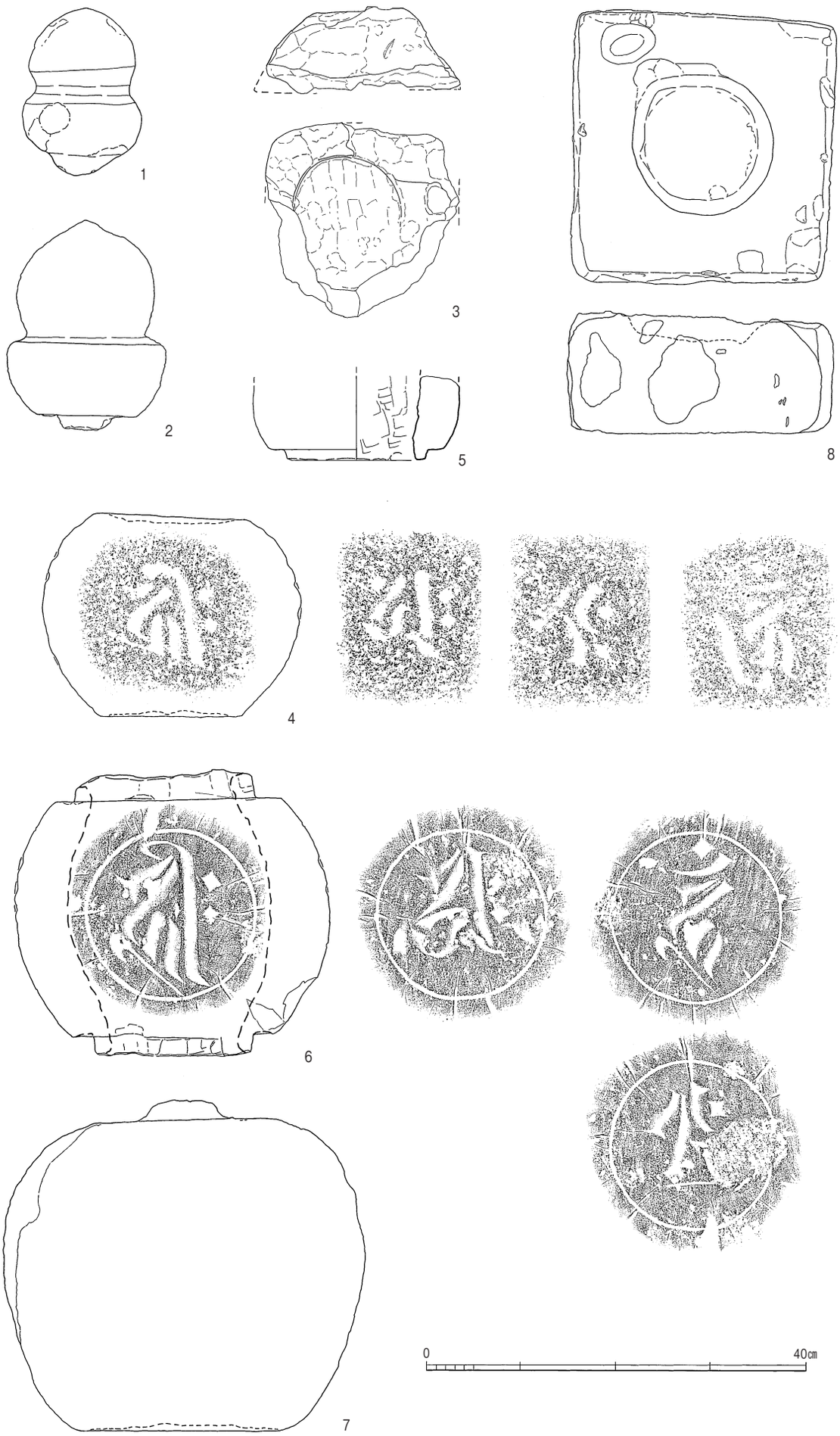


Fig.63　第 237 次調査出土遺物実測図①（1/6）

んでいると考えられる。法量は高さ 21.6㎝，最大幅 27.3㎝，頂部径 16.3㎝，底部径 15㎝を測る。完形品。

５は底部径 14.8㎝で，６に比べると小型のもので，高さ１㎝弱の低い枘を設けているが，６をみると下部の枘の方が高さが低いことから，下部片と考え，図化した。外面は摩滅が顕著であるが，内面には幅２㎝程度の鑿痕が残る。残存高さ 9㎝。底部は１/８程度残存する。６は摩滅・剥離・欠損が少なく残りが良い，内面空洞のほぼ完形品である。円形の体部中央に径 17.7㎝程度の月輪を刻み，その中に梵字を四方に薬研彫りで鋭く刻む。図正面が「キリーク」，右側面が「サク」，左側面が「カーン」，裏面が「タラーク」になると考えられる。内径最大 21.5㎝を測る。内面には幅 1.5㎝程度の鑿痕がそのまま残るが，外面は丁寧に仕上げており，上下の枘様円筒部のみわずかに鑿痕が残る。法量は高さ 30.5㎝，最大幅 33.4㎝，頂部径 18.5㎝，底部径 16㎝を測る。

７の法量は高さ 35.2㎝，最大幅 38.4㎝，頂部径 19㎝程度，底部径 21㎝を測る。完形の大型品で，火輪との接続部には径 10㎝，高さ２㎝の枘様突起が造り出す。頂部・底部とも平らに仕上げており，表面は剥離が顕著である。

地　　輪　地輪（８～10）　８～10 はいずれも凝灰岩製である。８は暗褐色を呈する軟らかい石質で，池の堆積土中にあったことから，摩滅・剥離が著しく，表面はほとんど剥離している。法量は高さ 13㎝，最大幅 28.2㎝。上部は径 15㎝を測り，上面には深さ 2.3㎝程度の円形の彫り込みを施すが，図の左上側の摩滅が顕著である。また上面の孔は自然の嵌入によるものと考えられる。９・10 は灰色を呈し，８に比べ石質がやや硬質のもの。９は１/２程度欠損するもので，上部には径 19.7㎝程度，深さ 4.8㎝程度の円形の彫り込み，下部には長さ 26㎝程度，深さ９㎝程度の方形の彫り込みを施す。また上部の彫り込みは丁寧に仕上げるが，下部の彫り込みは幅 1.5㎝程度の鑿痕がそのまま残る。法量は高さ 22.3㎝，最大幅 39.1㎝を測る。

10 はほぼ完形品で，法量は高さ 16.3㎝，最大幅 32.8㎝，上部の円形彫り込みは径 17.3㎝，深さ 3.5㎝，下部の方形彫り込みは幅 24㎝程度，深さ 8.7㎝程度を測る。調整は幅２㎝程度の鑿痕がそのまま残る下部彫り込み部以外は丁寧に仕上げる。

また図正面の１面のみ墨書が認められる。この文字を赤外線カメラで確認したところ，判読可能な文字は次の通りである。

墨書銘　系　〔楽カ〕　経　右
　　□　乃　出　孝
　　者
　　□

なお，「系」左側の五行目についても墨痕はあるが，文字は判読できなかった。長らく池の中にあったことから，判読できた文字は少なく，意味は不明であるが，追善供養に関する内容と考えられる。

板　　碑　板碑（11）　花崗岩製で，梵字や明確な加工はないものの，正面をほぼ平らに仕上げていること，石塔類とともに出土したことなどから，板碑の可能性が高いと思われる。裏面は荒削り

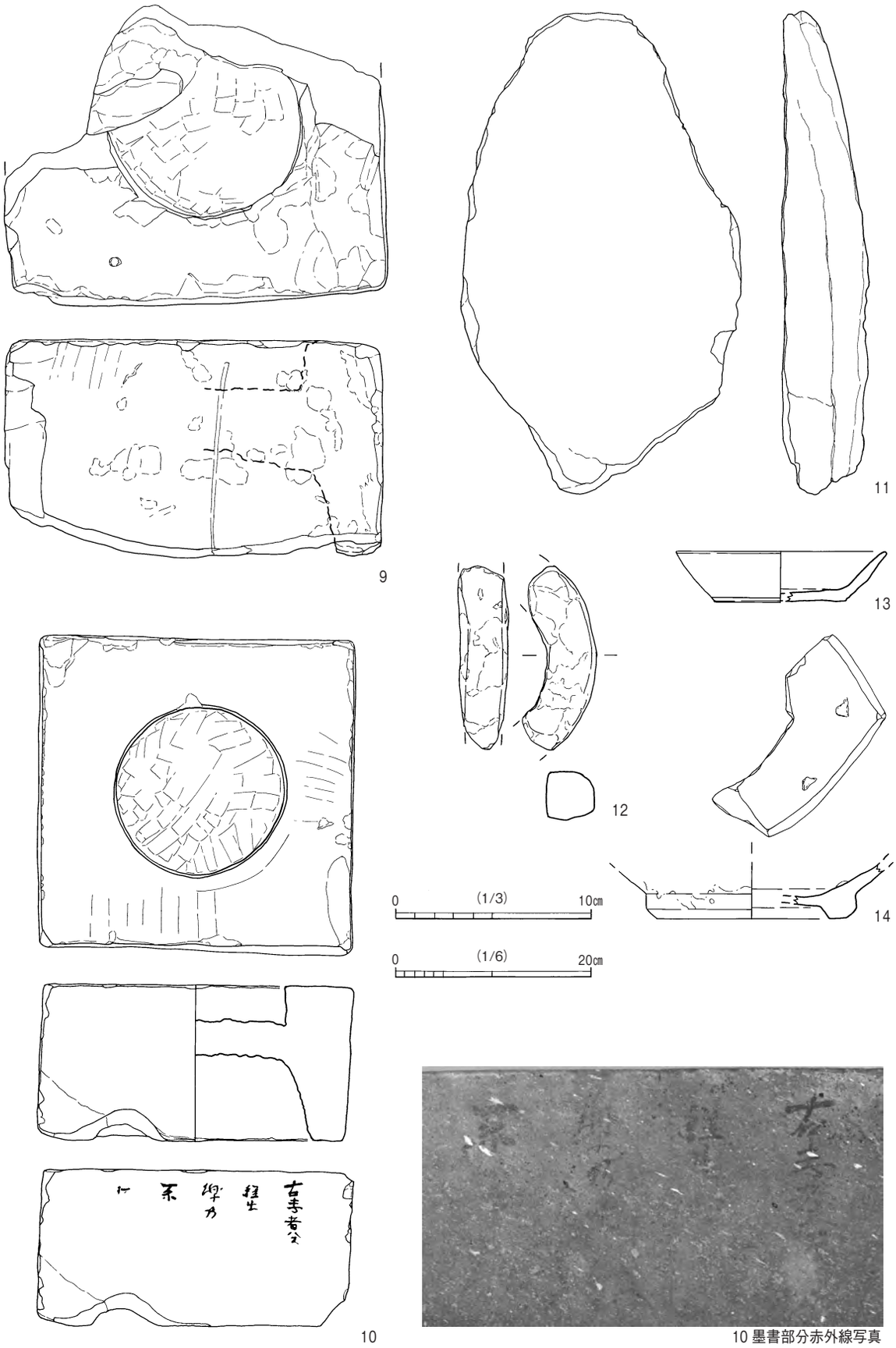


Fig.64　第 237 次調査出土遺物実測図②（13・14 は 1/3，他は 1/6）

のままで，法量は高さ 49.6㎝，最大幅 28.9㎝，最大厚さ 8.9㎝を測る。

不明石製品（12）　凝灰岩をドーナツ状に加工したものである。全面表面の剥離が顕著である。法量は残存長 18.9㎝，幅，厚さとも 5 ㎝を測る。

土器・陶磁器類

土師器坏（13）　底部が 1/6 弱残存するもので，口径 10.8㎝，底径 6.8㎝，器高 2.6㎝に復元される。底部外面は摩滅しているものの，糸切りを施した可能性がある。色は淡褐色。

陶器鉢（14）　内外面淡灰黄色の釉がかけられたもので，内面底部には胎土目が 2 ヶ所残る。生地の色は淡褐色を呈する。

（5）小　結

今回の調査における出土遺物はすべて池の堆積土から発見されたものであるため，遺構に伴うものではないが，石塔及び大量の緑泥片岩の川原石を発見していることから，調査対象地東側の丘陵上には中世墓が存在する可能性が高いと推測される。この中世墓は石塔の型式など，14 ～ 16 世紀代の時期まで存続した墓地である可能性がある。

中世墓地か

また小型の方形土坑である SX4810 は，調査では検出のみにとどまり詳細な構造は不明であるものの，本調査地点の北約 300 mに位置する観世音寺子院跡の推定金光寺跡で確認された火葬壙Ⅱに類似する。推定金光寺跡の火葬壙Ⅱは臥屈位の状態で木棺に納め，火葬したものとされており，本例もその可能性がある。なお，推定金光寺跡の火葬壙Ⅱは，15 世紀代を中心とする時期に比定されており，本例に伴わないものの，上層の堆積土から出土した石塔類ともおおむね整合する。

子院跡関連

観世音寺には，かつて 48 もの子院が存在したとされ，今回の対象地周辺にも推定西福寺や推定西林寺などが比定されている。今回の調査成果から，観世音寺子院跡に関連する遺跡の存在が予想されるため，今後も継続的な調査が必要である。

第 237 次調査石塔出土状況

7　第 238 次調査（政庁前面広場地区の確認調査）

（1）調査概要

経　過　大宰府政庁跡の周辺には，これまでの発掘調査で広範囲に建物群などが展開していることが知られており，大宰府の様々な機能を担う諸官衙が存在していたと考えられている。

今回の対象地は，大宰府政庁の前面に広がるいわゆる政庁前面官衙域の中でも中央に位置する前面広場地区で，これまでの発掘調査によって幅 160 mを超える規模の空閑地が広がっており，その中央北西寄りには「朝集殿」とも目される四面廂の大型掘立柱建物 SB2300 があることが明らかとなっている。大宰府政庁の周辺に広がる官衙群などを考える上で極めて重要な地区であることから，これまで九州歴史資料館では機会があるごとに確認調査を実施してきた。

今回の調査は，SB2300 の南側 1/3 ほどの範囲に重複するように計画された既存集合住宅の建替にあたり，事業者より地盤が軟弱であることから建物基礎を補強するための杭打設が必要

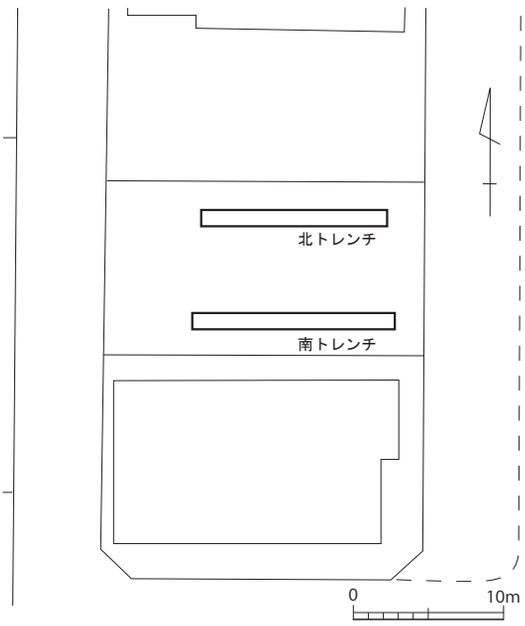


Fig.65　第 238 次調査地位置図（1/500）

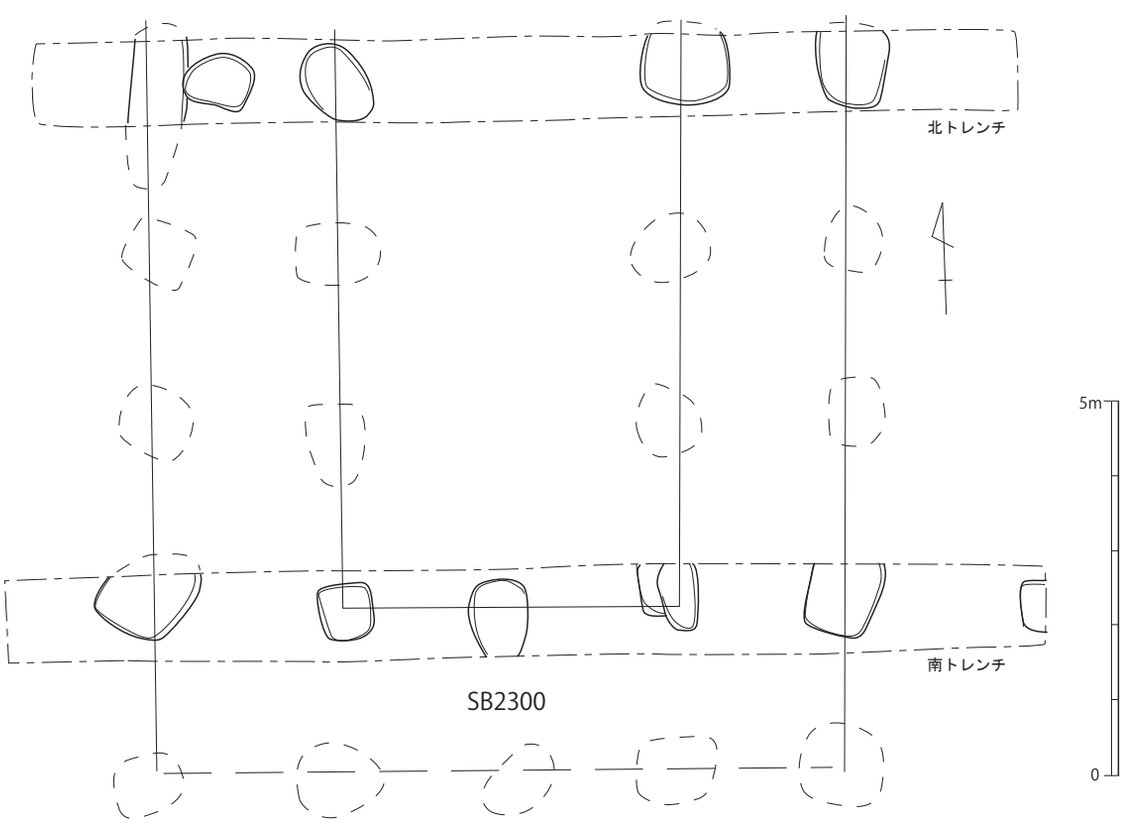


Fig.66　第 238 次調査トレンチ実測図（1/100）

との見解が示された。このため，打設する杭の位置がSB2300の柱穴と重複しない確実な位置への建設計画の変更を依頼するため，過去の発掘調査の記録と現地の状況との詳細な照合を行う必要があることから，確認調査を行った。

調査は太宰府市教育委員会職員の立会のもと，九州歴史資料館が主体となり，平成30年1月25日に実施した。重機によってトレンチ掘削を行い，発掘作業員による清掃や写真撮影，図面作成の後，即日埋戻して調査を完了した。調査面積は27㎡である。

位　置　大型掘立柱建物SB2300南部分に位置し，地番は太宰府市観世音寺2丁目8番である。大宰府史跡第86次調査区に重複する調査区である。

（2）トレンチ設定と基本層序（Fig.65・66，PL.14）

調査にあたっては，計画敷地内に東西方向に2本のトレンチを設定した。北トレンチは，長さ13 m，幅1 mで，南トレンチは，長さ14 m，幅1 mである。

いずれのトレンチでも発掘調査後の埋戻し土80㎝ほどを重機で掘削し，遺構面を露出させた後，発掘作業員により遺構検出を行い，過去の記録どおりの位置・形状でSB2300の柱穴を検出することができた。

杭の設計変更　これをもとに杭の打設位置について詳細な記録を作成し，遺構を避ける形で杭を配置することで設計変更を行った。

第238次調査北トレンチSB2300柱穴検出状況（西から）

Ⅳ　大野城跡の確認調査

Ⅳ　大野城跡の確認調査
１　大野城跡第 55 次調査（原地区の確認調査）…… 115
（１）調査概要 …… 115
（２）トレンチ設定と基本層序 …… 115
（３）各トレンチの調査成果 …… 116
（４）検出遺構 …… 122
（５）出土遺物 …… 122
（６）小　　結 …… 124

1　大野城跡第 55 次調査（原地区の確認調査）

（1）調査概要（Fig.67）

経　過　これまで特別史跡「大野城跡」の確認調査は，基本的に四王寺山の峰々をつなぐ城壁線やその内部に点在する建物群などを対象に実施されていたが，広大な面積を有する山麓部における確認調査はほとんど行われておらず，関連する遺構の有無や広がり，あるいは大野城跡の前後の時代をも含む土地利用の変遷については情報の蓄積が進んでいない状況にある。

一方で，近年，宅地開発等が指定地の境界に近い山麓部にまで及ぶようになってきており，将来的な史跡の活用等を進める上で，遺跡の状況を把握することが重要になってきている。特に今回の調査地周辺は特別史跡「大野城跡」に含まれると同時に，文献や近世の絵図などから寺院の存在が知られる「原遺跡」の包蔵地にも含まれる重要な地点の 1 つでもある。

原遺跡にも含まれる

今回の調査は，急傾斜地対策の一環として，砂防ダムの設置が計画されたことを機に，遺跡の有無や広がり，時代や性格などの把握を目的とした確認調査を実施したものである。

調査は，太宰府市教育委員会職員の立会のもと，平成 28 年 9 月 20 日に着手し，翌 21 日に完了した。掘削は重機により行ったが，湧水がある箇所が多いこともあり，基本的には掘削，写真・図化後，埋戻しを 1 トレンチずつ進めていった。調査面積は 67.85㎡である。

位　置　調査地は大野城跡の指定地の南東部に位置する。調査地の西側や南側では太宰府市教育委員会により「原遺跡群」として調査が積み重ねられており，調査地のすぐ北側の尾根上には普賢菩薩を祀る社も営まれ，宗教的空間の只中に位置していると考えられる。調査地の地番は太宰府市大字太宰府 1451，1475 － 1・8 ～ 10，1478，4790，5217 である。

（2）トレンチ設定と基本層序（Fig.68・70）

トレンチ設定　調査地は北西から南東に向って広がる谷地形で，北側と南西側にある尾根筋により囲まれている。谷筋は現代まで耕作地として利用されており，階段状の地形で，所々石積み等も遺存している。周辺の調査では古代に遡る寺院跡が確認されていることから，こうした段地形や石垣なども古代や中世に遡る，あるいはそうしたものを下敷きにしている可能性があることから，各平坦面にトレンチを設定し，遺跡の有無や広がりを把握することとした（1 ～ 6・8 ～ 12 トレンチ）。ただし，現地には雑木や笹竹等が繁茂していたためトレンチ設定に制約があり，谷部全体の調査を十分に行うことはできなかった。また，調査地西側の斜面際に水路があり，その周辺は溢れた流水で調査できる状況ではなかったことから，調査区は東側に寄って設定せざるを得なかった。なお，谷の南西側の丘陵尾根筋も，祭祀遺構などの存在が考えられることから 2 カ所に調査区を設定した（7 － 1・2 トレンチ）。

基本層序　既述のように，谷筋に沿って階段状に耕作地が形成されていたことから，表土は近年までの耕作地であったことに由来する暗灰褐色土ないしは黒褐色土である。この下層にはより古い時期の耕作土とみられる明灰褐色土や明黄褐色土があり，さらに下層には明灰色・明灰褐色・明黄褐色を呈する床土がみられた。これを除去すると，淡灰褐色・灰黄褐色・灰白砂な

どの地山となり，５トレンチなどは風化花崗岩に近い風化土が地山となる。地山面にはマンガン等の沈着が顕著であった。

丘陵部の７－１・２トレンチでは，表土（腐植土）の下に，締まりのない褐色土が堆積しており，これを除去すると黄褐色粘質土の地山となる。

（３）各トレンチの調査成果（Fig.69，PL.14 ～ 19）

１）谷部の調査

１トレンチ　調査地南東側にある広い平坦地の間に石積みが確認できたことから，石積みの時期や構造，各平坦面の状況を把握するため，石垣に直交する方向で調査区を設定した。調査の結果，石積みについては層位的な観察から近現代の造成に伴う構築物であることが判明した。一方で，地山面に径 20 ～ 40cm 程度の円形の掘り込みが複数確認でき，周辺に遺跡の広がりが存在することが明らかとなった。いずれも上面検出に留めているため詳細は不明であるが，埋土はいずれも明灰褐色土である。

遺構を確認

２トレンチ　当調査区は，１トレンチで確認した遺跡の広がりと，丘陵から谷への地形の変換点を把握するため，谷の中心へと向かう傾斜に沿って設定した。調査の結果，遺構面はごくわずかに西側へ向かって傾斜することが判明した。また，トレンチの中央部は長さ 5.5 mほどにわたって黒褐土の溜まりがみられた。柱状土層図に示したように，黒褐土は擂鉢状に堆積しているようであるが，遺物を全く含まない状況から，遺跡形成以前の堆積層と判断した。なお，調査区北東端では土器溜まり SX01 を確認した。

土器溜まり

３トレンチ　南東端の平坦地において，谷への地形の変化を把握するため，谷に直交する方向で設定した。調査の結果，南西方向に向かって傾斜する地形の落ちを確認した。この傾斜の上には黒褐色を呈する厚い堆積層がみられた。地形の落ちを確認した時点から湧水が激しくなり，西側の谷地形の状況については確認することができなかったが，周辺の調査状況などからすると，谷への傾斜がより急になるものと推定される。当トレンチでは遺構・遺物は確認できなかった。

４トレンチ　谷部の中央の段地形に残る石垣の前面の状況を把握するため，石垣の前面側に石垣に直交する方向で設定した。調査の結果，地表化 1.0 mで地山に達したが，その上には谷部の流水によって堆積したとみられる厚さ 0.5 mの礫混じりの粗砂層がみられた。遺構面は既に流水によって削平されているとみられ，石垣はその堆積層よりも新しいものである可能性が高いことが明らかとなった。当トレンチでは遺構・遺物は確認できなかった。

５トレンチ　谷の最も奥にある平坦面の状況を把握するため，地形の傾斜に直交する方向で設定した。調査の結果，耕作土に由来する表土を除去すると，谷部に堆積した砂層が現れ，流水によって運ばれたとみられる礫を多量に含む粗砂層の堆積もみられた。地山は現在の谷筋（西側）に向って急激に落ち込んでおり，近現代になって元々の谷地形を埋め立てて平坦地を広げて耕作地としていることが判明した。当トレンチでは遺構・遺物は確認できなかった。

６トレンチ　５トレンチの調査状況をうけて，遺構の有無と谷地形への変換点を把握するため，平坦地の東寄りに，地形の傾斜に直交する方向で設定した。調査の結果，調査区の東端に

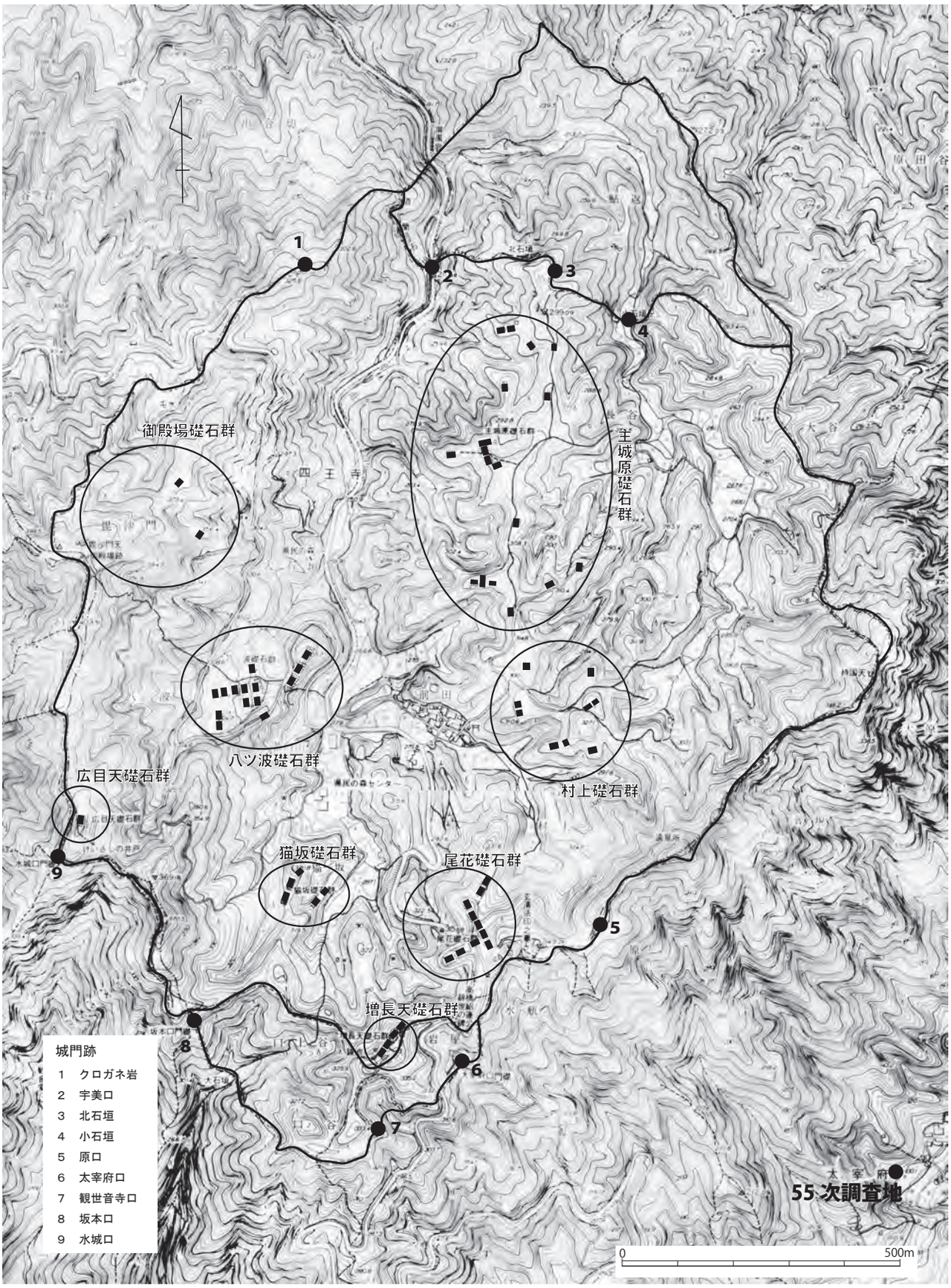


Fig.67　大野城跡全体図（1/10,000）

Fig.68　大野城跡第 55 次調査トレンチ配置図（1/1,000）

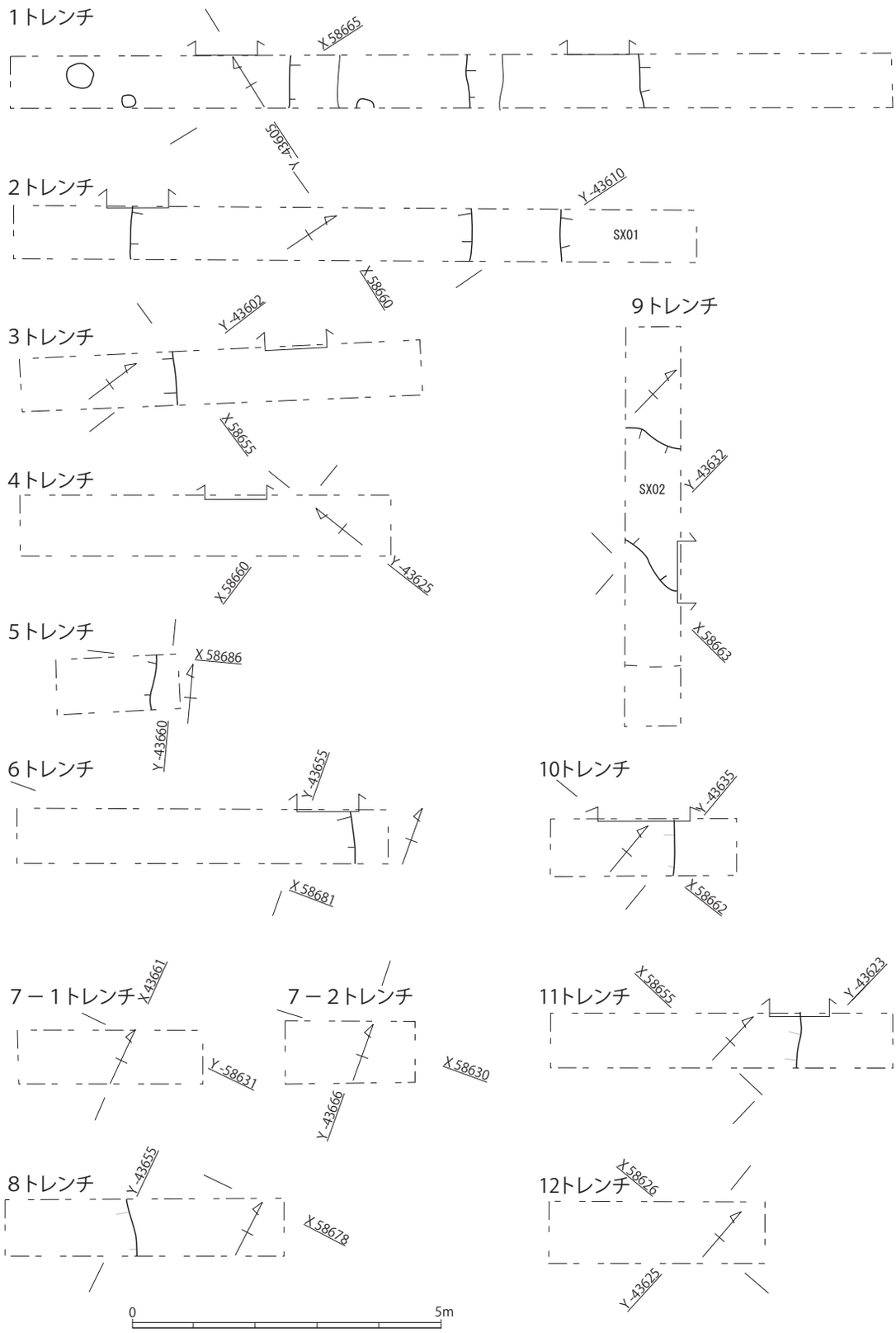


Fig.69　大野城跡第 55 次調査トレンチ略測図（1/100）

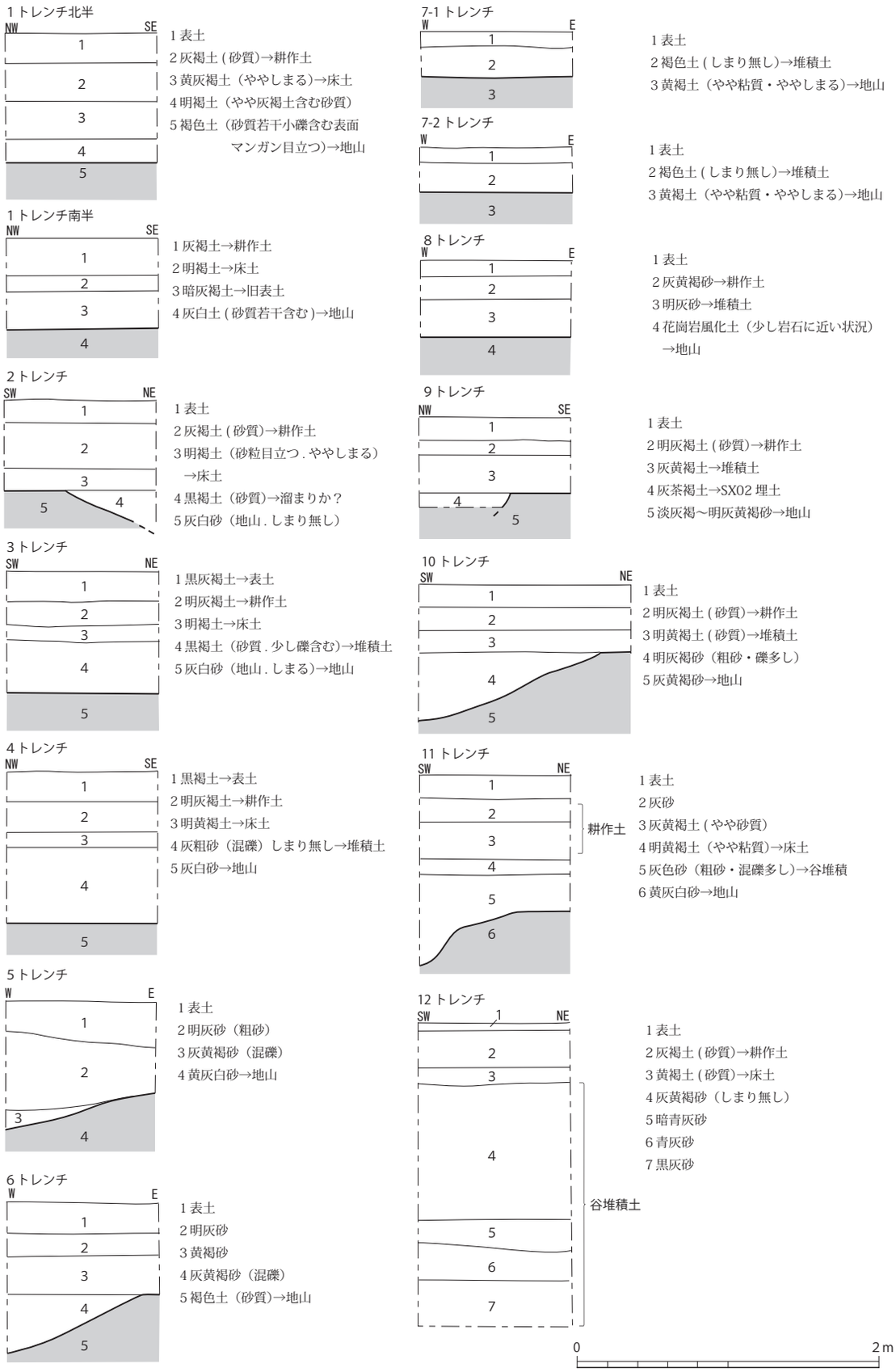


Fig.70　大野城跡第 55 次調査トレンチ土層図（1/40）

近いところから西に向かって急激に地形が落ち込むことが判明した。谷部には流水によって堆積したとみられる礫混じりの黄褐砂（３層）と灰黄褐砂（４層）が厚く堆積していた。当トレンチでは遺構・遺物は確認できなかった。

８トレンチ　東西に広い平坦地であることから，谷の流水の影響が少ないと推定される東側に寄せてトレンチを設定し，あわせて５・６トレンチで確認した谷地形の続きについても確認を行った。調査の結果，トレンチ東側では床土の直下で花崗岩に近い花崗岩風化土が確認でき，元々の地形を大きく削平して耕作地が形成されていることが判明した。また，調査区西側は急激に落ち込む地形となっていて，多数の礫を含む明灰砂が堆積していた。そのことから，流水によって元の地形が抉られるとともに運ばれてきた礫が堆積したものと推定される。調査区東側の地山面に遺構・遺物は確認できなかった。

９トレンチ　谷部中央にある石垣の後方の状況を把握するため，４トレンチとも軸を合せて石垣に直交する方向で設定した。調査の結果，石垣の裏込め土はしまりのない暗灰褐土で，近現代の耕作土である明灰褐土（２層）の直下から掘り込んでいることが判明した。そのため，石垣は古代や中世に遡るものではなく，近現代になって構築されたと推定でき，４トレンチでの調査状況とも齟齬の無い結果が得られた。一方で，土器小片を包含する土坑状（もしくは溝か）の遺構（SX02）が確認できた。

遺構を確認

10トレンチ　９トレンチでは遺構の存在を確認したが，５・６・８トレンチから続く谷筋は未確認であったことから，谷筋とは直交する方向で調査区を設定した。調査の結果，西側へと急激に落ち込む谷地形の位置を確認した。落込みには礫を多数含む明灰褐粗砂が厚く堆積しており，流水による堆積層が広く覆っていることが判明した。明灰褐粗砂の直上に耕作に伴う床土が確認できることから，谷部がある程度埋没した後に，耕作地として造成されたことが窺える。9トレンチで確認した遺構の続きはなく，当トレンチの方までは広がらないようである。他に遺構・遺物は確認できなかった。

11トレンチ　調査区を設定した平坦面は１・２トレンチで遺構の存在を確認しているが，谷筋の範囲が２・４トレンチでは確定することができなかったことから，谷への地形の変換点を把握するため，谷に直交する方向で設定した。調査の結果，耕作土と床土の下層に谷部の堆積層である灰色粗砂（５層）がみられ，その下に西側へと急激に落ち込む地形の変換点を確認した。地形の落ち込み部分には１m近くの大きな石をはじめ，多数の礫を含む砂層がみられた。そのことから，周辺はかなり激しい流水によって地形が抉られ，堆積層が形成されていることが判明した。遺構・遺物は確認できなかった。

12トレンチ　他のトレンチで確認した谷筋の西岸の状況を把握するため，谷に直交する方向で設定した。調査の結果，地表下2.2 mでも地山に到達せず，かなりの厚さの堆積層が存在することが判明した。一部の層位には東に向かって緩やかに下るような傾斜も認められることから，谷の西岸は調査区よりもさらに西側に位置し，谷筋は南西側の尾根筋に寄った位置に流れていたことが窺える。ただし，３トレンチでも谷への落ちを確認していることから，谷筋は急激に広がるような形であったことが推定される。遺構・遺物は確認できなかった。

２）丘陵部の調査（Fig.68 ～ 70）

７－１トレンチ　これまで四王寺山の峰々や山麓部などでは信仰に関わる様々な遺構が確認されており，今回の調査地の北側の尾根にも普賢菩薩を祀る社が存在する。そのため，調査地の南西側にある尾根筋も墓地や経塚といった遺構が存在する可能性があることから，尾根がのびる方向に調査区を設定した。調査の結果，表土・堆積土の下は黄褐土の地山となり，遺構・遺物は確認できなかった。

７－２トレンチ　当トレンチも７－１トレンチと同様の目的で設定したが，調査状況は全く同じで，遺構・遺物は確認できなかった。

（４）検出遺構（Fig.69・70）

SX01（Fig.69）

土器溜まり

２トレンチの北東端に位置し，少なくとも長さ 2.2 m以上を測る。遺構検出段階から土師器皿を主体とする土器片が面的に広がる状況が確認できた。埋土は暗灰褐色土で，１～２cm 程度の炭化物が混じっていた。遺構の時期を確認するため，表面にみえる土器片を取り上げたが，土器群の下はすぐに地山となるようで，遺構の深さは最大でも 10cm 程度と推定される。

SX02（Fig.69）

９トレンチの中央部に位置し，調査区を東西に横切る形で検出できた。東西の長さは不明であるが，幅は 1.6 mほどである。不整形な土坑を想定しているが，東西にのびる状況から溝となる可能性も否定できない。埋土は灰茶褐色土で，図化には耐えないが，土師器細片が数点出土した。

（５）出土遺物（Fig.71，PL.26）

SX01

土師器坏（１～７）　いずれも丸底となる坏で，口縁端部付近をごく僅かに外反させるものが多い。底部外面は，磨滅による不鮮明なものを除くといずれもヘラケズリにより調整し，内面には２・５・６のようにヘラミガキを行うものもある。

土師器皿（８～ 27）　いずれも低平な小皿で，口径 9.6 ～ 11.1cm 程度でまとまる。内底面のナデ調整により底部がやや丸底状をなす 14・20・22 などもあるが，基本的には底部はヘラ切り未調整で，平底とな

Tab.14　土器溜まり SX01 出土土師器法量

遺物番号	器種	口径	器高	底径	底部調整	板状圧痕
Fig.71－１	坏	14.4				
Fig.71－２	坏	14.4				
Fig.71－３	坏	14.8				
Fig.71－４	坏	15.0				
Fig.71－５	坏	15.2				
Fig.71－６	坏	15.3	3.8			
Fig.71－７	坏	15.8				
Fig.71－８	皿	9.6	1.3	6.6	ヘラ切り	○
Fig.71－９	皿	9.6	1.15	7.2	ヘラ切り	○
Fig.71－10	皿	9.8	1.05	7.6	磨滅	
Fig.71－11	皿	9.8	1.05	7.3	ヘラ切り	○
Fig.71－12	皿	9.8	1.1	7.2	ヘラ切り	○
Fig.71－13	皿	10.0	1.05	7.1	ヘラ切り	
Fig.71－14	皿	10.0	1.45	6.2	磨滅	○
Fig.71－15	皿	10.0	1.2	7.1	ヘラ切り	○
Fig.71－16	皿	10.0	0.7	8.0	ヘラ切り	
Fig.71－17	皿	10.15	1.3	7.85	ヘラ切り	○
Fig.71－18	皿	10.2	1.2	7.0	ヘラ切り	
Fig.71－19	皿	10.25	1.2	8.7	ヘラ切り	○
Fig.71－20	皿	10.5	1.55	8.2	ヘラ切り	○
Fig.71－21	皿	10.6	1.3	7.2	ヘラ切り	○
Fig.71－22	皿	10.6	1.8	7.9	ヘラ切り	○
Fig.71－23	皿	10.6	1.4	6.6	ヘラ切り	
Fig.71－24	皿	10.6	1.2	7.6	ヘラ切り	
Fig.71－25	皿	10.8	1.35	8.8	ヘラ切り	○
Fig.71－26	皿	11.0	1.2	7.4	ヘラ切り	

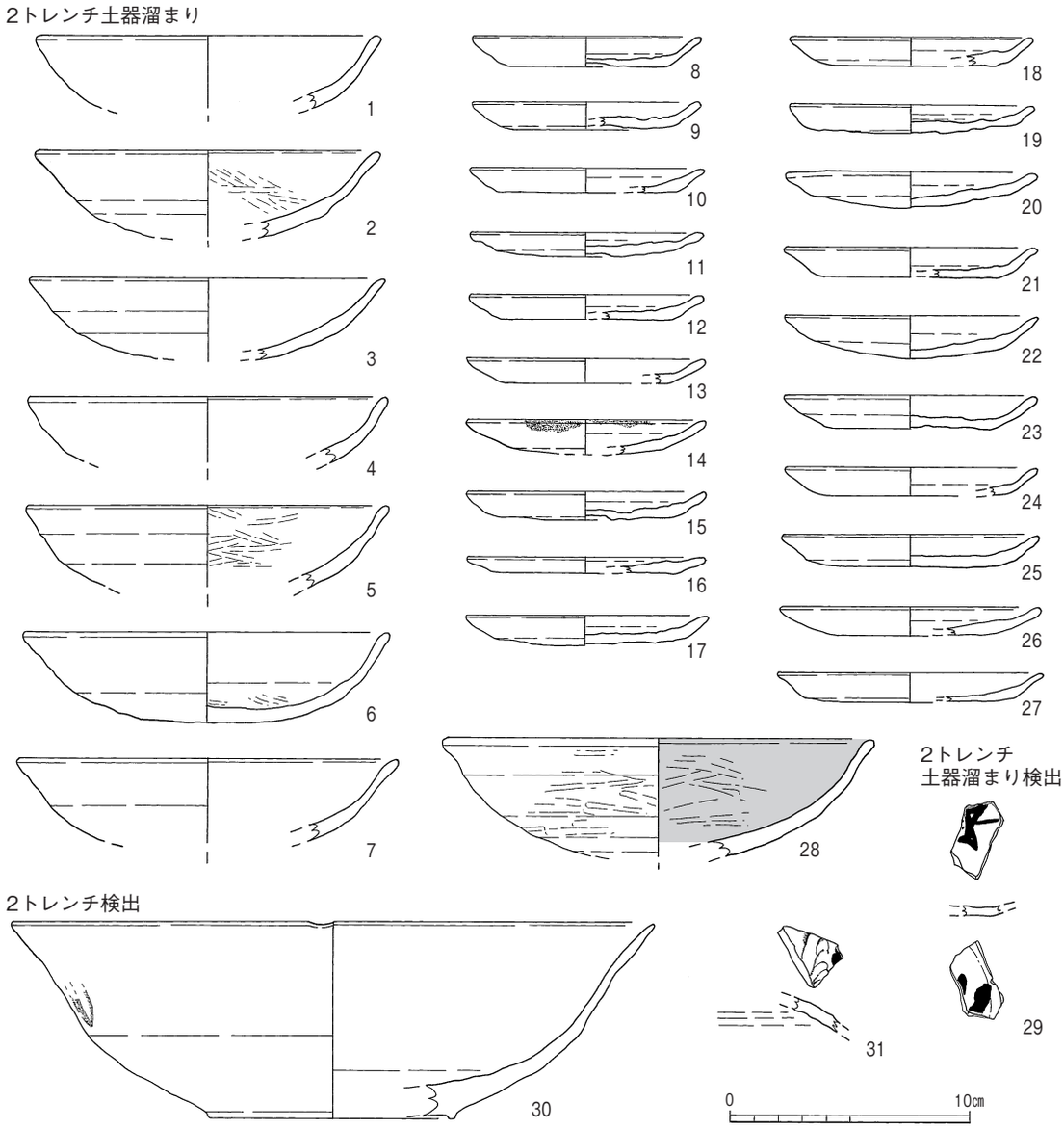


Fig.71　大野城跡第 55 次調査出土土器・陶磁器実測図（1/3）

る。また，底面に板状圧痕を残すものも多い。

黒色土器椀（28）　内面黒色のＡ類で，口縁端部を少し外反させる。

２トレンチ土器溜まり検出

土師器皿（29）　小皿の小片で，底部はヘラ切り未調整である。内面に墨書がみられるが判読は難しい。底部外面には墨痕がみられる。８～ 27 の皿が淡灰色～淡褐色を基調とするのに対し，29 は淡橙褐色で色調に違いが認められる。

２トレンチ検出

トレンチ内の遺構検出時の出土資料であるが，土器溜まり付近で取り上げたもので，上述の土器溜まりの一群に伴っていた可能性がある。

白磁皿（30）　復元口径 26.7cm とやや大きい。口縁部の一部に凹みがみられ輪花と考えられ，体部には箆押左縦線がみられる。全体に薄く釉が掛かり，高台内のみ露胎である。

青白磁壺（31）　外面は陽刻による文様を施し，淡青白色の釉が掛かる。内面は回転ナデ調整である。

（5）小　　結

今回の調査では，谷部の調査区において遺構・遺物を確認することができた。特に，谷筋の北東側（左岸）の1・2・9トレンチなどで柱穴の可能性がある円形の掘り込みや土器溜まり，不整形な土坑（もしくは溝状遺構）などが確認でき，調査対象地の広範囲に遺跡の広がりが確認できたことは重要である。また，現状の段地形は近現代になって石垣等を伴う耕作地として利用され，地形の改変を少なからず受けていることも事実であるが，複数段にわたって遺構が展開していることから，谷沿いの丘陵地を段造成していくことは古代にまで遡って行われたことが分かる。

段造成は古代に遡る

また，現在は西側の尾根裾に細い水路が設けられているが，調査の結果，元々の谷筋も西寄りを流れていたことが判明した。ただし，谷部の堆積土中には数十センチから1mほどの石までみられ，土石流を含む度重なる激しい流水が生じていたことが窺え，遺跡が形成されていた当時の谷筋とは規模や形状は異なるものと考えられる。

11世紀後半

今回見つかった遺構群は，遺構から出土した土器類からおおむね11世紀後半ごろまで遡るものであることは確かであるが，ごく一部の調査にとどまるため，その前後の時期も含めて変遷があったものと推定される。

調査地は「特別史跡大野城跡」の史跡指定地内に位置するが，原地区一帯は平安期から鎌倉期に隆盛し「原八坊」「原山寺」とも称された「原山無量寺」の北端に含まれている。そのため，周辺は太宰府市教育委員会により「原遺跡群」として調査が進められており，30次近くの調査が実施されている。今回見つかった遺構群も，時期的には「大野城跡」の範疇で理解するものではなく，「原遺跡群」のなかに位置づけることが適切で，「原山無量寺」の隆盛期の一端を示す遺構群と捉えられる。

今回は，「大野城」を含む四王寺山一帯の重層的な歴史の一部を垣間見たに過ぎず，調査・研究はまだまだ途上にあり，遺構・遺物の評価については今後の課題としたい。

Tab.15　報告書掲載遺構一覧

大宰府史跡						
No.	報告遺構名	調査次数	地区・トレンチ	遺構の種類	S番号等	備考
1	SX4731	212	蔵司E区Aトレンチ	柱穴	S-2	
2	SX4732	212	蔵司E区Aトレンチ	土坑	S-3	
3	SB5000	220	蔵司D区11・12トレンチ	礎石建物		
4	SD5005	220	蔵司D区11トレンチ	溝		SB5000雨落溝
5	SX5011	220	蔵司D区9トレンチ	土坑	S-5	
6	SB5030	220	蔵司D区11トレンチ	掘立柱建物	S-4	SB5000下層建物
7	SX4800	231	大楠地区	土坑	S-1	
8	SX4801	231	大楠地区	土坑	S-2	
9	SX4805	235	学校院	柱穴		
10	SX4810	237	観世音寺子院	土坑		
大野城跡						
No.	報告遺構名	調査次数	地区・トレンチ	遺構の種類	S番号等	備考
1	SX01	55	2トレンチ	土坑		
2	SX02	55	9トレンチ	土坑	S-1	

Tab. 16　大宰府史跡第212次調査報告書掲載遺物一覧

Fig	番号	遺構番号・層位名	注記（S・土番号）	種類	器種	備考
8	1	表採	SB5000付近 採集	瓦	軒平	560B型式
8	2	BTr.表土	62-13-8Gr 表土	瓦	鬼瓦	B型式
8	3	CTr.耕作溝	CTr. S-12 埋土 62-22 攪乱	瓦	丸瓦	901C型式
8	4	ATr.茶褐色土	61-25-7Gr 表土下茶褐色土	瓦	丸瓦	901C型式
8	5	DTr.表土	54-15-2 表土	瓦	丸瓦	901C型式
8	6	DTr.表土	54-15-3 表土下茶褐色土	瓦	丸瓦	901C型式
8	7	ATr.茶褐色土	61-25-12Gr 表土下茶褐色土	瓦	丸瓦	901C型式
8	8	ATr.茶褐色土	61-25-15Gr 表土	瓦	丸瓦	901C型式
8	9	Atr.耕作溝	61-25-16Gr S-5 上層①	瓦	丸瓦	901C型式
8	10	Atr.表土	61-5-8Gr 表土	瓦	平瓦	901C型式
8	11	表採	47表面採集	瓦	丸瓦	901E型式
8	12	表採	55-14Gr 表採	瓦	平瓦	915A型式
8	13	表採	54表採	瓦	平瓦	915A型式
8	14	DTr.耕作溝	DTr. S-16(54-15) 埋土上層	瓦	丸瓦	縄目叩き
8	15	BTr.耕作溝	BTr. 62-12-13 S-7 上層埋土①	瓦	平瓦	縄目叩き
8	16	ATr.茶褐色土	Atr.61-4 S-1上面 表土下茶褐色土	瓦	平瓦	縄目叩き
8	17	ATr.耕作溝	61-5-9Gr S-1 埋土上層(茶褐色土)	瓦	平瓦	縄目叩き
8	18	BTr.耕作溝	BTr. 62-12-13 S-7 上層埋土①	瓦	平瓦	縄目叩き
8	19	ATr.茶褐色土	61-25-9Gr 表土下茶褐色土	瓦	丸瓦	斜格子叩き
8	20	ATr.耕作溝	Atr. 61-4 S-1下層埋土②	瓦	丸瓦	斜格子叩き
8	21	ATr.表土	68-5-13Gr 表土	瓦	玉縁式丸瓦	斜格子叩き
8	22	DTr.茶褐色土	Dtr. 54-20-7Gr 表土下茶褐色土	瓦	丸瓦	斜格子叩き
8	23	CTr.耕作溝	CTr. S-5上層埋土①	瓦	平瓦	斜格子叩き
8	24	表採	54-5Gr 表採	瓦	平瓦	斜格子叩き
8	25	CTr.耕作溝	CTr. S-5上層埋土①	瓦	平瓦	斜格子叩き
8	26	表採	55-22Gr 表採	瓦	平瓦	斜格子叩き
8	27	DTr.茶褐色土	54-15-1Gr 表土下茶褐色土	瓦	平瓦	斜格子叩き
8	28	DTr.整地層	DTr..積土内出土 取り上げ①	瓦	丸瓦	
9	1	DTr.茶褐色土	Dtr .54-20-14 表土下茶褐色土	被熱瓦	平瓦	縄目叩き
9	2	DTr.茶褐色土	Dtr. 54-20-14 表土下茶褐色土	被熱瓦	平瓦	縄目叩き
9	3	DTr.茶褐色土	Dtr. 54-20-14 表土下茶褐色土	被熱瓦	平瓦	縄目叩き
9	4	表採	55-23Gr 表採	被熱瓦	平瓦	縄目叩き
9	5	DTr.表土	54-20-10Gr 表土	被熱瓦	平瓦	縄目叩き
9	6	DTr.整地層	DTr..積土上面堆積 取り上げ①	被熱瓦	平瓦	縄目叩き
9	7	DTr.茶褐色土	Dtr. 54-20-14 表土下茶褐色土	被熱瓦	平瓦	縄目叩き
9	8	DTr.茶褐色土	Dtr. 54-20-14 表土下茶褐色土	被熱瓦	平瓦	縄目叩き
9	9	表採	55-6Gr 表採	被熱瓦	平瓦	縄目叩き
9	10	DTr.表土	54-15-8Gr 表土	被熱瓦	平瓦	縄目叩き
9	11	ATr.表土	61-5-2Gr 表土	被熱瓦	平瓦	縄目叩き
9	12	DTr.茶褐色土	Dtr .54-20-16 表土下茶褐色土	被熱瓦	平瓦	縄目叩き
9	13	DTr.整地層	DTr.積土上面堆積 取り上げ②	被熱瓦	平瓦	斜格子叩き
9	14	表採	54 表採	被熱瓦	平瓦	斜格子叩き
9	15	DTr.茶褐色土	54-20-9Gr 表土下茶褐色土	被熱瓦	平瓦	斜格子叩き
9	16	DTr.茶褐色土	54-15-3Gr 表土下茶褐色土	被熱瓦	平瓦	斜格子叩き
9	17	BTr.表土	62-12-3Gr 表土	被熱瓦	丸瓦	斜格子叩き
9	18	DTr.表土	54-15-3Gr 表土	被熱瓦	丸瓦	斜格子叩き
9	19	表採	55-13Gr 表採	被熱瓦	丸瓦	
10	1	ATr.表土	Atr .61-25-5Gr 表土	須恵器	蓋	
10	2	ATr.表土	ATr.北 54-20-2Gr 表土	須恵器	有高台坏	
10	3	ATr.表土	ATr.北 54-1516Gr 表土	須恵器	有高台坏	
10	4	ATr.	ATr. S-1上層埋土 清掃時	土師器	皿	
10	5	ATr.表土	Atr .61-15-12 表土	土師器	甕	
10	6	ATr.	ATr. 68-5-12Gr S-5上層①	染付	小坏	
10	7	BTr.茶褐色土	BTr. 62-13-3 表土下茶褐色土	土師質土器	鉢	
10	8	CTr.表土下	CTr. 62-22-13 Gr 表土下	土師器	梅	
10	9	CTr.表土下	CTr. 62-18-9·10·13·14 表土下	白磁	碗	Ⅳ類
10	10	DTr.表採	DTr. 40付近採集品	須恵器	蓋	
10	11	DTr.茶褐色土	DTr. 54-20-10 表土下茶褐色土	土師器	蓋	
10	12	DTr.表採	DTr. 40付近採集品	弥生土器	甕	
10	13	DTr.茶褐色土	DTr. 54-15-13 表土下茶褐色土	土師器	甕	
10	14	DTr.茶褐色土	DTr. 54-20-15 表土下茶褐色土(単純層)	染付	碗	
10	15	ETr.表土	ETr. 40-3-15Gr 表土	須恵器	坏	
10	16	ETr.茶褐色土	ETr. 40-2-3 表土下茶褐色土	土師器	坏	
10	17	ETr.表土	ETr. 40-2-8 表土	青磁	碗	越州窯系
10	18	ETr. 整地層	ETr. 40-3-4 サブトレ下層	須恵器	坏	
10	19	ETr. 整地層	ETr サブトレ最下層 褐色整地層内	弥生土器	甕	
10	20	ETr. 整地層	ETr サブトレ最下層 褐色整地層内	弥生土器	甕	
10	21	ETr. 整地層	ETr. 40-3-4 サブトレ下層(第2整地)単純層	土師器	皿	
10	22	FTr.耕作溝	FTr. S-19溝埋土出土	須恵器	蓋	
10	23	FTr.茶褐色土	FTr. 61-14 表土下茶褐色土	須恵器	蓋	
10	24	表採	40-10 崩落壁面表土下60cmで出土	白磁	碗	
11	1	ETr.表土	ETr 表土	鉄製品	小札	3.1g
11	2	ETr.	Etr. 40-2 表土下下層	鉄製品	小札	2.3g
11	3	ETr.表土	ETr 表土	鉄製品	小札	0.1g
11	4	Atr.茶褐色土	61-20-9Gr 表土下茶褐色土	鉄製品	小札	4.2g
11	5	表採	54-5Gr 表採	鉄製品	小札	3.2g
11	6	DTr.表土	54-15-8 表土	鉄製品	小札	0.7g
11	7	Atr.表土	61-25-16Gr 表土	鉄製品	小札	1.0g
11	8	Atr.茶褐色土	61-25-16Gr 表土下茶褐色土	鉄製品	小札	0.5g
11	9	Atr.表土	61-20-6 表土	鉄製品	小札	0.7g
11	10	Atr.茶褐色土	61-25-16Gr 表土下茶褐色土	鉄製品	小札	0.8g
11	11	ETr.茶褐色土	ETr. 40-2-3 表土下茶褐色土	鉄製品	小札	1.5g
11	12	Atr.表土	68-5-14 表土	鉄製品	小札	2.6g
11	13	Atr.表土	61-15-12·5·6Gr 表土(清掃時)	鉄製品	小札	1.2g
11	14	Atr.表土	68-5-2Gr 表土	鉄製品	小札	3.0g
11	15	DTr.付近表採	DTr. 40付近採集品	鉄製品	小札	3.2g
11	16	Etr.表土	40-2-11Gr 表土	鉄製品	小札	1.1g
11	17	Atr.表土	61-15-2Gr 表土	鉄製品	小札	4.3g
11	18	CTr.表土	62-22-1Gr 表土	鉄製品	小札	1.1g
11	19	表採	KL67	鉄製品	小札	9.0g
11	20	Atr.表土	68-5-7 表土	鉄製品	小札	1.3g
11	21	Atr.表土	68-5-7Gr 表土	鉄製品	小札	2.6g
11	22	BTr.茶褐色土	62-13-3Gr 表土下茶褐色土(下層)	鉄製品	小札	1.4g
11	23	DTr.茶褐色土	54-15-8Gr 表土下茶褐色土	鉄製品	小札	12.8g
11	24	DTr.表土	54-15-6 表土	鉄製品	小札	1.0g
11	25	DTr.表土	54-15-7Gr 表土	鉄製品	小札	3.5g
11	26	Atr.茶褐色土	61-25-11·12·15·16 表土下茶褐色土(清掃)	鉄製品	小札	0.6g
11	27	CTr.遺構面	CTr. 62-22 清掃時	鉄製品	小札	1.2g
11	28	FTr.表土	FTr.61-14-14 表土	鉄製品	小札	1.0g
11	29	Atr.表土	61-20-5Gr 表土	鉄製品	小札	2.2g
11	30	DTr.表土	54-20-9 表土	鉄製品	小札	2.1g
11	31	DTr.表土	54-15-7Gr 表土	鉄製品	小札	1.5g
11	32	DTr.茶褐色土	54-15-4Gr 表土下茶褐色土	鉄製品	小札	1.6g
11	33	DTr.表土	54-20-1Gr 表土	鉄製品	小札	1.7g
11	34	Atr.表土	61-5-8 表土	鉄製品	小札	1.6g
11	35	Atr.攪乱	61-15-12Gr 1段下げ埋土(竹根)	鉄製品	小札	1.6g
11	36	Atr.表土	61-15-3Gr 表土	鉄製品	小札	1.4g
11	37	表採	57-15-7Gr 表土	鉄製品	小札	1.3g
11	38	DTr.表土	54-20-12Gr 表土	鉄製品	小札	3.2g
11	39	CTr.表土下	62-22-9Gr 表土下	鉄製品	小札	3.2g
11	40	Atr.表土	61-25-15Gr 表土	鉄製品	小札	0.7g
11	41	Atr.表土	61-20-11 表土	鉄製品	小札	3.0g
11	42	Atr.表土	Atr.北 54-20-14Gr 表土	鉄製品	小札	3.7g
11	43	CTr.表土	CTr. 62-22-10Gr 表土	鉄製品	小札	0.7g
11	44	FTr.表土	FTr. 61-14-14 表土	鉄製品	小札	4.5g
11	45	表採	61-12-8 表土	鉄製品	小札	1.0g
11	46	DTr.茶褐色土	54-15-4Gr 表土下茶褐色土	鉄製品	小札	1.4g
11	47	Atr.茶褐色土	61-25-7Gr 表土下茶褐色土	鉄製品	小札	1.1g
11	48	CTr.表土	CTr. 69-2-1Gr 表土	鉄製品	小札	7.4g
11	49	Atr.茶褐色土	61-25-8Gr 表土下茶褐色土	鉄製品	小札	4.3g
11	50	ATr.表土	Atr. 61-4-2 表土	鉄製品	小札	3.4g
11	51	表採	63-13-8Gr 表土	鉄製品	小札	5.1g
11	52	ATr.表土	61-15-11·12·15·16 表土(清掃時)	鉄製品	小札	9.2g
11	53	BTr.表土	62-13-2Gr 表土	鉄製品	小札	2.6g
12	1	BTr.攪乱層	62-11-6Gr S-6 上層	鉄製品	鉄鏃	2.0g
12	2	BTr.表土	62-11-3 表土	鉄製品	鉄鏃	1.9g
12	3	BTr.表土	62-11-8Gr 表土	鉄製品	鉄鏃	4.0g
12	4	BTr.茶褐色土	62-13-3Gr 表土下茶褐色土	鉄製品	鉄鏃	1.2g
12	5	DTr.表土	54-20-3 表土	鉄製品	鉄鏃	2.2g
12	6	表採	61-12-6Gr 表土下茶褐色土(下層)	鉄製品	鉄鏃	1.8g
12	7	CTr.表土	CTr .62-22-9 表土	鉄製品	鉄鏃	1.5g
12	8	Atr.茶褐色土	61-25-15 表土下茶褐色土	鉄製品	鉄鏃	16.3g
12	9	DTr.表土	54-15-7 表土	鉄製品	鉄鏃	1.2g
12	10	表採	61-12-8 表土	鉄製品	鉄鏃	7.4g
12	11	ATr.表土	61-15-11·12·15·16 表土(清掃時)	鉄製品	鉄鏃	1.0g
12	12	表採	55-14 表採	鉄製品	鉄鏃	1.1g
12	13	DTr.茶褐色土	54-15-13 表土下茶褐色土	鉄製品	鉄鏃	4.9g
12	14	CTr.表土下	CTr. 62-18-9 表土下	鉄製品	鉄鏃	3.3g
12	15	CTr.表土下	CTr. 69-2-4 表土下	鉄製品	鉄鏃	2.0g
12	16	CTr.表土下	CTr. 62-17-16 表土下	鉄製品	鉄鏃	3.6g
12	17	BTr.茶褐色土	62-12-5Gr 表土下茶褐色土	鉄製品	鉄鏃	3.0g
12	18	CTr.表土	CTr. 西壁面清掃	鉄製品	鉄鏃	3.2g
12	19	BTr.遺構面	62-13-1·2·5·6 表土下茶褐色土(最下層)清掃時	鉄製品	鉄鏃	2.4g
12	20	BTr.表土	61-12-6 茶褐色土 褐色土 黄色土 崩落土(3層目)	鉄製品	鉄鏃	1.4g
12	21	DTr.茶褐色土	DTr. 54-20-3 表土下茶褐色土	鉄製品	鉄鏃	1.3g
12	22	CTr.表土下	62-22-1 表土下	鉄製品	鉄鏃	1.3g
12	23	表採	55-2 表採	鉄製品	鉄鏃	1.8g
12	24	CTr.茶褐色土	62-18-9·13Gr他 清掃 表土下茶褐色土	鉄製品	鉄鏃	1.5g
12	25	DTr.表土	DTr. S-15(54-20)埋土上層	鉄製品	鉄鏃	1.8g
12	26	ATr.表土	61-25-15 表土	鉄製品	鉄鏃	2.4g
12	27	DTr.表土	54-20-6 表土	鉄製品	鉄鏃	1.6g
12	28	表採	55-2 表採	鉄製品	鉄鏃	3.3g
12	29	ATr.表土	68-5-16 表土下茶褐色土	鉄製品	鉄鏃	1.2g
12	30	CTr.茶褐色土最下層	CTr. 62-23 褐色整地上面清掃 表土下茶褐色土最下層	鉄製品	鉄鏃	1.0g
12	31	CTr.表土	CTr. 62-18-13Gr 表土	鉄製品	鉄鏃	1.1g
12	32	BTr.茶褐色土	62-12-4 表土下茶褐色土	鉄製品	鉄鏃	1.0g
12	33	ATr.表土	61-15-8Gr 表土	鉄製品	鉄鏃	1.0g
12	34	ATr.耕作土	61-25-16 S-5 上層①	鉄製品	鉄鏃	1.3g
12	35	ATr.茶褐色土	61-25-3 表土下茶褐色土	鉄製品	鉄鏃	1.2g
12	36	ATr.表土	61-20-11Gr 表土	鉄製品	鉄鏃	6.7g
12	37	ATr.表土	61-10-10Gr 表土	鉄製品	鉄鏃	3.6g
12	38	BTr.表土	62-12-7Gr 表土	鉄製品	鉄鏃	2.7g
12	39	CTr.表土	CTr. 62-22-7Gr 表土	鉄製品	鉄鏃	2.5g
12	40	ATr.表土	ATr. S-14 埋土上層	鉄製品	鉄鏃	3.0g
12	41	DTr.茶褐色土	DTr. 54-20-12 表土下茶褐色土	鉄製品	鉄鏃	3.5g
12	42	ATr.遺構面	Atr. 61-15-20 清掃	鉄製品	鉄鏃	1.5g
12	43	ATr.表土	Atr.北 54-15-15 表土	鉄製品	鉄鏃	3.2g
12	44	表採	55-8 表採	鉄製品	鉄鏃	1.7g
12	45	BTr.表土	62-13-5 表土	鉄製品	鉄鏃	4.9g
12	46	CTr.表土	CTr. 69-2-1 表土	鉄製品	鉄鏃	2.0g
12	47	DTr.茶褐色土	54-15-12Gr 表土下茶褐色土	鉄製品	鉄鏃	1.5g
12	48	DTr.遺構面	DTr. 54-15-20 清掃(遺構面)	鉄製品	鉄鏃	1.8g
12	49	BTr.表土	62-11-8Gr 表土	鉄製品	鉄鏃	2.3g
12	50	CTr.表土下	CTr. 62-20-2 表土下	鉄製品	鉄鏃	1.1g
12	51	BTr.表土	62-12-2 表土	鉄製品	鉄鏃	1.4g
12	52	DTr.表土	DTr. S-15 (54-20)埋土上層	鉄製品	鉄鏃	1.3g
12	53	ATr.表土	61-5-2Gr 表土	鉄製品	鉄鏃	1.1g
12	54	BTr.表土	62-11-8Gr 表土	鉄製品	鉄鏃	1.4g
12	55	CTr.表土	CTr. 62-17-15 表土	鉄製品	鉄鏃	1.1g
12	56	ATr.表土	61-10-11 表土	鉄製品	鉄鏃	1.6g
12	57	BTr.表土	62-11-8Gr 表土	鉄製品	鉄鏃	1.4g
12	58	DTr.茶褐色土	54-15-12Gr 表土下茶褐色土	鉄製品	鉄鏃	0.7g
12	59	CTr.表土	CTr. S-5 (62-22) 埋土中層①	鉄製品	鉄鏃	1.3g
12	60	BTr.表土	62-11-8Gr 表土	鉄製品	鉄鏃	0.8g
12	61	ATr.表土	61-5-13 表土	鉄製品	鉄鏃	2.3g
12	62	ATr.表土	61-20-10 表土	鉄製品	鉄鏃	6.8g
12	63	BTr.表土	62-12-2 表土	鉄製品	鉄鏃	2.6g
12	64	ATr.ATr.表土	Atr.北 54-15-14 表土	鉄製品	鉄鏃	2.9g
12	65	表採	62-13-3Gr 表土下茶褐面(下層)	鉄製品	鉄鏃	2.6g
12	66	表採	62-2-6Gr 表土下	鉄製品	鉄鏃	10.0g
12	67	FTr.茶褐色土	FTr. 61-14 表土下茶褐色土	鉄製品	鉄鏃	6.6g
12	68	DTr.茶褐色土	DTr. 54-20-15 表土下茶褐色土(単純層)	鉄製品	鉄鏃	7.0g
12	69	BTr.表土	62-11-8Gr 表土	鉄製品	鉄鏃	4.6g
12	70	ATr.茶褐色土	68-25-4 表土下茶褐色土	鉄製品	鉄鏃	4.3g
12	71	BTr.表土	BTr. S-7 62-12-13 中層埋土③	鉄製品	鉄鏃	5.2g
12	72	BTr.茶褐色土	62-13-3 表土下茶褐色土(下層)	鉄製品	鉄鏃	4.6g
12	73	DTr.表土	54-15-8Gr 表土	鉄製品	鉄鏃	4.6g
12	74	CTr.表土	CTr. 62-22-1 表土	鉄製品	鉄鏃	4.6g
12	75	ATr.表土	61-20-7Gr 表土	鉄製品	鉄鏃	3.8g
12	76	CTr.表採	62-22 表採	鉄製品	鉄鏃	3.0g
12	77	CTr.表土下	CTr. 62-17-13Gr 表土下	鉄製品	鉄鏃	5.1g
12	78	DTr.茶褐色土	DTr. 54-20-1 表土下茶褐色土	鉄製品	鉄鏃	1.5g
12	79	CTr.表土	CTr. 62-17-11Gr 表土	鉄製品	鉄鏃	2.9g
12	80	ATr.表土	68-5-2Gr 表土	鉄製品	鉄鏃	0.7g
12	81	CTr.表土下	CTr. 62-18-9 表土下	鉄製品	鉄鏃	0.5g
12	82	BTr.表土	62-12-2 表土	鉄製品	鉄鏃	2.6g
12	83	DTr.表土	54-15-3 表土	鉄製品	鉄鏃	2.0g
12	84	ATr.表土	68-5-1 表土	鉄製品	鉄鏃	3.4g
12	85	FTr.茶褐色土上層	61-13-5 表土下茶褐色土	鉄製品	鉄鏃	3.3g
12	86	BTr.茶褐色土	62-13-2Gr 表土下茶褐色土	鉄製品	鉄鏃	2.1g
12	87	ATr.表土	61-20-16Gr 表土	鉄製品	鉄鏃	2.6g
12	88	CTr.表土下	CTr. 62-17-13Gr 表土下	鉄製品	鉄鏃	2.5g
12	89	ATr.攪乱層	61-15-12 1段下げ埋土(竹根)	鉄製品	鉄鏃	2.9g
12	90	ATr.茶褐色土	61-20-16 表土下茶褐色土	鉄製品	鉄鏃	2.9g
12	91	CTr.表土下	CTr. 62-22-12 表土下	鉄製品	鉄鏃	4.3g
12	92	DTr.表土	54-20-7Gr 表土	鉄製品	鉄鏃	9.1g
12	93	CTr.表土下	62-18-9·10·13·14 表土下	鉄製品	鉄鏃	5.2g
13	1	BTr.表土	62-11-3Gr 表土	鉄製品	弓金具	0.8g
13	2	CTr.茶褐色土最下層	CTr. 62-23Gr 褐色整地上上面清掃 表土下茶褐色土最下層	鉄製品	弓金具	0.8g
13	3	表採	62-5-15Gr 表土	鉄製品	弓金具	0.7g
13	4	ATr.茶褐色土	61-20-16Gr 表土下茶褐色土	鉄製品	弓金具	0.1g
13	5	FTr.表土	FTr. 61-14-13 表土	鉄製品	弓金具	1.3g
13	6	BTr.茶褐色土	62-13-3Gr 表土下茶褐色土(下層)	鉄製品	弓金具	0.1g
13	7	BTr.茶褐色土	62-13-2Gr 表土下茶褐色土	鉄製品	弓金具	1.5g
13	8	CTr.茶褐色土	62-17-9·10·13·14 表土下茶褐色土 清掃	鉄製品	弓金具	1.4g
13	9	CTr.表土下	69-2-6Gr 表土下	鉄製品	弓金具	0.6g
13	10	CTr.茶褐色土	62-17-9·10·13·14 表土下茶褐色土 清掃	鉄製品	弓金具	0.6g
13	11	CTr.表土下	CTr. 62-18-14Gr 表土下	鉄製品	弓金具	0.1g
13	12	BTr.表土	62-12-2Gr 表土	鉄製品	弓金具	0.5g
13	13	BTr.茶褐色土	62-13-4Gr 表土下茶褐色土	鉄製品	弓金具	0.1g
13	14	FTr.表土	FTr. 61-14 表土	鉄製品	弓金具	0.4g
13	15	BTr.表土	62-12-7Gr 表土	鉄製品	弓金具	0.1g
13	16	CTr.表土下	CTr. 69-2-7Gr 表土下	鉄製品	弓金具	0.5g
13	17	CTr.表土下	CTr. 62-22-12Gr 表土下	鉄製品	弓金具	0.6g
13	18	CTr.表土下	62-22-9Gr 表土下	鉄製品	弓金具	0.6g
13	19	CTr.表土下	CTr. 62-22-1Gr 表土下	鉄製品	弓金具	0.5g
13	20	CTr.茶褐色土最下層	CTr. 62-23 褐色整地上上面清掃 表土下茶褐色土最下層	鉄製品	弓金具	0.6g
13	21	CTr.表土下	CTr. 62-17-12Gr 表土下	鉄製品	弓金具	0.4g
13	22	CTr.表土下	69-3-5Gr 表土下	鉄製品	弓金具	0.7g
13	23	ATr.表土	61-20-6 表土	鉄製品	弓金具	0.7g
13	24	BTr.表土	62-12-3Gr 表土	鉄製品	弓金具	0.1g
13	25	DTr.表土	54-15-4Gr 表土	鉄製品	吊手金具	3.0g
13	26	ATr.表土	Atr. 61-4-4 表土	鉄製品	鋲留金具	3.4g
13	27	FTr.茶褐色土上層	FTr. 61-19-2 表土下茶褐色土上層 地表下24cm	鉄製品	刀装具	81.7g
13	28	DTr.茶褐色土	DTr. 54-20-13 表土下茶褐色土	鉄製品	引手金具	9.6g
13	29	ATr.茶褐色土	68-5-12Gr 表土下茶褐色土	鉄製品	引手金具	5.1g
13	30	ATr.表土	Atr. 61-4-4 表土	鉄製品	引手金具	8.6g
13	31	CTr.表土	CTr. 62-17-11Gr 表土	鉄製品	鉄釘	4.0g
13	32	CTr.耕作溝	CTr. S-5 検出	鉄製品	鉄釘	1.4g
13	33	CTr.表土下	CTr. 62-17-9Gr 表土下	鉄製品	鉄釘	2.7g
13	34	BTr.茶褐色土	62-13-6Gr 表土下茶褐色土	鉄製品	鉄釘	2.6g
13	35	CTr.表土下	CTr. 62-22-5Gr 表土下	鉄製品	鉄釘	2.4g
13	36	ATr.表土	61-25-16Gr S-5 上層①	鉄製品	鉄釘	9.0g
13	37	ATr.表土	61-20-11Gr 表土	鉄製品	鉄釘	2.1g
13	38	ATr.茶褐色土	61-25-11Gr 表土下茶褐色土	鉄製品	鉄釘	3.8g
13	39	BTr.表土	62-11-7Gr 表土	鉄製品	鉄釘	3.0g
13	40	BTr.表土	62-12-4Gr 表土	鉄製品	鉄釘	2.0g
13	41	ETr.表土	ETr. 表土	鉄塊	鉄塊	
13	42	FTr.表土	FTr. 61-14-14 表土	鉄滓	鉄滓	
30	1	BTr.遺構面	BTr. 62-11-12 清掃	鉄製品	鉄鏃	
30	2	DTr.遺構面	DTr. 62-11-12 清掃	鉄製品	鉄鏃	
30	3	ETr.茶褐色土	ETr. 40-2-3 表土下茶褐色土	鉄製品	鉄鏃	
30	4	DTr.表土	54-15-7Gr 表土	鉄製品	鉄鏃	
30	5	BTr.遺構面	BTr. 62-11-12 清掃	鉄製品	鉄鏃	
30	6	BTr.	62-11-12	鉄製品	鉄製小札	
30	7	DTr.表土	54-15-7Gr 表土	鉄製品	鉄製小札	
30	8	ETr.表土	ETr. 表土	鉄塊	鉄塊	
30	9	DTr.表土	54-15-7Gr 表土	炉内滓	炉内滓	
30	10	ATr.表土	Atr.北 54-15-14Gr 表土	炉壁溶融物	炉壁溶融物	
30	11	DTr.茶褐色土	DTr. 54-20-10 表土下茶褐色土	炉壁	炉壁	
30	12	FTr.表土	FTr. 61-14-14 表土	鉄滓	鉄滓	

Tab. 16　大宰府史跡第220次調査報告書遺物一覧

Fig	番号	遺構番号・層位名	注記(S・土番号)	種類	器種	備考
37	1	12Tr.	12Tr. No.1	瓦	軒丸瓦	145b型式
37	2	9Tr.	9Tr. 西6 1層(表土)	瓦	軒丸瓦	145b型式
37	3	12Tr.	12Tr. 2層	瓦	軒丸瓦	275B型式
37	4	11Tr.	11Tr. 南1	瓦	軒丸瓦	290A型式
37	5	10Tr.	10Tr. No.1	瓦	軒平瓦	560H型式
37	6	7Tr.	7Tr. 周辺表採	瓦	軒平瓦	657b型式
37	7	11Tr.	11Tr. 南3 2層	瓦	鬼瓦	大宰府式
37	8	12Tr.	12Tr. 東1 2層	瓦	文字瓦	901B型式
37	9	1Tr.	1Tr. 2層	瓦	文字瓦	901C型式
37	10	5Tr.	5Tr. 2層	瓦	文字瓦	915A型式
38	11	9Tr.	9Tr. 西4 2層	瓦	玉縁式丸瓦	縄目叩き
38	12	2Tr.	2Tr. 2層	瓦	丸瓦	縄目叩き
38	13	9Tr.	9Tr. 西4 2層	瓦	丸瓦	
38	14	表採	表採	瓦	玉縁式丸瓦	斜格子叩き
38	15	5Tr.	3Tr. 2層	瓦	平瓦	縄目叩き
38	16	5Tr.	5Tr. 2層	瓦	平瓦	縄目叩き
38	17	9Tr.	9Tr. 西4 2層	瓦	平瓦	斜格子叩き
38	18	1Tr.	1Tr. 2層	瓦	平瓦	斜格子叩き
38	19	2Tr.	2Tr. 1層	瓦	平瓦	斜格子叩き
39	20	9Tr.	9Tr. 西5 1層(表土)	被熱瓦	丸瓦	縄目叩き
39	21	12Tr.	12Tr. 東0 1層	被熱瓦	玉縁式丸瓦	
39	22	11Tr.	11Tr. S-3 上段瓦溜	被熱瓦	玉縁式丸瓦	縄目叩き
39	23	12Tr.	12Tr. 東0 1層	被熱瓦	丸瓦	
39	24	12Tr.	12Tr. 西0 1層	被熱瓦	丸瓦	格子叩き
39	25	11Tr.	11Tr. S-3 上段(一段下げ)	被熱瓦	丸瓦	格子叩き
39	26	11Tr.	11Tr. 北4 表土	被熱瓦	平瓦	縄目叩き
39	27	12Tr.	12Tr. 東0 2層	被熱瓦	平瓦	縄目叩き
39	28	12Tr.	12Tr. 東1 1層	被熱瓦	平瓦	縄目叩き
40	1	1Tr.	1Tr. 2層	土師器	坏蓋	
40	2	1Tr.	1Tr. 2層	無釉陶器	壺	朝鮮系
40	3	2Tr.	2Tr. 1層	須恵器	坏蓋	
40	4	2Tr.	2Tr. 1層	須恵器	坏身	
40	5	2Tr.	2Tr. 2層	須恵器	高坏	
40	6	2Tr.	2Tr. 1層	須恵器	長頸壺	
40	7	2Tr.	2Tr. 2層	無釉陶器	壺	朝鮮系
40	8	2Tr.	2Tr. 2層	白磁	碗	Ⅳ類
40	9	5Tr.	5Tr. 2層	須恵器	壺	
40	10	5Tr.	5Tr. 2層	土師器	高台付坏	
40	11	5Tr.	5Tr. 2層	白磁	皿	
40	12	7Tr.	7Tr. 1層	須恵器	壺	
40	13	7Tr.	7Tr. 2層	須恵器	壺	
40	14	7Tr.	7Tr. 2層	須恵器	坏身	
40	15	7Tr.	7Tr. 3層	無釉陶器	鉢	朝鮮系
40	16	9Tr.	9Tr. 西0 S-5	須恵器	坏蓋	
40	17	9Tr.	9Tr. 西3 2層	須恵器	鉢	
40	18	9Tr.	9Tr. 西1 表土(1層)	青磁	碗	同安窯系
40	19	10Tr.	10Tr. 北側表採	須恵器	坏蓋	
40	20	10Tr.	10Tr. −6 2層	須恵器	坏蓋	
40	21	10Tr.	10Tr. −7 2層	須恵器	坏身	
40	22	10Tr.	10Tr. −8 2層	土師器	坏	
40	23	10Tr.	10Tr. −5 2層	土師器	甕	
40	24	10Tr.	10Tr. −6 1層	土師器	甕	
40	25	10Tr.	10Tr. −8 2層	青磁	碗	同安窯系
40	26	11Tr.	11Tr. 南3 2層	須恵器	坏蓋	
40	27	11Tr.	11Tr. 南6 表土	須恵器	坏蓋	
40	28	11Tr.	11Tr. 北2 表土	須恵器	高坏	
40	29	11Tr.	11Tr. 北2 表土	須恵器	高坏	
40	30	11Tr.	11Tr. 南5 表土	須恵器	平瓶	
40	31	11Tr.	11Tr. S-3 No.2	土師器	高台付坏	
40	32	11Tr.	11Tr. S-3 No.3	施釉陶器	碗	波佐見焼
40	33	11Tr.	11Tr. S-3 No.1	染付	碗	
40	34	12Tr.	12Tr. 東1 2層	須恵器	高台付坏	
40	35	12Tr.	12Tr. 東3 1層	須恵器	高坏	
40	36	12Tr.	12Tr 3層	土師器	皿	
40	37	12Tr.	12Tr. 東5 1層	無釉陶器	碗	
40	38	12Tr.	12Tr. 東0 2層	無釉陶器	壺	朝鮮系
40	39	12Tr.	12Tr. 東4 2層	無釉陶器	壺	朝鮮系
40	40	12Tr.	12Tr. 西3 2層	白磁	皿	白磁皿Ⅸ類
40	41	12Tr.	12Tr. 西6 2層	青磁	碗	龍泉窯系
40	42	表面採集	表面採集	無釉陶器	壺	朝鮮系
41	1	7Tr.	7Tr. 2層	鉄製品	鉄鏃	2.4g
41	2	2Tr.	2Tr. 2層	鉄製品	鉄鏃	2.9g
41	3	12Tr.	12Tr. 西2 1層	鉄製品	鉄鏃	2.3g
41	4	9Tr.	9Tr. 西5 2層	鉄製品	鉄鏃	1.7g
41	5	9Tr.	9Tr. 西5 1層(表土)	鉄製品	鉄鏃	4.9g
41	6	12Tr.	12Tr. 3層	鉄製品	鉄鏃	8.9g
41	7	5Tr.	5Tr. 1層	鉄製品	鉄鏃	5.1g
41	8	12Tr.	12Tr. 3層	鉄製品	鉄鏃	5.8g
41	9	5Tr.	5Tr. 2層	鉄製品	鉄鏃	5.2g
41	10	10Tr.	10Tr. −7 1層	鉄製品	鉄鏃	28.3g
41	11	2Tr.	2Tr. 2層	鉄製品	鉄鏃	5.4g
41	12	1Tr.	1Tr. 2層	鉄製品	小札	0.7g
41	13	5Tr.	5Tr. 2層	鉄製品	小札	0.6g
41	14	1Tr.	1Tr. 1層	鉄製品	小札	0.7g
41	15	5Tr.	5Tr. 2層	鉄製品	小札	2.6g
41	16	5Tr.	5Tr. 2層	鉄製品	小札	0.5g
41	17	5Tr.	5Tr. 2層	鉄製品	小札	0.7g
41	18	10Tr.	10Tr. −2 2層	鉄製品	小札	1.8g
41	19	12Tr.	12Tr. 東1 1層	鉄製品	小札	1.0g
41	20	11Tr.	11Tr. S-3 上段瓦溜	鉄製品	小札	2.5g
41	21	7Tr.	7Tr. 1層	鉄製品	小札	1.1g
41	22	5Tr.	5Tr. 1層	鉄製品	小札	1.0g
41	23	12Tr.	12Tr. 西2 1層	鉄製品	小札	2.0g
41	24	12Tr.	12Tr. 西0 1層	鉄製品	小札	3.8g
41	25	12Tr.	12Tr. 西0 1層	鉄製品	小札	2.2g
41	26	2Tr.	2Tr. 1層	鉄製品	小札	1.7g
41	27	1Tr.	1Tr. 2層	鉄製品	小札	6.6g
41	28	7Tr.	7Tr. 1層	鉄製品	小札	10.7g
41	29	1Tr.	1Tr. 1層	鉄製品	小札	18.9g
41	30	1Tr.	1Tr. 1層	鉄製品	小札	2.4g
41	31	5Tr.	5Tr. 2層	鉄製品	小札	0.6g
41	32	9Tr.	9Tr. 西5 1層(表土)	鉄製品	鉄鏃束	178.4g
41	33	2Tr.	2Tr. 1層	鉄塊	鉄塊	76.9g
41	34	11Tr.	11Tr. S-3 上段瓦溜	鉄滓	鉄滓	49.5g
41	35	12Tr.	12Tr. 3層	鉄製品	釘	4.6g
41	36	採集	採集	鉄製品	不明	2.5g
41	37	1Tr.	1Tr. 2層	鉄製品	短刀	87.3g
41	38	12Tr.	12Tr. 3層	銅製品	不明	1.1g
41	39	12Tr.	12Tr. 3層	銅製品	不明	3.3g
41	40	9Tr.	9Tr. 西1 1層(表土)	古銭	寛永通宝	2.1g
42	1	12Tr.	12Tr. 3層	鋳造関連遺物	取瓶	
42	2	9Tr.	9Tr. 西4 2層	鋳造関連遺物	羽口	
42	3	2Tr.	2Tr. 2層	石製品	滑石製紡錘車	12.0g
42	4	2Tr.	2Tr. 1層	石製品	滑石製紡錘車	7.4g
42	5	12Tr.	12Tr. 西6 2層	土製品	瓦玉	8.2g
42	6	11Tr.	11Tr. S-3 上段瓦溜(壁土)	土壁状遺物		42.4g
42	7	11Tr.	11Tr. S-3 上段(一段下げ)	土壁状遺物		60.2g

Tab. 16　大宰府史跡第231次調査報告書遺物一覧

Fig	番号	遺構番号・層位名	注記(S・土番号)	種類	器種	備考
50	1	床土	床土	須恵器	坏蓋	
50	2	床土	床土	須恵器	坏蓋	
50	3	床土	床土	須恵器	坏身	
50	4	床土	床土	須恵器	坏身	
50	5	床土	床土	須恵器	坏身	
50	6	床土	床土	須恵器	坏身	
50	7	床土	床土	土師器	坏	
50	8	床土	床土	土師器	坏	
50	9	床土	床土	瓦	丸瓦	
50	10	床土	床土	瓦	平瓦	
50	11	黄灰土	黄灰土(3層)	須恵器	坏蓋	
50	12	黄灰土	黄灰土(3層)	須恵器	坏蓋	
50	13	黄灰土	黄灰土(3層)	須恵器	坏蓋	
50	14	黄灰土	黄灰土(3層)	土師器	坏	
50	15	黄灰土	黄灰土(3層)	土師器	坏	
50	16	黄灰土	黄灰土(3層)	土師器	坏	
50	17	黄灰土	黄灰土(3層)	土師器	坏	
50	18	黄灰土	黄灰土(3層)	土師器	坏	
50	19	黄灰土	黄灰土(3層)	瓦	平瓦	

Tab. 16　大宰府史跡第235次調査報告書遺物一覧

Fig	番号	遺構番号・層位名	注記(S・土番号)	種類	器種	備考
60	1	1Tr.	1Tr. 黒灰土(5層)	土師器	坏	
60	2	1Tr.	1Tr. 黒灰土(5層)	土師器	坏	
60	3	1Tr.	1Tr. 黒灰土(5層)	土師器	皿	
60	4	1Tr.	1Tr. 黒灰土(5層)	土師器	椀	
60	5	1Tr.	1Tr. 黒灰土(5層)	瓦器	椀	
60	6	1Tr.	1Tr. 黒灰土(5層)	白磁	皿	白磁皿Ⅵ類
60	7	1Tr.	1Tr. 黒灰土(5層)	青磁	碗	龍泉窯系
60	8	2Tr.	2Tr. ピット	磁器	壺	
60	9	2Tr.	2Tr. 黄褐土(3層)	土師器	坏	
60	10	2Tr.	2Tr. 黒灰土(5層)	土師器	坏	
60	11	2Tr.	2Tr. 黒灰土(5層)	陶器	皿	
60	12	2Tr.	2Tr. 黄褐土(3層)	瓦	丸瓦	

Tab. 16　大宰府史跡第237次調査報告書遺物一覧

Fig	番号	遺構番号・層位名	注記(S・土番号)	種類	器種	備考
63	1	堆積土中	堆積土中	石塔	空風輪	花崗岩
63	2	堆積土中	堆積土中	石塔	空風輪	花崗岩
63	3	堆積土中	堆積土中	石塔	火輪	凝灰岩
63	4	堆積土中	堆積土中	石塔	水輪	花崗岩
63	5	堆積土中	堆積土中	石塔	水輪	凝灰岩
63	6	堆積土中	堆積土中	石塔	水輪	凝灰岩
63	7	堆積土中	堆積土中	石塔	水輪	砂岩
63	8	堆積土中	堆積土中	石塔	地輪	凝灰岩
64	9	堆積土中	堆積土中	石塔	地輪	凝灰岩
64	10	堆積土中	堆積土中	石塔	地輪	凝灰岩
64	11	堆積土中	堆積土中	板碑		花崗岩
64	12	堆積土中	堆積土中	石製品	不明	凝灰岩
64	13	堆積土中	堆積土中	土師器	坏	
64	14	堆積土中	堆積土中	陶器	鉢	

Tab. 16　大野城跡第55次 調査報告書遺物一覧

Fig	番号	遺構番号・層位名	注記(S・土番号)	種類	器種	備考
71	1	SX01	原地区2Tr. 土器溜	土師器	坏	
71	2	SX01	原地区2Tr. 土器溜	土師器	坏	
71	3	SX01	原地区2Tr. 土器溜	土師器	坏	
71	4	SX01	原地区2Tr. 土器溜	土師器	坏	
71	5	SX01	原地区2Tr. 土器溜	土師器	坏	
71	6	SX01	原地区2Tr. 土器溜	土師器	坏	
71	7	SX01	原地区2Tr. 土器溜	土師器	坏	
71	8	SX01	原地区2Tr. 土器溜	土師器	皿	
71	9	SX01	原地区2Tr. 土器溜	土師器	皿	
71	10	SX01	原地区2Tr. 土器溜	土師器	皿	
71	11	SX01	原地区2Tr. 土器溜	土師器	皿	
71	12	SX01	原地区2Tr. 土器溜	土師器	皿	
71	13	SX01	原地区2Tr. 土器溜	土師器	皿	
71	14	SX01	原地区2Tr. 土器溜	土師器	皿	
71	15	SX01	原地区2Tr. 土器溜	土師器	皿	
71	16	SX01	原地区2Tr. 土器溜	土師器	皿	
71	17	SX01	原地区2Tr. 土器溜	土師器	皿	
71	18	SX01	原地区2Tr. 土器溜	土師器	皿	
71	19	SX01	原地区2Tr. 土器溜	土師器	皿	
71	20	SX01	原地区2Tr. 土器溜	土師器	皿	
71	21	SX01	原地区2Tr. 土器溜	土師器	皿	
71	22	SX01	原地区2Tr. 土器溜 検出	土師器	皿	
71	23	SX01	原地区2Tr. 土器溜	土師器	皿	
71	24	SX01	原地区2Tr. 土器溜	土師器	皿	
71	25	SX01	原地区2Tr. 土器溜	土師器	皿	
71	26	SX01	原地区2Tr. 土器溜 検出	土師器	皿	
71	27	SX01	原地区2Tr. 土器溜	土師器	皿	
71	28	SX01	原地区2Tr. 土器溜	黒色土器	椀	A類
71	29	2Tr. SX01検出	原地区2Tr. 土器溜 検出	土師器	皿	
71	30	2Tr. 検出	原地区2Tr. 土器溜	白磁	皿	
71	31	2Tr. 検出	原地区2Tr. 土器溜	青白磁	壺	

PLATES

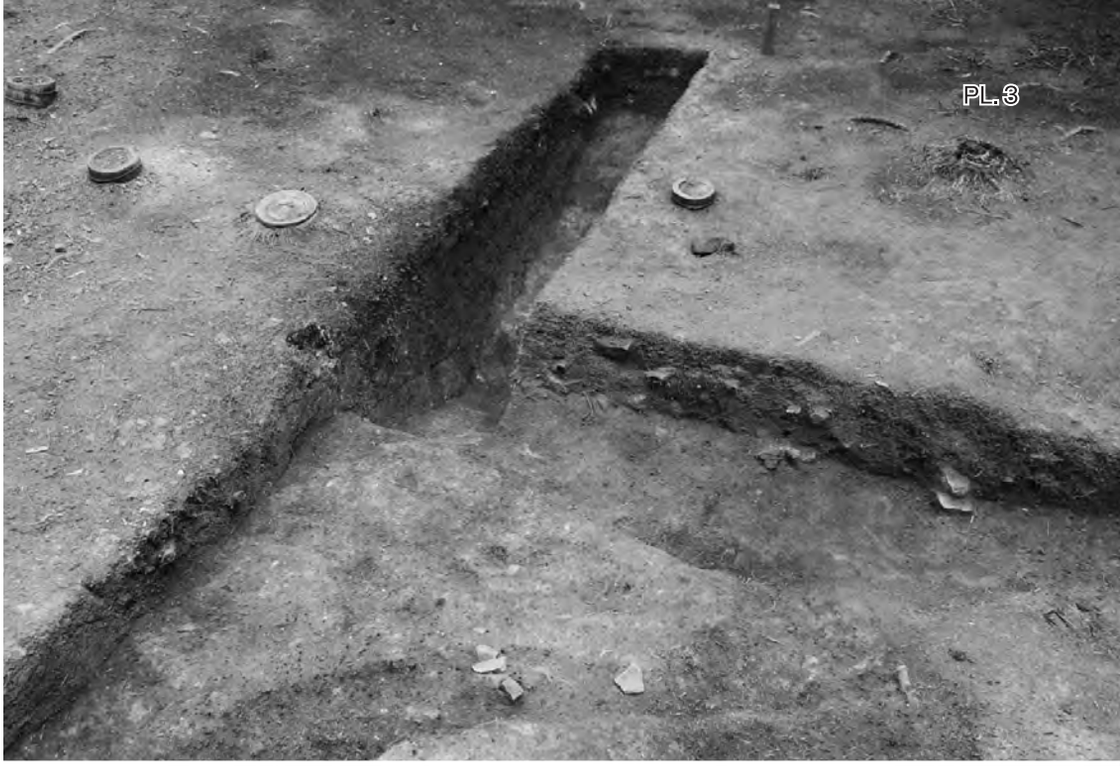
(1) 大宰府政庁周辺官衙跡蔵司地区遠景（西から）

(2) 大宰府政庁周辺官衙跡蔵司地区から西を望む（東から）

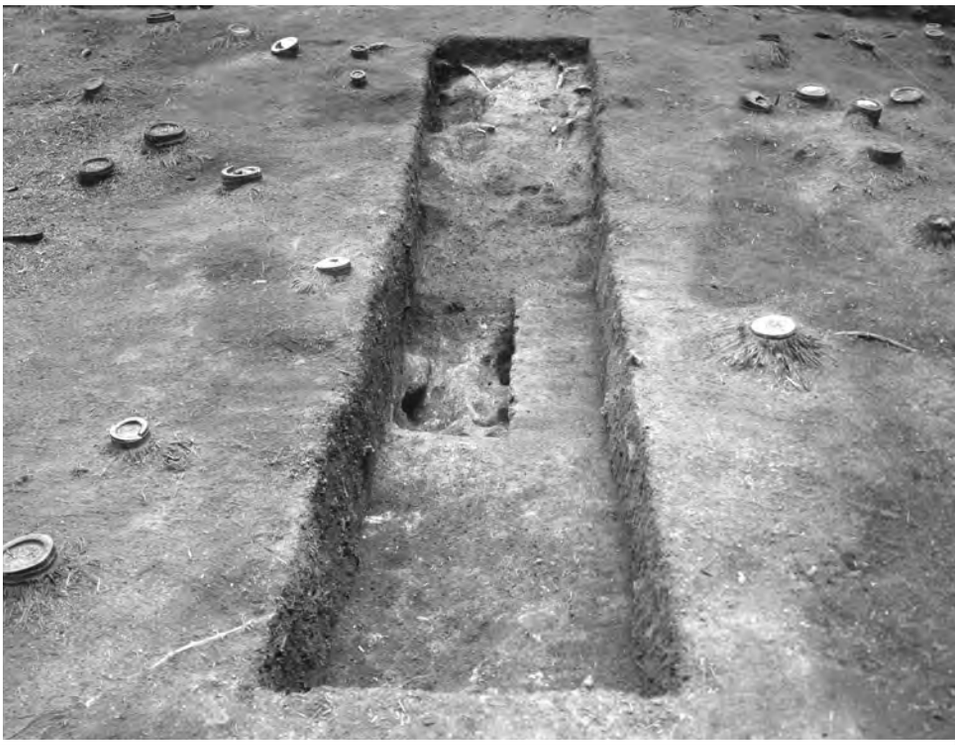
(1) 第212次調査状況（南東から）

(2) Aトレンチ掘削状況（南から）

(3) Aトレンチ掘削状況（北から）



(1) Aトレンチ掘削状況
（南西から）



(2) Bトレンチ掘削状況
（西から）

(3) Bトレンチ掘削状況
（南西から）

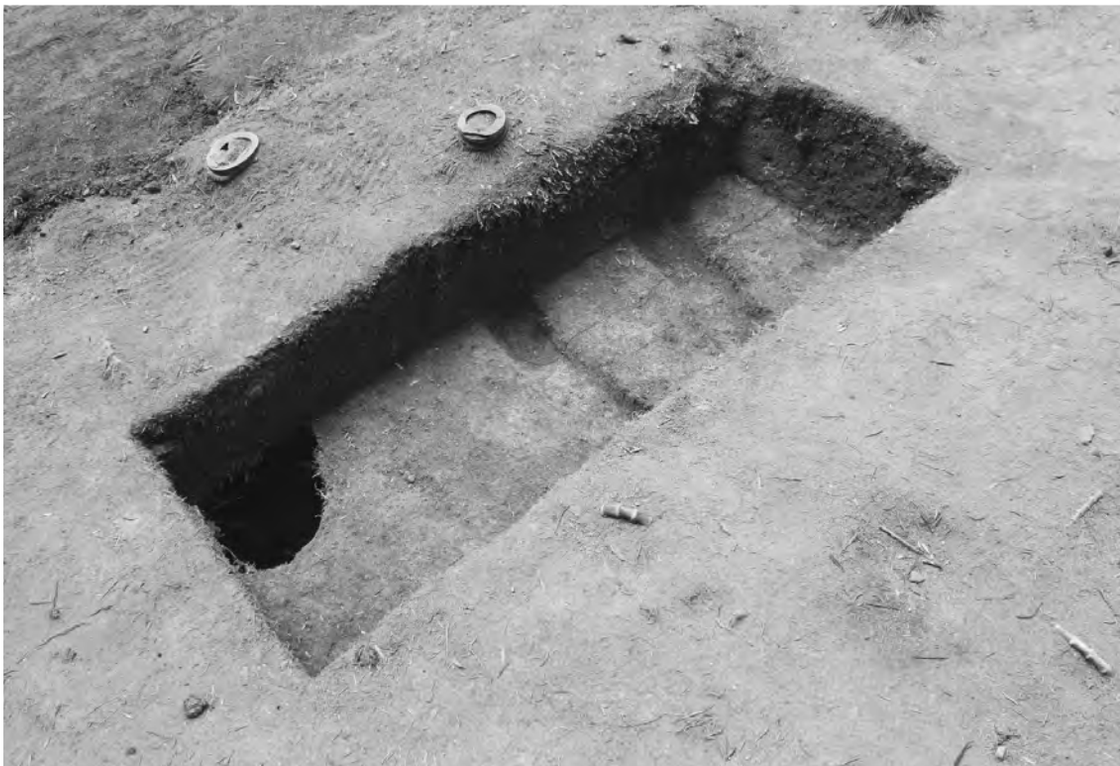
(1) Cトレンチ掘削状況
（南西から）

(2) Cトレンチ掘削状況
（南から）

(3) Dトレンチ掘削状況
（南東から）

(1) Eトレンチ掘削
状況（東から）

(2) Eトレンチ整地層
掘削状況（南から）



(3) Fトレンチ掘削状況
（南東から）

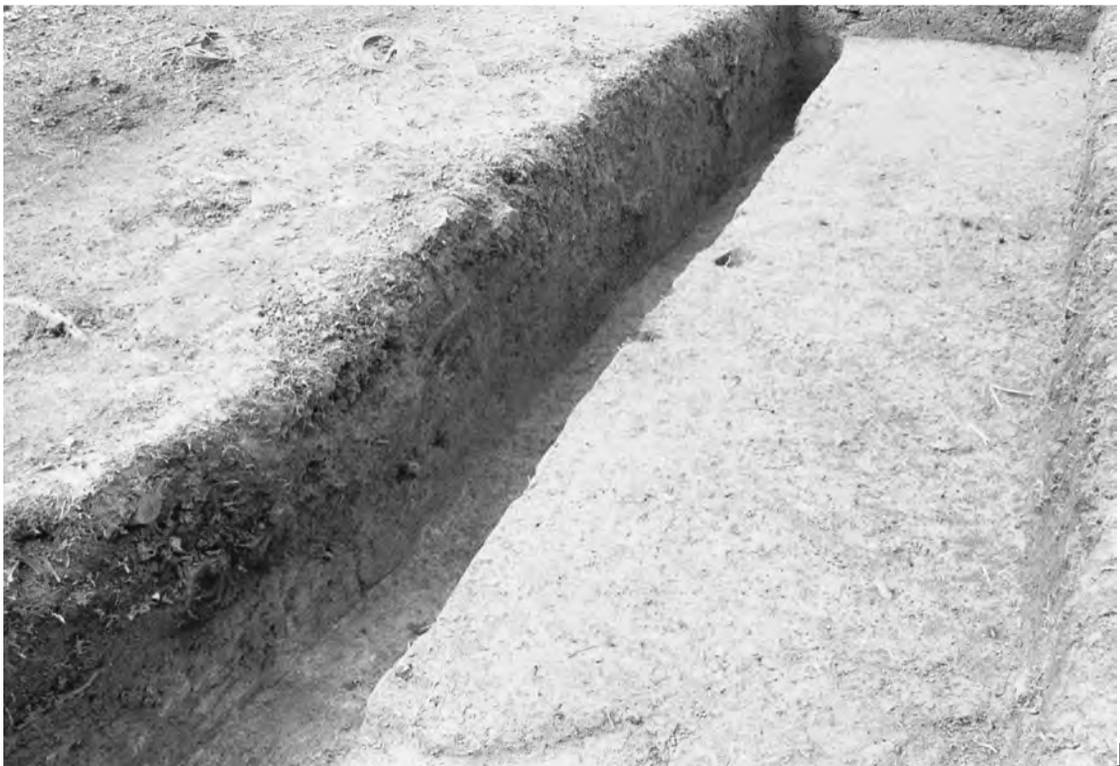
(1) 第220次調査状況
（南から）

(2) 1トレンチ掘削状況
（北東から）

(3) 2トレンチ掘削状況
（東から）

(1) 5トレンチ掘削状況
（北西から）

(2) 7トレンチ掘削状況
（南東から）



(3) 7トレンチ整地層掘
削状況（南東から）

(1) 9トレンチ掘削状況
（北東から）

(2) 10トレンチ掘削状況
（南東から）

(3) 11トレンチ掘削状況
（北西から）

(1) 11トレンチ礎石抜取穴
(S-3)（西から）

(2) 12トレンチ掘削状況
（南東から）

(3) 12トレンチ礎石検出
状況（南東から）

(1) 第231次調査トレンチ
（南東から）

(2) 第232次調査１トレンチ
（北西から）

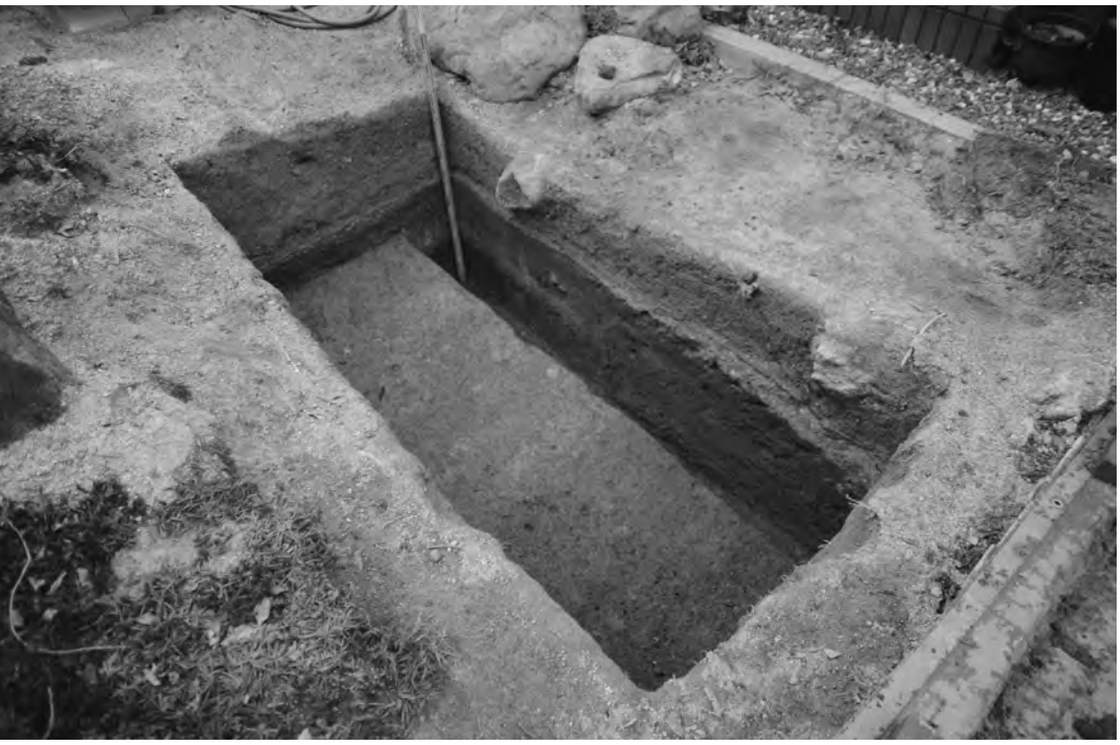
(3) 第232次調査２トレンチ
（南西から）

(1) 第233次調査１トレンチ
（西から）

(2) 第233次調査２トレンチ
（南から）

(3) 第234次調査１トレンチ
（南東から）

(1) 第234次調査２トレンチ
（南西から）



(2) 第235次調査１トレンチ
（南東から）

(3) 第235次調査２トレンチ
（北から）

(1) 第237次調査平坦面上段
検出状況（北から）

(2) 第237次調査平坦面下段
検出状況（南から）

(3) 第237次調査SX4810
検出状況（南から）

(1) 第238次調査南トレンチ
検出状況（西から）

(2) 大野城跡第55次調査地
（南東から）

(3) 大野城跡第55次調査地
（南から）

(1) 1トレンチ 北半部
（西から）

(2) 1トレンチ 南半部
（南から）

(3) 2トレンチ
（北東から）

(1) 2トレンチSX01検出状況
（南東から）

(2) 3トレンチ
（北から）

(3) 4トレンチ
（西から）

(1) 5トレンチ
（東から）

(2) 6トレンチ
（東から）

(3) 7−1トレンチ
（北東から）

(1) 7−2トレンチ
（北東から）

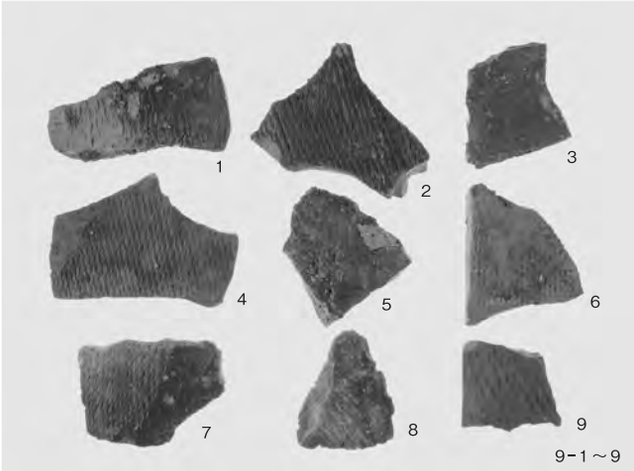
(2) 8トレンチ
（東から）

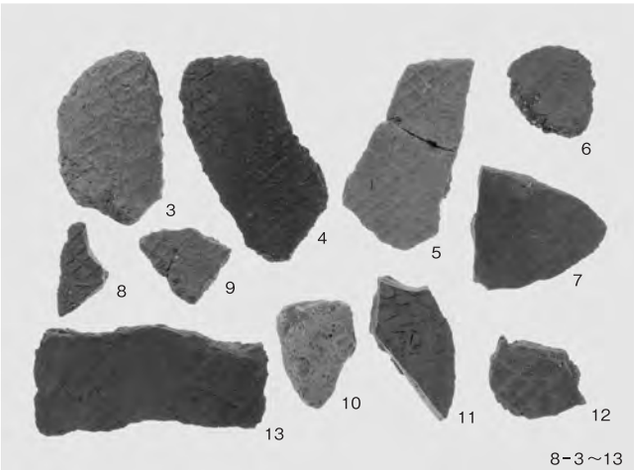
(3) 9トレンチ
（南から）

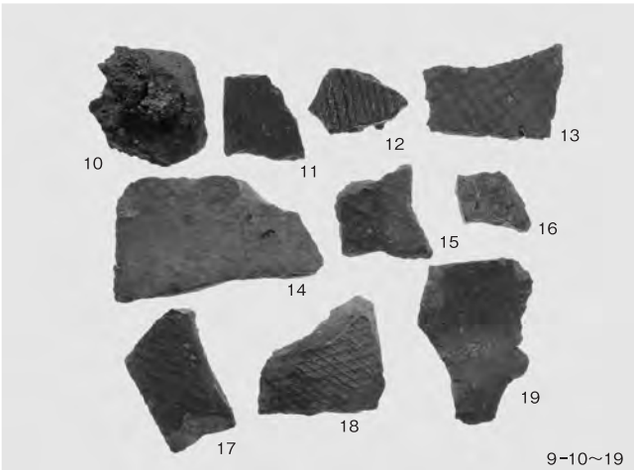
(1) 10トレンチ
（南東から）

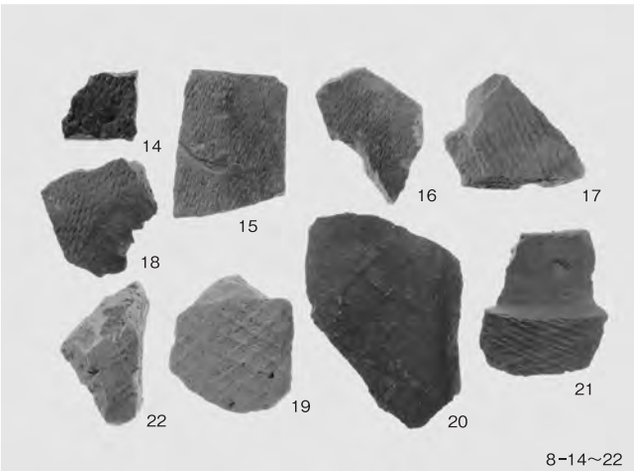
(2) 11トレンチ
（東から）

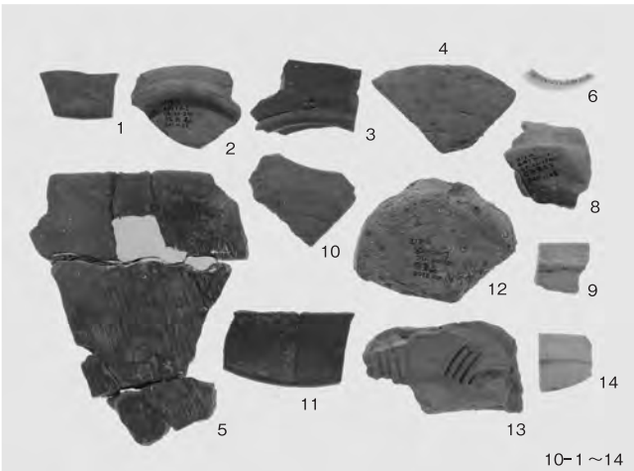
(3) 12トレンチ
（南から）

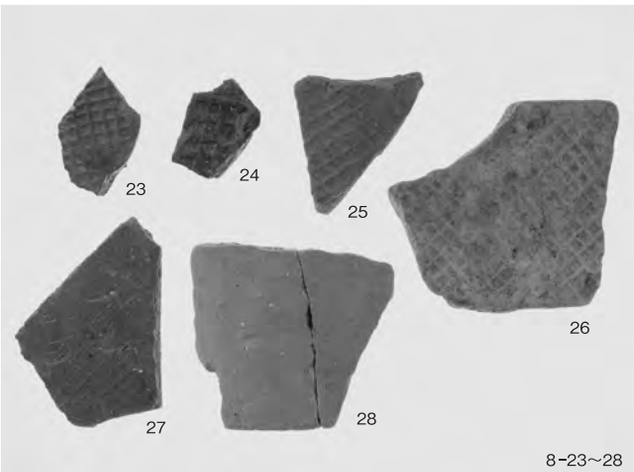


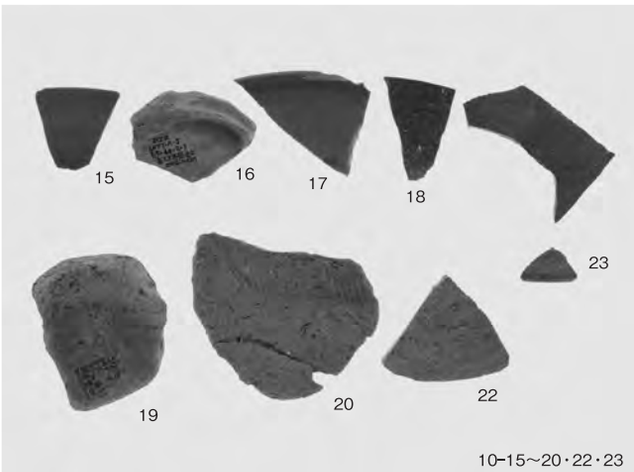




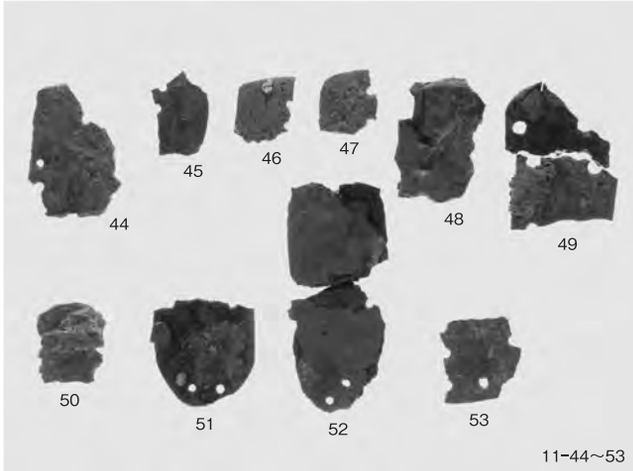


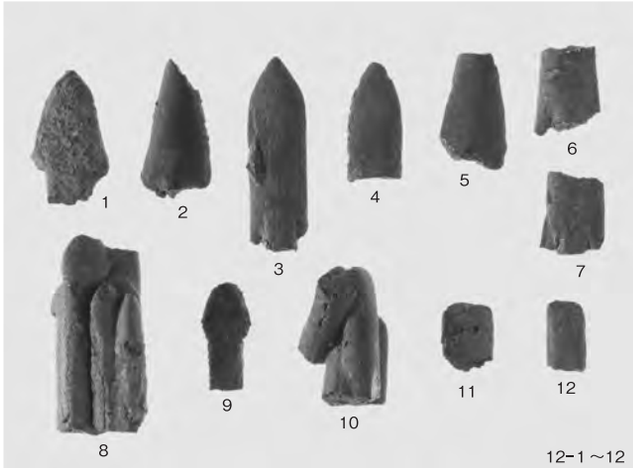


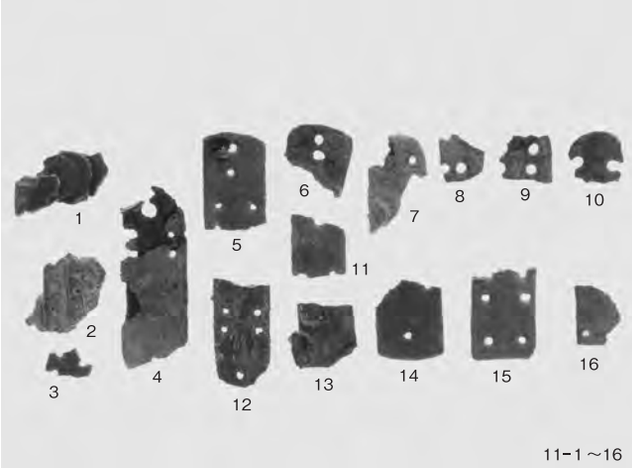


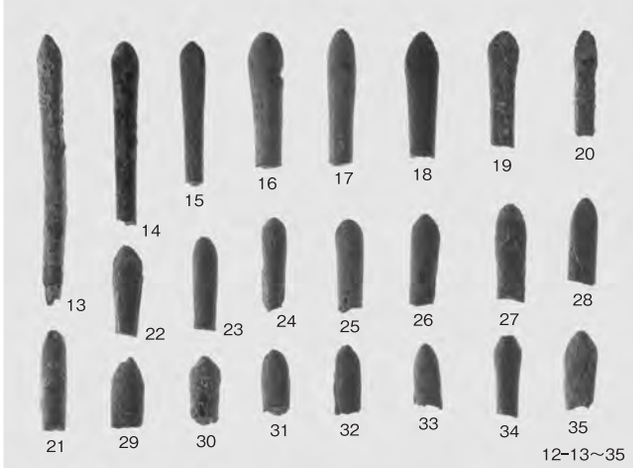


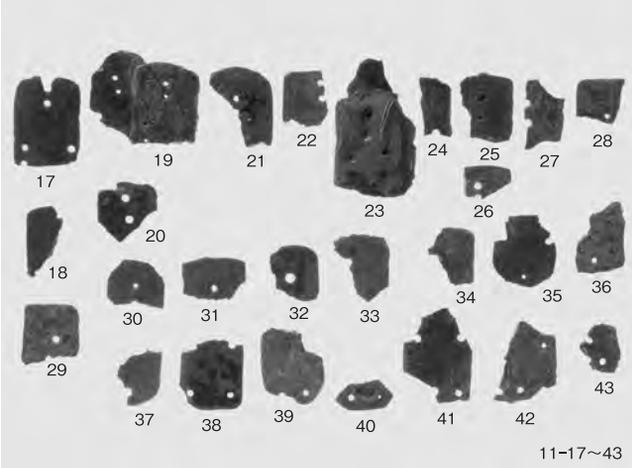
第212次調査　瓦，土器・陶磁器①

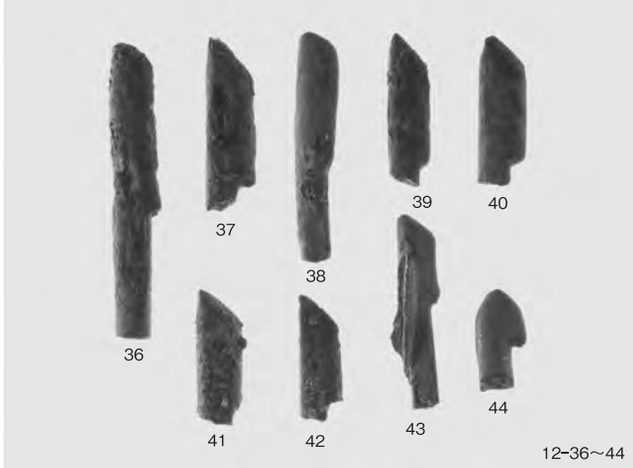




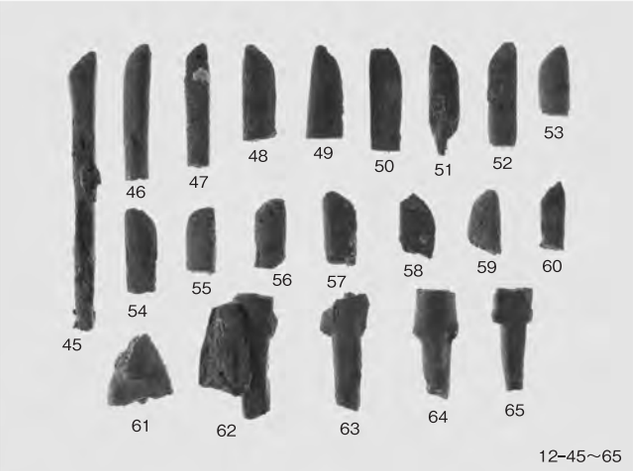




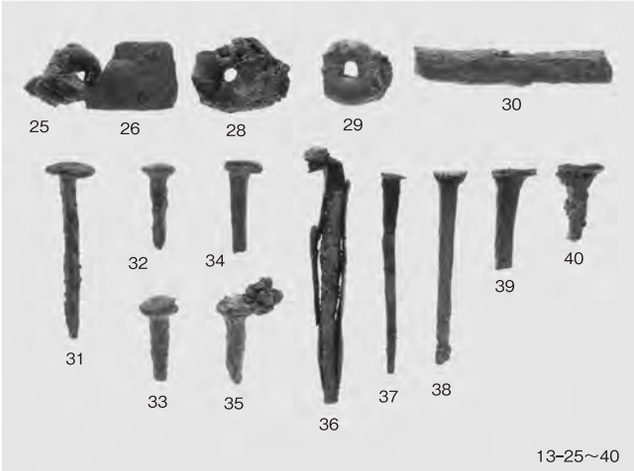




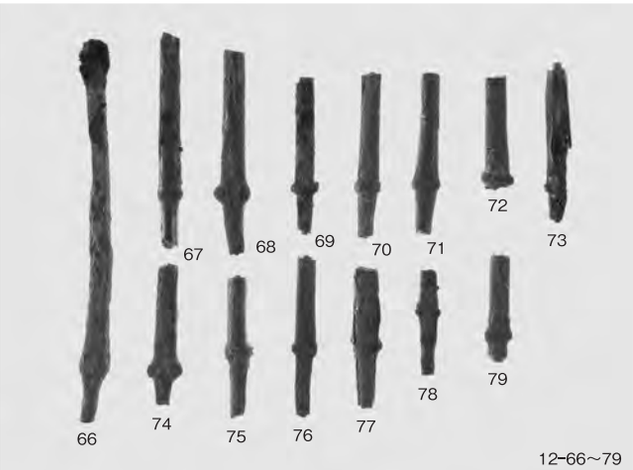
第212次調査　土器・陶磁器類②，鉄製品①



12-45～65

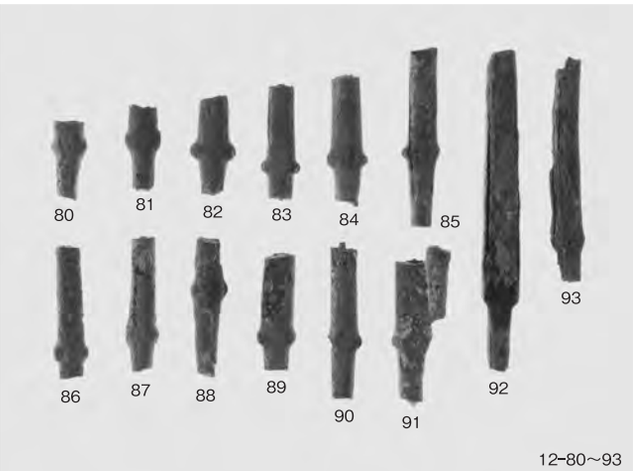


13-25～40



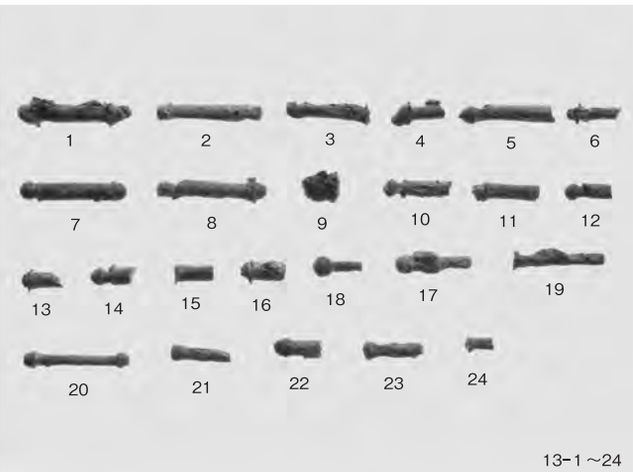
12-66～79

37-1



12-80～93

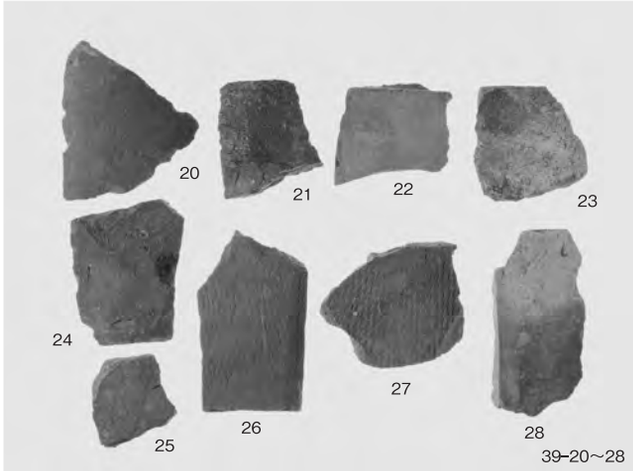
37-2・3・7

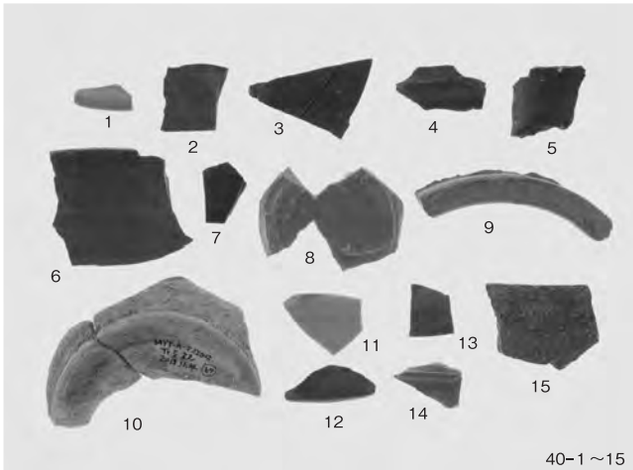


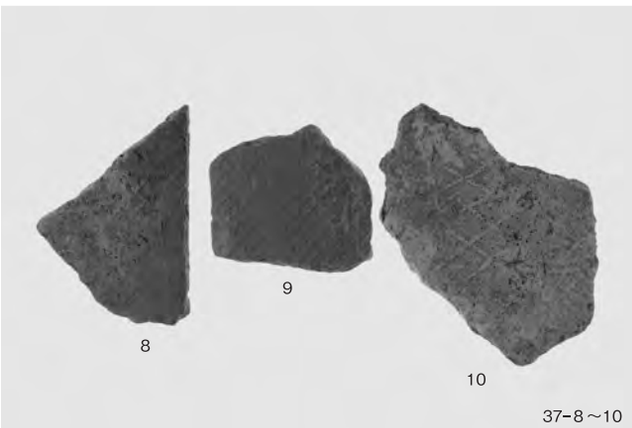
13-1～24

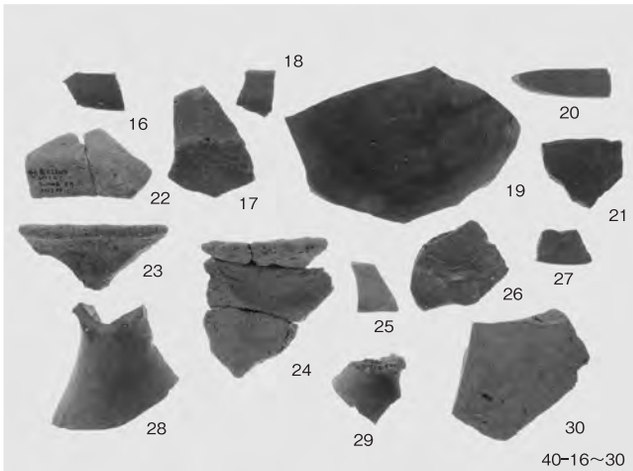
37-4

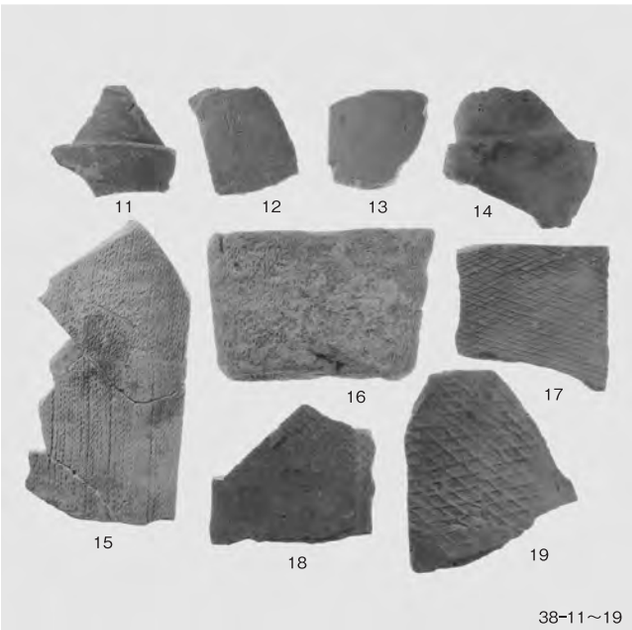
第212次調査　鉄製品②，第220次調査　瓦①

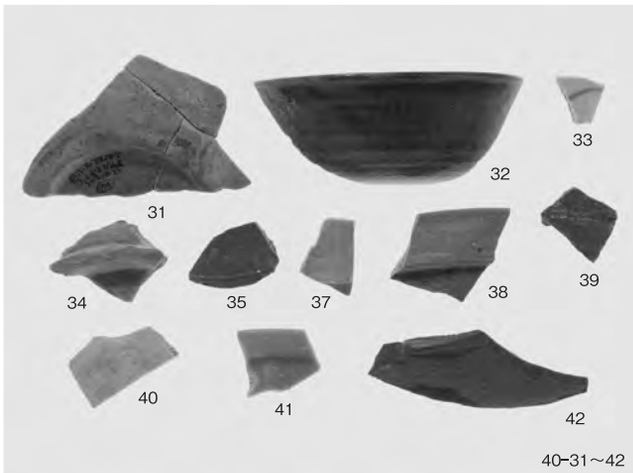




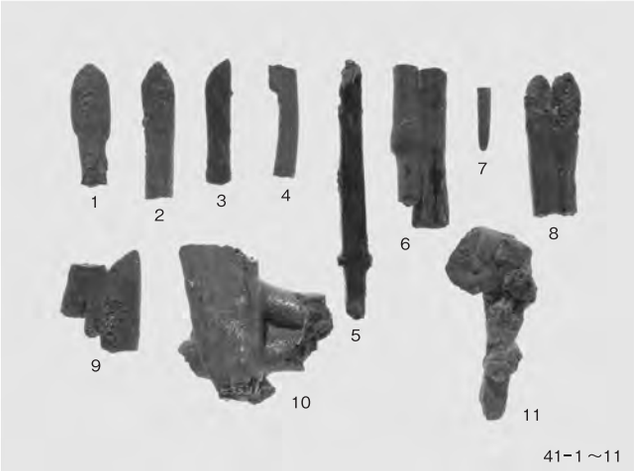


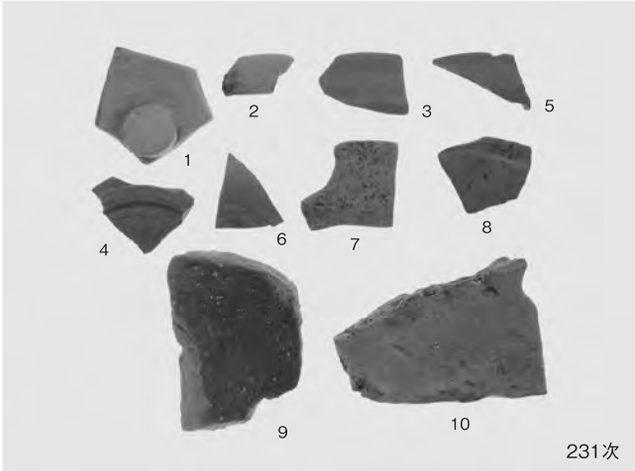


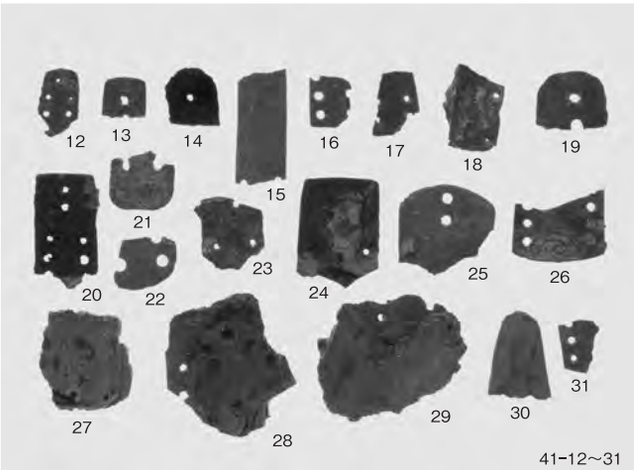


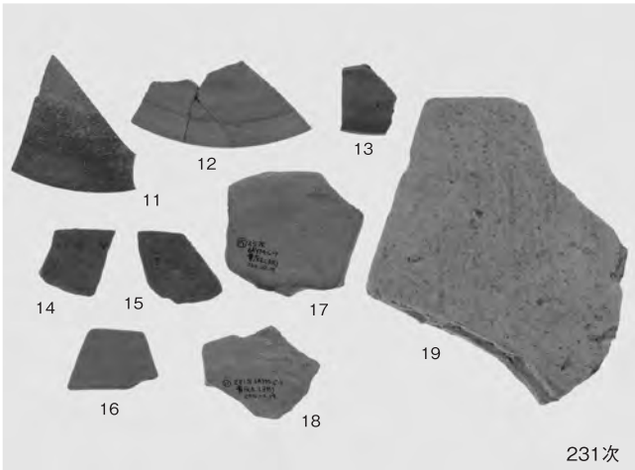


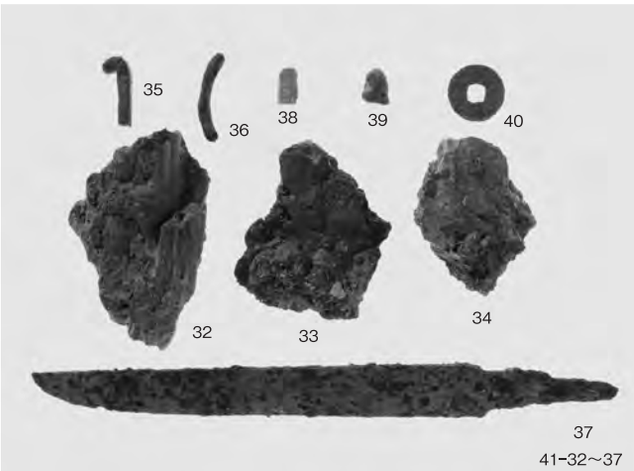
第220次調査　瓦②，土器・陶磁器類

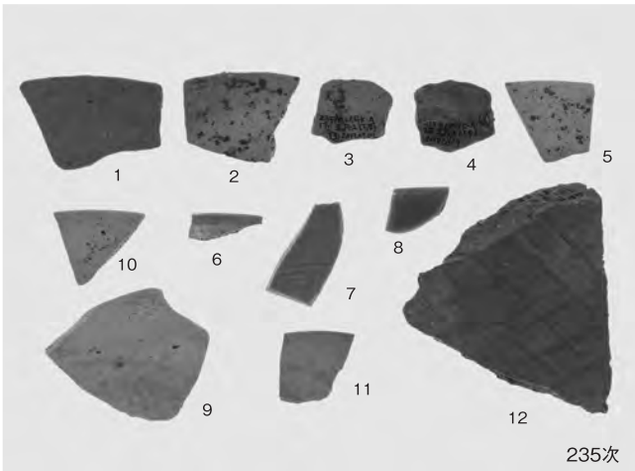


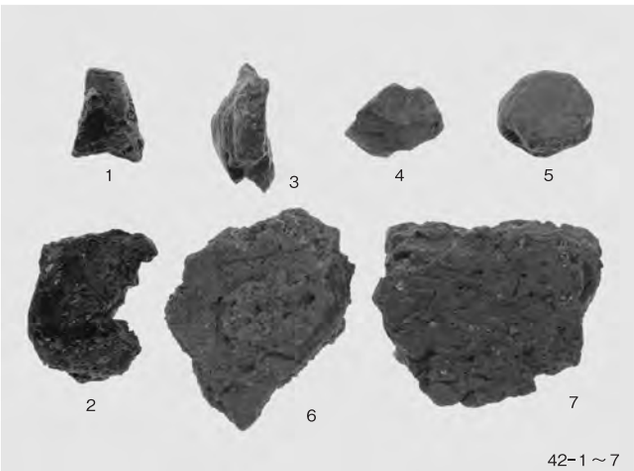


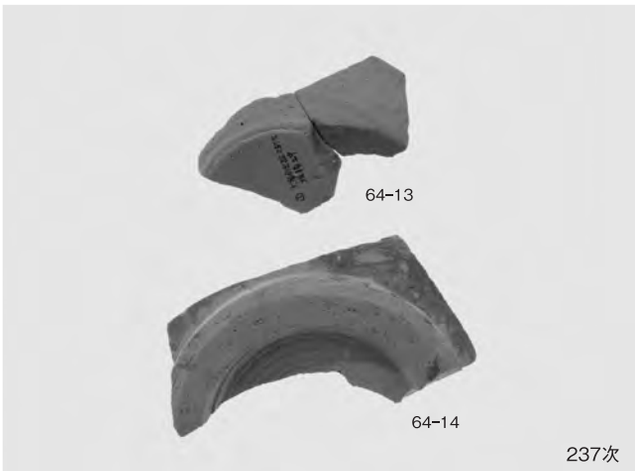










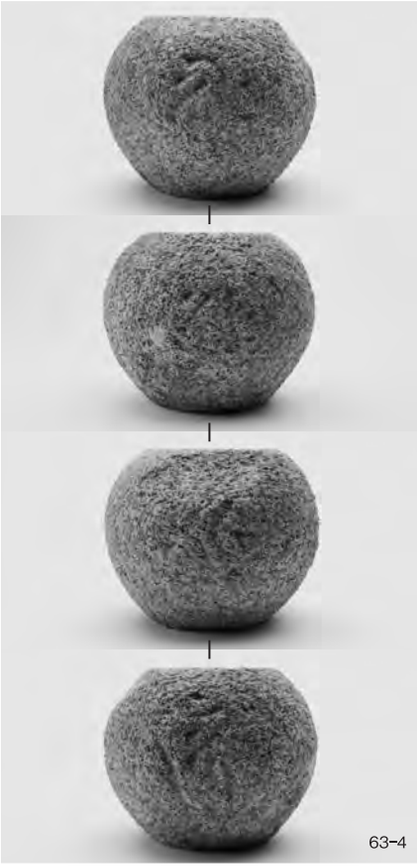


第220次調査鉄製品，第231・235・237次調査出土遺物

63-1

63-2

63-3

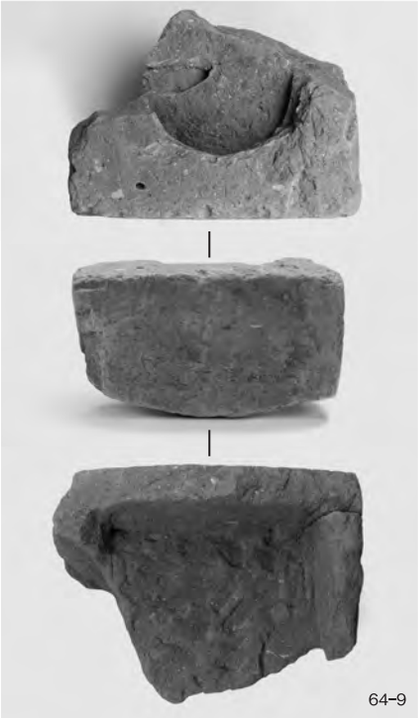

63-4

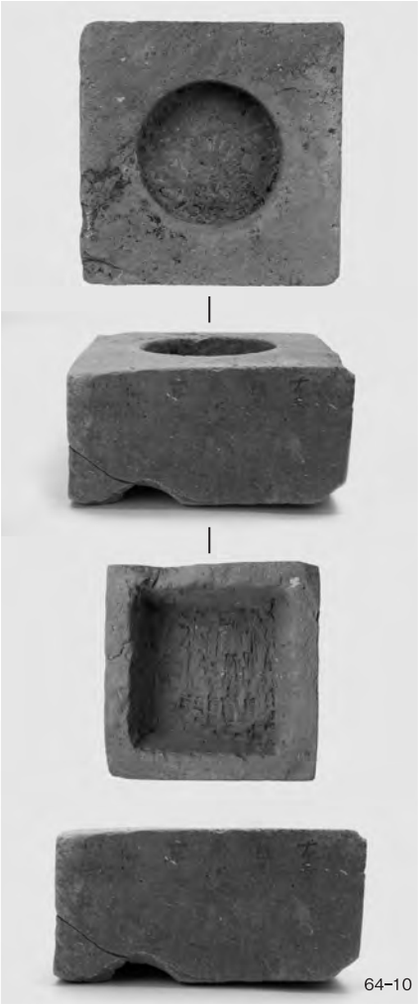
63-5

63-6

63-7

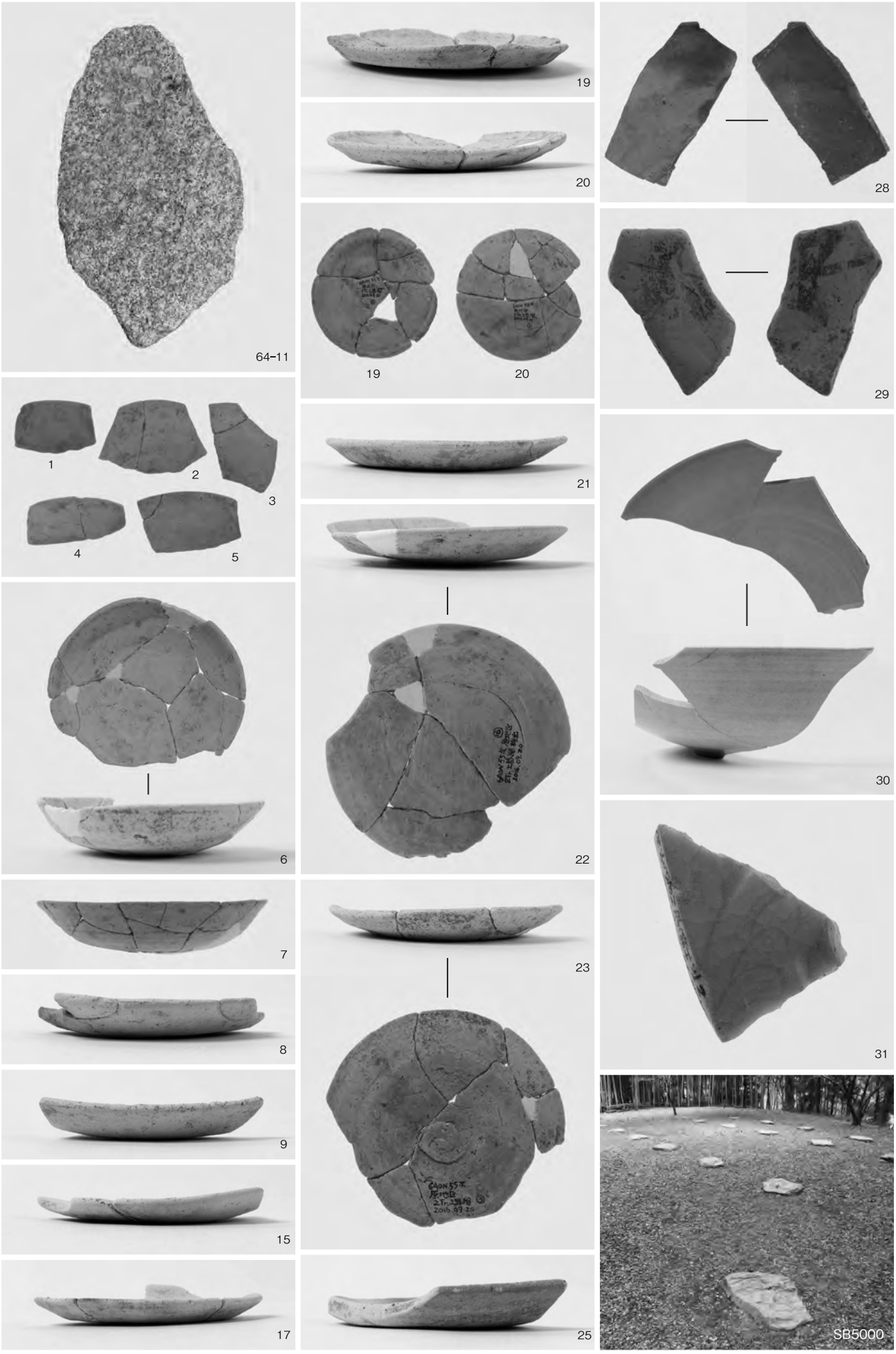
63-8


64-9


64-10

64-12

第237次調査　石塔類①



第237次調査石塔類②，大野城跡第55次調査出土遺物，蔵司SB5000

報　告　書　抄　録

ふりがな	だざいふしせきはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	大宰府史跡発掘調査報告書
副 書 名	
巻　　次	X　平成 28・29 年度
シリーズ名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	大庭孝夫・下原幸裕・岡田諭・小嶋篤・大澤正己・古環境研究所
編 集 機 関	九州歴史資料館
所　在　地	〒 838-0106　福岡県小郡市三沢 5208 － 3
発行年月日	平成 31（2019）年 3 月 31 日

所収遺跡名	所在地	コード		北　緯	東　経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	°′″	°′″		(㎡)	
大宰府史跡第 212 次調査	太宰府市観世音寺 3 丁目 484-1・2，486	40221	210045-212	33°30′39″	130°30′54″	110628～120330	61.50	計画調査
大宰府史跡第 220 次調査	太宰府市観世音寺 3 丁目 478，484-1・2，486	40221	210045-220	33°30′41″	130°30′54″	130724～140331	77.00	計画調査
大宰府史跡第 231 次調査	太宰府市観世音寺 2 丁目 11-173	40221	210316-231	33°30′36″	130°30′50″	160419	4.00	倉庫建設
大宰府史跡第 232 次調査	太宰府市観世音寺 6 丁目 896-22	40221	210075-232	33°31′07″	130°31′29″	160721	5.31	住宅建設
大宰府史跡第 233 次調査	太宰府市観世音寺 6 丁目 715-75・76，896-29	40221	210075-233	33°31′06″	130°31′30″	161128～161129	8.40	住宅建設
大宰府史跡第 234 次調査	太宰府市観世音寺 1 丁目 411，412	40221	210316-234	33°30′35″	130°31′04″	161220～161221	24.75	駐車場整備
大宰府史跡第 235 次調査	太宰府市観世音寺 4 丁目 213，214-1	40221	210046-235	33°30′42″	130°31′16″	170307・170314	4.00	住宅建設
大宰府史跡第 237 次調査	太宰府市観世音寺 5 丁目 896-1	40221	210075-237	33°30′54″	130°31′28″	180109～180124	4.00	堰堤取水部改修
大宰府史跡第 238 次調査	太宰府市観世音寺 2 丁目 8	40221	210316-238	33°30′33″	130°31′02″	180125	27.00	住宅建設
大野城跡第 55 次調査	太宰府市太宰府 1451，1475-1・8～10，1478，4790，5217	40221	300117-55	33°32′22″	130°31′15″	160920～160921	67.85	計画調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大宰府史跡第 212 次調査	官衙	奈良・平安時代	溝・ピット・整地層	土師器・須恵器・瓦・被熱鉄製品	被熱鉄製品が多量に出土
大宰府史跡第 220 次調査	官衙	奈良・平安時代	礎石・ピット・整地層	土師器・須恵器・瓦・被熱鉄製品	大型建物周辺の地形把握
大宰府史跡第 231 次調査	官衙	古代	土坑・整地層	土師器・須恵器・瓦	遺構の広がり確認
大宰府史跡第 232 次調査	寺院	古代～中世	なし	なし	谷地形を埋め立て
大宰府史跡第 233 次調査	寺院	古代～中世	なし	なし	本来は深い谷地形
大宰府史跡第 234 次調査	官衙	古代	なし	なし	空閑地を再確認
大宰府史跡第 235 次調査	官衙	古代～中世	ピット・整地層	土師器・須恵器・瓦	複数の遺構面
大宰府史跡第 237 次調査	寺院	中世～近世	中世墓	陶磁器・石塔類	子院跡に関わる墓地
大宰府史跡第 238 次調査	官衙	古代	掘立柱建物	瓦片	政庁前面の朝集殿か
大野城跡第 55 次調査	山城	中世	土坑・溝状遺構	土師器・陶磁器	原山寺に関わる遺構

概　要

本書は，平成28・29年度に九州歴史資料館が行った大宰府史跡の発掘調査及び整理作業の都合により報告が適わなかった平成23～25年度の蔵司地区の確認調査について報告するものである。なお，現在も調査を継続している蔵司地区の重点調査の成果については，今後正式報告書において報告を行う。

政庁跡西側の蔵司地区を対象とした第212・220次調査では，丘陵南西部に所在する大型礎石建物SB5000周辺の地形の成因や遺構の広がり等を把握するための確認調査を行い，SB5000付近の基壇状地形は近・現代の造成によって改変を受けていること，周辺部に整地層が広がっていること，被熱鉄製品が多量に出土することを確認した。

政庁前面に広がる官衙域のうち，政庁前面広場地区の第234次調査では遺構の分布が確認できず，空閑地が広がるとする第73次調査の調査状況を追認する結果が得られた。一方，大楠地区の第231次調査では，遺構・遺物の広がりが確認できた。観世音寺子院跡に関わる調査のうち，東観世地区の第232・233次調査では宅地開発時に谷部を大きく埋めている状況を確認した。観世音寺北側の山ノ井池の堰堤取水部の改修に伴う第237次調査では，五輪塔の部材等を伴う墓地が見つかり，子院に付属する墓域の広がりを確認した。

大野城跡で実施した第55次調査は，鎌倉時代ごろの遺構が広がっており，原山寺に関連する施設が周辺に展開していることが確認できた。

既刊報告書一覧

『大宰府史跡発掘調査報告書Ⅰ－平成 12 年度－』　2001 年３月
『大宰府史跡発掘調査報告書Ⅱ－平成 13・14 年度－』　2003 年３月
『大宰府史跡発掘調査報告書Ⅲ－平成 15 年度－』　2004 年３月
『大宰府史跡発掘調査報告書Ⅳ－平成 16・17 年度－』　2007 年３月
『大宰府史跡発掘調査報告書Ⅴ－平成 18・19 年度－』　2008 年３月
『大宰府史跡発掘調査報告書Ⅵ－平成 20・21 年度－』　2010 年３月
『大宰府史跡発掘調査報告書Ⅶ－平成 22・23 年度－』　2012 年３月
『大宰府史跡発掘調査報告書Ⅷ－平成 24・25 年度－』　2014 年３月
『大宰府史跡発掘調査報告書Ⅸ－平成 26・27 年度－』　2016 年３月
『大宰府史跡発掘調査報告書Ⅹ－平成 28・29 年度－』　2019 年３月（本書）

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2120261
登録年度 30	登録番号 5

大宰府史跡発掘調査報告書Ⅹ
平成 28・29 年度

平成 31（2019）年３月 31 日

発　　行　　九州歴史資料館
福岡県小郡市三沢 5208－3
印　　刷　　株式会社 プリンティングコガ
〒831-0034 福岡県大川市大字一木 736－5